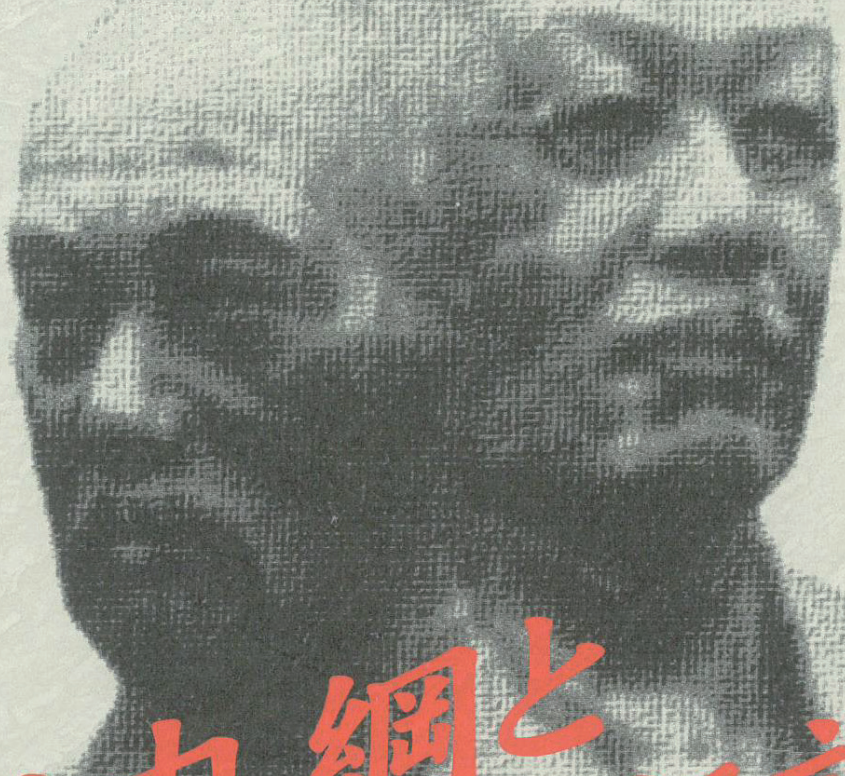
工業ハ富国ノ基



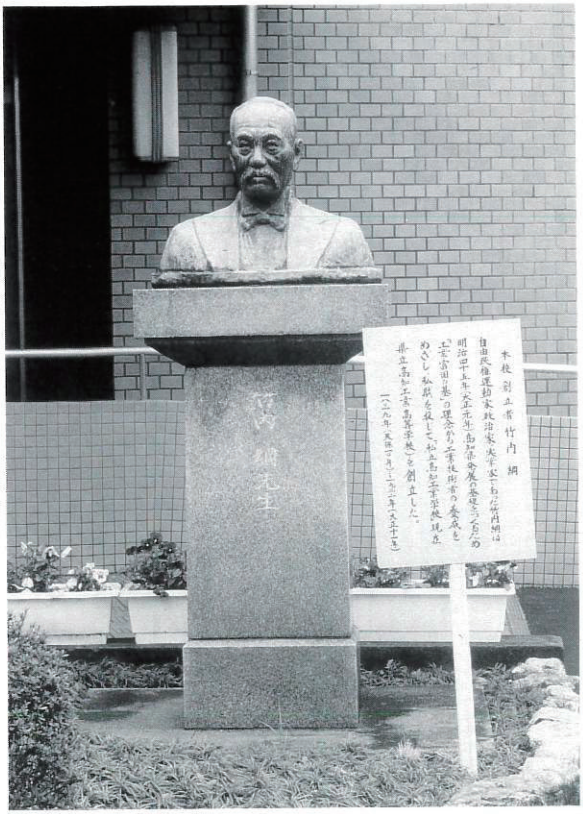
竹内綱と明太郎の伝記

高知工業高等学校同窓会編

工業八富国ノ基
竹内綱と明太郎の伝記



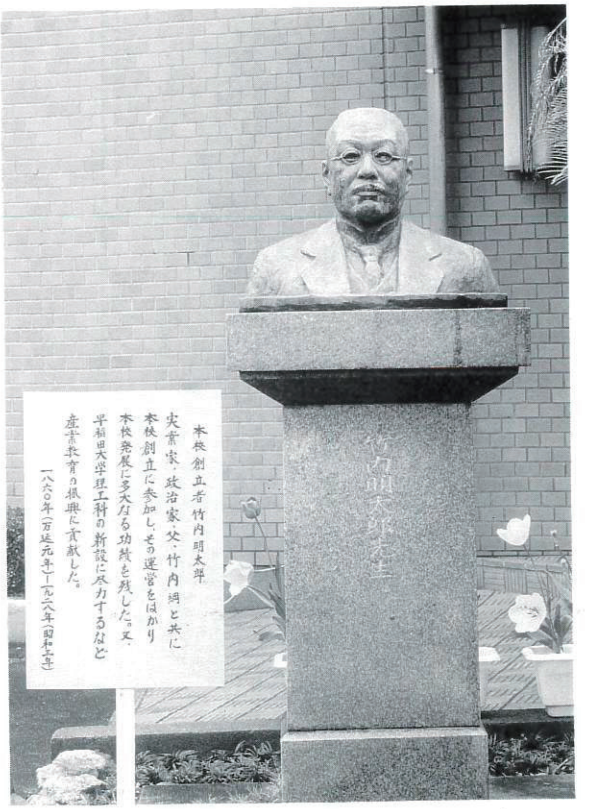
竹内　綱



高知工業高校玄関前にある綱の胸像



竹内明太郎



高知工業高校玄関前にある明太郎の胸像

はじめに ―竹内綱、明太郎の実像を追って

高知市桟橋通二丁目の県立高知工業高校正門に近い舗道の一角に、高さ二・四メートル、幅七十五センチ、奥行四十センチの御影石の石碑が建っている。道路と電車通りを向いた表側の上部には、明治維新に活躍した竹内綱の胸像のレリーフがはめ込んである。下方の御影石には「この地周辺は自由民権記念館、板垣退助邸跡碑、竹内綱、横山又吉の胸像、弘瀬重正、岡本方俊の顕彰碑、島本仲道誕生地、開成館、立志社、発陽社、修立社跡があり、さらに、『兆民通り』に続く自由民権のメッカである。愛称『自由民権通り』と呼ぶゆえんである」と碑文が彫り込んである。

高知工業高校の正門を入ると突き当たりに小さな庭園があり、その両端にそれぞれ胸像が建っている。向かって右が、綱である。実寸大の像全体の青銅の色が黒ずんでいる。

すぐ横に標札があって「本校創立者　竹内綱」さらに、「自由民権運動家、政治家、実業家であった竹内綱は、明治四十五年（大正元年）、高知県の発展の基礎をつくるため『工業富国基』の理念から、工業技術者の養成をめざし、私財を投じて私立高知工業学校（現在、県立高知工業高校）を創立した。一八三九（天保十年）～一九二二（大正十一年）」胸像の礎石の裏側には、

「本校創立者胸像再建記　大正十五年五月四日建設　本山白雲作　大戦のため献納　昭和二十九年五月

四日再建　島村治文作　県立高知工業高等学校同窓会」とある。

左側の胸像は、綱の長男、明太郎のもの。やはり顔部分の青銅色が所々黒ずんでいる。わきの標札には「本校創立者　竹内明太郎　実業家、政治家。父、綱とともに本校発展に多大なる功績を残した。また、早稲田大学理工科の新設に尽力するなど、産業教育の振興に貢献した　一八六〇（万延元年）～一九二八（昭和三年）」。裏側には「本校創立者胸像再建記　昭和六年五月四日建設　本山白雲作　大戦のため献納　昭和二十九年五月四日再建　畑正吉作　県立高知工業高等学校同窓会」とある。

ともに高さ約一・五メートルの御影石の礎石の上に胸像が設置してある。当初の胸像の作者は本山白雲だが、大戦で献納され再建されたものは作者が異なっている。正門前の舗道に建立された綱の胸像レリーフモニュメントは平成五年十一月、土佐史談会のメンバーらの指導を仰ぎ、高知県文化財団の援助を受けて母校創立八十周年記念事業として自由民権通り（はりまや橋――桟橋通）に建立された。

ところで、竹内綱と明太郎父子が高知工業高校の創立者であることは、同校の関係者なら知らぬ者はない。しかし、ほかにこの父子が残してきた功績となると意外に知られていない。

綱ともかかわりはあるが、とりわけ明太郎は今や世界的な企業であるコマツ（小松製作所）の創立者でもある。このことは、ごく最近まで小松製作所でさえも、一部の関係者以外にはあまり知られていなかった。

綱には自分の著した「竹内綱自叙伝」があり、その足跡をたどることはできる。また、本県では後藤象次郎や板垣退助らとともに明治維新の志士として活躍したこともよく知られている。しかし、息子、明太郎については幼少時代からほとんど知られていない。

その明太郎がやはりただの人ではない――ということで高知工業高校関係者に関心が持たれるようになったのは、平成四年に行われた高知工業高校の八十周年記念式典がきっかけであった。平成五年五月四日の同校の同窓会総会では、昭和十三年卒業生で太陽鍛工（本社・高知市布師田）の会長、山田通が竹内明太郎先生をしのぶとして「わが国工業の今、昔」というテーマで講演をした。

その中で明太郎と小松製作所との関係が出てくる。その講演の一部を抜すいした。

「私たちの通学していたころの校舎は北与力町（現在の永国寺町）にあった木造二階建ての古い建物で、校門を入ると正面玄関の両側に竹内綱、明太郎両先生の胸像が厳然と控えており、当時はこのお二人に帽子を脱いで一礼して教室に向かったものである。今から思えば、一礼したといっても形式的な虚礼にすぎなかったと恥ずかしく思う。それは両先生の偉大さを知らなかったからである。

卒業後、二十数年たったある日のことである。コマツの友人N氏から『小松製作所の五十年史を編さんすることになり資料を集めているが、実は小松製作所と高知との意外な関係を知りびっくりしている。というのは、当社の創立者とあなたの出身校、高知工業高校の創立者が同一人物の竹内明太郎氏だということを初めて知ったからだ』というのである。

コマツといえば、今や年間売り上げ一兆円という大会社であり、ブルドーザーなどの建設機械の世界的メーカーであることはよく知られているが、その発祥の地は石川県小松市である。竹内明太郎氏が石川県とどういう関係があったのか。なぜ、石川県に企業の地を選ばれたのか。その理由は分からないが、小松製作所の古い幹部から『うちの親会社、唐津鉄工所が…』というのを聞いたことがあった。

唐津鉄工所は、戦前戦中は工作機械メーカーとして有名な会社で、就職しようかと思ったこともあった。よくよく調べてみると、唐津鉄工所が竹内明太郎氏の最初に創立された会社であり、この会社を母体に小松製作所をつくられたということである。

また、竹内明太郎氏は日本の発展のために人材育成の必要を痛感され、私費で多くの留学生を欧州に派遣されていたが、この人たちが早稲田大学理工学部の教授陣の核になったとのことである。大隈重信は早大に理工学部をつくるにあたって、教授がそろわなくて困り、竹内明太郎氏に相談して何人かの留学生を呼び戻してもらって無事、理工学部を設立することができたとのことである。

私は、このような新事実を知ることによって、胸像の主、竹内明太郎氏に対して心から尊敬の念を感じる次第である。氏は、私たちの誇る郷土の大先輩であるとともに、近代日本を興した偉大な先覚者であり、工業国日本の礎を築いた方であるといえる」

山田のこの講演は、同窓会で大きな反響を呼んだ。

ちょうどこのころ、コマツ発祥の地である石川県小松市の小松商工会議所でも機械金属業部会が竹内

明太郎の足跡をたどり、また、小松製作所などとの関係を明らかにしようと積極的な調査活動を始めていた。そして、明太郎の生地である宿毛や高知工業高校などへも調査にやってきた。こうした動きに刺激を受けた高知工業高校では、平成六年五月に同窓会が創立者調査研究委員会（山田通委員長）を発足させた。同委員会のメンバーは、山田をはじめ、同窓会長、歴代校長、事務局員ら十二人からなる。もちろん、その他の同窓会員らも直接、間接的に協力、早速、関係先の訪問や資料集めなど調査活動にかかった。

当時、高知工業高校の校長をしていた宮田隆弘も、竹内綱と明太郎については強く引かれるものがあった。「ともかく、明太郎の足跡を一度、訪ねてみよう」と、平成六年の夏休みを利用して単独で小松市などを訪ね、小松商工会議所の好意もあって小松製作所や、綱が遊泉寺銅山の電化のために開設したという発電所や導水路などの現場を視察した。

「明太郎のアウトラインを知るだけでも巨人であることが浮き彫りになってくる。産業空洞化などで日本経済が岐路に立つ今、先見性と独創性を発揮し、日本の工業を興した明太郎から学ぶものは数えきれない。綱と併せて、この偉業を後世に残し伝えなければ」

宮田は、短期間の小松市訪問ではあったが、現地を訪ねてこのような意をますます強くした。宮田は、その後も明太郎が経営した佐賀県の芳谷炭坑跡や唐津鉄工所などにも足を運び、調査活動を進めた。

また、その年の秋には、他の委員らも明太郎の足跡を追って東京方面へ出掛け、小松製作所や唐津鉄

工所の関係者をはじめ、竹内綱、明太郎の親族を訪ねるなどして資料の収集に力を入れた。

こうした調査活動と併せて創立者調査研究委員会もひんぱんに開いて具体的な検討が行われた結果、平成七年九月の会合で「竹内綱、明太郎先生の生涯と、教育、経済、政界等の偉業と足跡の資料を収集、整理してまとめる」「創立八十五周年（平成九年）をメドに伝記とか記録等の本にまとめる」という方針が決まった。

その後も資料の収集など調査活動の役割分担まで行い、本格的な活動に入った。しかし、資料の収集などは困難を極めた。とりわけ、明太郎に関してはまとまった資料がない。特に、生いたちから少年時代についてはほとんどなかった。

そんな中で、調査研究委員たちのねばり強い調査によって、明太郎の日記の存在が明らかになった。明太郎の孫で、現在、駒沢大学教授、一橋大学名誉教授、竹内啓一氏が保管していたのである。

この日記は一部に欠落があるものの、明治の二十二年から大正を経て昭和三年に明太郎が病気で亡くなる直前までの合計二十六年間分がまとまって保存されていたのである。調査研究委員会では啓一氏に対して日記の公表について申し入れた。何度か折衝を重ねた結果、啓一氏はこの申し入れを快諾してくれたのである。

こうして、このたび「工業ハ富国ノ基――竹内綱と明太郎伝」としてまとめることができた。平成六

年五月に高知工業高校の同窓会が創立者調査研究委員会を設置し、本格的な活動を始めてからでも約三年が経過している。

綱、明太郎にしても新発見はあったものの、なにしろ資料が十分でなく、また、私たちの手が足らず、必ずしも満足なものではない。しかし、資料の収集など調査活動の際には各関係者のご好意、ご協力をいただき、当委員会としてもできる限りの努力をしたつもりである。

この本が、竹内綱と明太郎に改めて光をあてることができ、さらに、二人に関心を持たれる方々の参考にしていただけるなら幸いである。

最後に、母校高知工業高等学校の創立八十五周年、定時制開設五十周年にあたり、創立者、竹内綱、明太郎の伝記の発刊を祝うとともに、母校のますますの発展を祈り、百周年、さらに、次の世紀へとつなげていくことを期待するものである。

また、この記念事業を行うにあたり、多くの企業と同窓会員より浄財をご寄付いただいたことに心よりお礼申し上げる次第である。

創立者調査研究委員会
高知県立高知工業高等学校同窓会
会長　宗竹　啓介

工業ハ富国ノ基　目次

はじめに

第一部　竹内　綱

第一章　生い立ち

教育先進地、宿毛 …… 5

恩師酒井三治のこと …… 14

第二章　伊賀家における綱の功績

財政再建に尽力 …… 19

大阪蔵屋敷の経営 …… 21

異国船来港騒動の顚末……26
東北征討軍への参加……30
第三章　活躍の場を広げる綱
大蔵省に出仕……35
高島炭鉱の経営……36
高島炭鉱の買収……38
高島炭鉱の譲渡……44
第四章　苦闘の時代
突然の逮捕……52
大審院での審理……56
新潟での禁獄生活……61
第五章　綱をめぐる人々
吉田健三と綱……66
恩師の訓戒……68
第六章　政界への雄飛
板垣の遭難と自由党の解散……74
保安条例の発布……76

板垣の叙勲問題 …… 79
衆議院議員時代 …… 81
政治家としての信念 …… 86
隈板内閣の成立と瓦解 …… 88

第七章　朝鮮半島への事業進出

京釜・京仁鉄道の特許請求 …… 94
創立に向け本格的に始動 …… 99
京釜鉄道の許可と日本政府に対する特別保護願い …… 102
京釜鉄道株式会社を創立 …… 105
京釜鉄道余話 …… 111
京仁鉄道もまた …… 114
京義・営義鉄道と京城電気・水道問題 …… 118
杭九鉄道借款計画 …… 123

第八章　実業家として

北海道探検と清国漫遊 …… 129
フィリピン渡航計画 …… 131
海外遊覧と綱の再々婚 …… 134

終　章　教育振興の夢
巨星墜つ …… 141
竹内綱ゆかりの人物 …… 143
文中注釈 …… 149

第二部　竹内明太郎

第一章　政治から実業の世界へ
芳谷炭坑の経営 …… 160
技術革新と合理化 …… 162
竹内鉱業設立と炭鉱の買収 …… 166
遊泉寺銅山の経営 …… 170

第二章　鉱山事業から機械工業へ
唐津鉄工所の設立 …… 181
次々に新製品 …… 186
科学的な工場管理 …… 188
五大メーカーの一つに …… 192

小松鉄工所の設立……197
自信の持てる製品を……200
電気炉製鋼の草分け……202
新生・小松製作所……203
創立直後の不況……211
強一郎の入社……213
「世界のコマツ」へ……220
人材の育成……224
小松工業学校の誘致……230
ダット号の開発支援……233
株式会社快進社の発足……236
第三章　竹内鉱業の経営
社員は一千人台に……242
電気製鋼部門も計画通り……244
第四章　工業教育に尽力
早稲田でも理工学部設立の計画……248
工業教育の慈父、手島……250

幸運なめぐり合わせ……251
理工学部スタート……256
山本忠興のこと……259
リンゴ禍事件解決に一役……261
竹内記念ラウンジ……264
早稲田大学と小野梓……267
創立の母、小野記念堂も……270
私立高知工業学校の創立……271
私立高知工業学校、開校へ……276
高知県の機械工業の原点に……283
実習工場を民間に開放……285
学校は教職員まかせ……288
大家族主義の校風……290
吉田茂が講話……291
明太郎も卒業生に講話……293
私立から県への移管……296

第五章　政治家としての存在
立候補に異例の覚書 …… 303
吉田茂との共通点 …… 306
支部が勝手に …… 310
議員としての条件 …… 314
金なき者は政治家の資格なし …… 316
四国縦貫鉄道の建設促進に功績 …… 318
第六章　晩年の明太郎
欧州戦争で好況から不況へ …… 324
使命果たす …… 325
晴耕雨読の生活 …… 328
明太郎、逝く …… 329
社会に大きな足跡 …… 332
第七章　貴重な日記を入手
理想主義者だった明太郎 …… 340

第三部　理念を引き継ぐ

引き継がれる理念 …… 348
須崎工業学校の誕生 …… 352
寺尾に竹内父子の強い影響 …… 356
高知工科大学との縁 …… 358

資料編

竹内明太郎の日記 …… 364
竹内綱と明太郎の年表 …… 420
竹内家周辺の系図 …… 433
参考文献 …… 435
あとがき …… 438

第一部　竹内　綱

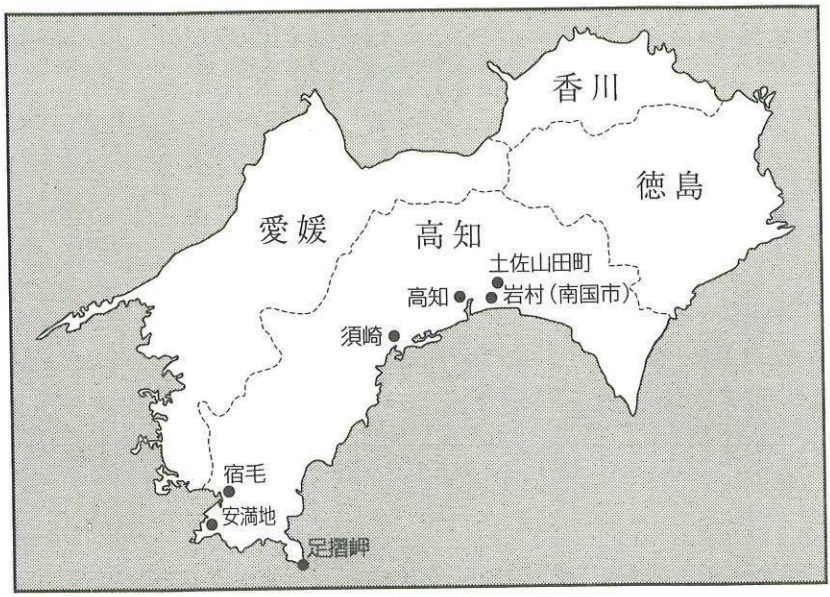
第一章　生い立ち

竹内綱は天保十年（一八三九）十二月二十六日、幡多郡宿毛村（現在の宿毛市）土居下に生まれた。通称を万次郎、諱は吉綱といい、武陵と号した。*生家の竹内家は、もとをたどれば幡多郡安森村（幡多郡佐賀町）に居を構える、長宗我部の家臣だったという。

宿毛竹内家の始祖は甚兵衛吉次といい、慶長五年（一六〇〇）、主君盛親と共に大阪に赴いている。彼は関ヶ原の合戦で敗れたのち大阪に留まり、縁あって安東左衛門佐可氏という武将に召し抱えられた。この可氏が新たに土佐の国主となった山内一豊の甥であったため、甚兵衛は一度は離れた故郷の土を再び踏むことになる。高知に戻った彼は、間もなく山内家の家老として宿毛郷に封ぜられた可氏に従って宿毛に入り、以後、代々、*安東家に仕えた。

竹内家は初代から知行百五十石を支給されていたが、二代続けて他家から末期養子を迎えたため、綱の祖父の代に身分を格下げされ、知行も召し上げられて二人扶持補米四石のみとなった。綱の自叙伝には養子相続の結果「騎馬ニ貶メラレ」たとあるが、その前の文章に、従来は伊賀家の「騎馬ト称スル士族」だったとも記されている。実際には、騎馬より一段低い「騎馬並」に下げられたものと思われる。

綱の父親は竹内家十二代当主、庄右衛門吉管（梅仙）。母親は袖崎といい、同じく伊賀家の騎馬を務め



た岩村家の出であった。母方の実家からは、明治から昭和初期にかけて幾人もの著名人が出ている。特に有名なのが綱の従兄弟にあたる岩村通俊、林有造、岩村高俊の三兄弟だろう。いずれも政治家や官僚として明治時代に活躍した。三人の父親の岩村英俊（号・礫水）も文武両道の達人で、綱の兵法の師でもあった。綱はその叔父を「北条流兵法ニ詳ハシク伊賀家ノ師範タリ。翁ハ兵法ノミナラズ和漢ノ文学ニ通ジ、風流文雅ノ士ナリキ」と評している。理財の才にも長け、伊賀家の財政を預かって功績を立て、何度か加増を受けたという。

綱は、こうした環境のもと、才能も個性も豊かな従兄弟たちと私塾や郷校へ通って学問や剣を学びながら、すくすくと育っていった。同じ頃、小野梓や大江卓など、日本の近代史に名を残す人々が宿毛で少年時代を過ごしている。彼らとも親交があったと思われる。

ただ、綱の少年期については、このほかに詳しいことは伝わっていない。西洋流兵法、一刀流剣術などを中村の郷士樋口真吉に学んだことがわかっている程度である。家督を継いだ時期なども不明だ。次男だった綱は、兄吉英が早逝したため家を継ぐことになったのだが、自叙伝に「二十歳ヨリ伊賀家ノ重役トナリ多忙ノ身」となったとあるだけで、そのあたりの経緯は一切記されていない。幼くして兄を亡くし、家督を継ぐことになったものの、以後は当時の慣習に従って元服、出仕とつつがなく運んだのだろうと推測される。

もっとも、嘉永七年（一八五四）十一月五日だけは別扱いになっている。この日、宿毛の町は大地震に襲われた。世にいう「嘉永七年の地震」である。

当時十五歳だった綱は、地震が起きた時、歩兵伍長として町外の原野での訓練に参加していた。午後二時頃、突然大地が激しく鳴動した。立っていることさえできないほどのひどい揺れで、歩兵たちはみな地面に伏したという。その間十分ほど。ようやく揺れが収まりかけたところで、全員が町内へ駆け戻ったが、至る所で家屋が倒壊し、火災も発生。津波で堤防は破壊され、道端の溝から水が噴き出し、わずか五、六町を走るのも危険な状況だったと、自叙伝には記されている。

この地震で、宿毛の町は壊滅状態となってしまう。住民の大半はからくも伊賀家の所有する山林に逃げ込んだが、住むところさえなく、一ヶ月以上野宿を余儀なくされた。災難を被ったのは町民や農民たちだけではない。伊賀家の奥方がけがをしたほか、家臣にも相当な被害が出た。家財はもちろん、家伝来の宝や書物が灰燼に帰し、身内を失った者も数多くいた。竹内家の屋敷も全焼したが、幸いなことに

家族だけは無事だった。当主である綱の父が異国船打ち払い守備役を命じられ、家族ともども宿毛から八里以上も離れた柏島という地に赴いていたためである。長子だった綱は文武を修行中の身ということで、一人宿毛の屋敷に残り、留守を預かっていた。

ところで、竹内家は綱が生まれた頃、宅地二反、田地約一町、山林約二十町を所有していた。数字で見るかぎり、決して裕福とはいえないが、幕末のこの時期、宿毛郷全体が経済的に困窮していたことを思えば、暮らしぶりはまずまずだったのではないだろうか。

領主の伊賀家は土佐藩から領地八千石のほか、足し米として玄米千八百石を与えられ、新田開発などにも力を入れていたが、度重なる天災などで財政が逼迫。綱が出仕し始めた頃には、『半知借上げ』と称して家臣の家禄を半分近くも徴収しなければ、やっていけないありさまだった。そんなところへ大地震が起きたのだから、たまったものではない。しかも、藩からは「異国船の来襲に備えて軍備を拡張せよ」との命令が下っていた。世情は日増しに不穏になり、領地の収入は激減して、支出だけが増える一方。重役に取り立てられた綱が多忙な身となったのも、また、まず第一に財政再建に着手したのも、必然の成りゆきだったといえるだろう。

教育先進地、宿毛

綱が生まれ育った宿毛（現在の宿毛市）は四国の西南、高知県の西の外れに位置している。車で四時

間ほどの行程、距離にして高知市から約百三十キロメートル。西は豊後水道を挟んで九州に面し、北は愛媛県と境を接し、南に太平洋を望む風光明媚なところである。入り組んだ海岸線が天然の良港を形成し、黒潮のもたらす海の恵みと温暖な気候のおかげで、漁業と農業の町として栄えてきた。

しかし、周りを山と海に囲まれているため、陸路に関しては昔から交通の便が悪い。土佐はかつて都人から『遠流の地』と呼ばれ、『陸の孤島』と称されたが、宿毛はさらに不便だというので、同じ土佐人からずっと僻遠の地扱いされてきた。綱が生まれた当時、宿毛市から高知市内まで行くのに徒歩で丸三日はかかったのだから無理はない。船で大阪へ直接出るにしても、豊後水道を通り佐田岬を回って、瀬戸内海を経由するルートで二週間以上を要した。

こうした交通事情の悪さは、明治、大正と時代が進んでもあまり改善されなかった。道路整備が進んだことで時間的距離は短縮されたが、交通手段やアクセス面の整備は立ち後れたまま。昭和も後半になって、ようやく近隣の中村市まで鉄道が敷設されたが、宿毛市へは届かなかった。平成九年春現在、高知市から宿毛市まで直通している公共交通機関はバスだけ。鉄道とバスを乗り継ぐ方法もあるが、それでも三時間はかかってしまう。江戸時代と比べると夢のような話だが、今の世の中、それくらい時間があれば、飛行機を使って北海道へだって行ける。昔どころか、いまだに僻遠の地なのである。

もっとも、平成九年秋には、第三セクターの土佐くろしお鉄道が宿毛市への乗り入れを実現する。地元住民の長年の願いであった鉄道が、やっと開通する。実現すれば、高知市から宿毛市内まで直行で二時間あまり。

ところで、宿毛への鉄道敷設に関しては、綱にもゆかりのある面白いエピソードが残っている。以下は、地元の郷土史家橋田庫欣氏からうかがった話の要約である。

綱の息子で昭和の名宰相と呼ばれた吉田茂が、父親のふるさと宿毛から衆議院議員選挙に出馬した時のこと。選挙活動を好まぬ茂が珍しく地元へ来たと聞き、幡多郡下の町長有志が陳情に駆けつけた。用件は、整備が遅れている鉄道をぜひとも宿毛まで延ばしてほしいというもの。これに対して、茂は「今*はもう飛行機と自動車の時代だ。飛行場でも造るならともかく、いまさら鉄道でもないだろう」と相手にしなかったという。



宿毛市中央２丁目の「竹内綱・吉田茂邸跡」の石碑

地元にすれば切なる願いだったに違いないが、「これからは鉄道よりも飛行機」という茂は、橋田氏の言うように「実に先見の明があった」といえるだろう。また、選挙中だからといって安請け合いしなかったことや、「地元への利益誘導をよしとしなかったのは政治

家として立派」という声もある。

普通なら本拠地で後援者から頼み事をされれば、お愛想の一つもいって頷くぐらいはするはず。それさえせずに陳情を即座にはねつけるとは、いかにも茂らしい話だ。しかも、その後自分で「*これで一万票は減ったな」と呵々大笑している。選挙民におもねらぬ姿勢は、生涯変わらなかった。官僚時代も相手が上司だろうと何だろうと、自分が納得しないかぎりは従わなかったと聞く。

こうした頑迷とも取れる茂の態度には、実父の綱に一脈通ずるものがある。茂の兄の明太郎も、選挙への出馬を要請された時、再三固辞したあげく、選挙運動を一切やらないことを条件に立候補を承諾した。やはり血は争えぬということか。

地理的な状況は前に述べた通りだが、宿毛を語る時、どうしてもはずせない特色がもう一つある。それは、江戸から明治時代にかけての宿毛の教育水準の高さだ。

僻遠の地に住み、外界から半ば隔絶された宿毛に住みながら、幕末、志ある人たちは常に外の広い世界を意識していた。土佐藩や四国などといった小さなくくりではない。日本全体を見つめ、さらには遠く海外へも目を向けていた。

これは、土佐藩全体に共通することのようだ。土佐人は、後ろを四国山地に遮られ、前を太平洋に阻まれた土地で生まれ育ったために、外へ出たい、もっと広い世界をのぞいてみたいという意識が、他の国の人間より強かったと思われる。また、それだけに、いったん外へ飛び出すと、狭い枠にとらわれる

ことなく、自由な立場で物事を考えることができたのではないだろうか。その根底には、『いごっそう』という言葉に代表される、土佐人ならではの反骨精神と自主独立の気風があった。

そして、それを知識の形で後押しし、育んだのが教育だった。

元来、土佐は学問の盛んな土地である。平安時代には流刑地とみなされていたが、流されてきたのはいわゆる犯罪者ではなく、ほとんどが政権争いに敗れた皇族や公家などであった。戦乱を逃れてきた貴族や、職務として赴任してきた官僚も少なからずいた。これら当時の知識人たる都人が、文化や教育の面で土地の人間に有形無形の影響を与えたことは想像に難くない。

そうした歴史の蓄積を反映してだろう。江戸時代、土佐からは谷時中、山崎闇斎、谷秦山ら優れた学者が相次いで現れ、南学と呼ばれる朱子学の一派を形成している。

彼らの思想は当時としては先進的だったため、保守的で固陋な政治家から疎まれ、危険視された。その結果、学者への弾圧という災いを招き、学問教育が衰退するという不幸にも見舞われている。しかし、幕末頃には、混迷した政局を乗り切るために、広い見識と自由な発想を兼ね備えた優秀な人材が求められるようになり、学問教育の重要性も再認識されるに至った。

土佐藩の教育史を見れば、この間の流れがよくわかるが、ここでは概略に触れるだけに留める。

藩としての教育体制は、公的教育機関である藩校を中心として整えられた。江戸中期から会所講と呼ばれる非常設の学問所や教授館、文武館（のちの致道館）などの藩校を相次いで設け、藩士の子弟に文武両道を学ばせたほか、幕末には医学館（のちに沢流館と改名）を新設し、時代と共に漢方から蘭学へ

と教授内容を変え、社会の要請に即して対応している。

藩校での教育は、文館と武校に分けて行われた。文館では、いわゆる四書（『大学』『論語』『孟子』『中庸』）五経（『易経』『詩経』『書経』『春秋』『礼記』）を中心とする経学と史学（『国史略』『日本外史』『十八史略』など）・国学・句読・兵学などを講じた。武校では当初、槍術・剣術・砲術・練兵・馬術などを教えたが、後にいくつかを廃止し、代わって西洋式砲術や洋式小銃を使用しての練兵などを行うようになる。

藩校に通ったのは士族の子弟で、八、九歳から十四歳くらいまでは師匠について書道・素読などの読み書きを習い、十五歳から四十歳まで文武の修業に励むのが普通だった。だが、藩校での学問が義務づけられていたわけではなく、儒者に師事することも認められていた。特に武芸に関しては、特殊な修練であるためそれぞれ個人的に師について修行するのがむしろ一般的だったという。こうした私塾や寺子屋は城下だけでなく郡部にも数多く存在し、士族や町民、農民が、それぞれの階層に応じた知識と教養を学ぶのに役立った。

郡部には『郷校』と称する官設の学校が各地に置かれていた。これは藩や郡奉行所、有力な土居付家老が設けた教育機関で、各家老に仕える士族（陪臣）の子弟が学んだほか、「士商共学」といって、町民（主に裕福な商家）などの子弟も部分的に受け入れられていた。代表的なものとしては安芸郡田野（現在の安芸郡田野町）の田野学校、幡多郡中村（現在の中村市）の行余館、安芸郡土居村（現在の安芸市）にあった五藤家の秉彝学舎、高岡郡佐川（現在の高岡郡佐川町）に深尾家が設立した名教館がある。綱の通った講授館（のちの文館、日新館）もその一つで、伊賀家の十代当主氏固が天保二年（一八三一）

に創立したのが始まりとされる。

宿毛における江戸時代の教育状況については、史料不足のため、はっきりしたことはわかっていない。ただ、講授館*の創立以前に学問所が置かれていたらしいことや、代々の領主が学問を奨励し、儒者などを招き自ら教えを受けるなどして文武の振興に務めていたことは、文献などからうかがえる。私塾や寺子屋に関しては『高知藩教育沿革取調』に詳しい。その中に所載されている『付・日本教育史資料』を見ると幡多郡下に四十二あり、そのうち近隣の中村に十二、宿毛領内（現在の幡多郡大月町を含む）に八ヶ所あったという記録が残っている。土佐藩における私塾・寺子屋の総数は『高知藩教育沿革取調』によれば約二百三十あまり、そのうち城下（現在の高知市内）にあったものが三十二ヶ所とされている。決して少ない数字ではない。

山内家の土居付家老である伊賀氏は、土佐藩の執政として藩内の政治に関わる立場にあった。幕府や他藩との交渉役を務めることも少なくなかった。その家の当主ともなれば、幼い頃からさまざまな知識や儀礼、作法を身につけておく必要があったはず。いきおい家臣や領民の教育にも力を入れていたと思われる。人材登用にも熱心で、代々の領主がそうだったように十一代氏理（うじきよ）も、小野節吉という商人を学問に優れ経理に明るいという理由で士分に取り立てている。宿毛の人々は、「学問ができれば立身出世も夢ではない」と考えたことだろう。また、そうした風潮があればこそ、民間の教育機関も隆盛したのである。

一方、官設の学校である講授館では「家士*以下卒に至る迄、老幼の別無く出席せしめ、経書及歴史等

を講授し、且つ幼年輩の為に、毎朝或は隔日に句読又は輪講及習字等の課程を設く。而して毎月両三の会日を立て、領主の邸内へ講授役を出席せしめ、経書等を講ぜしむるの制を定め」ていた。学習年齢は十五、六歳から四十九歳まで。時代や個人の資質などによって若干の違いがあり、『宿毛市史』によると、天保年間から文久三年二月までは七、八歳で私塾や寺子屋に入って十四、五歳で退学し、そののち郷校で文武両道を学んでいたが、文久三年三月以後、十歳で入校して十五歳で退校し、十六歳から四十九歳まで文武両道を学ぶことになったという。教科内容は藩校と同じく文と武に分かれており、文では四書五経を中心とする購読・習字・算術・作文・地理・暦学などを、武技では兵学・弓術・馬術・剣術・砲術などを修めた。

ちなみに、日新館時代の蔵書の一部は今も残っており、地元の宿毛市文教センター（宿毛市土居下）に保管されている。参考までに書名をあげておこう。

日本外史　国語定本　漢書評林　左氏伝校本　大日本史　四書正解　左繡　貞観政要　綱鑑易知録
資治通鑑　呂氏春秋　日本政記　詩経集註　史記評林　仏国商法　仏国民法　世説故事苑
萬国公法　日本外史補　輿地史略　英国史略　楚辞　泰西史鑑　萬国新史　自由の理　偉績叢伝
訓蒙修身学　西洋事情　世界国盡　西洋立志編　小学日本文典　理化日誌　西洋学校軌範　通鑑
校刻日本外史　聖徳太子十七条憲法　椿説弓張月　南総里見八犬伝

講読の際には漢籍のみを扱い、和学・洋学・医学を教えなかったこともあって、蔵書の大半が漢書だが、西洋の歴史や法律などを記したものも少なくない。かつての蔵書目録にも『英国史』や『洋算例題』『物理階梯』『幾何初歩』『地理初歩』『発明記事』『理学問答』などの書名が並ぶ。おそらく幕末から明治初期にかけて集められたと思われるが、激動する時代の息吹きを感じさせる書物を多数所蔵していた様子がうかがえる。高知大学教育学部の千葉昌弘教授は「江戸時代の宿毛には、大分を経由して、高知の中でも比較的早い時期から洋学や蘭学が入ってきていた」と指摘するが、この蔵書リストは、それを裏付ける格好の史料。文教の町宿毛では、こうした書物によって若者たちが最新の西洋事情を学んでいたのだろう。

その講授館で最初に講授役を任されたのは、三宅大蔵という人物だった。博学多識、特に文学に明るく、その優秀さを認められて、町民の出ながらのちに士格に列せられた。三宅の死後は、彼の私塾で塾長を務めたこともある上村修蔵が登用される。上村は経史に造詣の深い温厚の士で、他国への留学経験も持っていた。彼は、文久三年（一八六三）に講授館が文館と改められたのちも引き続き講授役を務めたが、その時、彼を補佐する形で酒井三治という青年が助教役に任命される。綱は上村、酒井の両人に師事して文学を学んだのだが、この酒井こそが少年期、青年期を通じて綱に最も大きな影響を与えたと思われる人物であった。

恩師酒井三治のこと

酒井三治（号・南峰、のちに南嶺）の生家、酒井家は江戸時代以前から伊賀家と縁のあった家柄で、いわば譜代の家臣である。家格は騎馬だが、宿毛ではなかなかの名家だったようで、親類には大江卓や小野梓、小野義真らそうそうたる人物が名を連ねている。宿毛の教育に大いに貢献した立田家や、綱とつながりの深い岩村家、林家とも縁戚関係にあった。

三治は、その家の次男として文政十一年（一八二八）に生まれた。生誕地は高知城下の宿毛屋敷だが、宿毛だったとする説もある。幼い頃から文武両道に秀で、特に居合と書をよくした。十五歳の時に藩校教授館に入校し、その後、高知城下の宿毛屋敷内で私塾を開き、子弟に筆道読書を教えていたが、領主の命により帰郷。弱冠二十四歳で講授館の助教役に任ぜられた。綱と出会ったのは、おそらくこの時。

それ以後、綱は酒井を師と仰ぎ、常に敬っていたが、三治の方も綱の才能を早くから見抜いていたようだ。そのためか、あるいは比較的年齢が近かったせいか、三治自身は綱を岩村通俊と共に、門人ではなく親しい友人として扱った。

助教役を一年間務めたあと、領主の許しを得て宿毛を離れ、三年間、江戸、大阪などで学問修行に励む。帰国後は宿毛で私塾を開き後進の指導にあたったが、学問への情熱は冷めず、三十歳の時に再び京都に赴いた。彼はこの時、大阪府政に功績を残した官僚出の政治家、西四辻公業と知り合う。西四辻は

後年、綱が大阪府へ出仕した折りに知事を務めていた人物でもある。

この頃から世情はいっそう騒がしくなり、安政の大獄（安政五年）、桜田門外の変（万延元年）を経て、幕末の激動が本格的に幕を開けることになるのだが、三治はこののちも、郷校や自分の塾での教育と遊学を何度か繰り返す。そのたびに新しい知識を得、不穏な社会情勢からもさまざまな事柄を学んだ。そして、それは門弟にも伝えられ、次代を担う若者たちの思想を形づくる大切な血肉となったはずだ。

彼の教えを特長づける卓越した見識と広い視野には、目を見張るものがある。

彼は軸物などに署名する際、必ず『日本人酒井三治』と自書したという。尊皇、佐幕、攘夷、開国と世論を二分する騒ぎが起きていた時代にである。藩や国といった狭い枠組みに収まらない、自由な精神を感じさせるエピソードではないか。その言葉からもわかるように、三治の念頭には、常に「世界の中の日本人」という思いがあった。「世界の一員として自分は何を為すべきか」「社会にどんな貢献ができるのか」を考え、そうした視点に立って門弟にも教育を施したに違いない。

彼の教え子たちは、綱にかぎらず、全員が国際的な視野を持っていた。大所高所から物事を見極める力を備し、それを国家や人民のために生かす道を選んだ。綱、岩村三兄弟、大江卓、結果はそれぞれに異なるが、誰もが自分の信念に従って、国家のため、世界のためと考えて理想の実現に向けて懸命に努力したのだ。三治の生涯を綴った評伝『酒井南嶺伝』（小山松勝一郎・弘中敦子共著・東京宿毛会発行）で著者が指摘するように、彼らの信条や生き様には、三治の及ぼした影響が色濃く見て取れる。

第二章　伊賀家における綱の功績

宿毛に大きな被害をもたらした地震から八年後の文久二年（一八六二）五月、竹内綱は伊賀家の目付役に任ぜられる。同時に身分も騎馬に戻され、知行三十石と役知二十石を与えられた。この昇進には、当時の社会情勢が大きく関係している。

世の中は大きく揺れていた。嘉永六年（一八五三）のペリー来航以来、幕府の政治が混乱を極めたためである。さらに、安政の大獄を発端として尊皇攘夷派が討幕へと矛先を変え、騒乱を起こしては民心の不安をあおった。大老井伊直弼の暗殺（桜田門外の変）、老中安藤信正の暗殺未遂（坂下門外の変）などが相次ぎ、三百年続いた幕府の威信は完全に失われてしまう。

土佐でも武市半平太らを中心に土佐勤王党が組織され、攘夷論が沸騰。影響は城下を遠く離れた宿毛の地にも及んだ。加えて、藩主の山内容堂が公武合体論を主張していたため、伊賀家の重臣たちは尊皇、佐幕のいずれをとるべきかで二派に分かれてしまった。この論争は一大騒動にまで発展したようで、決着のつかないまま重役全員が交代する事態となり、その余波で、弱冠二十三歳の綱が重責を担うことになったのである。

目付役に就任した綱は、地震の被害でいっそう悪化した財政を立て直すべく奮闘する。その一方で、

攘夷論に揺れる領内を鎮めるため、尊皇・佐幕の両派について詳しく研究することを思い立つ。綱自身は攘夷反対論者だったが、尊皇攘夷派を説得するには、それなりの理由が必要だと考えたのだろう。文久三年五月、主家の許しを得て側用役の岩村通俊と共に高知に赴き、両派の有力者をそれぞれ訪問している。

まず訪ねたのは、藩の奉行職にあった深尾鼎である。深尾は討幕攘夷派の非を唱えたが、その見解は、綱の言葉を借りれば「平凡ニシテ記スモノナシ」という有り様で、全く参考にならなかった。板垣退助にも面会を求めたが、折悪しく病気中で会えなかった。

二人は土佐勤王党の首領、武市半平太とも会見した。武市は土佐における攘夷派の急先鋒として、この当時あたるべからざる勢いを示していた。綱の言葉を借りれば、「長州の久坂玄瑞と結託し、京都で三條実美公と攘夷討幕の計画を立て、土佐に戻って容堂公にその旨を建議した」とあって、開国を迫る西洋諸国を『東洋への侵略を狙う外夷』と決めつけ、「すべて追い払わなければならない」と断言した。

しかし、綱はこれを聞いて、逆にますます攘夷論に無理を感じたようである。「以前から貿易を許しているオランダも追い払うのか」との問いに「無論だ」と言い放つ武市に向かって、重ねて「では、自国で産出することができない薬品や染料、毛皮、洋式銃などは、どうやって輸入するというのか」と尋ねている。一方の武市は、綱の鋭い追及に対して明瞭な答えを返すことができなかった。そのため、綱は「攘夷論はやはり不当である」との認識を強め、宿毛に戻ったのち、その旨を伊賀家に報告したのだった。

ところで、綱たちは武市を訪れる前に、目付役の後藤象二郎に意見を求めている。後藤は二人の前で「幕府と朝廷は調和しなければならない」との持論を展開し、「いたずらに勤王を唱えて攘夷討幕を主張するのは、国家の発達を妨害するだけだ」と攘夷派を一蹴。さらに「公議世論によって政権を統一すると共に、国内の産業を開発して、外国との貿易を盛んにすべきである。また、土壌が肥沃で物産も豊富な海外の未開地を植民開拓して、我が国の勢力を発展させる必要がある」と述べたという。この時の会見は、綱によほど強い感銘を与えたようで、自叙伝には「余ハ其論ノ雄大壮快ナルニ感服シ」と記している。

綱は、後藤の語る海外進出の夢に共感を覚えてもいたらしい。「奮躍ノ情ニ堪ヘズ」との思いから、ボルネオ島開拓を実際に検討中だという後藤に対して、その場で「是非とも植民事業に従事したい」と申し出、了承されると、すぐさま盟約を結んだ。事業実施の暁には、必ず一緒に努力しようというわけである。すっかり意気投合した二人は、これを機に次第に親しくなっていく。

ちなみに、この時の計画は後年、後藤の手で実行に移され、綱に経営を任せる話まで出たが、結局、実現には至らなかった。世間から「大風呂敷」とあだ名され、陸奥宗光に「*失敗の英雄」と評された後藤らしい結末だが、綱と後藤は以後も、ことあるごとに大事業を共に手がけては失敗するという、一見愚行とも見える試みを何度か繰り返す。

のちに大政奉還の立役者となる後藤と、政界・実業界で活躍する綱との交友関係がここに始まったのである。

財政再建に尽力

伊賀家における綱の業績を考える時、忘れてならないのは、やはり財政再建に果たした役割であろう。当時、伊賀家は経済的に完全に行き詰まっていた。財政難の直接の原因は宝永四年（一七〇七）と嘉永七年（一八五四）に起きた大地震である。

宝永の大地震では大津波が何度も押し寄せ、十七世紀半ばに開発した新田百五十町歩をすべて洗い流し、本田をも荒れ地に変えた。このため伊賀家には年貢米が入らなくなり、復旧に多大な費用を要したこともあって、続く八十二年間のうち六十七年間も藩に補助を願い出ている。その傷跡がようやく癒えかけたところを、嘉永の地震に襲われた。

加えて、幕末のこの時期、藩からは外敵に備えよとの命令が下されている。異国船を打ち払うための砲台の建築や銃砲、弾薬の購入など、軍備のための資金はいくらあっても足りないほどなのに、肝心の金がない。半知借上げを行っても長年の赤字を埋めることさえできず、一方では支出だけが増えていく。財政担当者は、さぞかし対応に苦慮したことだろう。

目付役に就任した綱も、まっさきにこの問題と取り組んだ。まず、軍備拡張のための資金を調達しなければならない。手っ取り早く現金を稼ぐために綱が目を付けたのは、海外への輸出によって高額な値段で取り引きされるようになった樟脳の製造だった。樟脳の原料の楠は、昔から伐採が禁止されていた

ので、領内の至る所にたくさんあった。それを片っ端から切り倒し樟脳にして売ろうというのである。このアイデアは図にあたった。綱はこの時の成果を自叙伝に、誇らしげに「結果ハ頗ル良好ニシテ、開始後一ヶ年余ニシテ、軍備ニ急要ナル資金ハ之ニヨリテ調達シ得ルニ至レリ」と記している。

また、財政整理を進めるために地租改正を行った。地租は昔から米で納められる習わしだった。宿毛でも、毎年収穫期になると担当者が各村へ出向き、村役人の立ち会いのもと、その年の収穫量を見積もって決めていた。もし、双方の見積高が一致しなければ、稲を一坪分刈り取って実際の収穫量を調べることになっており、作業が煩雑であるだけでなく、時間がかかりすぎるため、収穫に最適な時期を逃して収穫高が減ってしまうこともたびたびであった。

そこで、綱は、地租決定に要する作業を簡略化することで収穫高を増やし、年ごとに増減する年貢米を一定化させようと考えた。改正後の地租は過去三ヶ年間の収穫量を平均し、これに過去十年間の米価の平均値をかけて、その十分の四を年貢米として徴収することとした。以前の割合は十分の五だったから、一割ほど減った計算になるが、減収分は地租の金納化によって十分補えたらしい。改正に三年を要したものの、それ以後、地租による収入はほぼ倍増。伊賀家の財政赤字を解消したばかりか、家臣からの半知借上げの悪習もようやく廃止することができたという。

これら二つの財政再建策が大きな成功を収めた背景には、鎖国から開国へ、あるいは本格的な商品経済の進展といった社会情勢の変化があったことは否めない。だが、時代のニーズをうまく察知する勘とアイデア、そして、それを実行に移す行動力が綱になかったとしたら、これだけの成果が残せたかどう

か。

一方で、「綱には実業家としての素質はなかった」と見る人もいるようだ。彼にあったのは商才であり、大きな企業を組織し維持運営していく能力や、天下国家の大事を成し遂げる資質には欠けていたのではないかというのである。これらの主張には頷ける部分もある。彼が手がけた事業の中には、壮大な構想を立てたものの周囲の理解を得られず、計画倒れに終わったものがいくつかあるからだ。成功と同じように、失敗や挫折も多かった。後年、彼が政界に果たした役割を見ても、彼自身が中心となるよりは補佐的な立場で関わったり、調整役を務めた時の方がうまくことが運んだように思われる。

綱が自ら興した芳谷炭鉱などの経営を早くから長男の明太郎に任せた理由の一つは、もしかすると、彼自身そのことに気づいていたからではないだろうか。

大阪蔵屋敷の経営

綱が時流に合った商売が得意だったことはまず間違いない。樟脳製造などによって財政整理に成功した綱は仕置役に就任したのち、領内の産業振興を図るため引き続き特産物の輸出を計画する。

慶應二年（一八六六）一月、仕置役小頭立田強一郎（のちの小野義真）と物産方下役小野節吉（小野梓の父）を伴って陸路で大阪へと向かった。大阪商人の協力を得て紙や材木など物産を手広く売りさばくためである。

当初、大阪には何のつてもなかったため、高知藩の大阪蔵屋敷留守居役石川石之助と開済館頭取武藤清に援助を求めたところ、二人は綱を高知藩御用達の商家に紹介してくれた。その商家（炭屋彦五郎、辰見屋源助、銭屋文助の三家）の番頭と協議した結果、彼らの周旋でそれぞれの問屋と物産の販売及び荷為替の取り扱いについて話をまとめることができた。同時に、物産の輸送に必要な船を手配。船問屋淡路屋市郎平から五百五十石積みの帆前船を一隻買い入れ、別に淡路屋所有の二隻を利用することとした。大阪への宿毛蔵屋敷の設置も決め、辰見屋源助から道頓堀塩見橋北詰めにある三百坪あまりの地所を購入し、事務所一棟と倉庫七棟を譲り受けている。これらの事業には多額の費用を要したが、綱は炭屋彦五郎から金二千両を借り入れたという。

事業は順調に発展し、伊賀家に大きな利益をもたらした。そこで綱は明治二年（一八六九）、さらなる事業展開を試みる。一つは新たに汽船を購入し、瀬戸内海で回漕業を始めること。もう一つは、大阪・神戸間に鉄道を敷設することだった。明治維新後、商品経済がますます進展して、諸国間の物産の流通はいっそう盛んになった。船や鉄道で大量輸送できれば、それだけ利益も大きくなる。時流に敏感な綱がこうした世の中の動きに注目しないはずがない。手始めに回漕業に着手し、二千五百トンの蒸汽船を買い入れて、大阪・神戸・丸亀間で旅客貨物の輸送を開業した。これは成功し、七、八回往復した段階では業績も非常に良好だった。そのため、さらに事業を拡張することを計画。汽船の数を増やし、航路を瀬戸内海一円に広げて、大阪から下関に至る往復回漕業を行うための準備にとりかかった。

一方で、綱は鉄道敷設事業にも本格的に乗り出すことを決意する。この頃親しくしていた神戸駐在ア

メリカ領事モリソンから、鉄道を敷設すれば交通の便がよくなる上に、事業としても非常に有望であることを聞いたのがきっかけだった。綱が「大阪・神戸間に鉄道を敷設したらどうだろう」と尋ねると、モリソンは賛意を示し、「実際に事業を興すのなら、大阪の資産家の組合を通して政府から鉄道敷設の許可を得るのがいいだろう。それには巨額の資金が要るが、鉄道営業の監督と鉄道関連の機械一切をアメリカから買い入れることを条件に、アメリカから低利で借款できるよう私が働きかけてあげよう」と答えた。

この言葉に意を強くした綱は、さっそく行動を開始。まずモリソンの指定した路線を踏査し、工事設計に要する予算をはじき出すと、友人で大阪府参事を務める吉井源馬と相談し、鴻池ら資産家四、五人に声をかけて、政府に鉄道敷設を願い出るための組合を作るよう働きかけ始めた。

好事魔多し。二つの計画は結局、『絵に描いた餅』で終わってしまう。各港に支店代理店を置く手配をし、イギリス人から汽船を二隻買い入れる交渉を行っている最中に、藩から大阪にある宿毛蔵屋敷の引き揚げを命じられたのである。

この時の事情を綱は自叙伝に「宿毛蔵屋敷ノ事業追次発展セルニ及ンデ虚大ノ浮説世間ニ伝ワリ、高知藩ニ於イテ家老ノ家柄トシテ蔵屋敷ノ経営ハ僭越ナリトノ説アリシヲ以テ、明治二年五月伊賀家ニ対シ、本年十月ヲ限リ大阪宿毛蔵屋敷ヲ引キ揚グベシトノ命アリ」と記している。「家老の分際で蔵屋敷を設けるとは身分をわきまえない行為。しかも、それを金儲けに利用するとはけしからん」といったところか。藩上層部に、伊賀家の成功を不快とする声があったのだろう。

藩からの命令ではどうすることもできず、綱は一切の事業からの撤退を余儀なくされた。

宿毛の家中にも、事業の最大の功労者である綱のことを快く思わない人間がいたようだ。蔵屋敷の引き揚げに着手した綱は、事業に伴う負債の整理に四苦八苦することになるが、国元からはほとんど何の援助も得られなかった。財政的に余裕がなかったこともあるのだろうが、重役たちは藩の命令を伝えると共に、綱に対して「蔵屋敷に関する負債は伊賀家に類を及ぼさないよう、引き揚げの日までに処理せよ」と指示しただけ。「もし処理の見込みが立たなければ、至急帰国して重役と協議するように」との厳命も下したが、問題を解決する見込みがあってのことではない。綱に責任をとらせて、切腹させるためである。

若い頃の綱には、自分が正しいと思うことは、周囲の反対を押し切ってでもやってのけるようなところがあったようだ。若さ故の傲慢ともとれるが、幸か不幸か、綱はそれに見合う充分な才覚や実行力を備えていた。その分、周りの反感を買いやすく、結果的に綱が正しかったとしても、すんなりとは認めてもらえなかったに違いない。このことは、後述する異国船来港時の騒動からも言えることである。

自分が始めた事業である。国元からの手助けがあてにできない以上、何とか独力で切り抜けるしかない。しかし、事態は深刻だった。蔵屋敷の負債は当時の貨幣価値で三万円（現代の物価に換算すれば一億二千万円ほどか）を超すというのに、所有する汽船二隻と地所などをすべて売り払っても、その半分にもならないのだ。しかも、期限は五ヶ月足らず。さすがの綱も、ここにきて遂に進退窮まったかのように見えた。

だが、彼の商才は困難な事態に行き当たった時ほど、発揮されるものらしい。綱は苦心惨憺、知恵を振り絞ったあげく、この土壇場で起死回生の策を思いつく。

当時、日本では太政官札と呼ばれる紙幣が流通していたが、地方によっては藩札を使っている所があり、高知も同様だった。ところが、明治政府が中央集権国家体制を確立し権限を強めるにつれ、その地方でしか通用しない藩札の価値は急落。高知の場合、明治二年には、太政官札の半分以下にまで下落していた。この貨幣価値の差に目を付けたのである。

綱はまず高知に戻り、藩庁に対して藩札三万円の太政官札への引き換えと、大阪蔵屋敷引き揚げ期限の半年間延期を願い出た。藩札と太政官札との引き換えには藩の認可が必要で、かなり難しい問題だったが、願い出によって許されることがままあったという。後藤象二郎の尽力を得るなどして事を思い通りに運び、蔵屋敷の引き揚げ延長も許可された。

朗報を得た綱は勇躍大阪へ戻り、次なる手だてを講じた。土佐で取り引きされるさまざまな品物を買い取って、大阪から宿毛へ輸送し、改めて売りさばくという。物資の転売にまつわるからくりは自叙伝にも記されていないのでよくわからないが、とにかく、これによって多大な利益を上げ、三万円の負債すべてを償却することができた。おかげで、蔵屋敷の地所や汽船を譲渡した代金約一万円は丸ごと剰余金となった。宿毛に引き揚げた後、綱はそれをそっくり伊賀家に差し出している。

「伊賀家重役ハ負債ヲ償却シ得ザルニ於テハ、余ヲ切腹ノ厳刑ニ処シ、以テ藩ニ謝スルノ議ヲ決セシ由ナルモ、容易ニコノ難境ヲ脱スルヲ得タルハ、実ニ僥倖ノコトドモナリ」――こうして綱は、ようやく

窮地を脱することができたのだった。

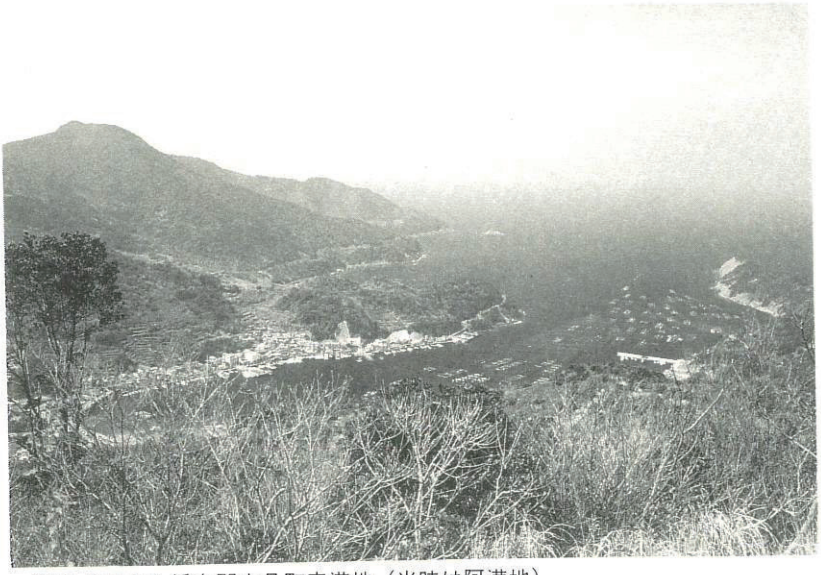
異国船来港騒動の顚末

実は、蔵屋敷の経営に乗り出す前にも、綱は一度、生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされている。自ら瀬戸際に立ったというべきかもしれない。

慶應二年（一八六六）七月三日、宿毛の町から四里ほど離れた阿満地浦（現在の幡多郡大月町安満地）という所に、一隻の異国船が姿を見せたという知らせが届いた。以前から「異国船が立ち寄ったら、ただちに打ち払え」と藩庁から命じられていた場所である。翌日には兵が派遣された。この時指揮を執ったのは当時老役を務めていた羽田左膳という人物で、仕置役の綱も同行することになった。

二人は、新たにオランダから購入したばかりの小銃ミネヘールを携えた歩兵二小隊を率い、漁船十艘余を連ねて現地に赴く。港には、今まで見たこともないような長大な大砲を据え付けた、巨大な黒船が停泊していた。船員たちはすでに船を下り、三々五々浜辺を行き交っている。

これを見た羽田や隊長たちは、藩の命令通り、すぐに攻撃すべきだと強硬に主張した。だが、綱は状況を冷静に判断していた。ここで打ち払いを強行しても、小銃しか持っていない自分たちと黒船とでは勝負にならない。それより相手方の動きを見ることが大切だ。そう考えた綱は「じかに様子を観察してくるので、自分が戻るまでは攻撃は見合わせるように」と言い残し、小舟に乗り込んで単身黒船に向かっ



騒動が起きた幡多郡大月町安満地（当時は阿満地）

た。

黒船の甲板では紳士らしい一人の外国人男性が綱を手招きしている。誘われるままに綱が乗船すると、その紳士は彼を船室に招き入れ、しきりに話しかけてきた。だが、綱には英語はわからないし、相手方も日本語を解せない。そこで、紳士がどこからか取り出してきた『和版英語箋』という辞書を使い、それぞれの国の言葉を単語ごとに指し示して意思の疎通を図ることになった。時間はかかったが、それによって黒船がイギリスのものであること、海洋測量のために阿満地浦に立ち寄り、明日には出港する予定であることなどを、おぼろげながら推察することができた。ちなみに、この紳士は初めて日本に駐在したことで知られる英国公使オールコックだったと綱は記している。ただし、別[*]の史料によればこの船は英国籍のセルベント号で、船長の名をフロックと記している。

会談の結果に満足した綱は陸へ戻り、羽田や隊長たちに観察結果を報告した。結局、綱の主張通り、攻撃はせずに明朝無事に出港を見送ることで意見が決した。今日的な感覚からすると、外国の港に無断で入って測量を行うなどというのはずいぶん乱暴な話で、侵犯行為に等しい。攻撃を仕掛けられても仕方ないところだが、当時の微妙な社会情勢と黒船の威力を考慮すれば、綱の判断は妥当だったといえよう。

特産品販売の件で大阪に何度も出張していた綱は、当然、日本の置かれている状況や諸外国の軍事力などをある程度理解していただろうし、大局的なものの見方も備えていた。それ故に出された結論だったのだが、この時の行動が独断専行で、藩の命令を無視したものと見なされ、綱は後日、切腹を命ぜられることになる。

「攻撃せず」の決定に不満を抱いた隊長の一人が、綱が宿毛に戻る前に「竹内は大切なる打払の使命を果たさなかった」として重役に密告したのである。しかも間の悪いことに、綱は会談の席で酒を飲み、酔っぱらって部下の元へ戻っていた。相手方の紳士的な態度に安心したのか、勧められるままに何杯も飲んだらしい。「シェリーやシャンパンなどの洋酒のおいしさに、思わず杯を重ねて大いに酩酊してしまった」と綱自身も認めている。

命令を守らなかったばかりか、「敵人ト酒杯ヲ献酬シ大酔シテ憚ルナキハ、実ニ大罪人ナリ許スベカラズ」というわけである。重役一同が集まって「竹内を切腹の厳刑に処すべし」と決し、同月六日夕刻、宿毛に帰り着いた綱に対して閉門蟄居を申し渡した。当初の予定ではその日のうちに切腹となるはず

だったが、どういうわけか実行されず、綱はあやういところで命を長らえる。案外、領主（氏理）の裁可を仰ぐのに高知城下の宿毛屋敷と連絡をとる必要があり、それに手間取ったのかもしれない。その後も正式な切腹の沙汰は下らず、自邸に引きこもったまま十日間が過ぎた。

そして、同月十五日。高知の宿毛屋敷留守居役より、綱にとってはまたとない吉報がもたらされる。藩政府が去る十日須崎に入港したイギリスの測量船を打ち払わず、逆に歓迎して牛肉鶏卵などの食料を贈ったという知らせだった。これを聞いた重役たちは、藩の突然の方針の変化に戸惑い、藩庁に対して次のような質問書を提出した。

一、領内へ異国船が来て薪水、食料等を乞う場合どうしたらよいか。

一、上陸したいという場合どうしたらよいか。許可を得ずに直ちに上陸した場合どのようにしたらよいか。

これに対する藩当局の回答は、「*なるべく上陸は拒否し、しいて上陸を申し出て暴挙のない場合は上陸させ薪水食料等を与えてもよい」というもの。藩が異国船の扱いに関する方針を変更した以上、綱を厳しくとがめだてする理由はない。重役たちは訴追を断念し、綱の閉門蟄居を解く。ここでも、綱は辛くも切腹の危機を切り抜けたのだった。

東北征討軍への参加

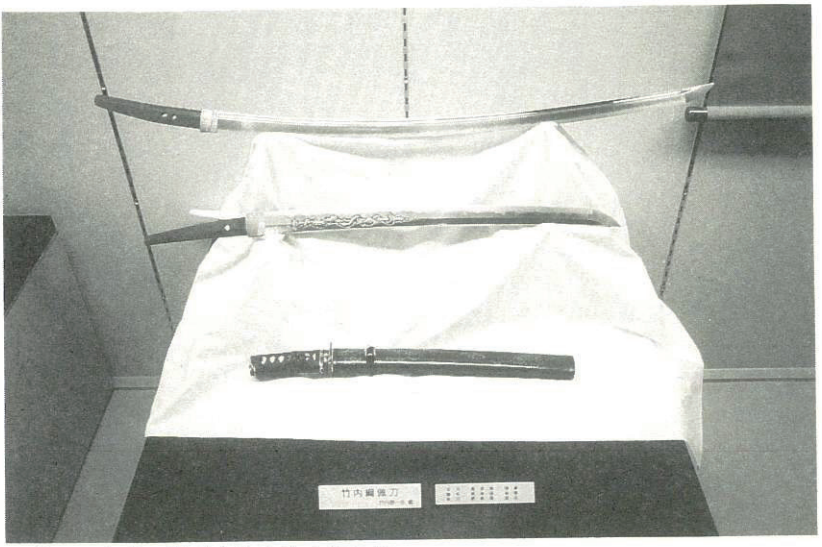
伊賀家の家臣としての綱の活躍は、財政面に留まらない。明治維新の際には戊辰戦争に従軍し、北陸・東北地方を転戦している。

明治元年（一八六八）四月、伊賀家の嫡子陽太郎（十二代氏成）の京都留学が決まり、綱はその守り役に選ばれ、物頭としてともに上洛することになった。随行は綱の他、近習林有造、医師羽田文友ら。次期当主を警護する大切な役目とはいえ、日頃の堅苦しい職務を離れての旅。綱の気分もいくらか軽かったのではないだろうか。三週間余りの行程ののち、一行は京都に到着。陽太郎は木屋町の旅籠に寄宿し、岩垣月洲の塾に通って勉学に励んだ。

ところが、当時は旧幕府軍と新政府軍が戦っている真っ最中。京都にいても、各地で繰り広げられる戦闘の噂は伝わってくる。これを聞いて十七歳の陽太郎は奮い立った。血気盛んな年頃である。国事のために「自分も」と思わないはずがない。内密で藩主山内容堂の許可を取り、北陸への出陣を決めてしまった。ちょうど国元で組織された機勢隊が、藩の東北征討軍に加わるべく上京してきており、一行はこれに合流することになった。

実は、この一件は最初から仕組まれたものだったらしい。

『林有造伝』によれば、林が公用で高知に出府した際、松山征討の準備に忙殺される藩士たちの様子に



宿毛歴史館に陳列される竹内綱の刀
（長谷部国重、脇差は尾崎源五右衛門助隆、短刀は肥前国忠吉）

刺激されて官軍への参加を決意し、一計を案じた結果だという。以前から脱藩をも辞さない覚悟で国事への参加を志していた有造は、好機至れりと考え、「若君を奉じて従軍すべきだ」と同行者たちに相談した。だが、お家の安泰を第一に考える綱に拒絶され、それなら直接若君を口説くまでとばかりに密かに動き始める。結局、この時の計画は実現しなかったのだが、有造はあきらめなかった。京都への留学を口実に、何とか出征の機会を捉えようと画策。容堂から陽太郎の京都留学の許可をとりつけ、上京を果たす。その後、単身戦場の様子を探った上で出兵してきた機勢隊に合流し、陽太郎ともども遂に参戦することを得たのだった。

また、一説によると、陽太郎自らが策を講じたともいわれている。京都へ上った際に、先に公務で出京していた岩村通俊から「のんきに読書などで時を過ごしている時ではない。みずから戦場に臨まれて*

王事に力を尽くさなければならない時節だ」と説かれ、我が意を得たりと喜んだ陽太郎は、すぐにも征討軍へ参加しようとした。だが、守り役の綱に「当主（氏理）の許しを得ていないから」と止められたため、側役の毛利恭輔を容堂の元へ遣わして許可を取り、藩命を受ける形で堂々と出陣したというのである。

ともかくも、同年六月以後、綱たちは機勢隊と共に北陸から東北を転戦する。越後新潟で藩の出征軍に合流し、柴田から奥羽の反乱軍を追って秋田方面へ進軍。秋田境の鼠ヶ関で堡塁戦を行った。綱も宿毛兵を率いて敵陣に夜襲をかけ、水戸兵が守っていた堡塁を奪取している。なお、この時の戦闘場所については綱の自叙伝と別の資料との間にくい違いがあり、綱の記憶違いとする説もある。

戦闘は一ヶ月以上続き、秋田城が陥落して終わる。奥羽の反乱平定後、機勢隊は越後を経て宿毛に引き揚げたが、綱たちは隊と別れ、陽太郎の仙台米沢視察に随行した。一行が東京を経て東海道経由で宿毛に帰着したのは、その年の十一月も終わりのことだった。

第三章　活躍の場を広げる綱

宿毛蔵屋敷の引き揚げに伴う残務整理を終えたところで、綱は第一の転機を迎えることになる。宿毛に戻り、伊賀家での務めに区切りがついたのを機に「爾後如何ニ身ヲ処スベキカ考慮」している時、大阪府大参事となった友人の吉井源馬に誘われ、大阪へ出ることを決意したのである。思う存分能力を発揮するには宿毛は狭すぎると感じたのか、あるいは、重役たちとの間のごたごたに嫌気がさしたのかもしれない。綱はこの当時すでに妻をめとっており、長男明太郎も生まれていたため、家族を連れての上阪となった。

明治三年（一八七〇）二月十五日、吉井の推薦で大阪府の役所に七等出仕することになり、正七位に叙せられた。大阪へ移ってからも綱の活躍は続き、翌四年二月二十日には少参事に任命され、位階も従六位となっている。当時の大阪府知事が恩師酒井三治の知人である西四辻公業だったことも、幸いしたに違いない。西四辻と吉井の厚い信頼を得た綱は、府の施策に対して、さまざまな進言を行った。その主なものが「取締制度の創設」、「流人の追払い」、「町村会制度の導入」、「河川改修」、「大阪新港の築港計画」である。

取締制度は、福澤諭吉の著書にアイデアを得て創設した。大阪市内各所に設けた交番に羅卒を配置し、

そこを拠点として市内の警邏を行うというもので、日本における警察の近代化の先駆けとなった。これによって大阪の治安が向上したことは、いうまでもない。

町村会制度は、混乱と腐敗の温床となっている現行制度を改善するために実施したものだった。当時、大阪市外の町村は幕府や諸藩、旗本、神社、寺院などの領地が入り交じり、道路も未整備で街並み自体が混沌としていた。そこで、秩序だった街づくりを行うために、各町村で区画整理と道路改修を断行。併せて町村会の設置と議員の選出、町村長及び助役の選挙を決め、大阪府下での地方自治確立に大いに貢献した。

淀川*・安治川の応急改修も成功しており、綱の発案による事業はおおむね順調に運んだといえよう。だが、その半面、問題や失敗も起きた。流民の追い払いに関していえば、大阪府中から無頼の徒を追放するのには役立ったが、周辺の諸府県に事前に連絡することなく単独で実施したため、居場所を追われた浮浪者たちが京都や兵庫へ流れ込む結果となり、周辺府県から苦情が相次いだ。また、大阪新港建設計画は、経済恐慌のあおりを受けて公債募集が認められず、大蔵省の裁定で中止となっている。

綱といえども、すべてが順風満帆というわけにはいかなかったようだ。

大蔵省に出仕

築港問題に関連して大蔵省の裁定を受けるため東京に出ていた綱は、そこで、陸奥宗光から大蔵省への転職を持ちかけられる。当時、陸奥は大隈重信のもとで大蔵省勤めをしており、綱の手腕を認めて「共に省務に尽力しようではないか」と熱心に説いた。綱もさまざまに思い悩んだはずだが、新港計画に失敗した挫折感もあったのだろう、陸奥の熱意に動かされ誘いを受けることを決意。家族ともども大阪を引き払い、明治六年十二月十五日、陸奥の推薦で大蔵省六等出仕庶務頭に採用された。

だが、ここでの活躍期間は短かく、わずか五ヶ月余りで退職してしまう。

出仕して間もなく、職場での数少ない知人であり、何かと頼りにしていた陸奥がある事情で辞職。その上、省内に大きな勢力を持っていた同僚の庶務頭岩崎徹と意見が合わず、不愉快な思いを味わう羽目に陥った。綱にとっておもしろくない状況が続いたところへ、京都府疑獄事件が起き、綱は調査委員を命じられる。これが結局、辞職の引き金となった。

疑獄事件は京都府大参事の槇村某を始め、関係者が多く、関係部署も広範囲に渡っていた。細かいいきさつは不明だが、この時、綱は木戸孝允から槇村の擁護を依頼され、その立場で参座会議に出席したと思われる。そこで、調査委員長の司法大臣大木喬任と意見が対立。論争を繰り広げた末、綱は、彼に同調した土方久元とともに委員を辞め、同時に大蔵省を辞職して、位階も返上する。

時に明治七年四月二十日のことであった。

高島炭鉱の経営

話は少しさかのぼるが、綱が宿毛を出て広い世界へと羽ばたいた頃、日本は世を挙げて文明開化に浮かれていた。この言葉は明治四年に流行った「半髪頭をたたいてみれば、因循姑息の音がする。ザンギリ頭をたたいてみれば、文明開化の音がする」という戯れ唄に織り込まれていることからもわかるように最先端の流行語であった。本来は、西洋諸国に追いつき追い越すことを目標に、海外の優れた文化や技術、風習などを進んで取り入れた当時の風潮を指しているが、物珍しさも手伝って西洋文化の移入はどんどん進んでいった。

政府もまた、それを国の基本方針として積極的に押し進めていった。西洋と日本の国力の差を文明開化度の違いによるものと捉え、競争の激しい国際社会の中で日本が生き残るには、西洋式の殖産興業を取り入れて富国強兵を図ることこそが肝心だと考えた結果であった。事実、当時の日本は西洋諸国から政治的には百年、産業の面では五十年以上後れていたといわれる。

イギリスでいわゆる産業革命が起きたのは十八世紀後半のこと、ジェームス・ワットが蒸気機関を発明したのが始まりとされている。この発明の実用化によって、従来、人力・畜力に頼っていた作業が機械化され、それまでの家内制手工業的から大規模な工場制工業へと生産形態が変わり、大量生産が行われる

ようになった。しかも、蒸気機関が交通機関へと応用されたことで、欧州全土に鉄道網が張り巡らされ、海外航路の発展と相まって、次第に広大な市場を持つ経済圏が確立されていった。こうして蓄えた富と軍事力を背景にイギリスを始めとする列強は海外へ領土を広げていき、やがて日本へも目をつける。

その間ずっと日本は鎖国状態にあった。太平の眠りを貪っていた徳川幕府が突然、諸外国から通商要求を突きつけられて、慌てふためいたのも当然である。もっとも幕府も馬鹿ではないから、欧米との力の差が歴然としていることは十分承知していた。だからこそ、逆らっても勝ち目はないが、相手の要求をいわれるままにのむこともできない、というジレンマに陥ってしまったのだ。それは幕府を倒した明治政府も同様であった。一応、国家としての体裁を整えていたが、いつ植民地化されるかわからないという不安や懸念にさいなまれていた。そこで、欧米と対等の力や地位を得るために、近代化を急いだのである。

その手段として、政府は欧米を手本にさまざまな啓蒙、教育活動を行った。同時に、視察団や公費留学生をたびたび各国に派遣して、新しい情報の入手にも務めた。政府の動きに影響され、民間でも新聞や雑誌を通じて競って西洋文化が紹介された。資金やつてのある者は海外へ出てじかに学び、経験を積んで帰国した後は、それぞれの分野でリーダーとなって政府の施策を後押しした。

土佐からも公費、私費を問わず大勢の若者が留学を志し、海外に出ている。綱と同郷の小野梓や、後に綱とともに自由党を旗揚げする片岡健吉、馬場辰猪なども留学経験を持つ。そして、西洋の優れた文明に感化され、彼らが欧米から持ち帰った先進的な思想の中から、やがて自由民権運動という大きなう

ねりが生まれてくることになる。

ちなみに、産業革命をもたらした蒸気機関は石炭を動力源としており、これ以後、石炭の重要性はいっそう高まっていく。綱が高島炭鉱の経営に興味を示した背景には、こうした事情や世相が存在していた。

高島炭鉱の買収

官僚を辞した綱は、三度目の転機に際して実業界への転身を図る。ことの起こりはこうだ。

綱が辞職する数ヶ月前のこと。親しい後藤象二郎が征韓論に破れ、下野するという事件が起こった。太政官参議を辞した後藤は明治七年三月以後、先に自ら興していた蓬萊社の経営に専念し、さまざまな事業を手がけながら、南洋への進出という長年の夢を実現するべく準備にとりかかった。そんな時、たまたま後藤を訪ねた綱は、彼から「昨年以来、*ジャーディン・マジソン商会の横浜支店長ウィトホールという人物と協議して、北ボルネオ島の土地をイギリス人貴族から購入する交渉を行っている。面積は日本本島の半分以上もある。契約が整ったら、ぜひともその経営を引き受けてほしい」と依頼された。植民開拓は二人がかつてともに熱く語り合った夢であり、綱にしてみれば願ってもない申し出である。喜んで承諾し、計画が実行に移されるのを楽しみに待つことにした。

だが、土地の譲渡価格に関して先方と折り合いがつかず、この話は不調に終わってしまう。綱の落胆が想像されるところだが、これをきっかけに、綱は蓬萊社の経営に参画することになった。

植民開拓の夢が破れ、大蔵省を辞めても、綱は別段挫けたりしなかった。それどころか、後藤の行動に触発されたのか、今度は、自分から別の事業を後藤に持ちかけている。それが、高島炭鉱の買収だった。

日本における炭坑の歴史は、そう古いものではない。わが国で石炭が初めて発見されたのは十九世紀初頭。場所は当の高島で、当初は発見者の名をとって石炭のことを『五平太』と呼んでいたという。西洋では十八世紀半ば以降、蒸気機関の発明によって需要が飛躍的に伸び、産業革命の進展に重要な役割を果たしたが、産業革命の進展が大幅に遅れた我が国では、十九世紀も半ばを過ぎてからその価値に注目が集まるようになり、明治に入ってようやく需要が増え始めた。出炭量は明治七年に二十万八千トン、翌八年に五十六万七千トンという記録が残されており、以後、昭和初期まで若干の増減はあるものの、全国的に増加傾向をたどっていく。

そうした状況にあって、高島炭鉱は全国でも指折りの出炭量を誇っていた。石炭自体が「二紀層ニ属シ日本第一ノ上等炭」である上に、埋蔵量も豊富。綱の記述によれば、炭層は明治七年当時十尺が一層、八尺が二層、五尺・三尺が一層ずつあり、資金や体制さえ整えば大規模な増産も可能だった。

そんな高島炭鉱が民間に払い下げられるかもしれないという話が伝わってきたのだから、綱でなくとも興味をそそられて当然だろう。ましてや彼は、かつて鉄道敷設を志したこともある人間。石炭の利用価値、収益性の高さは十分に認識していた。

そもそも高島炭鉱は佐賀藩家老鍋島孫六郎の所有地だったもので、維新前に採掘を行ったのが始まり

とされる。当初はオランダ貿易会社を経営するイギリス人グラバーが単独で出資し、西洋の最新器械を導入して事業を行っていたが、維新後にいったん藩主お取り上げとなり、改めてグラバーとオランダ人ボライトンに許可が下され、二人の合資で採掘が続けられていた。ところが、明治初年にグラバーが大阪の生糸相場で失敗し、大損害を被ったあたりから経営がうまくいかなくなった。加えて明治三年三月、同年六月、明治六年三月と、坑夫らの待遇改善要求に端を発する数百人規模の大暴動が相次いで起こり、後者では死者まで出す騒ぎに発展した。経営者である二人が日本の事情に疎く、坑夫らをうまく働かせることができなかったためではないかと思われる。

ともかくも、高島炭鉱は資金難と労使間の紛争という難題を抱えて完全に経営に行き詰まってしまった。対応に困ったグラバーは政府に買い上げを要請。そして、明治七年一月十九日、彼の希望通り炭坑の官有化が決まったのである。政府は、外務省に三十八万円でオランダ貿易会社から高島炭鉱を買収させたのち、工部省に交付して、その管轄下に置いた。

ところで、綱にこの件の詳細を教えたのは伊藤博文だった。伊藤とは伊賀家に奉公していた頃から面識があり、知人のよしみで政府筋の情報を聞かせてくれたものらしい。

ここで綱と伊藤の交友関係について少し述べておこう。二人を引き合わせたのは陸奥宗光で、宿毛蔵屋敷の運営が順調に進み、綱が回漕業の拡大を計画していた明治二年のことだった。同年四月、大阪造幣寮が開業し、それにあわせて当時大蔵大輔だった伊藤博文が公務で来阪したことがあり、この時、陸奥の紹介で二人は初めて顔を合わせ、以後、何度か会見する。当時、綱はかねてより主張していた廃藩

置県の建議書を伊藤に提出し、その是非について大いに論じ合った。その後、二人の交友はしばし途絶えていたが、綱が東京へ出てきた明治六年某月、四年ぶりに再会を果たす。この時伊藤は「昨日いろいろな書類を調べている最中にあなたの廃藩置県建議書を見つけ、あなたが意気堂々と自分の意見を論じていたのを思い出しました。その翌日に再会できるとは実に不思議なことです」と語り、大笑いしたという。それ以来、二人は親交を深めていったのである。

話を本筋に戻そう。

伊藤から高島炭鉱が将来高い利益を生む見込みがあること、政府としては相応の希望者さえいれば払い下げる用意のあることを聞かされた綱は、蓬萊社を通じてこれを手に入れようともくろむ。当の後藤も偶然、別の筋からその件を耳にしており、話はすぐにまとまった。念のため当局の技師などからも話を聞いてみたが、伊藤のいう通り、あるいはそれ以上に利益が望めそうなことがわかった。

二人は炭鉱経営に自信を深め、同年九月二十日、後藤の名義で大蔵省に対して払い下げを願い出る。許可が下りたのは、それから二ヶ月後の十一月二十七日のことで、翌十二月二十三日に正式に払い下げを受けた。

代価は五十万円。そのうち二十万円を即納し、残る三十万円は年六分の利子を付けて七ヶ年割賦で支払うこととなった。だが、蓬萊社の内情は会社運営に支障を来すほど苦しく、自己資金などまったくない。そこで後藤が奔走し、高島炭鉱の坑業代弁委託契約と引き換えにジャーディン・マジソン商会から二十万ドルを借り入れ、ようやく即金分の支払いに充てることができた。

その後後藤は、高島が官収される以前からそこで働いていた同商会社員の支配人、鉱山技師、機械技師らを引き続き雇って事業に着手する。実際の経営管理の一切が、綱に任された。綱はその後しばらく長崎と東京を往復する生活を続けることになる。

炭鉱経営は綱の性に合っていたようで、さまざまな問題の処理に苦労しながらも、順調に業績を伸ばしていく。長崎入りした綱は、支配人や技師など外国人従業員らを督励して炭鉱内外の設備を順次整理拡張すると同時に、それまで何かと騒動の元となることが多かった工夫たちの使役請負の習慣を改めるなど精力的に活動した。その結果、業績は次第に向上。明治九年六月の決算期には出炭量が毎月約三万トンに達し、利益は五万五千円以上にも上った。

それを裏付けるような記事が当時、いくつかの新聞に掲載されている。明治八年二月八日付け『あけほの』の「出炭好調、二年で元金消却か」、明治九年五月二十六日付け『郵便報知』の「蓬萊社負債消却」、同年六月七日付け『浪花新聞』の「出炭良好、炭壙社に改称」と題する記事が残っている。

参考までに内容を紹介すると、『あけほの』が「(前略)高島の石炭坑は殊の外都合よろしく、これ迄の様子にては、一日に三百八十噸も出るよし。追々巻き揚げ器械など整頓ならば、この上百八十噸も増して一日に五百噸も出るに至るべし。されば、一噸を五円と見て、一日に二千五百円、一ヶ月に七万円ほどなり、この内経費およそ三万円と見積り、残り四万円は純益なるべし(後略)」というもので、『郵便報知』には「高島の石炭坑はいよいよ盛山して、日々の純益が三千円ずつも上りますれば、尽力周旋の人も出来て蓬萊社の負債消却の法も立ち、就ては同社は閉じて炭壙社と改称になりました」とあり、

『浪花新聞』でも同様の消息が報じられている。

こうした高島炭鉱の好調ぶりを受けて、綱はさらに事業を拡大。明治八年には、高島近郊の端島（はしま）・大島・香焼（こうやぎ）島という三つの石炭坑を、佐賀家の家老深掘家から買収して順次開坑に着手する。これらの炭坑も高島同様有望で、明治十年六月の決算期には、三島だけで毎月二万一千トンを出炭するまでになった。

だが、すべてがうまく運んだわけではない。時には深刻な問題に直面することもあった。

明治九年七月二十五日、突然坑内でガスが原因と見られる火災が発生。坑道の入口を閉鎖しても鎮火しなかったため、やむなく坑内に海水を導入した。これによって、高島炭鉱は長期間の操業停止に追い込まれてしまう。火災の第一報を聞いた時、綱は蓬萊社の負債を整理すべく東京にいた。そのためすぐさま長崎へ向かうことができず、後藤がひとまず先に現地へ赴き、火災後の応急策を講じることになった。綱が高島に到着したのは八月末で、後藤と交代後、ただちに坑業回復に向けて準備にとりかかっている。しかし、作業は思うようにはかどらなかった。出炭を再開するには坑内に残っている海水をすべて汲み上げなければならず、それには揚水ポンプが必要だったが、英国から買い入れたポンプがなかなか到着しなかったためである。結局、操業を再開できたのは、翌年の三月も末になってからだった。

だが、綱の行く手にさらに大きな落とし穴が待ち受けていた。

明治十一年（一八七八）四月二十五日、綱はかつての盟友たちを助けて政府転覆計画に関与した容疑に問われ一年間の禁獄生活を余儀なくされる。そしてその間に、彼が苦心して育て上げた四つの炭鉱すべてを、後藤が借金のかたに岩崎弥太郎に譲り渡してしまったのである。

高島炭鉱の譲渡

蓬萊社は、後藤象二郎が明治三年に起こした合資会社だった。資本金は三百万円。うち二百万円を後藤と懇意にしていた大阪の豪商、鴻池・石崎・長田・辰見屋・平野屋の五家が出資し、残る百万円は蜂須賀・上杉の二家と後藤が出資する約束で、まず最初に蜂須賀・上杉・後藤が共同で負担分の十分の二を支払い、東京に本店、大阪と長崎に支店を、さらに広島などに出張所を置いて事業を開始した。

表向きの社主は三井の番頭だった吹田久則という人物が務め、組合員として吉井源馬、岡本健三郎、小野義真らが加わった。顔の広い後藤らしくジャーディン・マジソン商会と手を組んで、帆前船五隻を買い入れて回漕業を行ったり、地方の士族から金録公債証書を安く買い入れるなどさまざまな商売を手がけ、一時は活況を呈した。後藤は銀行業にも意欲を示し、イギリス人を高給で雇って顧問に招聘している。

ところが、設立後まもなく鴻池ら主たる出資者と後藤の間にもめ事が持ち上がり、出資金の十分の二が払い込まれないという事態が起きる。この紛争は数年間も続き、そのため蓬萊社は予定していた事業を実施することができなくなったばかりか、多額の負債を抱える羽目になった。

蓬萊社を何とか維持するため、後藤は社債を一手に引き受けるとともに、八方手を尽くして財源確保に努めた。政界の有力者である大隈重信に協力を依頼したり、副島種臣を通じて清の政治家・李鴻章に日清共同事業を提案したりもしている。大隈からは何の反応も得られなかったが、李鴻章が興味を示した

ため、後藤は北海道の水産物を清に輸出する計画を立てた。李の保護の下、清における販路を確保し拡大していこうという思惑だった。ところが、折悪しく征台事件（明治七年）が勃発。日本と清との関係が悪化したため、この計画は頓挫してしまった。

そんなところへ高島炭鉱の買収話が持ち込まれ、後藤は渡りに船と承諾する。だが蓬萊社の負債額は大きく、炭鉱事業にも何かと出費がかさんだことから、借金はなかなか減らなかった。後藤は高島の経営を綱に任せて負債整理にあたっていたが、明治八年四月二十五日、いわゆる大阪会議によって元老院議官に任命されたため、蓬萊社の経営から退くことを決意。代わりに綱へ経営権を譲ることを思いつく。後藤のたっての頼みとあっては断りきれない。綱は要請を受け入れ、明治九年五月末いったん東京に戻り、社長に就任する。

前途は多難だった。高島炭鉱の業績が順調に伸びていた時期とはいえ、蓬萊社の負債は百二十万円を超す。債権者から債務返済を要求する訴訟を起こされ、その数が二十一件にも及んでいた。

借金返済の確たるめどもつかないまま、綱は債権者たちを相手に何十回となく説得を繰り返す。「高島炭鉱は将来有望なので、その利益で債務を返済できる。ついては訴訟を撤回してもらえないだろうか」。だが、債権者たちは容易に首を縦に振らない。とうとう綱は、債権者二十一人を一堂に集めて会議を開き、高島炭鉱の利益が確実なことを詳細に説明した上で、切り出した。

「負債元利をすべて五年割賦で返済したい。もし、この提案を受け入れてもらえないのなら、蓬萊社を解散し、社の所有する財産を売却するほかありません。けれども、それでは債務の半分にも充たないの

です。いずれにせよ、どちらを選ぶかは、あなた方債権者たちの決議にお任せします。私としては、お互いのために年賦返済を承諾していただけることを切に望みます」

幸いにも、これで事は決した。債権者たちは綱の説明を聞き、蓬萊社側の誠意を認めたのである。その後の決議で年賦返済の提案が了承され、訴訟はすべて撤回されることになった。このように、蓬萊社の財政再建と高島炭鉱の経営に心を砕いた綱だったが、結局、その努力は水泡に帰すことになる。

綱が社長となった頃、すでに蓬萊社の事実上の社主である後藤とジャーディン・マジソン商会との関係は悪化していた。後藤と社長ウィトホールとの間に溝が生じ、意見の食い違いからもめることも珍しくなかった。対立が決定的にならなかったのは、綱が両者の間に立って調整役を務めていたからだった。綱は自ら長崎に滞在して、炭鉱の経営に専念すると同時に、ウイトホールや炭坑支配人との関係維持に気を配った。その甲斐あって彼らとの間に厚い信頼関係を築くことができ、ことあるごとに事業運営に必要な資金を融資してもらっていたのだった。

ところが、明治十一年四月、政府に対する反乱容疑で綱が突然拘留されてしまったことで、状況は一変する。大切な潤滑油を欠いた両者は再び衝突を繰り返し始め、遂に後藤がジャーディン・マジソン商会に対して一方的に高島炭鉱の代弁契約解除を通告するに至った。これを受けて同商会は、逆に後藤に対し蓬萊社並びに高島炭鉱に関わる負債元利総額百二十八万円の返済請求訴訟を起こす。

泥沼の様相を呈したこの騒ぎは、十数回の弁論の後、判事が高島炭鉱は法律上負債の担保とは認められないこと、また負債元利の数字が大きく双方の計算に食い違いがあることを指摘して、両者に示談を

命じたことで解決へと向かう。最終的にジャーディン・マジソン商会が譲歩して、後藤が二十万円を返済すれば訴訟を撤回すると約束したのである。この時の様子を当時の新聞は、次のように伝えている。

明*治十一年六月十七日付『東京日日』「高島炭鉱の債務を平等に分割返済」

「世上に噂ありし後藤象二郎氏と英一商会（ジャーディン・マジソン商会のこと）との葛藤もようやく平和に帰し、該社の管理人ジョンソン氏も長崎に赴きて後藤氏に面晤（めんご）し、ともに横浜に帰りて新条約を取り結ぶと云う。また後藤氏は高島炭鉱の諸規則を改正し、その所得の純益金をもて蓬莱社以来の借金方に振り向け、諸債主に平等の分賦を出すとか、その他これまでとは諸事の振り合いを換え、便益を専一にせらるるよしなれば、高島の模様はますます改良にいたるべしと、ある方より聞得します」

明*治十二年四月二十六日付『朝野』「負債六十五万円に上る炭坑訴訟」

「横浜英一番（ジャーディン・マジソン商会のこと）より後藤氏に係る炭坑訴訟は、このたび被告の負債総額六拾五万円と定め、内廿万円は当金、四十五万円は永年賦とし、我が法律によれる尋常貸借文面の証書を被告へ渡し、首尾よく熟議が整えり」

訴訟は免れたものの、依然として蓬莱社には金がない。そこで後藤は高島炭鉱を担保として岩崎弥太郎からジャーディン・マジソン商会への返済金二十万円と、その他の負債支払いに必要な百三十万円余りを借り入れることにした。これが命取りになり、明治十四年三月、高島・端島・大島・香焼の四つの炭坑をすべて、岩崎に譲り渡さなければならなくなったのである。

綱は禁獄中にジャーディン・マジソン商会に対する契約解除通告を知り、後藤に自分の意見を知らせ

た。だが後藤がこれを無視したため、綱は彼に対する不快感を強め、以後、この件については一切関わりを持たず傍観者の立場をとった。明治十二年八月に放免され東京に戻った後も、綱は態度を変えていない。二人が曲がりなりにも和解したのは、高島炭鉱が岩崎の手に帰した後のこと。後藤はやむを得ない事情があったことを説明し、事前に相談しなかったことを詫びて綱に金一万円を贈ったという。

ところで、綱が獄中にいる間、高島炭鉱では工夫たちが賃金引き上げを要求して暴動を起こし、警官隊が出動する騒ぎに発展したことがあった。さらに、明治十三年には死者四十七人を出すガス爆発事故と、合理化をめぐる紛争が相次いで起きている。炭坑としての高島は高い利益を約束された宝の山だったが、半面、経営上のトラブルも多かった。後藤が高島炭鉱を手放した背景にはこうした事情も関係していたのではないだろうか。

明治十一年八月八日付『東京日日』「工夫三百名余が暴動」

「去月二十七日より高島炭鉱の工夫等が、非常の暴動を起こしたり（その原因は未だつまびらかならず）。この日、払暁より工夫の坑内に在るもの皆坑を出て来り、更代の工夫もまた坑に入らずして何か陰謀を企つる様子なりしが、午後八時ごろ工夫三百余名ばかり、納屋頭某の家に押しよせ、格子を毀ち、酒樽等を打ち破り、某を捉えてまさにこれを殺さんとす、某は辛くその場を逃れたり。（中略）暴徒の続々と本署に拘引せらるるもの今朝まで百一名なりと云う（炭坑舎器械場並びに舎員尾上某宅、雇い洋人宅は既に打ち毀され、大工小屋も廿九日夜焼失せるよし）。三十日の西海新聞に見えたり。」

明治十一年八月九日付同紙「賃金引き上げを要求、警官隊の出動で鎮定」（本文略）

明治十三年四月十七日付『朝野』「ガス爆発で死者四十七名を出す」

「（前略）本月四日午前九時、高島炭山第二坑内蒸気卸し東廿一片盤中より瓦斯破裂し、ために工夫、門監等の即死する者四十七名、疵傷の軽重を合わし四十七名、坑用馬の死する八頭に及べり。その死傷たるやけだし破裂の弾力に斃れ、或いは破裂後坑中に充塞する炭酸瓦斯の気烟にふれ、または昏迷狼狽して途を失い、岩石等に衝突破砕せしものならん（後略）」（後藤が長崎県令に提出した書面よりの抜粋）

明治十三年十二月七日付『東京日日』「暴動の原因は合理化反対」

「先ごろ高島炭坑を騒がせし工夫並びにその巨魁ども、かの折り召し捕られて近々処刑になるべしと聞けり。さてこの暴動のもとはと云うは、もと同坑は炭質も良く出高も多く、我が国にて屈指の良坑なれども、年来の大借なる上に近来上海その外にても石炭相場の下落したるより維持の方むずかしく、よって去るころ社則を改革して在来の雇い人の中にて懶惰のもの、また不用の人員等を放逐し或いは減給し、また用便に足るべきものを東京、横浜より雇い入れなどしてもっぱら冗費を省くことのみ要としたれば、社中の会計もやや立ち掛かりたるに、右の放逐減給等の者がいたく恨みて、手を換え品を替え工夫を煽動して、（中略）ついにかかる騒動に及びたるなりという。さればこの暴挙のために炭坑舎の損失も少なからず。（中略）この上は社中の有力者が非常の力を尽くすにあらざれば、維持方はなはだ難しかるべしと云えり。我々局外者といえども、日本のためにはかく坑山の繁昌して、廃業の不幸を見ざるべきを願うのみ」

第四章　苦闘の時代

綱が士族の身分を剝奪され一年間の禁獄に処せられた当時のことを語る前に、なぜ彼が政府に対する反乱を企てたと見なされたのかを知る手がかりとなる自由民権運動について触れておきたい。

「自由は土佐の山間より」という言葉で広く知られるように、土佐はしばしば「自由民権運動発祥の地」といわれてきた。これは土佐立志社（明治七年四月十日創立）が西南戦争以後、武力ではなく、言論の力で政治を動かそうとしたことに由来する。立志社は、広く世論を喚起して国民の声を一つにまとめ、その力で民主主義国家を実現することを基本方針としていた。その方針のもとに優れた人材が結集して、国会開設要求を強力かつ粘り強く展開し、遂には政府にこれを受け入れさせたのだった。

こうした活動は当時の日本でも例を見ないもので、自由民権運動の中で立志社の果たした役割は非常に大きかった。色川大吉氏は自著『自由民権』（岩波新書）の中で、「自由民権の代表的な思想家は大半、土佐が生み出していたのであり、その先駆性、指導性、豊かな人材の輩出、組織力、財政力、どの点をとってみても、立志社にまさる民権結社がわが日本にあったとは思われない」と述べている。立志社こそ、自由民権運動の中心組織であった。

また、立志社の創立に関わった板垣退助は、明治七年には後藤象二郎・古沢迂郎らと共に愛国公党を結

成し、天賦人権を基本に君主と人民の理想的な関係や政治体制を説いて、日本帝国の維持昌盛の実現を目指した。板垣らは左院に提出した「民選議院設立の建言」の中で、立志社と同様の主張を行っている。その内容は「今日の政権は天皇にあるのでもなく、人民にあるのでもなく、専制政府の官僚の手中にあることを指摘し、その失政により国家は瓦解の状態であると断じ、これを改める道は天下の公議（世論）を盛んにすることであり、それは民選議院（国会）の開設によってのみ実現できる。そうすることによってはじめて官僚の専権を制限でき、上下人民の安全幸福が確保できる」というもの。自由民権運動の出発点ともいうべき「歴史的大文章」であった。

こうした動きを背景に、土佐立志社はいっそう強力に自由民権運動を展開していく。明治十年、西南戦争が起こると、社長の片岡健吉は立志社建白を京都行在所に提出し、天皇への執奏を求めた。この建白書も、以後の「本格的民権運動の起点となった画期的文書」である。同時に片岡らは自由民権思想を民間に普及させるべく、日本各地での演説会の開催や雑誌の発行も企画した。こうした動きは紆余曲折を経ながらも、国会期成同盟会の結成などへと続き、明治十四年頃、最高潮に達する。

このような時代を先取りする活動が土佐に芽生えたのには理由がある。第一章でも述べたように、土佐人は一般的に自主独立の気風に富み、権力におもねることを潔しとしない。この土佐人気質と教育に熱心な風土とが合致した結果、自由民権運動のリーダーシップをとるにふさわしい人材を数多く輩出することができたのである。これについて、平尾道雄氏が著書『立志社と民権運動』（高知市民図書館）の冒頭で次のように解説している。

「どうして土佐に自由民権論が発生し成育したか、由来土佐人は山沢の気に富む。嶮岨な山と茫漠たる海にもみたてられ、南国の太陽に照りつけられて激しい気象をもつ。闘争的である。この闘争性がある権力に対して反抗化する。権力からの解放を戦いとろうとする。これが土佐人を自由主義運動へ駆りたてた性格的要素だと思考される」

明治初期、専制的政治体制に対する強い不満が生じた時、土佐人独特の気質が頭をもたげ、多くの土佐人を政治活動へと突き動かしていったに違いない。

自由民権運動が華やかだったこの頃、綱はあまり表舞台に出てきていない。だが、政治的には板垣退助や後藤象二郎らと志を一にしていた。彼もまた自ら望んで自由民権運動に関わり、激しい時代のうねりの中に身を投じた一人だったのである。

突然の逮捕

明治十年十一月末、蓬萊社の負債整理に関するごたごたを片づけた綱は、二人目の妻瀧子と四男直馬を伴って長崎へと向かう。長崎滞在中、綱は高島以下四つの炭坑の開発に全力を傾注。事業拡大に努めるとともに、翌十一年一月には長男明太郎を留学させるため長崎に呼び寄せた。他の子供たちを東京に残してきていたようだが、家族と一緒の生活は仕事に追われる綱の心を慰めたに違いない。

だが、そんな穏やかな日々は長く続かなかった。明治十年に起きた西南戦争に際し政府に対する反乱

計画に荷担した容疑で拘留、禁獄されたのである。

明治十一年四月二十五日。高島にいた綱は炭坑舎近くのレストランで昼食をとり、周囲の林を散策した後午後の仕事に戻った。すると、一人の巡査が彼の帰りを待ち受けており、「警察屯所へ来るように」という。ただちに屯所へ向かった綱は、そこである警部から「川路大警視からあなたを拘留して東京へ護送するようにという電報が届きましたので、あなたを拘留します」と告げられた。

まさに青天の霹靂と表現したいところだが、綱本人は以前からこの日が来ることを予期していたと思われる。前年から旧知の土佐立志社員の逮捕が相次いでいたからだ。

土佐立志社では林有造・大江卓らが中心となって明治十年三月一日、西郷隆盛軍に呼応して挙兵することを決議。小銃買い入れなどの準備を進める傍ら、後藤象二郎・板垣退助・陸奥宗光らの説得にあたった。だが板垣が慎重な態度を示したため、挙兵計画はなかなか実行に移されず、そのうちに西郷軍の劣勢が明らかになったため、結局実現されずに終わる。しかも計画と林らの動向の一部始終が政府に察知されていたため、関係者の逮捕が相次ぐことになった。六月十四日に薩摩との連絡役を務めていた立志社員藤好静・村松政克が逮捕されたのを皮切りに八月八日には林が、さらに同月十八日には片岡健吉が拘引された。林は後述する小銃購入の件で東京の綱の屋敷に向かう途中に拘引されており、拘引理由となった林の一連の行動には綱も深く関わっていたのである。

綱はそのまま警察署に留め置かれ、署内の拘留所に入る。そして、この日を境に、多忙を極めていた彼の生活は大きく変わった。その時の戸惑いを彼は後年、「余舎務多忙ニ依リ日夜拮据寸暇ヲ得サルノ処

一朝閑身トナリ頗喪然ノ想アリ」と記している。普段とはあまりにかけ離れた拘留所での生活に始めは気落ちし、暇を持て余したようだが、すぐに気を取り直し、同房の肥後人中村六蔵から新約聖書のマタイ伝を教えてもらい、楽しんで聞いたりしている。

仕事のことも気がかりだったはずだが、それはそれで手を尽くした。高島の坑業や石炭販売に関する事務など炭鉱舎の仕事は綱の突然の逮捕によって多大な支障をきたしたが、毎日のように拘留所へやって来る舎員にあれこれ指示を下して難局を乗り切ろうと努めていた。

辛い経験もあった。拘留されてから九日目のこと。面会に訪れた知人から実母の死を知らされたのである。

いつも彼を温かく見守り、深い愛情と厚い信頼を寄せてくれた母であった。世に出て以来二十年間というもの、主家のため、国家のため、あるいは人のために東奔西走し続け、両親に孝養を尽くすどころか、側にいることさえ少ない息子を「酒食に耽ったり人と争ったりということがないので、たとえ家にいなくても、病気以外に何も心配することはありません」と他人に語っていたという。

そんな母が亡くなったのだ。綱の悲しみの深さは察するに余りある。後日、彼は死の床に就いた母を見舞うこともできず、臨終にさえ立ち会えなかった自分の運命を嘆き、次のように記した。

「此般ノ事不慮ニ災ヒシテ人生ノ免ル能ハサル事ト雖モ、固保身之予防ナキヨリシテ致ス処タラント思ヘハ罔極ノ悲痛終天不能忘、嗚呼」

自叙伝の中で、彼が自分の家族のことについて個人的な感情を交えて触れたくだりは、ほとんど見あ

たらない。それだけに、この一節が重く響く。

皮肉にも、母の死を知った日の夜、東京への護送が決まった。同行は巡査一名。船上の人となった綱を、同じ便で東京へ戻る妻と直馬、長崎の屋敷で働いていた使用人たちが出迎える。やがて出港の時刻となり、綱は見送りに来た炭鉱舎員に別れを告げ、長崎の地を後にした。

この突然の逮捕とそれに続く禁獄は、実母の死と相まって、綱に少なからぬ衝撃を与えたと思われる。だが、拘留され投獄されたこと自体は、それほど大きな打撃ではなかったはずだ。なぜなら、この時の綱に対する当局の扱いは非常に穏やかで、紳士的なものだったからである。

たとえば、長崎での拘留中、彼はひんぱんに衣服や食物の差し入れを受け取ることができた。おかげで「拘置所のまずい食事をとらずにすんだ」と記している。東京へ護送された時も、寄港地で出迎えてくれた友人たちと面会したり、共に散歩することを許されたし、船中でシャンパンを飲んで別れを告げたこともあったという。禁固一年の実刑判決を受け新潟の監獄へ移されてからは、さらに待遇が良くなった。日当たりと風通しの良い一軒家に二人の受刑者とともに暮らし、政治や世間のことを語り合ったり、読書三昧の日々を過ごしたという。投獄というより気ままな隠遁生活を送っているような印象さえ受ける。

同じ頃に逮捕され、岩手県に十年間禁獄された林有造らも同様で、綱だけが特別待遇だったわけではない。しかも、彼らは出獄後、何の障りもなく選挙に立候補して当選し、代議士として活躍している。こうした恵まれた扱いは、おそらく綱が士族階級に属していたことや当時の政治状況、社会情勢などとも関わりがあるのだろう。もっとも、その点を割り引いても、いわゆる政治犯と、彼らに対する当局の

弾圧という今のイメージからはほど遠い。明治という時代ゆえのことだったのだろうか。

大審院での審理

明治十一年五月九日、東京に戻った綱はただちに警視庁に留置された。翌十日にはさっそく大審院へ呼び出され、担当の玉乃世履判事から厳しい尋問を受ける。玉乃判事は「昨年、鹿児島で賊徒が暴挙に出た際、林有造や大江卓らが兵を挙げて政府転覆を謀ろうとしたが、君もまたその企てに加わっていたのではないか」と糺問した。これに対して綱は「そういう事実は全くないし、そんな企みがあったことさえ今日まで知らなかった」と主張して一歩も引かなかった。

「確かに私は二人の親友だが、知らないものは知らない。西南戦争の際に彼らが京都や高知へ行くと聞いた時、私は高知県下の血気盛んな連中が暴挙に出ることを心配して、早まった行動をとらないようにと何度も彼らを説得した。私が武力行使を好まないのを知っていたから、彼らはそうした謀り事があることを私に一言ももらさなかったのだろう」

綱がこう申し立て、そのほかの証拠となる事柄について陳述すると、玉乃判事は別の角度から攻めてきた。「岡本健三郎から小銃買い入れの依頼を受けたことがあったのではないか」というのである。それは事実だった。前年の二月中旬頃に会った際に、綱は岡本から「横浜に小銃はないか」と聞かれている。その時、綱は「台湾征討の際に蓬萊社が購入するつもりで小銃二千挺を取り寄せたが、その後どうなっ

たかわからない。それ以外に心当たりはない」と答え、「今この時期に小銃の所在を問い合わせるのは非常に好ましくないことだ」と岡本を諫めた。すると、彼は「こんな時だからこそ知っておきたいのだ。場合によっては購入することになるので、大きな利益が得られるかもしれないぞ」という。昔からの知人の頼みとはいえ、綱としては厄介事に巻き込まれたくない思いもあり、「問い合わせてはみるが、好ましくないことなので、それ以上のことは引き受けられない。君が自分でやりたまえ」と告げるにとどめたが、最終的に小銃の出物を扱うダ・ローザというポルトガル商人を岡本に紹介したのだった。

綱は、こうした経緯を玉乃判事に語り、さらに「両者を引き合わせた際、『これ以上この件に関わりたくないので、小銃の売買については二人で取り決めてほしい』と言い残して席を立った。だから、交渉がどうなったのか、後のことはまったく知らない。もし私の言葉を疑うのなら、仲介にあたったジャーディン・マジソン商会へ問い合わせればよい」と、事件への関与を重ねて否定した。玉乃判事がこの陳述を信じたかどうか定かではない。だが、獄中日記には「其外余カ大江等ノ謀ニ与ルヘシト云不審アレドモ、無根ノ誣言録スルニ足ラス」とあるから、判事はあくまでも綱を共謀者の一人と見なし、追及の手を緩めなかったものと思われる。

取り調べは一度だけだったが、大審院へは幾度となく呼び出された。口述筆記された書類に拇印を押したり、内容を確認したりと用件はさまざまで、そのつど、ばかばかしいほど杓子定規な手続きが繰り返された。これには官僚出身の綱も相当辟易したのだろう。密かに「拇印などという野蛮な風習はやめて花押に改めるべきだ。花押を記せない者は、本人の好きなように○でも△でも描かせればいいのだ」

という感想を洩らしている。

呼び出しのない日は、「三畳敷ノ一室ニ独リ閉チ篭メラレ、狭小ナル窓ハ高クシテ昼尚暗ク、夜ハ燈火モナク陰鬱ヲ極メタリ」という状況の中で、鬱々と時を過ごした。房内での細かな雑用に時間を費やすことも少なくなかったらしい。ある時など、衣服や布団を家へ送り返すのに、袷類はすべてほどいた上で房の外に出さなければならない決まりだといわれ、一日がかりで自ら袷の糸をとく羽目になったこともある。「可笑」とだけ記された一文から、彼の複雑な思いが伝わってくる。

綱は当初、数日で釈放されると高をくくっていた節がある。自分は無実という強い確信があったのに加え、尋問が一回きりだったため、証言が確認され次第すぐに片がつくと考えたのだろう。だが、そう簡単にことは運ばなかった。いつまでたっても拘留は解けず、二度の釈放願いもことごとく却下されてしまう。暗い監房での生活に悲壮感はなかったものの、陸奥宗光までもが土佐立志社の挙兵計画に関与した容疑で逮捕された（同年六月十日）のを知った頃には、それなりに覚悟を決めていたのではないだろうか。

さて、そんな単調な毎日を三ヶ月間も送った末、綱は待ちに待った言葉を耳にする。この頃、林・大江（明治十一年五月十五日逮捕）・陸奥らに対する大審院での取り調べが夜半にまで及ぶことが多くなっていた。その理由を判事が「この件の処分を急ぐように、政府からしきりに催促されているからだ」と説明し、さらに「処分の決定にはそれほど日数はかからないだろう」と結審の近いことを匂わせたのである。

判事の言葉通り、それから三週間と経たないうちに判決が下された。武器購入における綱の関与を有

罪と認め、士族の身分を剝奪した上、禁獄一年を申し付けるというもので、綱にしてみれば到底承服しがたい内容だった。しかも、拘留以来尋問は一回きり。裁判も行われないまま、一方的に有罪を言い渡されたことになる。綱は大いに憤慨して「全ク冤罪ニ服従セザルヲ得ザリシハ、実ニ不幸ノ至リナリキ」と嘆いたが、当時はまだ控訴という制度がなかったため、どうしようもなかった。

判決を申し渡された後、綱はいったん身柄を仮禁獄所へ移される。そこで旧知の谷重喜と同房になり、二人は久しぶりの再会を喜び、夜を徹して語り合った。仮禁獄所には林や大江など綱の知人が何人か収監されていた。彼らも綱たち同様に再会を祝したようで、獄中日記には「此夜快話ヲ得テ終霄不能眠。他房悉然リ」と記されている。

この仮禁獄所での生活は一カ月足らずで終わり、綱は佐田家親と共に新潟県へ移送されることになった。同房だった谷重喜は山田平左衛門らとともに山梨へ移され、林有造と大江卓は岩手へ、陸奥宗光は山形、片岡健吉は栃木へそれぞれ移送が決まった。

この処置は、去る五月十四日、時の内務大臣大久保利通が石川県出身の士族島田一郎らによって暗殺された事件「紀尾井坂の変」に端を発している。国事犯罪人の反乱分子への影響力を懸念した政府が、彼らを地方へ配置することで危険を事前に回避しようとしたのである。

実際、この時期の首都東京は不穏な空気に包まれていた。八月二十三日夜半には近衛砲兵大隊の兵卒二百名以上が蜂起。上官を殺害して兵営を脱出し、天皇に強訴を試みるという事件「竹橋騒動」を起こしている。

この時の騒ぎは、仮禁獄所にいた綱の耳にも届いており、獄中日記には「昨夜半監内頗騒擾、何故ヲ知ラス。或云、火事、或云兵乱」（八月二十四日付）、「去ル廿三日ノ夜近衛砲兵ノ暴挙ヲ記スル新聞紙ヲ読ムヲ得タリ」（同月二十七日付）などと記されている。また、同じ頃に「夜十一時頃、塀外頗ル騒擾、何事ナルヲ知ラス」（同月三十日付）、「聞、昨夜ノ騒擾ハ兵隊脱走ノ挙アルニ依ルト云」（同月三十一日付）との記述も見られ、頻々と騒ぎが続いていた様子がうかがわれる。

日本全体に目を向けても、各地で騒動が持ち上がっていた。明治九年末、地租改正に反対を唱える農民たちが茨城と三重で大一揆を起こしたのを始め、明治十年には熊本・石川・大分で農民による騒擾が四十七件も発生。また、同じ年、西日本を中心にコレラが大流行し、長崎・鹿児島・兵庫・大阪などで多数の死者を出す。さらに、国立銀行の相次ぐ新設が紙幣インフレを引き起こし、不作と重なって物価を高騰させ、庶民の不満はいっそう高まっていたのである。

政府はこうした社会情勢を警戒し、国事犯罪人の分散配置を急遽決定したものと思われる。

九月一日、綱は明け方に呼び出しを受け、その朝の内に新潟へ向けて出立する旨を通達される。共に新潟へ護送される佐田のほか、陸奥宗光や片岡健吉、林有造らも途中まで同道した。また、急な旅立ちで所持品のなかった綱のために、明太郎があとから荷物を届けにやってきてそのまま新潟まで同行することになった。

一行は翌々日、利根川を渡ったあたりで、二手に分かれた。北陸へ向かう綱たちと、東北へ行く陸奥・岩神ら。別れに際し、陸奥は一編の漢詩を綱に贈る。

君之北越吾東羽／萬里同為流竄人／明日秋風各分手／不識何時再渡湊

これに対する綱の返礼は、万感の思いを込めた「自重自愛」の四文字のみ。

惜別の情の尽きぬまま、道はとうとう岐路にさしかかる。綱は陸奥らに向かい、「好ましくない別れ方だが、この先も勉励に努めて、再び相見えた時には、この別れをよいものとして思い出せるようにしたいものだ」と語った。陸奥がこれに答えて一言二言述べた後、二組の囚われ人は再会を約して握手を交わし、互いにしばしの別れを告げた。

大江・林らも同じ岐路から去っていった。彼らとは充分に語り合えずに離れることになり、綱は遺憾な思いで親友たちを見送っている。さらに翌四日、片岡らとも別れた綱たちは人力車と小舟を乗り継いで先を急ぎ、九月十一日に新潟に到着する。翌朝県庁に出頭した綱は、その日の午前中に身柄を仮禁獄所へと移された。

新潟での禁獄生活

仮禁獄所は寄居という所にあった。綱と佐田の住居となったのは監獄内の二百坪程の松林の中に建てられた古屋を修繕した小さな家で、十畳と六畳の二間に分かれていた。内部は板間に薄縁を敷いただけの粗末な造りだったが、前後に窓があり、日当たりと風通しは悪くなかった。特に西北の窓の外には古い堤と翠の枝葉を生い茂らせる松が見え、爽快な眺めが楽しめた。昼も夜も窓を開け放し、外との出入

りも運動も自分たちの好き勝手にできた。

新しい住まいには、北山三六（獄中日記では「北山信」）という名の先客がいた。九年前に禁獄十年を宣告されたという古強者だが、新参の綱と佐田のために膳や椀などの器物を前もって用意してくれるなど、なかなか親切なところがある。話してみると気持ちのよい人物で、風流を解する文雅の士でもあることがわかった。三人はすぐに親しくなり、一緒に詩を吟じたり、読書に耽って悠々自適に過ごした。

後年、綱はこの頃の生活を振り返り、「自分が禁獄の身であることを忘れてしまった」と回想している。

時折、明太郎や知人が面会に訪れたほか、家族や他県に禁獄されている友人たちから手紙がきた。次女菊から牡丹の絵を贈られた時など、その巧みさに感嘆しつつも郷愁の念を誘われ、心慰められる思いだったという。その他にも差し入れは頻繁に届いたが、中には綱が特に注文して取り寄せたものもあった。獄中では漢詩以外に国法汎論などを読んだが、英語の辞書や英文典といった書物が差し入れに含まれていたことから、おそらく原典をひもといていたと思われる。勉強熱心な綱の一面がうかがえる。

月日は穏やかに流れていった。世間は相変わらず騒々しかったが、その喧噪も監獄内までは届かず、綱たちの静かな毎日が乱されることはなかった。国事のために一生を多忙の内に過ごした綱にとって、外界と隔絶されていたこの頃が生涯で最も平穏な時期だったのではないだろうか。

綱が禁獄を解かれたのは彼の獄中日記によると、突然の拘留から約十六カ月後の明治十二年八月二十日のこと。明太郎や親しい友人たちの出迎えを受けた綱は、佐田とともに意気揚々と新潟を発ち、同月二十七日、晴れて満期放免の身となって再び東京の土を踏んだのだった。

第五章　綱をめぐる人々

話を少し前に戻そう。

綱が新潟の獄舎にいた頃、遠く離れた東京ではささやかな、しかし、将来日本の行く末を左右することになるある変化が起きていた。明治十一年九月二十二日、綱の血を受け継ぐ五人目の男児が誕生したのである。それが、のちの吉田茂である。

綱が拘留された時、妻の瀧子も長崎にいたことはすでに述べた。彼女は、綱が東京へ護送された同じ船に乗って帰京したのだが、当時、すでに新しい命を宿していた。妻として夫の留守を預かる立場にあったとはいえ、身重ではさぞ心細かったに違いない。竹内家には義父と子供たちがいたが、頼りになるのは長男ぐらいのもの。その明太郎も二十歳前の若者で、父親に代わって一家を支えていくのはまだ無理だった。

そんなわけで、綱の親しい友人である吉田健三が、よるべないこの家族の面倒を見ることになった。東京にある彼の別宅に身を寄せた瀧子はそこで茂を生む。母子はその後もしばらく健三の厄介になっていたらしい。当時、綱はすでに六人の子持ちだったが、健三には子供がなかったため、二人の間で「次に男の子が生まれたら養子に」という約束を前もって結んでいたらしい。

茂は健三の小梅の別宅と横浜の自宅とを行ったり来たりしながら成長し、明治十四年八月四日、正式に吉田家の養子となった。養父健三の死後、しばらく東京の竹内家で暮らしたこともあったが、綱の子供ではなく吉田家の当主として扱われ、邸内に別棟を増築して住んでいた。竹内家の門には「吉田茂」の表札も掲げられた。

茂については、幼少時から長じて政界に身を投じ、父親に優るとも劣らぬ波瀾万丈の生涯を送ってその幕を閉じるまでのことが、すでに多くの書物に書かれているので、ここでは省く。ただ、茂と綱の関係についてだけ、ふれておこう。幼くして養子に出されたためか、茂は実の父である綱に対してあまりよい感情を持っておらず、実家の竹内家の人々ともそれほど親しい付き合いはなかったというのが従来の説のようだ。

だが、獄中日記における綱の記述や、近年その存在が公になった茂の長兄明太郎の日誌などを読むと、実際は違っていたのではないか。たとえば、綱の獄中日記の明治十二年七月十四日付の箇所には父吉管から受け取った手紙の一部が引用され、「深川の吉田の家に行き、茂と遊んだ」という父の言葉に「これ以上うれしいことはない」という彼の素直な気持ちが書き添えられている。

また、外務省入りした茂に綱が日本刀一振りを贈った話は有名だ。これについては、のちに茂自身が「刀*は関ノ兼光。これは悪いことをしたらハラでも切れということでしょう」と語っている。ちなみに茂はこの時、実姉からも紋付きの和服一重ねを贈られたという。さらに綱は茂が外交官として初めて海外に出た際には、愛児のために赴任先の奉天総領事であり自分の友人でもある萩原守一に紹介状を書い

た。この紹介状は、親の七光を嫌った茂が奉天を離任するまで萩原に渡さなかったため、まったく役に立たなかった。

これらのエピソードを見ていくと、綱が養子に出したわが子を彼なりにかわいがり、その行く末を案じていた様子がうかがえる。

長兄の明太郎と茂との関係も、割合密接だったと思われる。明太郎の日誌を読むと、疎遠な間柄にしてはかなり頻繁に茂の名前が出てくるからだ。茂は学生時代、外交官時代を通じて何度も明太郎の居宅を訪れていた。用件はさまざまで、小遣いをねだりに来て明太郎に叱られたこともあれば、大学進学について相談しに訪れたり、外務省入省を報告しに来たこともあったらしい。

実の親が幼い自分を養子に出したことへのわだかまりはあっただろうが、そうした負の感情だけを抱いたまま茂が綱や明太郎と生涯接したとは考えられない。事実、茂は「*父祖の名が汚れて後世に伝わることを極端に恐れていたようだ」という。これは、吉田健三ともゆかりがあり、第一次吉田内閣で文部大臣を務めた高橋誠一郎氏の言葉だが、氏は続けてこうも語っている。

「*かつて阿部眞之助氏だったかが、氏の実父竹内綱氏を評して『荒淫度なし』というような言葉を使ったのを読んだ時の怒りようはなかった。『自分の父は断じてさような人物ではない。それは大江卓の誤りだ』と息まいていた」

このように親しい人に対しては、茂自身が実父綱や養父健三について語ったことも少なくない。その半面、実母のことはあまり人前で口にしなかったようだ。ただ、雑誌『改造』（一九五〇年一月号）に寄

稿した「父と母〜生い立ちのことなど〜わが青春回顧」と題する一文で、珍しく実母*との逸話を披露している。

もっとも、茂のその後の生き方を見れば、彼が紛れもなく綱の子であり、その血を継いでいることは明白なように思える。もちろん、貴族的なものの考え方や行動様式など養父母から受けた影響は計り知れないが、その中に綱譲りと思われる「いごっそう」的な性格や、保守と革新がない混ぜになった明治士族特有の思想が時折顔をのぞかせているからである。

吉田健三と綱

ワンマン宰相吉田茂の精神と肉体を主に生み育てたのが実父綱と、養父母となった吉田健三・士（こと）夫妻の三人であることは周知の事実である。では、綱と健三との交流はいつ頃始まったのだろうか。『評伝吉田茂』によれば、明治五年頃だという。

吉田健三は、もともと越前福井藩の士族だった。嘉永二年五月六日、吉田家の長男として生まれ、一度は家を継いで医学を修めるために大阪へ出たものの、結局、医者になるのが嫌で長崎へ移り、英学を学んだ。その後、密航同然で英国の軍艦に乗せてもらい、上海からシンガポールを経て欧米に遊学した。日本に戻ったのは明治元年のことで、間もなく横浜のジャーディン・マジソン商会に雇われる。この入社の背景には、あるのっぴきならない事情があった。

帰国した健三はひとまず新潟へ赴き、そののち実業界への進出を志して東京へ出た。最初に手がけた商売は、誕生したばかりの日本海軍に軍艦を売り込むことだった。若く意気盛んな健三は当時、仏教界で大きな力を持っていた大洲鉄然（おおずてつねん）師や赤松連城師と相談して軍艦売り込みを計画し、ジャーディン・マジソン商会を通じてイギリスから軍艦二隻を取り寄せた。ところが、八十万円もするこの軍艦が思うように売れず、そのうちに支払いにも窮してしまった。困ったあげくに健三は同商会に代金の肩代わりを頼み込み、借金と引き換えに船は「三年以内に必らず海軍に納入するから、それまで自分を無給で使ってもらいたい」と申し込んだのである。

だが、現地仕込みで英語が達者な健三は無給どころか、「どこで覚えたのか生糸の鑑定に抜群の腕前を示したので、ジャーディン・マジソン商会から月給三百円という破格の待遇を受け」、支配人を務めるまでになった。約束通り軍艦の売り込みに成功し、わずか三年で同商会を去ったが、会社への貢献度は高く、退職時に一万円の特別賞与を贈られている。

独立後は横浜市太田の醤油醸造所を買い取ったり、横浜の地域開発に関わるなど、さまざまな事業を手がけた。綱以上に商才があり、優れた経営手腕と先見の明を備えていたため、それらのほとんどで成功を収め、若くして巨万の富を築く。明治二十二年十二月一日に四十歳の若さでこの世を去った時、その遺産は当時の金額で五十万円に上ったという。猪木氏が指摘するように、綱が「ややもすれば非分の大事業を企てて、必ずしも成果を収めなかったのに比べると、吉田健三の方が、はるかに金もうけはうまかった」のだろう。

健三が綱と知り合ったのは、ジャーディン・マジソン商会を去ってからのこと。明治五年二月の東京日々新聞の創刊に関わった縁で、健三は板垣退助、後藤象二郎、林有造ら土佐出身の政治家と顔見知りになり、綱とも親しく付き合うようになったものらしい。当時、健三は事業同様、政治に対しても深い関心を寄せていた。明治十四年十月、自由党が結成されると自ら入党して、資金面から党の活動を支えたほどである。二人の関係は、綱が高島炭坑の経営に携わるようになってから、いっそう親密さを増す。蓬萊社は以前からジャーディン・マジソン商会と取り引きがあり、健三は健三で退職後も同商会の首脳と親しくしていたためである。

したがって、綱が突然逮捕され一年間の長きにわたって禁獄生活を余儀なくされた時、その家族に対して健三が支援の手を差し伸べたのは当然のことだった。明治二十年十二月二十六日に保安条例が発布され、綱が東京からの退去を命ぜられた際も、健三は彼を横浜の自宅に迎えしばらく寄寓させている。仕事と息子茂を通じて綱と健三の結びつきは年を追うごとに深まっていった。そして、それは健三がその早すぎる死を迎える日まで続いたのである。

恩師の訓戒

もう一人、綱をめぐる人々について語る時、忘れてはならないのが、第一章で詳しく紹介した恩師、酒井三治である。

綱が郷里を離れて実業界や政界に身を投じたように、三治もまた維新後間もなく宿毛を後にし、さまざまな変転を重ねていった。

明治三年に日新館が藩校となった際には、助教役と同じ準大得業生に任じられ、私塾を運営する傍ら、引き続き子弟の教育にあたった。だが、思うところあって明治四年に私塾を閉鎖し、さらに翌年には、学校制度の改革に伴い教職を解かれた。『伊賀氏学制沿革取調要項』には「解任」とあるが、中央でそれぞれ活躍している教え子たちを見て、自分も世に出て何かを成し遂げたいとの思いが募って辞職を願い出たというのが真相らしい。

知人西四辻公業を頼って大阪へ移った三治は官吏となり、大阪府庁勤務を経て大蔵省へ出仕した。そこで順調に出世を重ねるが、体調を崩したこともあり、七年後の明治十二年、職を辞して高知へ戻る。一時は高知市内で再び教職についていたようだが、肺を病んでからは鏡川のほとりに庵を結び、ひっそりと余生を送った。その間、手紙のやりとりぐらいはしていただろうが、綱と三治がじかに顔を合わせることは一度もなかったようだ。

二人が再会を果たしたのは明治十四年七月になってからである。当時、後藤象二郎とともに政党を起こすべく活動していた綱は、板垣退助に参加を求めるために高知へ戻り、その時久しぶりに三治を訪ねている。だが当の三治は病臥中で、結局それが子弟の最後の別れとなってしまう。

三治は自分の病の重さを充分自覚していたらしい。友人でもあった教え子の訪問を喜び、起き上がって半日余りも話し込んだが、別れに際して綱にこう告げた。

「兄ガ宿毛ヲ出シヨリ相見ザルコト十有余年ナリ、今日ノ面会ハ喜悦限リナシ、然ルニ予ノ病気ハ到底回復ノ望ミナシ、今日ノ別離ハ是レ永訣トナラン」

さらに、師としての深い愛情から「兄ハ無二ノ親友ナリ、訣別ニ望ンデ一言セザルヘカラズ、兄ハ生来非分ノ大事業ヲ企テ多クハ失敗ニ終レリ、須ラク深ク戒慎スベシ」と戒め、別れの記念として前漢代の建威郡太守の古印章を手渡した。綱は号泣するばかりで答えることができず、ただただ恩師の厚意に感謝し、居宅を辞した。それから十日あまりのち三治の病状はにわかに悪化し、妻に看取られて静かにこの世を去る。享年五十四歳であった。

第六章　政界への雄飛

禁獄を解かれ東京に戻った綱は、本格的に政治活動を開始。後藤とともに言論と平和的な行動によって、国会開設を政府に働きかけていくことになる。

当時、政府に対する国民の不満は依然根強かったが、鹿児島で西郷軍が破れて以来、武力行使の愚かしさと困難さが深く理解されるようになり、力ではなく民衆の声、世論によって政府を動かそうとする自由民権運動が次第に高まりを見せていた。綱たちはこの運動の先頭に立ち、政党の組織を目指した。

彼らが取り組んだ政党の組織は、もともと板垣退助が発案したものだった。

板垣はいち早く自由民権を提唱し、太政官参議に任命されると直ちに国会開設の建議を行った。征韓論に破れ下野した後は、明治七年一月に後藤らとともに愛国公党を結成し、後藤・副島種臣・江藤新平・由利公正・岡本健三郎・古沢茂・小室信夫の七名と連名で民撰議員設立建白書を左院に提出している。

翌年には、立志社を中心に全国の自由民権政社を結集して愛国社を結成し、我が国初の全国的政党として活動を開始した。愛国社は同志を各府県に派遣して党員を広く募ったが、資金難と求心力の源であった板垣の政府復帰によって一度は自然消滅の憂き目にあう。

活動を再開したのは明治十一年九月になってからで、植木枝盛・安岡道太郎ら立志社員の努力によるも

のだった。再興なった愛国社は、明治十二年十一月の第三回大会において国会開設請願運動を同社の中心スローガンとすることを決定。さらに、明治十三年三月の第四回大会で国会期成同盟会と改称し、政府に対して国会開設を強力に要求していくことになる。その一環として、同年四月十七日には片岡健吉・河野広中の両名が二府二十二県八万七千人の総代として、国会開設嘆願書を太政官に提出するが受理されず、元老院へも提出したが同様に却下された。

ちょうどその頃、外務省が諸外国との不平等条約改正に失敗し、政府高官に北海道官有物払い下げに関する不正疑惑が浮上するなど、政府の失態が相次いだ。言論集会の自由を規制する法令が発布されるに及んで世論は沸騰。各地で政党が結成され、政府を追及する動きがにわかに激しくなった。

国会期成同盟会も活発化し、明治十三年十一月、東京大会を非合法で開催。翌年十一月を期して全国各地に乱立する政党を統合し、自由党として組織することを決議する。

綱はその一大政党の陰の立役者の一人であった。自由党による政党政治を構想していた彼は、民心を集めるために主宰者として板垣を担ぎ出そうと考え、十四年五月、久しぶりに故郷高知の土を踏む。板垣が大阪会議の決定により一度は参議に復帰したものの、間もなく辞職し高知に戻っていたためだ。だが、板垣は政党を組織し動かしていくための資金がないとして、自由党への参加を拒んだ。対応に困った綱はいったん東京に戻り、後藤に費用を調達させ、その一部を持って再び板垣を訪れる。ここに至ってようやく板垣は上京を決意。八月二十六日に土佐を発ち、九月十日、大阪で五千人を超える聴衆を前に演説を行った後、同月十六日には東京入りして上野精養軒で「政党興立の急務を切論」した。

この時板垣に渡った五千円がその年の東北遊説の費用に充てられ、その勢いをかって翌年には東海・中部地方で遊説が行われた。かの有名な「板垣死すとも自由は死せず」のせりふを残した岐阜での遭難事件は、その時に起こった。

その後も国会期成同盟会は順調に活動を展開し、十四年十月一日には同会を大日本自由政党結成会に変更し、予定通り党組織の準備にとりかかった。この会合で綱は、林包明・鈴木舎定・山際七司と共に原案起草者に選ばれている。

綱たちが原案作成に従事し、その審議を行っていた頃、政府は突然新しい動きに出る。国民の怒りを目の当たりにし、強い警戒感を抱いた首脳陣が明治政府最大の危機を打開するため、明治十四年十月十二日、立憲政体に関する方針・北海道官有物払い下げの中止などを発表するとともに、明治天皇の名の下に国会開設の詔勅を宣布したのである。

「明治十四年の政変」と呼ばれるこの出来事は、「国会開設運動に些少の譲歩をすることによって、民権運動の鋭鋒を挫く」ために仕組まれたものだった。詔勅では「明治二十三年を期して国会を開くこと、其の組織権限は欽定憲法によって定めること・国会開設の早急を争って事変を起こし、国安を害するものは処罰する」ことが宣言された。

これを受けて板垣は、同年十月二十九日、浅草井生村楼で自由党創立総会を開催。後藤を議長として盟約党則を議決し、総理以下各役員を選出して無事閉会した。この時、綱は後藤と共に常議員に選ばれ、以後、自由党の活動に全力を傾けることになる。

板垣の遭難と自由党の解散

きたる帝国議会の開会に向けて、自由党は板垣総理の遊説を精力的に展開した。明治十五年三月には東海道地方に在住する党員の招待に応じて、静岡・浜松・名古屋などを巡回し、各地で演説会を開いて自由党の主義綱領を熱烈に説いた。板垣の遊説には綱をはじめ党幹部も同行し、地元の党員と互いに胸襟を開いて理想の政治を語り合った。

その遊説途中の四月六日、板垣は岐阜金華山中教院で懇親会を催す。会は盛況を極めたが、板垣は疲れた身体を休めるため宴会が終わる前に一人退席し、宿舎へ戻ることになった。綱や内藤魯一らに見送られ、板垣が玄関を出ようとしたその時、異変が起こった。何者かが短刀を抜き払い、板垣の胸部めがけて突きかかってきたのである。この事件については、いろいろな部分で*さまざまな説が伝えられているが、ここでは綱の自叙伝をもとに当時の状況を簡単に再現してみよう。

暴漢（相原尚褧という愛知県内の小学校教員）が板垣に襲いかかった時、その場には綱ら党関係者が何人か居合わせた。しかし、あまりに突然で予想だにしない出来事だったため、誰も止めることができず、板垣と暴漢はそのままもみ合いになった。わずかの間をおいて内藤が駆けつけ暴漢を取り押さえたが、一瞬遅く、この襲撃で板垣は顔と胸、手に傷を負う。だが、板垣は負傷をものともせず、「流血淋漓タル左手ヲ以テ胸ヲ押サヘ、右手ヲ挙ゲ突立シ、板垣ハ死ストモ自由ハ死セスト叫破」したのである。

綱もすぐに駆け寄り、彼の胸の傷を調べようとした。板垣は「肺に重傷を負った。生命を保つことはできないだろう」といって拒んだが、綱はあえて胸から短刀を引き抜き、衣服を裂いて傷を調べた。傷は意外に浅く軽微だった。それを知って板垣もようやく安心し、しばらく休憩したのち宿舎へ戻っていった。

「板垣襲わる」の知らせは、大きな衝撃となって全国を駆け抜ける。各地方の自由党員が岐阜に駆けつけたほか、板垣の安否、容態を問い合わせる電報が相次いだ。事件は政府のさる筋からの命令によるものだとする見方も現れ、政府を攻撃する声が高まった。騒ぎが広がることを恐れた政府は、同月十二日、明治天皇の勅使として侍従長西四辻公業を派遣し、慰問の言葉と金三百円の見舞金を下賜。これによって一大騒乱にまで発展しかねなかった政府批判は急速に鎮静化していく。

一方、綱は勅使や各地から集まった見舞客の応接に追われたが、幸い板垣の傷が数日で平癒したので、遊説を再開した板垣に同行して近畿地方を回った。

この事件によって自由党の結束は強まったかのように見えたが、事態は逆の方向へと動き始める。その後の板垣の行動が自由党の内部分裂を引き起こしたのである。特に明治十七年十月、板垣が後藤とともに欧州視察へ出かけたことが一部の党員の批判を買った。わが国初の国会開設に向けて党の勢力をいっそう拡大しなければならない大切な時期に、党首が差し迫った必要もなく日本を離れることは好ましくない。しかも、二万ドルともいわれるその旅費が出所不明とあっては、反対する声が起きるのも無理はなかった。

だが、板垣はこれを無視して外遊に出る。そのため馬場辰猪や大石正巳ら結党以来の同志が何人も離党する事態となった。折りからの集会条例や新聞紙条例などによる政府の弾圧強化と財政難も加わって、自由党はついに解散へと追い込まれる。明治十七年十月十八日、大阪での大会を最後に自由党が解散。立憲改進党も同じ頃、大隈重信らの脱党によって有名無実化しており、これ以降、自由民権運動は求心力を失い急速に衰退していく。

岐阜の遭難時件で命拾いをした板垣の存在が、結局は自由民権運動の死命を制したわけである。こうしたことから、「板垣死すとも自由は死せず」の言葉をもじって「板垣の代わりに自由が死んだ」と評する学者もいる。

ちなみに、自由党解散の引き金となった外遊の費用は後藤から板垣に渡されたもので、後藤が富商から借り入れたことになっている。だが、その背後には、自由党の弱体化をもくろんだ伊藤博文ら政府首脳の指示があったといわれている。

保安条例の発布

明治十八年十二月、政府は太政官制度を内閣制度に改め、伊藤を初の内閣総理大臣に任命。以後、欧化主義的政策を急激かつ強力に押し進めていく。

ところが皮肉なことに、今度はこうした政府の動きが精彩を欠いていた自由民権運動に再び力を与え

ることになった。条約改正への対応を含め、政府の政策に納得できないでいた民権派の面々が、政府に対抗するには諸勢力の連携が必要不可欠であると考えるようになり、一致協力して活動し始めたのである。後藤象二郎が各政党に呼びかけて始まった「小異を捨てて大同に就く」という、この大同団結運動により民権派は再び勢いを取り戻す。そして明治二十年十月二十二日、片岡健吉を代表として地租軽減・言論集会の自由・外交失策の挽回を政府に迫った。いわゆる三大事件建白運動である。

また、建白書の提出に先立って、条約改正案反対運動が日本国中に巻き起こった。同年八月一日には、政府に対して異議を唱えて辞職した谷干城を支持する林包明ら三百名余りが示威運動を行う。これに呼応して各地方の政党員が続々と東京に集まり、元老院や諸大臣に対して条約改正案に反対する要求を提出した。さらに十二月に入ると、二府十八県の総代が建白書を提出し、外国に対する政府の卑屈な態度を責めたのである。

政府はこうした民権派の動きを反乱の兆しと受けとめたのか、政情不安を理由に同年十二月二十六日、突然、以下のような保安条例を発布する。

皇居行在所五里以内ニ於テ秘密結社秘密集会ヲ為シ内乱ノ陰謀ヲ企テ治安ヲ妨害スル者ハ三ヶ年以内退去ヲ命ス

この条例によって東京には戒厳令が敷かれ、皇居三里外への退去を命ぜられた者は五百七十人以上に及んだ。大半が政党員たちで、そのうちの二百三十四人が高知県人であった。だが、中には政治活動と全く関係のない商人や労働者も含まれていたという。まさに「政府ノ狼狽察スベキナリ」である。だが、

そんな条例でも、三大建白運動を粉砕する充分な効果を持っていた。中江兆民・片岡健吉・尾崎行雄ら運動の中心人物に対してことごとく退去命令が下され、ある者は自主的に東京を去り、ある者は武力によって従わされた。片岡らのように退去を拒んだ者は逮捕された。保安条例によって、「自由民権運動再興の可能性はここで最終的に消滅した」のである。*

自由党の結成以降、常に板垣・後藤らと行動をともにしてきた綱も、条例の適用を受けた。当日、綱は後藤を訪ねており、夜がふけたため帰宅しようとしたところを門内で待ち構えていた巡査十数名に拘引され、警視庁へ連行された。そこで退去三年を申し渡され、川崎駅へと護送されたのち放逐となった。退去の理由は、仕事で唐津へ出張した帰りに神戸・横浜間の定期船に乗った際、高知県の政党員数名がたまたま同船していたという、ただそれだけのことだった。

東京の自宅へ戻ることを禁じられた綱は、その夜から横浜太田町の吉田健三宅に寄寓した。自叙伝には、その後、中島信行と共同で太田町外の松林の中に仮の住居を構え、明治二十三年八月までそこに暮らしたと記されている。なお、明治二十年十二月三十日付の東京日日新聞によれば、綱が住まいした太田町外の家は、当時の横浜太田村二一二三番地にあった健三の別荘を借り受けたもので、沖本弥五郎・鎌田政春なる人物と三人で暮らすことを当局へ届け出たとなっている。

ちなみに綱が、保安条例に基づく東京からの退去を解除されたのは、明治二十二年二月十一日のこと。大日本帝国憲法の発布に伴う大赦によるものであった。

保安条例によって再び自由民権運動に大きな打撃を与えた政府は、その主要な指導者たちを内閣に取

り込むことで民権派の消滅を図る。明治二十一年二月、元立憲改進党総理大隈重信を外務大臣として入閣させ、四月に発足した黒田清隆新内閣で政府攻撃の先鋒を務めていた後藤象二郎と、当時もなお民権派のシンボル的存在であった板垣に対して入閣要請を行ったのである。

さすがに板垣は辞退したが、後藤はこれを承諾。後藤に対して非難が集中したが、時すでに遅し。中心人物を失った大同団結運動は間もなく消滅し、政党政派は再びそれぞれの道を歩むことになった。自由党は林有造らが再興を目指し、また、立憲改進党は尾崎行雄らが中心となって立て直しを図るが、前途はなお厳しかった。政府の巧みな裏工作によって、民権派はまたも大きな打撃を被ったのだった。

混乱と対立が続く中で国会開設の準備を着実に進めていた政府は、ドイツでの憲法調査などを経て明治二十二年二月十一日、大日本帝国憲法を発布する。近代国家日本が紆余曲折を経ながらも、議会制立憲君主国としての第一歩を踏み出そうとしていた。

板垣の叙勲問題

綱と板垣退助の関係は自由党解散以後も長く続いた。ここで、二人の親しい間柄と、板垣が綱に寄せた厚い信頼を物語るエピソードを一つ紹介しよう。

明治二十年五月、板垣を伯爵に叙し華族に列するという決定がなされた。長年、国家に尽くしてきた功労を評価しての叙勲であった。だが、板垣は栄誉を受けることをよしとせず、二度にわたって辞退を

申し出る。辞爵は明治天皇の恩命に背くことに他ならず、それだけで一大事である。政府が何度か説得を試みたが、強硬な態度は変わらない。当時宮内総理両大臣を兼任していた伊藤博文も困り果て、とうとう綱に板垣の説得を依頼してきた。

綱はさっそく板垣を訪ね、「明治天皇の恩命を速やかにお受けせよ」という伊藤の言葉を伝えた。これに対して板垣は「私は維新前から四民（皇族・華族・士族・平民）平等主義を唱え、高知藩においては士族の常識を破って世禄を廃止した人間だ。明治二年に参議になった時は太政官に華族制度廃止の建議を提出しており、そのことは世人のひとしく知るところでもある。それなのに、どうして今になって叙爵をお受けすることができるだろうか」と、語気鋭く持論を述べたて、説得に応じようとしない。

日を改めて相見えても、その主張は変わらなかった。「なお慎重に熟考してほしい」との綱の願いを聞き入れ、今一度じっくり考えてみたという板垣が長い論議の果てに口にしたのは「華族制度を漸次廃止するために一代華族制を主唱することを決心した」という言葉だった。そこで綱は「叙爵の恩命は陛下の優渥なる思し召しにより下されたものであるから、ここはひとまずお受けしておき、その後、政府に対して一代華族制の建議を行ってはどうだろう」と提案した。

「それなら陛下のお心に背かずにすむ。あなたの意見が採用されればよし。万一、採用されなかったら、その時こそ決然と爵位を返上すればいいではないか」

こう迫る綱と板垣の間で、なおも懇談論議が交わされたが、結局は綱の説得が効を奏す。板垣はようやく受爵を了承し、七月十五日、叙爵御受書を奉呈した。

綱にしてみれば、天皇陛下の恩命を尊重し、かつ板垣の輝かしい経歴を守るために勧めた受爵だったが、実際には政府の巧妙な策略の一部に過ぎなかった。叙爵という格好のタイミングを捉え、天皇の恩命を利用して板垣の心身両面の自由を拘束するとともに、民権派からの切り離しを狙ったものだったのである。

衆議院議員時代

四十歳から五十歳代後半にかけ、綱は事業を息子明太郎に任せ、政治活動に専念する。綱の政治家としての本格的な活動は、第一回帝国議会衆議院議員選挙から始まった。

明治二十三年七月一日、高知県第一区（高知市・土佐郡・長岡郡）から立候補した綱は、一、二八八票を獲得し、次点候補に大差をつけて勝利を収める。この時、高知県からは同じ自由党系の片岡健吉と林有造が第二区（吾川郡・高岡郡・幡多郡）で、植木枝盛が第三区（香美郡・安芸郡）で選出された。さらに県外での立候補となったが、中島信行（神奈川県）、中江兆民（大阪府）、大江卓（岩手県）らも当選を果たしている。

第一回議会招集に先立って、旧自由党系の大同倶楽部・愛国公党・自由党などが合同して立憲自由党を結成したため、綱らは院内最大勢力に所属することとなった。衆議院議員となった彼は、政府と各政党との間に立ってもっぱら調整役を務める。

当時の日本は議会制度をスタートさせ、近代国家としての体裁を一応整えていたとはいえ、西洋諸国に比べるとまだまだ後進国に過ぎなかった。周囲の国々から成熟した国家として認められるには、何よりもまず議会を円滑に運営しなければならない。そう考えて、ことあるごとにぶつかりあう内閣と政党の仲介役を、自ら進んで引き受けたのだった。

手始めとして、議会開会に先立ち、内閣大臣と各政党の領袖とを会談させようともくろむ。議会に提出予定の予算案と重要議案について事前に意見を交換し合って、相互の意思の疎通と政策面の融和を図ろうとしたのである。まず立憲改進党の領袖中野武営・嶋田三郎・尾崎行雄に自らの考えを述べたところ、幸いにして三人の了承を得ることができた。そこで綱は中野とともに当時の総理大臣山縣有朋と大蔵大臣松方正義を訪ね、賛同してくれるように持ちかけた。山縣らは熟考を約束し、後日「会談そのものは受け入れられないが予算案の事前提示は了承する」と回答して、百冊にも上る膨大な予算案書を綱に交付した。

十一月一日、いよいよ議会開会の当日を迎えた。予算委員に選ばれた綱は委員長の大江卓と相談した上で、委員会が開かれる前に独自に予算案の検討を行う。そして、政府内の局課の廃合、官吏の配置、俸給の逓減、経常・臨時費の節減など、事細かに手を加え、それを予算委員会に諮った。予算委員会は政府が提出した八千七百五十一万円余りの予算に対して七百五十一万円余りを削減した修正案を議決、衆議院予算総会へ提出した。

この衆議院予算総会は最初から紛糾する。予算の一割近くが頭から削られたのだから、無理もない。

政府としても黙って修正案を受け入れることはできず、予算の削減をめぐって激烈な討論が交わされた。さらに、松方蔵相が議会に向かって「予算削減には一切応じられない」との声明を発表したため、事態は混迷の度を深める。大多数の議員が激高し、解散をも辞さぬ勢いで政府を攻撃し始めた。

議会の円滑な運営に粉骨砕身してきた綱はこうした現状を憂い、政府に対して修正案に同意するよう働きかける。林有造や大江卓ら同じ思いを抱く議員とともに諸大臣のもとを訪れ、説得交渉にあたった。

ところが、同僚議員の中に彼らの動きを快く思わぬ者がいた。綱たちの真意を知らず、政府と手を結んだ裏切り者と思い込んだのであろう。ある日、血気盛んな壮士たちをそそのかして、交渉のために外務大臣官邸を訪れた綱と林らを襲わせた。『林有造伝』（田中貢太郎著）によれば、予算委員長らが政府と妥協したとの噂が院外に流れた時、壮士たちは「林を殺せ、竹内を殺せ」と喚き立てたというから、襲撃はもちろん脅しなどではなかった。

幸いにも、綱たちには事前に危険を察知した政府関係者の命令で護衛が同行していたため、全員無事にその場を離れることができた。犯人もまんまと逃れ去り、遂に捕まらなかったが、綱はその背後に自由党議員がいることを知り、事件の翌日、決然と自由党を脱党する。林、大江、片岡、枝盛らも党を去った。その他、綱と気持ちを一つにして脱党した者は三十七人に及んだ。

危険な目に遭いながらも、綱は政府に対する働きかけをやめなかった。政府与党であった国民協会会長の佐々友房とともに政府に対して修正案の受け入れを勧告し続け、その結果、後藤象二郎（逓信大臣）と陸奥宗光（農商務大臣）も予算の早期成立を主張するようになり、政府はついに予算の削減に同意す

る。

明治二十四年一月十五日、当初予算案から六百五十一万円を減額した修正案が予算総会に提出され、賛成一二七・反対一二五で可決された。衆議院を通過した予算案は、それから間もなく成立する。わずか二票の僅差での勝利だったが、綱たちの必死の努力が実った結果であった。

政府と野党各党との対立は以後何度も激化し、そのたびに綱は両者に妥協を求めていくことになる。第一回選挙以降は八年間にわたって、一個人として自由な立場から、政府と政党との関係改善のために尽力した。

明治二十五年には、伊藤内閣と自由党とを提携させている。衆議院において多数派となった自由党と内閣が提携すれば、重要問題の早期解決に役立ち、ひいては政党政治の実現につながると考えたためであった。和衷協同の必要性を強調する綱に対し、伊藤、板垣の両首脳は当初それぞれに「理論としては異議はないが時期早尚である」として応じなかった。しかし、「提携の事実を公にすることはできなくても、時々二人で会見して相互に意思を確認し合い、議会運営に関連して重要な問題が発生した場合に妥協できる余地をひらいておくべきだ」と説く綱の言葉にようやく首を縦に振った。

二人は九月二十一日、芝公園紅葉館で相対し、長時間にわたって親密な会談を行う。そしてそれ以後の三年間、政府と議会とが衝突するような困難な状況が生ずるたびに伊藤と板垣は綱を通じて交渉を行い、それぞれに妥協し合って問題解決に努めた。綱が構想したように政府と自由党との提携が効力を発揮したのである。

さらに明治二十八年七月には陸奥宗光（外務大臣）の要請で、当時再び政府と対立していた自由党の懐柔を試みた。農相を辞した後藤が野党を率いる大隈重信と合流し、政友同志会と称する団体を設けて政府への攻撃を始めたため、対応に苦慮した陸奥が綱に事を託したのである。

この年四月十七日、政府は清と講和条約（下関条約）を結び、前年七月から続いていた日清戦争に終止符を打ったが、後藤らはその戦後経営に関して不満を抱いたものと思われる。戦勝国である日本は清から韓国の独立承認と台湾・遼東半島の割譲、三億円の戦費賠償を獲得したが、日本の大陸への進出を警戒したロシア・フランス・ドイツから、いわゆる三国干渉を受け、遼東半島の返還を余儀なくされていた。

後藤らはこうした政府の弱腰に業を煮やし、外交責任を追及して内閣を崩壊に至らしめるため臨時国会の召集を求めた。しかも松方蔵相がこれに賛意を示して辞職し、後藤・大隈と共に政府を攻撃しようとしており、事態は容易ならざる展開を見せていた。

ここに至って伊藤も、ようやく自由党との再提携によって状況を打開することを決意する。陸奥を通じて綱を動かし、自由党に協力を求めようというのである。綱を呼び寄せた伊藤は「板垣と会見し、じかに提携を決したい」と語り、その願いを叶えるべく、綱はその足で板垣を訪ねた。

綱の要請に、板垣は躊躇の色を見せる。自由党内に政府に反対を唱える者が多かったためで、板垣といえども一人で彼らを説得することは難しい状況だった。そこで、綱は林・片岡・中島・松田ら党首脳と協議した上で、党員有志を集め、じかに提携を訴えることにした。この作戦は効を奏し、自由党は政府との提携を議決。八月二十七日、芝紅葉館で伊藤と板垣の会見が行われた。会見には綱や林らも同席し、

その年に開かれる議会での重要問題について大まかな方針を決め、政府と自由党との提携を正式に決定して、初めて公に発表した。

同年十二月に開かれた第八回議会では、予想通り反対各派から政府に対する弾劾上奏案が提出されたが、反対大多数で否決され、同議会は翌年三月平穏無事に閉会する。これを受けて政府は、明治二十九年四月、自由党との提携強化と協力への感謝の意味を込めて板垣を内務大臣に任命した。

努力の成果を目の当たりにして綱としても大いに満足感を感じたのではないだろうか。自叙伝のこの項は、「是全ク伊藤内閣ト自由党提携ノ結果ニシテ、遠カラズ政党内閣ノ成立ヲ期待スベキニ至レリ」と結ばれている。

政治家としての信念

長い間一民間人として政治に関わり水面下で活躍した綱だが、議員としては都合三度、衆議院議員選挙に勝利している。

初回については先に記した通りだが、明治三十一年三月（第五回衆議院議員選挙）に再び出馬し、東京一区から当選を果たす。この時は唐津へ出張中の綱に無断で友人の黒田綱彦が推薦届けを出し、仕方なく立候補したものらしい。それから五年後の明治三十六年三月（第八回衆議院議員選挙）にも立候補し、高知県郡部の代表として議会に席を占めている。

綱の政治に対する姿勢はこれまで述べてきた数々のエピソードの中に投影されているが、彼の息子たちの政治家としての信念や生き様からも読みとることができる。

長男の明太郎が後年、綱の跡を継ぐ形で衆議院議員になった際、「金のない者が政治をやるから不正、腐敗が起こるのだ」という主旨の言葉を語ったと伝えられているが、おそらく綱も同じ考えだったに違いない。「活動費用の工面は息子に任せ、自分は政治のことだけに没頭したい。資金を心配する必要がなければ、私利私欲に走って道を誤ることなどない」。そう思っていたのではないだろうか。

若き日の明太郎はそうした父親の気持ちを汲み取り、よくその期待に応えた。彼はこの時期すでにひとかどの青年実業家に成長しており、多忙な社長綱に代わって竹内鉱業を切り盛りし、事業を順調に発展させていた。息子の努力によって潤沢な活動資金が確保されていたからこそ、綱は理想の政治の実現に向けて邁進できたのである。

政治は金のために行うものではない。

政治家たる者は国のため、国民のためにその時、その立場で常に己の本分を尽くせばそれでよい。それが綱と明太郎、茂親子に共通の信念であったことはいうまでもないだろう。

また、先に述べた綱と明太郎のつながりは、茂とその娘婿との関係を想起させる。茂は若くして養父から莫大な遺産を相続したが、そのすべてを外交官時代に使い果たし、首相になった時は大磯の家ぐらいしか残っていなかったという。だが、政界で強力なリーダーシップを発揮するには莫大な金がいる。ワンマン吉田といえども本当なら資金調達に苦慮したはずだが、結果的にそうはならなかった。愛娘和

子の結婚によって、またとないスポンサーを得たからである。和子の夫、麻生太賀吉は九州の炭鉱王で、義父となった茂の人間性と類稀な政治家としての手腕に深く心酔し、茂のために政治資金を提供し続けたのである。

隈板内閣の成立と瓦解

綱が二度目の衆議院議員選挙当選を果たしたその年、明治三十一年六月三十日、第一次大隈内閣（隈板内閣ともいう）が成立し、板垣は内務大臣となった。

板垣は綱を招き、「この並立内閣は我が国初の政党内閣であり、君の宿論を実現したものである。私は君を大臣として推薦しようと思ったのが、君には勅任官の経歴がない。やむをえず大蔵省次官に内定したのだが、了承してもらえないだろうか」と語った。綱は板垣の心遣いに感謝しつつもこれを断り、内務次官に就任したいと申し入れる。

「仕官は好みませんが、政党内閣の実現に際してできうる限りの尽力を惜しまないつもりです。並立内閣の成立後、最も注意しなければならないのは、大隈氏と閣下の意見が衝突した場合でしょう。不肖の身ではありますが、私が両閣下の間に立って調和に努めますれば、多少の効果はあると自負しております。その任にあたるには閣下の部下となる必要があるのです」

これに対して、板垣は「内務次官は既に内定済みである」と答えた。そこで綱は「次官でなくても局

長か書記官でもかまいません」と重ねて申し入れたが、板垣は「勅任の履歴があるというので、林有造と大石正巳を大臣に推薦している。君を次官以下の地位につけるのは、私には忍びがたい」として了承しない。論議を重ねたが、話はまとまらなかった。

その数カ月後、綱の危惧した通り板垣と大隈の意見が衝突する。綱は辞表を提出しようとする板垣に向かって、「耐え難いこともあるでしょうが、しばらくは忍従し、辞表の提出を差し控えていただきたい。そして、私にお二方の調整役を務めさせて下さい」と熱心に説いた。板垣自身はこれに賛成の意向を示したが、ちょうど自由党の領袖が集まって評議を行っている最中だったため、綱の提案を衆議に諮ったところ、受け入れられなかった。

結局、それから間もなく板垣が辞表を提出し遂に並立内閣の崩壊を見るに至ったのである。

第七章　朝鮮半島への事業進出

明治政府首脳は、日本を名実ともに世界に冠たる国にすることを目指していた。そのためには西洋に比べて遅れている産業を振興させ、経済力・軍事力を高める必要がある。産業、とりわけ工業の発展には豊富な資源と労働力と、商品経済を支える広大な市場が欠かせない。そこから生まれてきたのが中国大陸への進出という国家的プランであった。

大陸には広大な土地と多様で豊かな資源があり、労働力にも市場にもなりうる膨大な人口を抱えている。大陸を手に入れられれば、やがては世界へと支配圏を拡大していくこともできるに違いない。また、そうすることが列強に日本の実力を知らしめるきっかけにもなる。当時の政治家・軍人たちはそう考えたのだろう。

だが、豊かな資源と未知の可能性を秘めた大陸に、熱い視線を注いでいたのは日本だけではなかった。イギリス・フランス・アメリカ、そしてロシアが清国を足がかりとして勢力を広げつつあり、大陸の覇権を虎視眈々と狙っていた。日本としては、この競争に遅れを取るわけにはいかない。

幸いなことに(朝鮮にとっては不幸なかぎりであったが)、大陸へのルートは朝鮮半島という形で自然にできあがっている。そこで、まず朝鮮国を支配下に置き、朝鮮半島を拠点として清へ、そして大陸へ

と領土を広げようとする野望が生まれた。征韓論の挫折や台湾征討の実施など、さまざまな動きを経て明治中期以後、中国大陸征服の野望は明確な形となって動き始めるのである。

第二回衆議院議員選挙後、綱が一個人として政治に深く関与し続けたことは、すでに述べた通りだが、その活躍は多方面に渡り海外へも及んでいる。中でも朝鮮半島における活動は、特記すべき事項であろう。

明治二十七年七月、綱は陸奥宗光外相に招かれ、重大な使命を託された。当時、日本は朝鮮半島での支配権拡大をめぐって清と対立関係にあった。きっかけは、同年五月に勃発した東学党の乱である。全土を揺るがしたこの反乱を鎮圧するため、朝鮮政府は清に出兵を要請した。ところが、その際、清は先年日本と結んでいた天津条約を無視し、単独で陸海軍を派遣した。天津条約は日本と清が共同で朝鮮を保護することをうたった条約であり、有事の際、朝鮮国内に兵を派遣する場合は互いに事前通告することと定められている。日本政府はこれを理由に「清の無断派兵はこの条約に反するものだ」として清を非難するとともに、独自に陸海軍の朝鮮派遣を決めた。その結果、両国の対立が深まり、東学党の乱が鎮圧されたにもかかわらず双方とも軍を引かず、朝鮮半島で互いににらみ合う形となった。

日本政府は大鳥公使に朝鮮政府と交渉させ、清の軍隊を撤退させようとしたが、交渉開始以来一ヶ月以上が経っても事態には何の進展も見られない。しびれを切らした日本政府は「これは清がわが国を侮辱しているからであり、向こうが撤兵しないかぎり開戦もやむを得ない」と判断するに至った。

陸奥が綱を呼んだのは朝鮮政府の内情を探らせるためであった。日本政府としては宣戦布告に際して

朝鮮政府首脳の真意を知っておく必要があったが、朝鮮国内の政情は混沌としていて把握するのが難しい。そこで自由な立場にある綱に対して、「至急朝鮮に赴き、朝鮮政府の状況を観察した上で開戦すべきか否か、もし開戦すべきならば、いつが適当かを判断して報告せよ」と要請したのである。

陸奥はまた「大三輪長兵衛は、朝鮮政府の財政顧問として数年間京城に滞在していたので、大官連とも親しい。君から大三輪に対して同行を求めるとよい」とも告げた。綱は「私は大三輪とは一面識があるに過ぎません。ただ、林有造が大三輪と大変親しいので、林に彼を説得させましょう。ついでに林も同行させようと思います」と答え、陸奥もこれを了承した。

綱は翌二日、さっそく林とともに東京を発ち、大阪に大三輪を訪ねる。国事のためとあって、大三輪は綱の要請を快諾し、同月四日、三人は大阪から一路京城へと向かった。京城では大三輪の親友である大官閔泳詢の邸宅に滞在した。三人は大鳥公使を訪ね、現在の状況について説明してもらった。公使の話では「朝鮮政府とは依然交渉中だが、成果は何も得られていない」という。「そもそも今回の事態を招いた東学党の乱は、長年続いた悪政を糺すよう民衆が政府に改革を求めたものである。そこでわが国としては、朝鮮に政治改革を断行するための重要政策を確定させ、しかるのちに清に対して陸海軍の撤退を要請させようと考え、政治改革に関する交渉を続けているが、朝鮮側の態度が煮えきらないので、清軍の撤退を求める発議を行うことすらできないでいるのだ」と公使は説明した。

さらに三人は政府の意向を知るために、大三輪と親交のあった大官連を訪問していろいろ話を聞いた。その結果、朝鮮政府首脳が清の公使袁世凱と共謀しており、大鳥公使との交渉に応じる意志のないこと

が確認できた。そこで綱は観察の状況を陸奥に知らせるとともに、「速やかに清に対して開戦すべきである」と電報で勧告した。折り返し陸奥からは「林・大三輪をそのまま京城に留めおき、君はすぐさま東京へ戻り詳細を報告せよ」との返電が届いた。

これが七月十九日のこと。綱は命令に従いただちに帰国。その日のうちに陸奥に対して観察状況の詳細を報告し、開戦する以外に手はないという意見を重ねて具陳したところ、陸奥もこれを了承し、翌日閣議を召集して開戦の決議を行うに至った。政府は御前会議での正式決定を経て、翌二十一日、電報で朝鮮に出征中の陸海軍に対し、開戦の命令を発した。

開戦に先立って日本政府は、開戦のきっかけづくりを大鳥に命じた。清の勢力を排除してからではなければ朝鮮の内政改革は難しいが、そう簡単に日清両軍の衝突は起きない。第一、日本から何の理由もなく戦闘を仕掛けるわけにはいかないからである。大鳥は朝鮮政府に対して内政改革案を示し、拒否されると、これを口実としてただちに日本軍を動かし王宮を占拠させた（甲午事変）。

王宮占拠事件を狼煙に明治二十七年七月二十三日、陸軍は成歓牙山において、また海軍は豊島沖で戦闘を開始。日清戦争の火蓋が遂に切って落とされた。

世界各国はアジアの盟主、大国清の圧倒的な勝利を確信していたが、その予想を裏切って戦局は日本軍有利に進んだ。同年九月に平壌で清国軍を撃破したのに続き、十月下旬には鴨緑江を制して清の領土に侵入。海上でも連合艦隊が勝利し、朝鮮から清国軍を駆逐するとともに黄海の制海権をほぼ掌中に収めた。遼東半島を占拠した日本軍は清国艦隊を降伏させた後、清からの講和申し入れを拒絶してさらに

南進し、澎湖島を占領した。

そして、翌二十八年三月二十日から下関で、日本側全権伊藤博文・陸奥宗光と朝鮮側全権李鴻章らとの間で休戦条約並びに講和条約に関する交渉が始まった。日本の法外な賠償要求に交渉は難航したが、同月三十日に休戦条約が調印され、四月十七日には講和条約も調印されることとなった。

これによって日本は、清と朝鮮の宗属関係の廃棄を明文化し、事実上、朝鮮の支配権を手に入れたのだった。

京釜・京仁鉄道の特許請求

朝鮮における政情視察を終え対清開戦を勧告した綱は、その後、朝鮮半島での鉄道敷設が急務であることを政府に提議していく。

明治二十七年十月、日本は朝鮮との間に京釜・京仁両鉄道に関する暫定条約を締結し、二鉄道の敷設及び経営管理権を手に入れたが、諸般の事情で着工しないままになっていた。綱はこの二鉄道に注目したのである。尾崎三良・大三輪長兵衛と相談して、京釜・京仁鉄道株式会社の創立と韓国中央銀行の設立を決意。明治二十八年二月、伊藤博文総理に設立趣意書を提出した。

翌二十九年一月、伊藤は綱を招いてこう告げた。「近頃、朝鮮国民の間に日本に対する排斥論が沸騰し、騒ぎが相次いでいるようだ。そこで大三輪に朝鮮朝廷の状況を観察させようと思うのだが、君から大三

輪にこの旨を伝えてもらえないだろうか。それから、君たちから提議されていた京釜・京仁鉄道の敷設は容認しがたいが、中央銀行設立の件は認めようと思うので、大三輪が朝鮮に渡ったら朝廷に許可を願い出るとよい。そして、表面上は、この銀行設立の請願のために朝鮮に赴くことにしなさい」と。綱は伊藤の要請を受け入れ、大三輪を東京へ呼び寄せ、伊藤に面会させた。

大三輪は、まず中央銀行設立のため大蔵省銀行局長と協議に入ったが、伊藤の命により急遽、予定を繰り上げて朝鮮へ渡ることになった。日本政府の謀略で閔妃暗殺事件（明治二十九年十月八日・乙未事変）が起こり、朝鮮国内の世情がにわかに不穏になったことから、朝鮮朝廷の状況観察は一日の猶予もならないと伊藤が判断したためである。

予期した通り、朝鮮国内における日本人排斥の勢いは、いっそう激しさを増していた。そのため、京城入りは果たしたものの、大三輪は大官連から避けられ面会することさえできず、半月余りを空しく過ごす羽目になった。ようやく農商工部鉱山局長や同部大臣らと秘密裏に面会できたのが三月二十一日のことだった。その席で朝鮮国民の排日感情を融和し、日朝両国の親善友好関係を高めるための方策を協議した結果、朝鮮側から「貴国がわが国における今日の危急を救済して、誠意を表明する以外にない」との申し入れが行われた。

その際、農商工大臣は、アメリカ政府が現在、朝鮮政府に対してアメリカ人モールスに京仁鉄道を特許するよう強硬に求めていることを告げた。そして、「我が国民は鉄道の敷設権が外国に占有されることを危惧しています。しかし、わが国が独自で京仁鉄道を敷設しようにも、政府には資金を支出するだけ

の余裕がありません。もし貴国から敷設資金百万円の借款を受けられれば、京仁鉄道はわが国が敷設するものとしてアメリカの要求を拒否することができます。どうか政府の窮地を救い、日朝親善の誠意を示してください。そうすれば、国民の排日感情も収まるはずです。わが国の急迫した事情を了解し、借款条約に応ずるよう貴国政府を説得していただけないでしょうか」と大三輪に協力を要請してきた。これに対して大三輪は、帰国後ただちに日本国内の資産家と相談し、本月中に必ず借款条約を締結できるよう政府へも働きかけていくことを約束した。

その後、大三輪は当時の在朝公使小村寿太郎を訪ね、大臣との秘密会見の結果を報告。同時にアメリカからの京仁鉄道特許請求に対し、暫定条約に基づき朝鮮朝廷に抗議することを提案した。ところが、小村公使はこの時まだアメリカが特許請求を行っていたことを知らなかったため、後日、事実関係を確認した上で、改めて大三輪と話し合うことになった。

小村は朝鮮の外部大臣李完用と面談した際に、アメリカからの特許請求の件を質す。それが事実であることがわかると、李大臣にアメリカの請求を拒絶するよう申し入れたが、李大臣の回答ははかばかしくなかった。李大臣は「貴国は暫定条約によってアメリカの請求を拒否せよというが、暫定条約が締結されてからほとんど三年が経過している。それなのに、貴国はいまだ工事に着手していないではないか。したがって、我が国は暫定条約はすでに無効であると考える」と主張したのである。

これを聞いた大三輪は、小村に朝廷に対してただちに抗議するよう迫ったが、小村は本国政府の指示が必要だとして応じなかった。そうこうするうちに大三輪は、知人である朝鮮外部外交局長からモール

スが朝廷に十万ドルを献上したことを知らされる。外国局長は「これで近日中にモールスに対して京仁鉄道が特許されることは間違いない」という。果たせるかな、それから間もなく「京仁鉄道がモールスに正式に特許された」との知らせが大三輪の元へ届けられた。

しかも、フランス公使が京釜鉄道を自国人グリロに特許するよう請求を始めたというではないか。グリロなる人物は先年、京義鉄道の敷設許可を得ている実業家である。このままいけば、朝鮮半島の主要な鉄道網はすべて列強の手に帰すことになる。京仁・京釜鉄道は本来なら日本が敷設し経営管理するはずの路線。それを列強がさらっていこうとしているのである。

大三輪はただちに小村を訪ね、善後策の検討に入った。大三輪は「京仁鉄道はもはや致し方ないとしても、京釜鉄道の特許は何としても我が国が獲得しなければならない。そのために私はこれから急ぎ帰国しようと思う。仲間と相談して京釜鉄道株式会社を発起し、発起委員から朝鮮朝廷へ特許請求を行う準備を進めるつもりだ。日本政府に対してもこれを認めるよう請願するが、公使、あなたも暫定条約を根拠にフランス公使からの請求を拒絶するよう、朝鮮国と交渉してほしい」と小村に迫ったが、またも本国の指示がないことを理由に動こうとしない。

そこで大三輪は政府を動かす手段として、既成事実をつくることを選ぶ。在留邦人の集まりである居留民会議を開き、京釜鉄道株式会社創立委員を選出し、彼らを東京に派遣する決議を行って、発起人二十余名の連署を添えて朝廷に対し特許請求書を提出した。さらに朝鮮外相李完用と秘密裏に交渉を行い、「同年九月を期限として京釜鉄道特許の請願を行うので、それまでにフランス人からの特許請求を拒絶

してほしい。もしそのように取り計らってもらえれば、金五万円を提供しよう」という旨の秘密契約を交わしたのだった。

大三輪は創立委員らと東京へ戻り、綱や尾崎らと今後の方針について話し合った上で、揃って伊藤総理と陸奥外相を訪問した。両大臣が列席しての会見で、これまでの経過と今後の見通しについて報告した。重ねて京釜鉄道株式会社創立発起人を募り、朝廷への特許請求を行うつもりであることを告げ、政府としてこの計画を容認し支援してくれるよう要請した。

だが、伊藤の答えはノーだった。主な理由は当時、日本の経済界が恐慌に見舞われ、大きな打撃を被っていたため、「出資者となる発起人を募っても集まらないだろう」というもの。加えて伊藤は「朝鮮半島における鉄道の敷設と経営は、列強がこぞって注目するところであり、国際上慎重なる考慮を要する案件であるから、政府としても軽々に判断することはできないのだ」と説明した。

この時、綱は陸奥に一人別室へ招かれ、改めて説得を受けている。

「君は年来理想に耽り、成功が難しい事業を企てては失敗に終わっている。京釜鉄道もまた成功の見込みのない事業である。どうか反省し、あきらめてほしい」

奇しくも陸奥は恩師酒井三治と同じ忠告をしたわけである。だが、綱にしてみれば、他の事業はいざ知らず、京釜鉄道に成功の見込みがないというのは心外であった。あれこれ弁じ立てて逆に陸奥を口説こうと試みたが容れられず、とうとう何の成果もなく、その日の会見を終えたのだった。

創立に向け本格的に始動

いったんは引き下がった綱だが、伊藤らの説得を断念したわけではない。翌日伊藤を再訪し、京釜鉄道の重要性を強調し、日本による早期敷設の意義を繰り返し説いた。

「確かに今日の経済状況からすれば京釜鉄道株式会社の創立は困難ではありますが、ぜひとも請願を容認していただかなければなりません。その理由は第一に、京釜鉄道の敷設が日朝両国のために必要であること。第二に、これが何よりも肝心な点ですが、京釜鉄道は将来、アジアと欧州を結ぶ鉄道が完成した場合に重要な連絡網となる路線だからです。これらの点を明確にして経済界の有力者を勧誘すれば、相当な発起人を集められるでしょう。また朝廷から特許を得るにあたっては、大いに同志を糾合し、広く全国に渡って国民の愛国心に訴えて株式を募集すれば、必ず目的を達することができるはずです。もし我々の期待に反して、発起人として経済界の有力者のうち百名も集められなければ、やむを得ないことですが請願は撤回します。

以上の通り、我々が国家のために尽くす所以を申し述べましたが、この上、もし我々の請願を退け、暫定条約の既得権を打ち捨てて省みず、みすみす外国人に獲得されるような事態に至れば、我々としては本年度の議会開院の暁に必ずや貴族院・衆議院双方において政府の責任を追及するべく問題提議を行うことになるでしょう。それに対して政府は、おそらく申し開きをすることはできないはずです。そう

した事態は、我々が政府のために大いに憂慮するところなのです」

綱がこう迫ると、伊藤総理はしばし沈思黙考したあげくに「熟考した上で、きっと返事をしよう」と答えた。

それから三日後、待ちに待った吉報がもたらされる。伊藤総理が綱と尾崎を招き、じきじきに「相当と認められる発起人を百名以上集められれば、君たちの請願を容認しよう」と告げたのである。

これを聞いた綱たちは勇躍、発起人募集に奔走する。その結果、財界の大物である渋沢栄一をはじめ、なじみの深い大江卓や中野武営、益田孝、前島密らの賛成を得ることができた。彼らの助力で勧誘は順調に進み、六月末には百五十名に達する。

そして七月六日、日本橋倶楽部で京釜鉄道株式会社発起人総会が開かれることになった。発起人規約や拠出金、今後の活動方針などについて決議を行い、ついで発起委員八名を選出して無事終了した。この時、綱は渋沢栄一・尾崎三良・大三輪長兵衛らとともに発起委員に選ばれ、さらに常務を任されている。

発起委員は発起人百五十五名の連署で、朝鮮朝廷あての京釜鉄道特許請求嘆願書を臨時外務大臣西園寺公望に提出。さらに京釜鉄道特許条約締結のための委員として、尾崎・大三輪の両名を京城に派遣し、駐朝公使原敬とともに外部大臣李完用に面会させた。

李大臣の態度は、先に交わした密約が効果を発揮したこともあって、思いのほか好意的だった。大三輪らの要求に対して李は、「暫定条約によって、京釜鉄道の特許条約を貴国と締結すべきであるのはいうまでもない」と答え、続けて「ただ条約を結ぶにあたっては規定事項を閣僚と審議した上で、皇帝陛下

の裁可を得る必要があるので、今しばらく待ってほしい」と猶予を請うた。日本側に異論のあろうはずがない。朝鮮側の願いを受け入れ、特許条約案を李に提出して、ひとまず会見を終えた。

ところが、事態はその後膠着状態に陥る。朝廷内に排日の気勢が高まっていたためで、李大臣としても手の打ちようがなかったのである。その苦境を物語るかのように、その頃、原公使宛に届けられた大臣からの公文書には「暴徒が鎮定されなければ、鉄道の敷設は危険であるから、もうしばらく猶予をいただきたい」としたためられている。これに対して原が「鉄道の敷設は暴徒が鎮圧されるまで当然待つつもりだが、特許条約については早急に締結すべきである」と厳しく迫ったところ、李大臣は陛下の裁可を受けていないことを理由に言を左右して、いっこうに埒があかない。

「条約の締結が難しいのなら、せめて条約の規定事項に関する協定だけでも結んでおきたい」と改めて申し入れたが、「今日の状況では協定を結ぶのも困難である」として拒否されてしまった。それでも、李は自らの不手際を陳謝し、「あなた方の特許請求に今すぐ応じることはできないが、フランス人の請求は既に拒絶しているので、暴徒の鎮圧に成功した暁には必ずあなた方と特許条約を締結します」とだけ約束した。

そこで、大三輪らは約束の証として李にその旨を文書にしたためさせ、これを携えていったん帰国することにした。あとの交渉は当面、在留邦人で日本の民間銀行の京城支店長を発起委員代理として、彼に任せることになった。

後日、確認したところによれば、フランスからの特許請求が拒絶されたというのは事実であった。だ

が、尾崎・大三輪らの派遣があと一月遅れていたなら、京釜鉄道はおそらくフランス人グリロに特許されていたに違いない。そうなれば綱たちの努力はまったく水泡に帰していたわけで、実に危ないタイミングだったのである。

京釜鉄道の許可と日本政府に対する特別保護願い

明治三十一年二月、朝鮮駐在公使に加藤増雄が任命された。これを知った綱は尾崎とともに赴任前の加藤公使を訪ね、京釜鉄道特許条約締結に関して特別な尽力を依頼した。加藤は快く引き受けてくれ、京城に向けて出発していった。

加藤は有能な外交官で辣腕をふるって対朝外交を有利に進め、特に朝鮮の政情安定に力を注いだ人物である。彼が赴任した当時、朝鮮国内では独立党と称する一団が跋扈して世間を騒がせていた。加藤は朝鮮政府要人に巧みに働きかけて、これらの危険分子を取り除くように計らい、世情を鎮静化させることに成功する。このため皇帝は加藤を大いに信頼し、大官連の中にも親日派が増えていった。

朝鮮で多大な功績を残し大きな影響力を持つに至った加藤は、綱との約束を果たすため、京釜鉄道特許条約締結運動を開始する。ちょうどその頃、伊藤博文の清国訪問が公表され、その途中、仁川に寄港することが決まった。加藤はこの機を捉えて朝鮮政府に揺さぶりをかけた。ごく親しい間柄の内官に「伊藤公が仁川に立ち寄ったなら、京釜鉄道の特許が遅れていることを指摘し、速やかに条約を締結するよ

う皇帝陛下に請求されるだろう。そうなる前に私は責任をとって公使の職を辞し、帰国しようと思う」と告げたのである。

この内官は「今加藤に去られては朝鮮政府としても朝廷としても不利である」と判断し、皇帝に対して「どうか速やかに特許条約の締結を裁定され、公使がその職に留まれるようお取り計らい下さいますように」と進言した。皇帝は内官の言葉を聞き入れ、特許条約締結の内命を下す。加藤が伊藤を出迎えるために仁川に赴いた当日、皇帝の特使が彼のもとに到着した。

加藤はただちに外部大臣李完用と会見し、条約協定にこぎつける。こうして同年九月八日、京釜鉄道合同条約が締結されたのである。

ようやく京釜鉄道の特許を手に入れた綱たち発起委員は線路踏査のため、委員の一人である大江卓を逓信省作業局長・参謀本部陸軍少佐・嘱託技師長ら十数名とともに朝鮮に派遣した。大江は明治三十二年二月に東京を発ち、加藤公使と皇帝に謁見して線路踏査に関して特別保護を願い出る。その結果、皇帝の命によって調査対象地域の役人に対して、踏査員の警備を厳重にし、便宜を図るよう通達が出された。

一行は朝鮮警察の巡査十数名を同行して、京城から釜山に至る路線の選定踏査を行った。同時に、沿線の各市郡村の人口や旅客貨物の集散状況も調査し、六月末に東京へと戻った。

この踏査団の派遣に際して、さまざまな力添えを要請するため、綱は参謀本部に川上操六を訪ねている。川上は当時、参謀本部長を務めていた人物である。その席で川上は「京釜・京仁鉄道に関する暫定条約は私が主張して締結させたものだ。日清戦争後すみやかに工事を開始するよう何度も督促したが、政

府の態度がはっきりしないまま三年近くも経ってしまい、結局、京仁鉄道はアメリカ人に持っていかれてしまった。その後京釜鉄道もフランス人が特許を請求していると聞き、憤慨に堪えなかったのだが、君たちの熱心な発起運動を見て、深甚の同情をもって成功を期待していた。それが今日、遂に線路の踏査を行うまでに至ったのだ。誠に愉快な限りである。君に対していくら感謝しても足りないぐらいだ」と語った。その言葉は、綱には心底から発せられたもののように響いた。

そこで綱は「発起以来、政府当局者に提議請願を行うたびに難詰されたり、意義を唱えられることばかりでした。閣下のように同情して下さった方は今まで見たことありません」と正直に打ち明けた。二人は互いに呵々大笑し合い、初の会見を和やかに終えたのだった。

現地での踏査を終えたため、発起委員は明治三十二年七月、発起人総会を開き、京釜鉄道株式会社の設立を決議する。同時に、京釜鉄道の敷設工事費並びに運輸営業設備費を調製し、総資本金を二千五百万円として一株五十円の株式五十万株の募集を決定した。

さらに事業の円滑な運営を期すため、政府に対して何度か特別保護を願い出る。だが、政府は、京釜鉄道に対する国民の非難攻撃が激甚を極めていることを理由に、決定を先送りするばかり。業を煮やした委員らは時の総理大臣山縣有朋に対して、連名で京釜鉄道特別保護に関する請願書を提出した。山縣は委員らの請願に「個人的には賛成だ」としながらも、世論の反対があまりにも激しいため、議会に特別保護案を提出することを躊躇していた。

そこで、綱は尾崎と共に第一四議会の開院に際して、貴衆両院各派の首領に面会を求め、京釜鉄道速成建議案の提出を依頼した。綱たちの根回しが効を奏し、この建議案は貴衆両院において大多数で可決される。時に明治三十三年一月二十日のことであった。

朝鮮半島における支配権の強化と大陸進出とを念頭に置いてのことだろう、その後も政府は京釜鉄道に対して手厚い保護政策を打ち出していく。同年九月十五日、「外国で鉄道を敷設する帝国会社に関する法律」を公布し、京釜鉄道会社に準用。同月二十七日には京釜鉄道会社創立委員に特別保護命令書を下付した。さらに明治三十五年十月二日、京釜鉄道敷設等の事業に対して四百七十九万円の支出を決定している。

京釜鉄道株式会社を創立

政府の特別保護を得たことで、活動に弾みがついた京釜鉄道株式会社発起人会は、会社組織の立ち上げを決定。明治三十三年二月二十日、発起人総会を開いて、京釜鉄道株式会社の創立を議決した。創立委員は十三名で、選挙により決定。綱はもちろんその中に含まれていた。渋沢栄一がここでも委員長を務め、綱と尾崎、大三輪、日下義雄が常務に選ばれた。

創立後初の活動は、現地に委員を派遣して線路の実測等を行うことで、そのための費用として委員が連帯責任で渋沢・大倉喜八郎から五万円を借り入れることになった。

ともあれ、紆余曲折を経て、とうとう京釜鉄道株式会社が正式に発足したのである。政府の保護を取り付けたことで株式募集も順調に進んだようだ。明治三十四年十月二十三日付の東京日々新聞が「株式の募集好調」と題する記事の中で、この頃の京釜鉄道株式会社の消息を伝えている。

「※京釜鉄道会社の日下義雄氏の一行来着し、昨夜、有志家の会合を倶楽部本館に開き、日下氏の同社株式募集に関する談話あり。形勢すこぶる宜しく、一万株以上の申し込みあるべき模様なり」

この間、綱は京釜鉄道株式会社の常務取締役に就任し、事業を成功へと導くため、全身全霊を捧げていくことになる。

京釜鉄道に対する特別保護を決定した後、政府はその具体策の一つとして京釜鉄道株式会社に対し十五年間にわたって年六分の補給利子を交付することを決定している。この決定に際しては、内閣と発起委員との間に利子の割合をめぐる長い駆け引きがあった。内閣は当初、補給利子年五分を提示したが、発起委員は「年六分以下では、今日の経済界の状況では株式募集に応じる者はない」と主張してこれに反対。話し合いは数カ月もの間、膠着状態に陥ってしまった。

この状況を打破したのが、やはり綱であった。明治三十三年六月十日、尾崎・渋沢と共に総理官邸に山縣首相を訪ねた綱は、居並ぶ内閣首脳に対して京釜鉄道株式会社の早期成立の必要性を改めて説き、年六分の補給利子を了解してくれるよう求めた。ただし、その場は要請のみとどめて退席し、その足で単身、京釜鉄道の経営に熱心だった陸軍次官の桂太郎を訪ねている。彼から首脳陣に働きかけてもらい、閣議での決定を急がせようと考えたのである。

当日の会談の模様について綱から聞いた桂は、快く依頼を引き受けてくれた。結局、この桂次官の尽力によって閣議での決定が速やかに行われ、ようやく綱たちの望む通り年六分の補給利子が認められたのだった。

明治三十三年三月、綱は大江・大三輪と共に京城へ向かう。京釜鉄道敷設工事に関して朝鮮朝廷と細部の詰めの交渉を行うのが目的だったが、事業を円滑に推進すべく皇族や大官連を歴訪し、親交を深める狙いもあった。

皇帝に謁見した際には、鉄道事業を主管する専門部署の設置を奏請し、鉄道院の設立という大きな成果を手に入れる。同時に、大三輪がその監督を命ぜられ、これによって、その後の朝廷との交渉が非常にスムーズに運ぶことになった。大官連訪問や皇族の接待など、もう一つの目的である朝廷への働きかけも首尾よく運んだ。同月十三日には日本人技師ら測量団が渡朝し、鉄道院の職員と警備員が同行して京城・釜山間で線路の実測を行っている。

その後、綱らは鉄道院総裁と会見し、鉄道用地として京城地方では南大門・永登浦間、釜山地方では草梁・釜山鎮間における線路並びに停車場の収容地域を決定するよう要請した。鉄道用地に関しては、すでに日本人らによる買い占めが行われ地価高騰を招いていたため、早急に決断を下し、対象地域の土地売買を禁止しておく必要があったのである。しかも京釜鉄道は広大な地域を対象としていたことから、事前に相当な困難が予想されていた。

鉄道院は日本側の要請を受け入れ、速やかに収容地域の選定にとりかかった。停車場用地として南大

門で約十一万坪、永登浦で約八万坪、同じく草梁で約八万坪、釜山鎮で約二十一万坪などをそれぞれ指定し、当該地域の売買を禁じた。

こうして第一の難関は突破できたが、次には、土木工事の請負先の選定という新たな問題が控えていた。合同条約で「工事役夫は十分の九の割合で朝鮮人を雇う」との取り決めがなされていたため、朝鮮側は大官の一人を社長に迎えて工事請負会社を設立した上で、この取り決めを根拠に京釜鉄道株式会社に対して請負契約を結ぶよう強硬に求めてきたのである。

綱は頻繁に交渉に訪れる会社の理事たちを前に、「線路の実測が終わり設計などの準備が整ってからでないと、工事請負契約を結んでも意味がない」と告げたが聞き入れられず、何度も同じ説明を繰り返さなければならなかった。そこで、「工事請負契約を交わすにはいろいろと条件がある。第一に資本金が潤沢であること、第二に経験豊富な技師を雇っていることだ」と切り出し、重ねて「工事請負契約の際には請負金高の十分の一を保証金として提供してもらう決まりだが、京釜鉄道の場合、その額は百数十万円にも上る。これをたった一社でまかなうことは、とてもできないだろう。また、あなた方は『朝鮮人は古来から土木工事や大建築に優れた手腕を示している』というが、それと鉄道敷設工事とは全く異なる。鉄橋を架けトンネルを掘るといった工事は、欧米の技術に頼らざるを得ないものなのだ。日本でも初めて鉄道を敷設してから二十数年間は、西洋から技師を招聘していたほどだ。貴国にはそうした技術を持った人間がいないのではないか」と具体的に説得にかかった。

これで朝鮮側は強硬な態度を改めた。後日の会見で、工事請負会社が綱の提案を受け入れ、日本側の

推薦する日本人技師を雇い入れることと、請負会社側で資本金や工事に必要な機械などの準備が整い次第、京釜鉄道側が工事区域を定め、その上で請負契約を結ぶことの二点を承諾したのである。

この時の理事たちに対する説得は、綱にとってかなり苦しい局面の一つだったようだ。彼らを下手に怒らせて反感を買ったりすると、工事予定地域の人心にも影響するだろうし、そうなればたちまち工事に支障が出ると考えたからである。

幸いにもその後は特にもめ事は起こらず、朝鮮側も工事請負によって相当の利益を得た。このことは、「地方の人心を融和する上で大きな効果があった」と綱は記している。ちなみに工事の進捗状況については、明治三十四年九月二十二日付の時事通信[*]が、前日二十一日に釜山で南端起工式が挙行されたことを報じている。

これ以後、京釜鉄道の敷設は着実に進行していった。だが、その間には、沿線に住む在留邦人から停車場の位置変更を求められたり、日本人が組織する複数の工事請負会社から同時に発注を要請されるなど微妙な問題がいくつも発生した。その一つひとつに、綱は京釜鉄道株式会社の常務取締役として誠実に対応し、解決に努めたのである。

とにもかくも、こうした事実を後述する京釜鉄道の国有化と併せて考えると、そこからは、綱がたった一人でとりかかった京釜鉄道事業が、官民こぞって大きな期待をかける一大国家プロジェクトへと変貌していく様子が浮かび上がってくる。それは、すなわち時代が綱の先見性に、ようやく追いついたことの証明のように思えてならない。

報われない苦労はない。遂に夢が現実となる日がやってきた。明治三十八年一月十三日、京釜鉄道が晴れて開通したのである。ただし、全線が完成するのは大正三年のことで、*当時は一部区間（草梁・永登浦間）で暫定営業していたようだ。そして、その四ヶ月後、京釜鉄道の開通式が華やかに京城・釜山の両地で挙行されることになる。

明治三十八年（一九〇五）五月二十六日、時事通信は特電で伝えている。

『*今二十五日、草梁に於いて京釜鉄道開通式祝典を行い、各種の余興あり、すこぶる盛観なり。本日午前十時、京釜鉄道開通式を行い、参列者無慮千二百余名にてすこぶる盛況を極め、博恭王、李戴覚両陛下には十時十五分御台臨、午後一時十分御退出あらせられたり』

朝鮮半島の中心部、現在の大韓民国の首都・ソウル（当時の京城）と、南東部の端に位置する釜山とを結ぶ京釜鉄道の開通を祝う式典の開催を伝える第一報である。

この日、韓国朝廷の要人を来賓に迎え、日韓双方の関係者が相集った。祝典は博恭王、李戴覚両殿下の臨席のもと、鉄道の線路図と経営概要の捧呈、式辞の朗読に続き、数々の祝辞を受けてつつがなく終了。午後に散会となった。同紙は翌日の紙面で、開通式の模様をさらに詳しく報じた。

『*（前略）朝来好天気なりしため、午前九時半頃より来賓の車を駆り、或いは徒歩にて来集する者引きも切らず、その数約千二百名（内衆議院議員百名、貴族院議員三十名、韓人二百三十名、西洋人百四十名）と註せられる。正午頃少雨ありしも、間もなく霽れ渡りて誂え向きの好天気なりしを以って、場内は無論、場外に来集する者ほとんど立錐の余地なく、その雑沓名状すべからず。

会場の装置　会場は南大門京釜鉄道支社の構内にして、停車場及び会場の入口には、相対して京釜の文字に模擬したる壮観目を驚かすばかりの二大緑門を造りて、日韓両国の国旗を交叉せり。（後略）』

開通を祝う人出の多さが、京釜鉄道に寄せる当時の人々の関心の高さを物語っている。壮観で目に鮮やかな会場の装飾も、関係者の晴れがましい思いが伝わってくる。

京釜鉄道はその後も順調に発展を遂げ、同年九月には日本国内の交通網との連絡を密にするため、政府の肝煎りで山陽鉄道並びに日朝間の定期汽船と連絡運輸を協定している。

だが、明治末になると日本国内で私鉄の国有化が取り沙汰されはじめ、京釜鉄道もその流れに組み込まれていく。明治三十九年三月には京釜鉄道買収法案が衆議院に提出され、さらに同月三十一日、鉄道国有化法（明治三十九年十月一日施行、同四十年十月一日買収完了）の公布に伴い、京釜鉄道買収法が公布された。これによって、京釜鉄道は韓国統監府の所轄となり、以後、国有鉄道として国策と絡み合いながらの発展を余儀なくされるのである。

京釜鉄道余話

京釜鉄道に関しては、いろいろな逸話が残っているが、一つ紹介しておこう。

綱は特許請求を求めて朝廷に通ううちに、次第に皇帝の厚い信頼を得るようになった。ある時皇帝に謁見した綱は、皇帝からじかに「あなたは日朝両国の親善に大変熱心だと聞いた」と声をかけられ、意

見を求められた。綱はこれに対して「日朝両国の官民がお互いに歩み寄り、助け合い、一致協力して国防共栄・経済共通を図り、国の威信や国力を発展させなければなりません。そのためにも両国の交通の便を開くことが肝心要の急務です」という、かねてからの持論を展開している。さらに、その具体的な手段として「第一に京釜鉄道を敷設して日朝の交通を盛んにすること。第二に京義鉄道を敷設してアジアとヨーロッパを結ぶ鉄道連絡網を完成させることが必要です」と説き、「ロシアが満州鉄道の早期完成を急いでおり、遼東・大連への連結には今から二年とかからないでしょう」とも申し添えた。

すると皇帝は愕然とした面持ちで「満州鉄道速成の件は今日初めて聞いたが、誠に恐怖に耐えない。ロシアはアジア侵略のため満州鉄道を敷設しているのだから、それが大連まで到達すれば、わが国に対して侵略戦争を仕掛けてくるのは必然であると思われる。あなたはこの件についてどのように考えるか」と問いかけてきた。

そこで綱は皇帝を安心させるべく、「外敵の侵略を恐れないわけではありませんが、鉄道は本来、交通の便をよくし経済を発展させることを原則としているものです。ロシアとしてもただ侵略のためだけに鉄道を敷設するはずがありません。鉄道が大連海まで達したからといって、ただちに戦争を起こすようなことはないでしょう」と意見を述べた。

この会見の最後に皇帝は「あなたの説は正しいかもしれないが」と前置きした上で、「それでも私の信念を覆すことはできない。どちらが正しいかは、いずれわかるだろう」と語ったという。

答えは確かに出た。この後間もなく朝鮮は、ロシアではなく、盟友と信じた日本から日韓併合（一九

一〇年）という形で侵略を受け、国家としての存在そのものを危うくすることになった。そして決め手は、やはり鉄道であった。綱の見通しはある意味で正しかったが、皇帝の懸念もまた真実を突いていたのである。

ところで、この皇帝との会見に関して、もう一つエピソードが伝わっている。京釜鉄道がいよいよ着工となり、永登浦で起工式が行われた時のこと。招待客の一人であるロシアのロバノフ公使が綱にこう問いかけた。

「京釜鉄道の敷設は貴国にとっては喜ばしいが、わが国には恐るべきことです。これは、我が国と戦争をするための準備なのでしょう」

綱は無論、即座にこれを否定する。「京釜鉄道は営利を目的に日本の資本家たちが組織したもので、戦争のために政府が造ったものではありません」。

歴史的な結末はさておき、この時の綱の言葉に嘘はなかったと思われる。綱としても朝鮮半島に鉄道を敷設することが国威発揚、国力増強につながることぐらいは明確に意識していたはずだが、侵略を念頭に置いていたとは思えない。やはり、純粋に経済的な目的、商取引による利益の獲得を第一義としていたのではないだろうか。

だが、結局、綱のとった行為が「工業富国基」という彼の夢を叶えると同時に、日朝親善の願いを破ることになる。京釜鉄道自体は個々の資本家の利益と国家の発展に寄与すべく、日朝間の経済振興を図る目的で建設されたものだったが、結果的に日本の朝鮮半島支配と大陸進出のための道具として利用さ

れたからである。

日露戦争と韓国併合、さらに、それに続く諸々の外交政策を綱がどう理解していたのか、今となってはわからないが、歴史の皮肉を感じずにはいられない。

京仁鉄道もまた

ここで、再び話を明治三十年前後に戻そう。発起委員らが京釜鉄道計画の実現に向けて奔走していた頃のことである。

当時、綱はひそかに京釜鉄道以外の問題を抱え込んでいた。アメリカ人モールスに特許をもっていかれた京仁鉄道、これが喉に刺さった小骨のように綱の心を刺激し、折に触れて悔しさを思い起こさせていたのである。だが綱は後にその無念を自ら晴らすことになる。

きっかけは、明治二十九年十月に訪れた。綱は偶然、モールスが敷設工事資金の調達に困窮していることを知り、京仁鉄道の買収を持ちかけようと思いつく。ちょうどその頃、布哇駐在アメリカ公使が日本を訪れていた。そこで、綱は共通の知人である益田孝を介して、京仁鉄道買収の希望を公使からモールスに伝えてくれるよう依頼した。

この時は何の反応もなかったが、二年後の明治三十一年一月になって、モールスが京仁鉄道を売却するつもりであることがわかった。外務次官小村寿太郎が外務大臣大隈重信の内命として、モールスが外

務省顧問のデニソンに京仁鉄道譲渡の周旋を依頼してきたことを、発起委員の一人である尾崎に話したのだった。小村は尾崎に対し、「京釜鉄道株式会社発起委員らで譲渡に関する交渉を行うように」との外務省の意向も伝えている。

いよいよ昔日の無念を晴らす好機が訪れたのである。尾崎と綱は発起委員会を開催し、京仁鉄道組合を設けて譲渡交渉を行うことを決議し、デニソンからモールスへ、東京へ来て交渉の席に着くよう通知させた。これを受けて、モールスは同年三月に来日。綱や渋沢委員長と交渉を行い、四月五日、遂に京仁鉄道譲渡条約を締結するに至った。

京仁鉄道組合には発起委員らの他に、大隈重信の勧誘で、岩崎弥太郎・三井守之助・大倉喜八郎・安田善次郎といった当代きっての実業家が加わった。岩崎・三井が各二株、渋沢・大倉・安田が各一株、その他の委員は前島密を代表として一株を所有することになり、それぞれが相当額を出資して、その中からモールスに交付する寄託金を捻出した。

綱はもう一つの宿願を果たした。京仁鉄道を手に入れたのである。

念願は叶ったものの、京釜鉄道同様、京仁鉄道の行く手には暗雲が垂れ込めていた。モールスから敷設工事費の前借りをたびたび求められ、その都度、大多数の組合員が資金繰りを理由に特許の放棄を決議しようとしたからである。

最初の困難は明治三十一年七月に訪れた。この時、モールスは「百万円の追加支払いが認められなければ、賠償金を払って条約を解除する」と強硬な態度を示した。そのため組合員の中から「費用の調達

が難しいことでもあるし、この調子では利益も見込めそうにない。いっそ条約を解除した方がいいのではないか」との声が上がる事態となった。

組合ではこの意見が多数派を占めていた。条約解除賛成派の説得にあたった綱は「京仁鉄道は国家にとって大切な鉄道であるから、個人や一団体の利益を云々して条約を解除するような真似はしないでほしい」と切々と訴えたが、聞き入れてもらえなかった。結局、大隈重信に掛け合って政府から百万円を借り入れる約束を取り付け、ようやく条約続行にこぎつけることができたのだった。

その後はしばらくは工事が順調に進んだようで、明治三十二年九月二十七日付の東京日々新聞に「日本資本で海外最初の鉄道開業式」と題して京仁鉄道の一部開業が報じられている。それによると「邦人*の資本及び技術により、海外に敷設せられたる鉄道の嚆矢京仁鉄道は、さきに仁川、鷺梁津間の線路落成せしを以って、去る十八日、韓国仁川港に於いて開業式を挙行した」とある。

ところが翌三十二年十月、またしてもモールスが厄介な話を持ち込む。「やむを得ない事故が発生したため工事費が予定額を超過しそうなので、その分の二十万円を追加してほしい」というのである。「請求に応じてもらえないなら三百万円で買収したいという希望者がいるので、違約金に剰余金八十万円を添えて支払い、条約を解除したい」とモールスは前回以上に強気に迫ってきた。

再び組合員による会議が開かれたが、今度も「条約を解除せよ」と声が多数派を占めた。「八十万円もの望外の利益が手に入るのだから、解約の求めに応じてやればよい」というのが彼らの言い分。それに対して綱は「政府と協議した上で組合の決議を行うべきだ」と主張。議論は紛糾してまとまらなかった。

綱は何とか一週間の猶予を得ることに成功し、政府に対してさらに百万円の借り入れを願い出る。モールスに必要な資金を渡して、京仁鉄道譲渡に関する一切の手続きを今度こそ完了させてしまおうと考えたのである。

幸い、綱の願いは今度も聞き入れられ、大隈重信と松方正義両大臣の尽力で国庫から組合に対し二百万円の貸付が行われた。組合ではこのうち百万円を正金銀行に返済し、残る百万円をモールスに交付することにした。綱の記述によれば、モールスに渡った百万円は京仁鉄道に関する一切の譲渡手続きの完了と同時に、未完成分の工事費を差し引いた残額だったという。正確な金額は記録を紛失したためわからないとも記している。

とりあえず、これで京仁鉄道に関するごたごたがほぼすべて片づいたことになる。そこで組合は京仁鉄道合資会社を組織し、朝鮮朝廷に対して正式な特許譲渡願いを申請。同年十一月末、既成の鉄道並びに鉄道に属する全財産の譲渡手続きを完了した。ここに至って、京仁鉄道もまた正式に日本のものとなったのである。

その後、会社側は、日本人の支配人技師長足立太郎に未完成部分の工事を続行させた。竣工は明治三十四年十月のことで、ただちに運輸営業を開始し、翌三十五年十一月には京釜鉄道株式会社に合併されることとなった。それ以後、京仁鉄道の営業成績は飛躍的に発展し、路線一里あたりの一日の平均収入が一五、六円と、当時の山陽鉄道とほぼ同額にまで達したという。これは綱たちにとっても、予想以上の好成績であった。

京義・営義鉄道と京城電気・水道問題

明治時代、朝鮮半島では京城を起点として東西南北、各地に至る鉄道が朝鮮国内外の資本によって複数整備された。敷設当初から綱が深く関わった京釜・京仁の二鉄道をはじめ、京義鉄道・営義鉄道などがそれである。

京義鉄道は総延長二百九十里あまり、途中、平壌を経て京城と義州鴨緑江を結んでいる。一方の営義鉄道は、その京義鉄道の終点である鴨緑江から満州安東県を経て遼東半島の大石橋に至る。前者は朝鮮半島と大陸を結ぶ重要路線であり、後者は、綱の記述によれば、ロシアの東清鉄道と交差してヨーロッパとの交通を開くと共に、大石橋から営口に達して清の関外鉄道に連絡し、清国内の各鉄道との交通を開く、アジアとヨーロッパを結ぶ大幹線鉄道であった。

綱はかなり早い時期から京釜鉄道と京義・営義鉄道の連結を構想していたようだ。日本から朝鮮、さらに清へと続く一大交通網を構築し、それらを日本が支配することで、朝鮮半島における権益の拡大と大陸進出の足がかりをつかもうとした。したがって、京釜鉄道の実現に全勢力を傾注する傍ら、京義・営義二鉄道の敷設にも多大な関心を払っていた。

このうち、京義鉄道に関しては先にも触れた通り、いったんは明治二十九年七月にフランス人グリロが特許を得ていたが、諸般の事情で着工しなかったため、特許権が消失したものと見なされ、明治三十

三年七月、改めて朝鮮国内で組織された西北鉄道会社に特許が許可されていた。当然、フランスはこれに異議を唱える。フランス公使と朝鮮政府との間で交渉が行われ、当該鉄道の工事監督並びに技師にフランス人を招聘し、機械材料もすべてフランスから輸入することで決着がついた。これを受けて朝廷は宮中に西北鉄道局を設置し、フランス公使館書記官ラヘーブルを監督に任命して、明治三十四年十月、西北鉄道起工式を挙行することとなった。

綱はことの成りゆきを見守るべくラヘーブルに近づき、さまざまな情報を入手していたが、西北鉄道の起工式後、間もなくラヘーブル自身から耳寄りな話を聞かされる。「近々監督を辞任しようと考えている」と告げられたのである。「西北鉄道には成功の見込みがなく、しかも工事に際して奇怪なことが多すぎて、自分には到底堪えられないからだ」という。ラヘーブルは、さらに綱にこう語った。「その奇談の一つを話してあげましょう。西大門で起工式を行ったあと宮中から専門の役人を派遣してもらい、朝鮮でのしきたりに習って地相を鑑定させたのですが、その地官は『京城は地相から見て、風水でいうところの龍の頭にあたり、西大門は龍の目に相当します。したがって、この地から工事を開始すれば、必ず凶変が起こるでしょう』と報告してきたのです」。

かの地の人たちは、当時の日本人以上に迷信深く、また父祖伝来のさまざまな言い伝えやしきたりを重んじていた。そのため、西洋人から見れば何でもないようなことが問題視され、結果的に工事にも支障を来したと思われる。ラヘーブルはそうしたトラブルの繰り返しに、とうとう我慢しきれなくなったのだろう。

だが、綱にしてみれば願ってもないチャンスが向こうから転がり込んできたことになる。さっそくラヘーブルに対して「京釜鉄道と連絡させるために、京義鉄道を敷設しようと思います。西北鉄道の特許を譲渡していただけないでしょうか」と持ちかけた。すると、当のラヘーブルはとっくに関心を失っていたためか、こともなげに「朝廷の許可が得られるなら問題ないでしょう」と答えたのだった。

綱は西北鉄道の特許譲渡に関してラヘーブルと盟約を交わし、西北鉄道会社幹部と共に譲渡を認めてもらえるよう朝廷に請求を行った。ところがその運動に突然、横やりが入る。明治三十六年二月、ロシア公使が朝廷に対して、京義鉄道をロシアに特許するよう強硬に申し入れてきたのである。もちろん、黙ってこれを見過ごすような綱ではない。林公使を動かして朝廷に抗議するとともに、ある巧妙な手を使ってロシア公使と折衝を行い、要求を撤回させた。さらに、京義・営義二鉄道が日本にとって、いかに重要な路線であるかをしたためた趣意書を日本政府に提出し、両鉄道の日本による早期敷設に向け、朝鮮と日本の両政府に対して強力に働きかけていく。

だが、同年十二月、京釜鉄道株式会社本社から至急帰国するように命じられ、綱の運動は中断してしまう。政府*が会社に対して京釜鉄道の一日も早い完成を求めてきたのがきっかけで、綱を除く理事全員と社長の交代が決まり、引き継ぎなどの業務に忙殺され、綱が全く動けなくなってしまったからだった。

このため、京義鉄道問題は一時棚上げの形となっていたが、その後、思わぬ展開を遂げる。明治三十七年二月十日の日露戦争の開戦を機に日*本政府が朝鮮朝廷に敷設を通告し、突貫工事で完成させたのである。日本政府はそれまで綱の再三の要請に対してなかなか反応を示さなかったのだが、危急存亡の時

に際して、ようやく重い腰を上げたわけである。

営義鉄道も京義鉄道同様、日露戦争をきっかけとして日本政府が敷設を行った。路線は安東県と奉天間のみで当初の構想とは若干異なっていたが、それでも綱にしてみれば、自分の狙いの正しさが実証され認められたわけで、充分満足だったのではないだろうか。京義・営義二鉄道に関する自叙伝の項目は、「余ノ計画ハ半バ達セラルルヲ得タリシナリ」という文章で結ばれている。

京城電気鉄道と京城水道とは、コールブランとホストウィキというアメリカ人が明治三十年に朝廷から特許を得たものである。資本金は四百万円。うち二百万円を宮中からの出資でまかない、まず電気鉄道を敷設した。ところが、経営管理がうまくいかず、営業開始以来、成績不良が続き、宮中への配当がゼロのまま数年が経過していた。

綱は、さっそくこれに目をつける。京仁鉄道買収の勢いに乗って、京城電気鉄道も買収しようと考え、公使館の萩原書記官と共に計画を練り、明治三十五年四月、宮中への働きかけを開始した。その結果、宮中の了解を取り付けることに成功したが、譲渡価格に関して、事業主のコールブランと折り合いがつかない。結局、綱は京城電気鉄道買収計画を断念せざるを得なかった。

ところが、明治四十一年になって、コールブラン本人から「先年交渉を行った価格二百万円で譲渡したい」という話が持ち込まれる。一説によると、アメリカが韓国における権益を握っているのを不快に思った韓国統監伊藤博文が、何とか権利を日本のものにしたいとコールブランに働きかけ、その結果、

綱の名が上がったともいう。コールブランは日本人を全く信用しておらず、ただ一人、綱に対してだけは先の交渉を通じて信頼感を抱いていたらしい。伊藤の命を受けて交渉を持ちかけた渋沢栄一に対して、「*渋沢男でも誰でも、日本人と商談する事は真っ平だ。ただ、竹内綱さんなら協商してもよい」と答えたという。

綱はかつて自ら希望した買収話でもあり、国家のためになることでもあるので、コールブランのじきじきの指名を受け入れた。だが、あいにく綱は英語が堪能でない。そこで実際の交渉役として、白石直治を選んだ。白石は次女菊の夫で、綱にとっては娘婿にあたる。気安い間柄であり、信頼を寄せられる人物でもあった。その上、土木工学界にその人ありと知られた逸材で、当然英語が堪能である。

この白石の働きで、コールブランとの交渉は今度はうまくまとまった。しかも、先方は綱の娘婿である白石をいたく気に入ったようで、電気鉄道だけでなく「京城水道の特許を譲渡してもよい」とまで申し出た。「韓国内で他に相応の利権を手に入れたので、あなたさえよければ水道は安価で譲ろう」という。綱にしてみれば渡りに船。さっそく白石に命じて、両方の譲渡契約をまとめさせた。

この結果、京城電気鉄道と京城水道はコールブランの手を離れることになった。鉄道は日本人が設立した京城瓦斯会社の所有となり、水道は明治四十二年六月末に朝鮮総督府に買収されたのである。

杭九鉄道借款計画

朝鮮半島における鉄道敷設及び経営は、非常な困難を伴った。多大な労力と膨大な資金を必要としただけでなく、さまざまな個人や関係機関の協力がなければ、特許を得ることさえできなかった。だが、綱は大勢の人に助けられ、また時には天運をも味方にして、この大事業を成し遂げた。

かつて恩師酒井三治から「生来非分ノ大事業ヲ企テ多クハ失敗ニ終レリ。須ラク深ク戒慎スベシ」と戒められた綱だったが、生涯をかけて挑んだこの企てには、遂に勝利したのである。京釜鉄道だけでなく京仁鉄道、京義鉄道、営義鉄道、さらには京城電気鉄道の権益をも、最終的に日本のものとすることに成功した。いち早く日本で手がけた大阪・神戸間の鉄道敷設計画は全くの失敗に終わったが、朝鮮半島では、ほとんどすべての事業で一定の成果を上げることができたのだ。綱にとって、これほど満足のいく結果はなかったのではないだろうか。

だが、その勢いをもってしても、事業を大陸へと拡げることは容易ではなかった。その一例として、清国杭九鉄道計画の顚末を紹介しておこう。

綱は明治三十六年十月、日本政府の内命を受け、杭九鉄道の路線踏査のために鉄道局技師長小川資源と共に清に二度に渡って出張した。その後、政府による敷設計画は中止されたが、この調査の過程で杭九鉄道の有望さを知った綱は、「政府がやらないのなら自分が」とばかりに、事業として取り組むことを決意する。

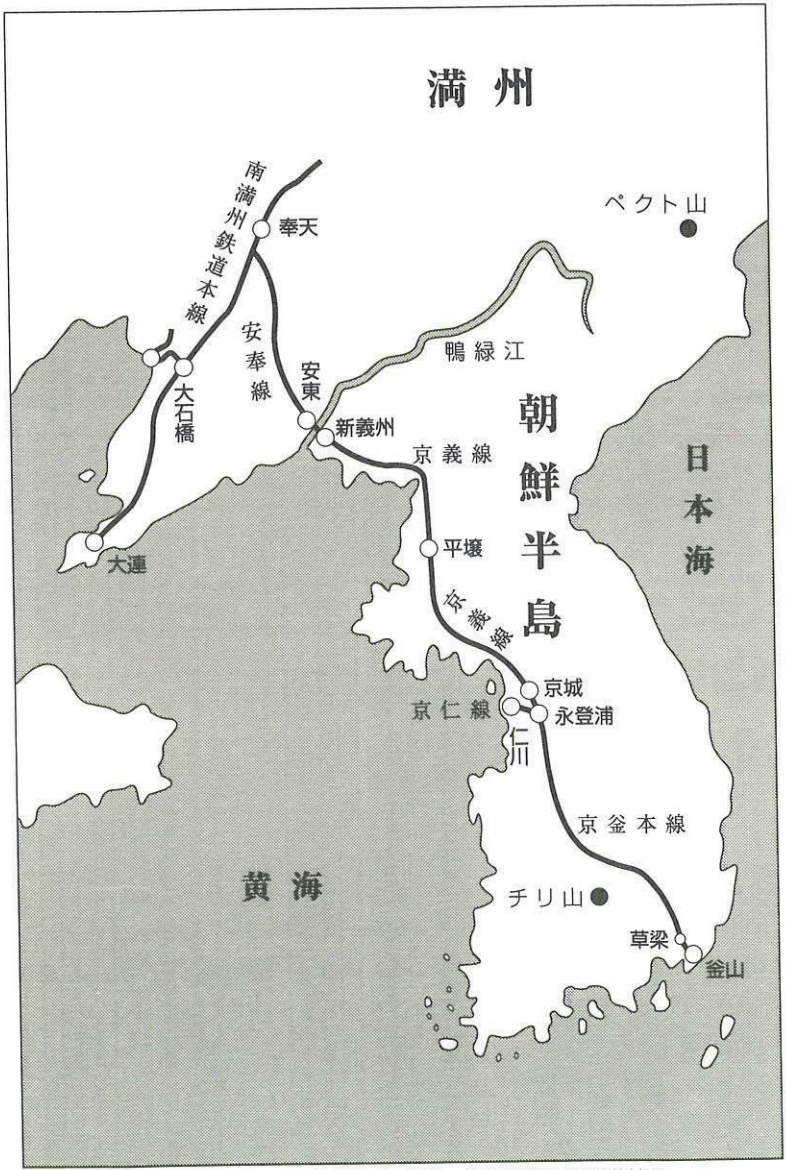
清国浙江省州を起点とし、厳州・衛州・常山を経て九江に達するこの鉄道は、経由地点である南昌で北は京漢鉄道、南は粤漢鉄道に連絡する主要路線であった。沿道には広大で肥沃な耕地が多数存在し、各種の穀物・綿花・生糸・絹織物などの生産が盛んで、石炭などの地下資源も豊富に産出されている。さらに、物価や賃金が日本に比べて低廉なため、工業生産にも適していた。このため、綱は鉄道さえできれば、さまざまな分野で大きな利益が見込めると判断したのである。

綱は知人のアドバイスを受け、日本からの借款で資本を用意し清国人に会社を組織させ、清国政府に対して鉄道敷設の特許を申請する計画を立てる。そして、事業開始に向けて特許請求運動を展開するのだが、事は思うように運ばなかった。

当時の桂首相に援助を求めたところ、杭九鉄道の重要性は認めるとしながらも、首相は「予定路線が同盟国であるイギリスの勢力範囲にあるというので、国内の反対が強く、やむを得ず計画を断念したのだ」と答えるのみ。綱は再三説得を試みたが、「同盟国イギリスの不興を買うような真似はできない」と遮られ、政府の援助を取り付けることはできなかった。

綱はその後も機会あるごとに計画の実現に向けて努力したが、今度ばかりは無駄骨だった。後年、志を同じくする清国人とめぐり会い、彼の協力を得て、何とか清国政府に特許を願い出るところまでこぎつけたものの結局、却下されてしまう。

ねばり強い綱も、ことここに至っては事業を断念せざるを得ない。綱が自ら認めているように、明治四十四年八月、杭九鉄道敷設計画は完全に失敗に終わったのである。



竹内綱の手掛けたあるいは構想した朝鮮・清国満州の鉄道線路
（昭和２年発行鉄道旅行図より）

第八章　実業家として

綱が働き盛りの時期を政治家として過ごしたことは先にも述べたが、もちろん政治一辺倒の生活だったわけではなく、事業にも目を向けていた。それも、朝鮮半島における鉄道敷設事業のように政治色の濃いものから、国内各地で手がけていた鉱山業など、より利潤追求の意味合いの強いものまで幅広い。事業の核となっていたのは竹内鉱業であった。

竹内鉱業の経営はもっぱら明太郎任せだったが、重要事項の決定にはやはり社長である綱の承認が必要で、そのためにも日頃から指揮監督を怠れなかったのである。何より綱自身、炭坑を始めとする鉱山業に依然興味を引かれていたようだ。

高島炭坑での経験で事業の旨味を知った綱は、再び炭坑経営に意欲を示す。政治活動の傍ら、高島炭坑の技師だった高取伊好という人物に有望な石炭坑を見つけるように依頼し、彼の選定で佐賀県松浦郡芳谷に狙いを定めた。その場所が海軍の軍用地だったため、九十余万坪の坑区の払い下げを政府に対して出願。希望通り許可を得て、明治十八年六月十六日、東京を発って唐津へ向かった。同月二十六日、芳谷入りした綱は炭坑をくまなく踏査し、芳谷が高島に劣らず有望なことを確信する。炭層は三尺・二尺・五尺の三層からなる。炭質は九州一上等で、塊炭七分に対して粉炭三分の割合であった。

調査結果に満足し、綱は高取と諸施設・設備の計画について審査決定を行い、新鉱の開削にとりかかったのち、ひとまず帰京することにした。そして、翌年一月には明太郎を唐津へ出張させ、以後、芳谷炭坑事業の管理運営の大半を委任している。

その後、芳谷炭坑は期待に違わず順調に業績を伸ばし、芳谷炭坑合資会社として資本金十二万円で新たなスタートを切る。出資者は高取の他、外村宗次郎・魚澄惣左衛門の三人であった。ここでも明太郎はいかんなくその手腕を発揮し、鉱業発展に大いに貢献する。鉱区は次第に拡張され、四百万坪以上に達し、三カ所で斜坑を開くまでに至った。明太郎は、事業の拡大に合わせて炭鉱内の設備や周辺の施設整備にも心を配った。鉱業用機械の製造所を設け、塊炭と粉炭を選別する機械も導入した他、会社単独で芳谷・山本間に一里半に及ぶ運搬用の鉄道を敷設している。また、出炭量の増加を図るため、イギリスから技師を呼び寄せて旧来の採掘方法を改めるなど、鉱業の近代化にも一役買った。

こうして芳谷炭坑の坑内外の設備はすべて整えられていった。明太郎の進取の気風あふれる経営によって芳谷炭坑は大成功を収め、明治三十年以降には毎年二十万トン以上の石炭を産出、その利益も数十万円に達するようになったのである。

芳谷炭坑の経営が順調に進んだことで、綱は新たな炭鉱の経営に乗り出す。明治二十六年二月、福島県にある白水炭鉱を手に入れ、白水炭鉱株式会社を創立したのである。これについては史料がないため詳細はまったく不明だが、明治二十九年七月に改正された定款には「本社は福島県磐城国白水石炭を採掘し及び之れを販売することを目的とし（後略）」と記されている。鉱区は、明治二十七年八月六日に許

可された内郷村大字白水字湯ノ嶽・川平（二二、四〇九坪）と、同年九月二十日許可の字川平（一四、六六坪）、字入山・川平（六二、二七四坪）の三カ所であった。

また、きちんとした記録がないため詳細は不明だが、明治二十六年九月二十三日付の『朝野』新聞に「大倉喜八郎ら、民営製鉄所設立を発表」と題する記事が掲載されており、その発起人の一人に、自由新聞の報道として竹内綱の名が挙げられている。参考までに記事を紹介しよう。

「*製鉄問題は久しく世間に囂々（ごうごう）として、その設立を主張するものまた数派に分かれ、互いに相排斥して、容易にその相談の纏まるべき模様もなかりしが、小室信夫氏の一派と雨宮敬次郎氏の一派とは、未だ実際設立談の熟せざるに先だち、大倉喜八郎氏の一派は突然民説製鋼所設立の義を決し、昨日自由党の機関新聞を以って、これを天下に公けにせり。その発起人は、自由新聞の記する所によれば、大倉喜八郎、梅浦精一、大江卓、竹内綱、岡野知荘等十数氏なりと云えり。資本金は六百万円にして、日本製鉄株式会社と称する由」

さらに明治三十五年には、遊泉寺銅山を外村鉱業所から買収している。外村は先に述べたように、芳谷炭鉱の共同出資者の一人である。この銅山についても買収の経緯や規模など詳細ははっきりしていないが、明太郎の日誌を見るかぎり、芳谷炭坑同様、明太郎が実質上の経営者であり、白水炭鉱も実際の管理運営は明太郎がとりしきっていたものと思われる。

これらの事業は、明治二十七年に竹内鉱業株式会社（本社・東京）が創立されてからは、その傘下に組み入れられた。竹内鉱業は、綱の多彩な経験や人脈と明太郎の経営手腕とがうまく合致し、時流にも乗っ

て大きく成長する。そして、芳谷だけでなく茨城無煙炭鉱、大夕張炭鉱、橋立金山などの経営も手がけ、巨万の富を築いていくのである。

北海道探検と清国漫遊

名のみの社長とはいえ、綱が鉱山事業に対して意欲を失っていたわけではない。おもしろそうな話が持ち込まれると、時間を都合して自ら調査に出かけたりもしている。たとえば、明治十九年八月の北海道旅行などがそれである。

綱の従兄で当時、北海道長官を務めていた岩村通俊の招きで北海道へ渡った綱は、その機会を利用して鳥嶋羅臼山の硫黄坑へ出かけた。知人の柳田友郷・長谷川吉郎次から視察を依頼されたためだが、両人によれば同坑はかなり有望とのことで、その結果が良好なら、柳田たちが坑主と結成する予定の営業組合に加わらないかとの提案も持ちかけられている。

綱はかねてから硫黄坑経営に興味を抱いていたらしく、これを快く承諾し八月末に北海道へ赴いた。視察には坑主の平山進なる人物も同行。北海道入りした一行は、途中岩村と合流して函館・十勝・根室を遊覧。続いて鳥嶋へと向かい、九月半ばに硫黄坑を訪れた。現地には三井物産の砂利硫黄坑事務所があり、綱たちはそこに二日ほど滞在して視察調査にあたった。

問題の硫黄坑は、傾斜四十度以上の険しい山道を一里ばかり登った所にあった。満山に硫黄の岩盤が

露出し、至る所で露天掘りが行われている。一目見ただけで埋蔵量の豊富さがわかる、壮大な眺めであった。想像以上の手応えを得た綱は帰路につき、アイヌの村を経て根室に到着したところで、かねて柳田に依頼されていた通り、平山と羅臼硫黄坑組合営業条約を締結した。

平山と別れ、十月下旬に函館へと戻った綱のもとへ、富谷彦五郎という人物が柳田の紹介状を持って現れた。富谷は、自分が所有する秋田県角館の硫黄坑を視察してほしいという。綱は、秋田地方を巡覧するよい機会だと考え、これを了承し、富谷と共に角館へと向かった。

大曲から十一里ほど離れた所にあるこの硫黄坑は、それより数年前に開坑されたものだった。四、五ヶ所に一尺ばかりの層が見えたが、坑量が非常に貧弱で、利益の面で見込み薄なことが見て取れた。とにもかくにも、それで視察は一応終わり、責任を果たした綱は天童・山形・福島を経て、東京へと戻っていった。

ちなみに、最初に訪れた羅臼山の硫黄坑に関する営業組合条約は、その後、平山と柳田との間に紛議が生じ、結局、破約となってしまったという。

硫黄坑経営の夢は実現しなかったが、芳谷炭坑はその間も順調に業績を上げていた。その関係で、綱は、今度は清へ赴くことになる。渡清の最大の目的は、商人陳輝堂との間で芳谷産の石炭を毎月二千五百トンずつ売買する契約を交わすためであり、同時にイギリス人ダラスとも石炭毎月二千トンの売買契約を結ぶ予定だった。

明治二十五年十月、綱は通訳を伴い船で上海へと渡った。現地の領事林権助や三井物産上海支店長小

室信吉らと交遊し上海の市内各所を遊覧した綱は、二件の販売条約の締結を終えると、香港へと向かう。香港では羽電其に迎えられ、同氏と芳谷石炭の香港における一手販売を許可する条約を交わした。仕事を終えた後の綱は、ここでも市内の遊覧や演劇鑑賞を楽しんでいる。

三つの大きな目的を完了した綱は、翌十一月中旬に帰国。唐津での事業の盛況ぶりを視察した後、大きな成果を手に東京へ帰着した。

フィリピン渡航計画

ところで、波瀾万丈な綱の生涯のうちでも最も風変わりな出来事は、フィリピンへの渡航計画ではないだろうか。これは、好奇心旺盛で多少向こう見ずなところのある、いかにも綱らしいエピソードだ。

明治三十五年四月、綱は岩本千綱という元陸軍大尉の訪問を受ける。岩本は陸軍を辞したあと南洋諸島を遊覧して数年を過ごした人物で、その間のよもやま話を綱に語って聞かせた。その際、当時、スペインからアメリカへ売却されたばかりの植民地、フィリピンのことが話題に上った。

岩本はかの地で、独立運動の指導者であるアギナルド将軍と親交を結び、彼から「日本の壮士を募ってアメリカの征討軍に対抗するための部隊を編成してほしい」としきりに頼まれたという。

この話に、綱は持ち前の好奇心をいたく刺激されたらしい。「当然、そんな頼みには応じられなかったが、誠に同情に堪えなかった」と語る岩本に対して、「アギナルド氏が同情すべき立場にあるのは確かだ

が、いつまでもアメリカ軍に抵抗すべきではない。フィリピンに相応の自治制度を施行することを条件に降伏すれば、民主主義の国アメリカなら必ずこれを受け入れてくれるだろう。そうするように岩本さん、あなたからアギナルド氏に忠告されてはいかがだろう」と勧めた。岩本もこれに賛成し、「アギナルドには書簡で忠告しよう」と言い、その日は別れた。

後日、再び訪ねてきた岩本は、アギナルドからの返書を綱に見せて、こう語った。

「アギナルドは私の忠告を容れて自治制度の施行を条件に降伏を決意したが、降伏しようにもつてがなく、困っているらしい。私と君にフィリピンへ来て、フィリピン総督を説得してくれないかといってきている。どうだろう、一緒に行ってくれないか」

綱に否やがあろう筈がない。さっそく岩本と共にフィリピンへ赴く決意をし、そのための準備にとりかかった。綱はまず知人である青木外相を訪ねてこの件をつぶさに語り、自らのフィリピン行きについて意見を求めた。すると、青木外相は「個人としての行動であれば、私も個人の立場で賛成しよう」と答えた。そこで綱は青木と相談し、日本駐在のアメリカ公使に別の知人を介してこの件を持ちかけてみることにした。公使の返事は「フィリピン総督に面会して、じかにあなたの意見を述べなさい」というもので、綱のためにわざわざ紹介状を書いてくれた。これに気をよくした綱は勇んでフィリピン行きの支度を整え、渡航の日を待つばかりとなった。

ところが、出発を二日後に控えて、綱は青木から思いがけない話を聞かされる。首相の山縣が綱のフィリピン行きに異議を唱えているというのだ。その日、山縣にこの件を報告した青木は大反対を受け、「ア

メリカが自治制度施行を条件に、反乱軍の首謀者であるアギナルドの降伏を認めることなどあり得ない。また、日本人である竹内がそんなことを主張してアギナルドを助けるような行動に出れば、わが国とアメリカとの間にどのような外交上の紛議を生じるかもしれない。断じてフィリピン行きを許可してはならない」と厳しく命じられたという。

さらに、青木は「自分は『竹内のフィリピン行きは個人的な行動であり、政府の関知するところではありません。それにアメリカは反乱の長期化に堪えられないでしょう。アメリカ政府が、反乱が一日も早く治まることを望んでいるのは、公使が竹内に対して紹介状を交付したことでも明らかであり、外交上の紛議を生じる恐れなどありません』と主張して説得を試みたが、首相は頑として承知しなかった。この上、議論を続ければ、私が辞職することになる。辞職はいっこうに構わないのだが、どのみち君のフィリピン行きは許可されないだろう。誠に遺憾だが、今回の渡航は断念せざるを得ないのではないか」とも語った。

こうなっては、いかに綱といえども打つ手がない。結局、フィリピン渡航計画を中止し、アギナルドへの協力も断念したのだった。

アギナルドはその後、*アメリカ軍の捕虜となり、独立闘争自体も挫折に終わっている。もしもこの時、綱たちのフィリピン行きが実現していれば、フィリピンのその後の歴史に多少なりとも影響を与えていたかもしれない。

海外遊覧と綱の再々婚

政治家として、実業家として多忙な日々を送った綱だが、たまには仕事を離れてのんびりと時を過ごすこともあった。もっとも、それは政治や実業の世界からある程度遠去かっていた時期、つまりかなり高齢になってからのこと。一度目は明治四十三年に清国北部を遊覧した時で、二度目はその翌年、朝鮮の金剛山を訪れた時である。

いずれも目的は純粋な観光で、名所旧跡を訪ねては歴史の重みに感嘆し、先人たちの偉大な業績を讃えたり、あるいは知人たちと交遊を温め、在留邦人と新たな親交を結ぶなどして大いに見聞を広めたようだ。ちなみに金剛山遊覧は、明太郎が芳谷炭鉱を三菱会社に譲渡した直後のことだった。このため、綱は明太郎の求めに応じて、朝鮮へ渡る前に唐津を訪れ、長年、炭鉱に助力してくれた関係者や元社員を招いて謝礼の宴を催している。

また、約二ヶ月かけて北清を漫遊した際には帰国後、各方面から感想を求められたため、旅行中に清国と清の人々に対して抱いた思いなどを「対支感想談」としてまとめてもいる。論説の対象となった分野は清国人の国民性や産業の将来性、資源の豊富さなど多岐に渡る。その中で、綱が明らかにした清という国についての洞察はなかなかに鋭い。特に、商業の分野で卓越した手腕を示す清国人の存在は、日本にとって今後大きな脅威となることを看破し、「我が国民は清国についてのさまざまな事項を審査し

て、今後の方策を誤ることなく立てなければならない。それが目下の急務中の急務である」と述べて感想談を結んでいる。彼が大陸及び朝鮮半島をどのように考えていたのかがよくわかる、興味深い文章である。

とはいえ、旅の力点が遊覧に置かれていたことに違いはない。

この頃の綱は表立って政界や実業界に顔を出すことが少なくなっており、明太郎に跡を譲って、半ば隠居同様の生活を送っていたと思われる。その分、旅行も気楽に楽しみたかったのだろう。朝鮮遊覧には妻を同行している。

明治三十六年に綱は二人目の妻を病気で亡くし、さらに自らも病気を得て入院、手術を受けた。明太郎の日誌には同年十月二十二日、二十三日付で「父君病気のこと昨日委細郵便出した安心すべき旨電報あり」「父君入院手術受けたるも少しも痛みなく手術後平常通りにて一両日退院出来安心すべき旨電報来り安心せり」とあり、病気も手術も大したことはなかったようだ。同じく日誌には、同年十一月二十三日付で「大人（綱のこと）七時三十分列車にて、韓国へ向け出発につき新橋停車場へ至る」とも記されているので、健康はすぐに回復できたと思われる。

この頃、綱はとっくに還暦を過ぎていたが退院後、ただちに現役に復帰し、朝鮮半島での鉄道敷設事業に関連して精力的に働いた。老いたりといえども、意気なお盛んだったのである。

そこで、亡き妻瀧子の喪が明けた翌年十一月には、身の回りの世話をしたり、話し相手を務める人間が必要だというので、綱に後妻を迎える話が持ち上がる。相手は毛受甲子（きね）という女性であった。縁談を

持ち込んだのは、綱の妹（実妹清か）と次女菊らしい。明太郎をはじめ子供たちの反対も特になく、話はとんとん拍子に進み、同年十二月十五日、めでたく挙式となった。

綱が明治四十四年に金剛山遊覧へ同伴したのは、この甲子夫人である。ちなみに綱は再婚以後、私用はもとより仕事で唐津や朝鮮などへ出かける際にも、たびたび夫人を同行させている。仲むつまじい夫妻の様子が目に浮かぶ。綱の家庭人としての一面を見る思いだ。

終章　教育振興の夢

綱の生涯もそろそろ最晩年へと近づいてきた。激動の人生にふさわしい結末とするために、本来なら、ここで大きく紙面を割き、彼の業績のうちで最も意義深く偉大なものの一つ、教育への貢献、すなわち高知工業学校の創立について触れるべきだろう。だが敢えて、そうしないでおく。

理由は二つある。一つは、教育に対する綱の理想や信念が明太郎のそれと一致していること。どちらも明太郎の生き方から鮮明に浮かび上がってくるので、第二部で彼の生涯をたどりながら、じかに感じとっていただきたいと思う。

二つ目は(こちらが主な理由なのだが)、事実上の学校創立者が綱ではなく明太郎であることだ。高知工業の創立は、綱の古希を記念する意味で、明太郎が長年のアイデアを実現したもの。関係各方面に働きかけたり、資金提供から教師の確保に至るまで準備を整えたのは明太郎自身で、すべてができあがったところへ綱の名を冠したのである。

記念すべき開校式には、あいにく明太郎が視察で海外へ出張中だったため、綱だけが創立者として出席し、壇上で学校設立の主旨を述べて居並ぶ学生や教師を激励した。だが、それも綱及び明太郎が理想とするところを明太郎に代わって語ったものだった。

もっとも、綱が教育に関心を持ち、教育振興に尽くしたことは事実である。明太郎が手がけた学校創立とはいえ、それを承認したのは綱自身の意志だったからだ。

長い間炭鉱経営に携わり、工業振興による富国を志してきた綱は、当時の日本の教育水準がどのようなものか、それが列強との経済競争にどのような影響を与えているのか、熟知していた。自身も幾度となく海外へ出かけている上に、明太郎が海外視察から戻るたびにさまざまな見聞を語って聞かせた。だからこそ、わが国の工業レベルを引き上げるには、まず教育環境の充実を図るべきだと考えたに違いない。しかも、故郷高知の状況は、工業・教育共に、日本全国に比べて著しく後れていた。

功なり名を遂げた綱が、まず、これを何とかしなければならないと考えたとしても不思議はない。明太郎が「高知に工業学校を設立しようと思う」と相談してきた時、綱は故郷への恩返しという気持ちを込めて、これを快く認め、息子の後押しをしたのではないだろうか。

明太郎は高知工業設立を決意したのと同じ頃、早稲田大学に理工科を新設するため、人材や資金面で多大な援助を行ったが、その際にも綱はこれに賛同している。のみならず、大隈重信ら大学関係者と明太郎の間に立って、事業がうまく運ぶように仲立ちをしていたようだ。

また、高知工業以外の学校にも、綱の関与をうかがわせる証拠が残っていた。それも、高知とは一見、縁もゆかりもなさそうな秋田県でのことだった。

明治四十三年四月一日、秋田鉱山専門学校開設の詔勅が下される。設立出願者は当時の秋田県知事下岡忠治のほか、藤田伝三郎・岩崎久弥・吉河虎之助の三名。藤田らはいずれも富豪の実業家で、当時、秋

田県内の主要鉱山をほぼ独占しており、「御三家」と呼ばれていたという。学校の建築設備資金三十五万円を寄付したのも彼らであった。

これに先立って、明治四十一年四月七日には、当時の文部大臣牧野伸顕の名で寄付出願が許可されている。ちなみに、牧野文相は吉田茂の妻雪子の実父で、綱とは姻戚関係にあった。

もちろん、それが理由とは思えないのだが、綱はこの秋田鉱山専門学校の創立に関わっていたらしい。「らしい」というのは、この場合も、関係が生じた経緯が全く不明だからだ。今回の伝記制作に際して学校側に協力をお願いしたところ、快く応じていただけたのだが、届いた資料に綱の名前は見あたらない。学校開設の詔勅を掲載した当時の新聞記事も、手がかりにはならなかった。明治時代の人名録などを見ると、綱の業績として京釜鉄道敷設や高知工業設立などと並んで、秋田鉱山専門学校の創立があげられているので、かろうじて関係があったことがわかる程度だ。

ただ、手広く鉱山を経営していた藤田たちと綱とは、いわば同業者である。仕事を通じて、お互いに面識があったことは充分考えられる。御三家の全員か、もしくはそのうちの誰かと親交があり、その縁で学校創立に携わることになったのではないだろうか。

残念ながら、これ以上のことは現状ではわからない。今後、何らかの新資料が発見されることを期待したい。

政治と事業に明け暮れた綱の一生。その大部分は、日本国内はもとより朝鮮半島から中国大陸に至る

まで、東アジアを文字通り縦横無尽に駆けめぐった日々だった。祖国を一流の近代国家にするため日本を政治的・経済的にレベルアップさせようと奮闘し、また、国民の教育水準をも高めようと心を砕いたのである。

だが、くわしいことがわかっているのは明治時代のみ。自叙伝が明治四十四年の朝鮮旅行を最後に終わっているため、それ以後のことは全くといっていいほどわかっていない。

明太郎の日誌を見ても同様である。京釜鉄道が完成した明治三十七年頃には、まだ綱に関する記述がかなりあり、鉱山視察などで国内外を忙しく飛び回っていた様子がうかがえるが、それも明治四十一年まで。あとは、あまり登場しなくなる。おそらく七十歳を過ぎたあたりから、第一線を退いて隠居生活にでも入ったのだろう。

ともあれ、こうしたわけで、人生の総決算期を迎えた綱が何を思い何をなしたのか、あるいは何をしようとしていたのかを知る術は今のところない。したがって、その晩年について、あれこれ推測することは避けたい。むしろ彼のあとを継いだ明太郎の足跡をたどる方が、綱の生涯を締めくくるのにふさわしいのではないだろうか。明太郎は後継者であると同時に、綱にとって政治と実業の分野であるいは工業教育についても最高のパートナーであり、よき理解者であったからだ。

巨星墜つ

政治家、実業家として激動の時代を生き抜いた竹内綱。彼の生涯は、鎖国を解き近代国家への道を進み始めた日本の発展と、歩調を一にしていた。彼はまさしく、明治という時代を体現した人物の一人だったのである。



東京・谷中霊園の竹内綱の墓

公には失敗も数多いが、成功もまた多かった。幾たびも訪れた試練を乗り越え、あまたの困難に打ち勝って壮大な事業を成し遂げ、各方面に確固たる足跡を記している。高知工業学校設立という、現在、そして未来に続く輝かしい実績もある。

私生活の面では二人の妻に先立たれ、十四人の子供のうち三人（次男欽次郎・五女トヨ・六男健）が早

世するという不幸に見舞われたが、他の子供たちはそれぞれに家庭を持ち、自分たちなりの生活を築いていった。特に明太郎と茂の活躍は、綱に優るとも劣らず華々しく、また意義深いものとなった。

偉大な業績を残し、あまつさえ公私共に立派な後継者に恵まれた綱は、非常に幸運だったといえるだろう。

晩年のことが伝わっていないのは、それだけ穏やかで安楽な日々を送っていたからだと思いたい。

そして、大正十一年一月。以下に抜粋した明太郎の日誌が、綱の生前最後の記録となった。

「一月七日　夜十一時過ぎ大人（綱のこと）病気の趣電報、五時二十分発信。大人危篤の電報十一時過ぎ発信三時十五分着」

「一月九日　午前三時大人逝去亀井同伴十一時過ぎ帰宅」

「一月十一日　九時過ぎ本家に至り十時三十分より挙式、十一時三十分終了、十二時二十五分出棺、一時十五分より挙式、二時十五分前終了、二時より三時迄告別式執行式後直ちに埋葬に移り帰途本家に立寄り五時前帰宅（後略）」

大正十一年一月九日、明治の英傑竹内綱は病気のため、東京麻布の自宅で亡くなる。享年、八十二歳であった。

竹内綱ゆかりの人物

岩村　通俊

天保十一年六月十日生まれ、大正四年二月二十日没。岩村三兄弟の長男で、父親は綱の叔父であり、兵法の師でもあった岩村英俊。幼少期に酒井三治に師事し、長じて領主伊賀氏理の側用役、目付役などを務めた。明治維新後は新政府に登用され、判事や裁判所長、県令、北海道長官などを歴任。官僚として数々の業績を残したほか、農商務大臣や貴族院議員の経験も持つ。明治二十五年、勲功により男爵に叙せられた。

林　有造

天保十三年八月十七日生まれ、大正十年十二月二十九日没。三兄弟の次男で、生涯を通じて綱と最も関係が深かった。幼くして同郷の士族、林茂平次の養子となる。維新後、高知県参事として手腕を発揮し、外務省にも出仕。その後、征韓論に破れて辞職し片岡健吉らと共に立志社を創立するが、西南戦争に際して政府転覆を謀ったとして投獄された。板垣退助らと愛国公党を設立し、自由党の基礎を築く。衆議院議員を八期務めたほか、逓信大臣、農商務大臣を歴任。政界引退後は宿毛に帰り、郷土の発展に尽くした。

岩村　高俊

弘化二年生まれ、明治三十九年一月二日没。三兄弟の末弟。戊辰戦争で勲功を立てたのち、明治政府に登用され、佐賀の乱の平定や台湾事件での交渉に活躍。各県の県令、知事も歴任した。貴族院議員に勅選され、明治三十一年には男爵を授けられた。

大江　卓

弘化四年九月二十五日生まれ、大正十年九月十二日没。陸援隊に参加し、高野山の義挙に加わる。のちに明治政府に登用され、各県の県令、参事を歴任。その間、ペルーのマリヤルーズ号事件で奴隷解放を主張して英断を下し、国内での芸娼解放令公布のきっかけをつくるなど、被差別民、部落解放運動に関わっていく。自由民権運動にも参加し、立憲自由党の組織、自由党の幹事などを経て衆議院議員となる。政界引退後は実業界で活躍し、綱と共に京釜鉄道建設に尽力する。晩年は融和事業に没頭し、僧籍に入って被差別部落の改善融和に努めた。

小野　梓

嘉永五年二月二十日生まれ、明治十九年一月十一日没。幼少期は酒井三治に師事。昌平黌への入学、上海、アメリカ、イギリスへの留学経験も持つ。帰国後、司法官僚を歴任するが辞職し、大隈重信と共

に立憲改進党の結成や、早稲田大学の前身である東京専門学校の創立などに貢献した。のちに教育水準の向上と良書普及を志して東洋館書店を開業。自ら著した「国憲汎論」などの法律書を多数出版したが、三十五歳の若さで病没した。

小野　義真（立田強一郎）

天保十年四月八日生まれ、明治三十八年五月八日没。緒方洪庵に師事し、伊賀家の文館句読役などを務めたのち、明治政府に出仕。土木頭として大阪港築港や淀川改修に敏腕をふるったが、実業界へ転身。三菱会社の大番頭として岩崎弥太郎を補佐し、汽船による海上輸送や鉄道事業、大規模農場経営（小岩井農場）などを多数手がけ、成功させた。日本を代表する大企業、三菱の基礎を固めたのは彼だともいわれている。綱、明太郎親子との縁も深い。

林　包明

嘉永五年生まれ、大正九年六月十七日没。民権運動家。自由民権運動が高まった明治七年、同志と共に宿毛合立社を創設し、自由党結成にも参画。政治活動の傍ら、「社会哲学」など数々の著書の執筆と、後進の教育に力を注いだ。

樋口　真吉

綱の自叙伝には「長崎でオランダ兵法を学び、熊本藩で一刀流剣術を修め、兵法剣術とも当時の高知藩で一流の師範だった」と記されている。（高知県市民図書館編『高知県人名事典』）

谷時中（一五九九年～一六四九年）

名は素有、字は時中、通称大学、のちに三郎左衛門、号は鈍斉。朱子学の一派であった南学を儒学として独立させた南学中興の学者。弟子には野中兼山、山崎闇斎らがいる。官途につくことなく民間にあって学を講じた。

山崎闇斎（一六一八年～一六八二年）

儒者。通称嘉右衛門、名は嘉、闇斎は号である。もとは僧侶だったが、野中兼山の勧めで谷時中の門人となり還俗した。神儒を一致させた垂加神道を唱えたことで知られる。兼山の死後、南学者が弾圧され、闇斎も土佐を離れた（いわゆる南学四散）。これによって土佐では一時、南学は完全に衰退することとなった。

谷秦山（一六六三年～一七一八年）

儒者。通称丹三郎、本名重遠、秦山は号。野中兼山によって郷士に取り立てられ、のちに山崎闇斎に

学ぶ。天文、暦法に明るく史学研究でもその名を知られ、請われて土佐に戻り藩士に講義を行った。南学を再び土佐へ紹介した功労者であり、以後、南学は土佐藩の教学を独占するに至った。

大三輪長兵衛

天保六年、筑前箱崎に生まれる。大阪を拠点に活躍した商人で、立志社の設立に賛同するなど政治にも大きな関心を示した。林有造との親交が深く、その縁で綱とも知り合う。明治二十四年、朝鮮政府に招かれて財政改革に従事し、その経験を買われて綱と共に日清戦争開戦にまつわる大任を果たすことになった。明治三十一年、大阪第一区より衆議院議員に選出されている。

エミリオ・アギナルド

中国系の混血児で、ルソン島の地方官吏を務めるエリートだったが、スペインからの独立を目指す民族運動に身を投じ、ホセ・リサール、ボニファシオらと共に同志を指導した。一八九七年三月に革命政府を樹立して大統領に就任し、七月独立を宣言。同年末にはスペイン総督との間に協定を調印し一時休戦に応じるが、再び対立し、アメリカ軍の支援を得てスペインと交戦を繰り返した。その後、アメリカの裏切りにあい、フィリピンがスペインからアメリカに売却されたのちは対米独立運動を展開したが捕らえられ、アメリカへの忠誠を誓っている。

牧野伸顕

大久保利通の次男。文久元年（一八六一）十月二十二日生まれ。外交官を経て文部大臣、枢密院顧問、農商務大臣、外務大臣等を歴任。のちに男爵となる。二・二六事件の際に襲撃を受けたが、茂の娘で孫にあたる和子の機転に救われ、長寿を保った。

吉田雪子

牧野の長女。明治二十二年五月九日生まれ、昭和十六年十月四日死去。油絵と和歌をよくし、特に色彩感覚に優れていたという。吉田茂との結婚は明治四十二年のことだったが、茂はロンドン赴任を目前に病気治療のため自らの披露宴を欠席し、新郎の席に身代わりとして先年、綱から贈られた関の兼光を置いたというエピソードが残っている。入籍は同年三月十日。明太郎日記によると披露宴は前年十二月二十八日に行われている。

文中注釈

第一章

P2「生家の竹内家は…」　高知県立図書館報『とさみづき』平成七年三月三十日号

P2「安東家」　明治時代に「伊賀」と改姓。綱の自叙伝には当初から「伊賀」と記されているので、これ以降「伊賀」に統一して表記する。

なお、これ以降、特に注釈のないものについては、参考資料及び「」内の引用文の出典は『竹内綱自叙伝』である。

P4「嘉永の大地震」　この年の終わりに元号が改まったので、「安政の地震」ともいう。

P7　東京宿毛会発行『土佐すくも人第十二号』所載・橋田庫欣講演録「幡多人の反骨性」より引用。

P10『高知県の教育史』より引用。

P11　参考資料／『高知県の教育史』

P11『高知藩教育沿革取調』より引用。

第二章

P18「失敗の英雄」『世界之日本』第十八号所載論説・陸奥宗光著『後藤伯』より引用。

P27　橋田庫欣氏はオールコックではなく、公使パークスの通訳アーネスト・サトウだと指摘する。

P28　異国船の来港に関して伊賀家日記が残っているが、綱が宿毛に帰着したのが四日とあり、自叙伝とは異なる。

P29『幕末と宿毛』より引用。

P31『宿毛人物史』より引用。

第三章

P34「淀川・安治川の応急改修…」　改修に伴う本格的な測量と工事は、綱の辞任後に行われた。この工事は、そもそも慶應四年七月の大阪開港に合わせて安治川流域に外国人居留地や川口波止場、税関などを設け、貿易拠点としての整備を図ったことに始まる。だが、当時の淀川・安治川は川底が浅く、大型船が波止場まで入ることができなかったため、物資の輸送に重大な障害となっていた。また、政府による蔵屋敷貿易の禁止や廃藩置県などの政策が大阪の経済に打撃を与えたこともあって、各藩との貿易を期待していた外国商人は次第に神戸へと活動拠点を移していった。このことから考えると、洪水防止という河川改修の大きな目的は達成されたが、外国貿易の振興というもう一つの目的は果たしえなかったと見るのが妥当だろう。（参考図書／山川出版社発行『県史二七・大阪府の歴史』）

P38　ジャーディン・マジソン商会

横浜外人居留地の英国一番地に事務所があったことから、「英一番館」ともいう。

P41　大町桂月著『伯爵後藤象二郎』所載略年譜によると十一月二十九日となっている。
P42　出典及び引用はすべて毎日コミュニケーションズ発行『明治ニュース事典』。
P47、P48、P49　出典及び引用はすべて毎日コミュニケーションズ発行『明治ニュース事典』。

第四章
P51　参考資料／外崎光広著『土佐の自由民権運動』
P51　外崎光広著『土佐の自由民権運動』より引用。
P51　外崎光広著『土佐の自由民権運動』によれば、遠藤茂樹が自著『自由民権と現代』の中で、「その鋭い批判と確乎たる在野的気迫は、自由民権運動の全過程を通じて随一のものであった」と評したという。
P59　自叙伝には「禁獄に処せられた当日から同罪の者二十四人と二十畳敷の二間に同居となり、その中に陸奥や林、大江、岡本、岩神の五人の親友が含まれていた」とあり、獄中日記の記述と若干食い違いが見られる。「禁獄に処せられた当日」が仮禁獄所へ移された日を指しているのかどうかは不明だが、自叙伝にも、お互いに「昼夜対座し寝食を忘れて談笑したのは、実に限りなく愉快なことだった」というくだりがあるので、おそらく同じ日のことだと思われる。いずれかが綱の記憶違いであろう。
P59　紀尾井坂の変
島田の他、長連豪・杉本乙菊・脇田功一・杉村文一、島根県士族浅井寿馬の計六名が、大久保を国政を私

した姦夫と断じて暗殺を決行した。彼らは凶行に先立ち、自由党系の民権派新聞『朝野新聞』上で斬姦状を公表している。西郷軍を途中で脱した、はね上がり分子ともいう。

P59　竹橋騒動（竹橋事件ともいう）

兵営のあった場所からこう呼ばれる。日本軍隊史上最初にして最大規模のものだったが、計画が政府に事前に察知されていたため、翌二十四日未明にはすべて鎮圧され、数名の死者を出して幕を閉じた。暴動の理由は今日に至るまで特定されていないが、一説によれば、「西南戦争の賞典がなかったこと、陸軍省の経費削減による減給・官給品の減省などに対する不満」が原因という。他に、逮捕された兵卒の口述書に基づき、「当時の地租改正反対農民一揆や自由民権運動の影響を強く受けていたのではなかったか」とする説も発表されている。（参考資料／自由国民社発行『現代用語の基礎知識八〇年版付録・読める年表』）

第五章

P64　柴田敏夫『吉田茂氏の系譜』・朝日新聞社編『写真集吉田茂』一二〇ページより引用。

P65　猪木正道著・評伝『吉田茂』三一ページより引用。

P66　保安条例の発布で綱が東京からの退去を余儀なくされたことについて、形式上、条例発布を命じた張本人である当時の三嶋警視総監を、茂の母が「一生恨む」といったそうだと記している。

P67　猪木正道著・評伝『吉田茂』三一ページより引用。

P67　柴田敏夫氏の推算によると、昭和四十二年当時の時価で二十億円相当。
P67　猪木正道著・評伝『吉田茂』三二ページより引用。

第六章

P73　外崎光広著『高知レポート四・土佐の自由民権運動』高知市文化振興事業団刊より引用。
P74　この時の板垣や綱の行動（板垣が自ら賊から短刀を奪い取ったという説もある）、「板垣死すとも…」の言葉をめぐっては諸説が伝わっているが、ここでは割愛する。なお、詳細は『自由党史』、土佐史談会発行『土佐史談一六一号・板垣退助遭難一〇〇年特集』、外崎光広著『土佐の自由民権運動』などに詳しい。
P78『現代用語の基礎知識八〇年版付録・読める年表』より引用。
P78「退去者で横浜は大混乱」と題する記事に詳しい。当該資料は毎日コミュニケーションズ発行『明治ニュース事典』に所載されている。
P86　明治二十五年二月十九日付の朝野新聞は「落選した名士たち」と題する記事の中で、自由党外から衆議院議員選挙に出馬した綱が落選したことを報じている。これに対して、綱は自叙伝の中で「その年の衆議院議員選挙の候補として再度推薦されたが固辞した。政党の枠外から働きかけて、政府と自由党とを提携させようと考えたためである」と記している。（参考資料／毎日コミュニケーションズ発行『明治ニュース事典』）

第七章

P94　京釜・京仁両鉄道に関する暫定条約の内容は次の通り。
(1)朝鮮内政改革の施行、(2)漢城・釜山、漢城・仁川間鉄道の早期敷設、(3)漢城・釜山、漢城・仁川間の軍用電信（開戦前に無断敷設）の条約化、(4)全羅道に貿易港開港、(5)王宮占領事件の不問、(6)朝鮮『独立自主』のための日朝委員による合同会議、(7)王宮警備の日本軍の撤退（海野福寿著『韓国併合』岩波新書より引用）

P105　日本新聞は発起人総会の開催を同年二月一日、日本橋倶楽部においてと報じている。（参考資料／毎日コミュニケーションズ発行『明治ニュース事典』）

P106　毎日コミュニケーションズ発行『明治ニュース事典』より引用。

P109　参考資料／毎日コミュニケーションズ発行『明治ニュース事典』

P110　参考資料／筑摩書房発行『年表日本歴史　第六巻　明治・大正・昭和』

P110　時事通信・明治三十八年九月十一日付（毎日コミュニケーションズ発行『明治ニュース事典』）

P115　京仁鉄道譲渡条約の要項は次の通り。
一、モールスは京仁鉄道の敷設並びに運輸営業設備を完成し、特許権並びに鉄道に属する全財産を京仁鉄道組合に譲り渡すこと。
一、譲渡の総額を金二百万円とすること。
一、京仁鉄道組合は条約締結と同時にモールスに譲渡総額のうち二十万円を前渡し金として寄託し、

残りは工事の進行状況に応じて交付すること。

一、モールスは条約を完全に履行できない場合は、前渡し寄託金の倍額を組合に賠償すること。

P116　参考資料及び引用／毎日コミュニケーションズ発行『明治ニュース事典』

P117　明治三十三年十一月十三日付の中外商業に「全線開通の開業式」と題する記事が掲載されている。それによると、全線の開通式が行われたのは前日十二日のこと。京城・仁川間在住者及び関係者が国内外から五百名以上も招かれ、西大門において盛大に開業を祝ったという。（参考資料／毎日コミュニケーションズ発行『明治ニュース事典』）

P120　同年十二月二十八日には京釜鉄道株式会社に関する緊急勅令が公布され、即日施行されている。（参考資料／時事通信「京釜鉄道会社に関する緊急勅令」明治三十六年十二月二十九日付・毎日コミュニケーションズ発行『明治ニュース事典』）

P120　電報「林公使、京義鉄道建設を通告」の記事・明治三十七年三月四日付（毎日コミュニケーション『明治ニュース事典』）

P122『工学博士・白石直治伝』二二九ページより引用。

第八章

P127　農商務省鉱山局「明治二十八年調特許採掘一覧」より引用。

P128　毎日コミュニケーションズ『明治ニュース事典』より引用。

P133　アメリカ軍によるアギナルドの逮捕は明治三十四年（一九〇一）三月二十三日のことで、それ以降の動向は関連書などには記されていない。綱の自叙伝にある記述では、明治三十五年五月にアギナルドから岩本に対して協力要請の手紙が届いたとされており、現状で判明しているかぎりの史実とは異なる。年代等の食い違いは、おそらく綱の記憶違いによるものと思われる。

第二部　竹内明太郎

第一章　政治から実業の世界へ

竹内明太郎は万延元年（一八六〇年）二月二十八日、竹内綱と妻、春の長男として当時の幡多郡宿毛村土居下（現在の宿毛市中央二丁目）で生まれた。

幕末期で、日本国中が鎖国か開国かで揺れ動いていた。各藩が佐幕か尊皇かで議論を戦わせる激動の時代であった。明太郎が生まれる七年前の嘉永六年（一八五三年）には、アメリカの東インド艦隊司令官、ペリーが神奈川県の浦賀に来航し、幕府に開国を迫った。生まれた翌月の三月三日には、「桜田門外の変」が起きている。

明太郎は父、綱が土佐藩宿毛領主の伊賀家の重臣だったことから、慶応三年、七歳の時に郷学校の日新館（所在地は現在の宿毛小学校）に入った。

日新館は伊賀家の学問所の講授館として天保年間に発足したといわれる。文久三年（一八六三年）に文館と改められ、さらに慶応三年（一八六七年）二月、文館が廃止された後、日新館が新設された。ここには、文館時代に助教授だった酒井三治（南嶺）が校長格で残っていた。酒井は、江戸後期の儒学者で『日本外史』を著し、後の尊皇攘夷派に大きな精神的影響を与えた頼山陽の高弟の一人。家臣の学業奨励に理解を示した領主、伊賀氏理の全面支援を受けて人材教育に力を入れた。

一部でも述べたが彼は書面の末尾に必ず「日本人、酒井三治」と付記したという。その思想の根幹には、地域の枠を飛び越えて日本とか世界までを視野に入れた発想があった。かつて竹内綱はその酒井から薫陶を受けた。明太郎も酒井に直接、教えを受けたことはないにしても、日新館における塾生への影響力を考えれば、ここに学んだ明太郎の人格形成に大きな影響を与えたことは間違いないだろう。

この宿毛の少年時代に明太郎は国事に奔走してほとんど家にいなかった父、綱に代わって祖父、吉管にかわいがられ、教養も身につけた。また明太郎は、やはり伊賀家の重臣だった織田大八の長男、信福と親しくなる。父親がともに伊賀家の重臣で、しかも明太郎と信福は同い年であった。織田信福は、後年高知に出て歯科医となり、自由民権運動にも深くかかわった。また明太郎が衆議院議員になる時や私立高知工業学校を設立する時にも全面的に協力することになる。

明太郎は九歳まで宿毛にいたが、父が大阪府で勤務するようになる明治三年には、ともに上阪した。この大阪時代に、土佐藩出身で三菱財閥の創始者、岩崎弥太郎が自邸内にアメリカ人講師を招いて開いた私塾、岩崎英学塾に通い英語を学ぶ。ここで初めて西洋文明の洗礼を受けるのである。

明太郎はさらに明治六年、綱の大蔵省勤務に伴ってともに上京する。東京では啓蒙思想家の中村敬宇（正直）が主宰する東京同文社に入塾。中村は旧幕府の御儒者の出身で、幕末の慶応二年（一八六六年）、イギリスに留学。帰国後、「西国立志編」を著した。明太郎は、東京同文社でこの「西国立志編」に書かれたイギリスとその精神を教えられた。

東京では土佐出身の思想家、中江兆民が開いた仏学塾へも通った。中江は司法省から派遣されてフラ

ンスへ留学。帰国後、ルソーの民約論を翻訳。明太郎は中江から直々に民約論の講義を聞き、自由平等思想を学ぶ。こうして明太郎は大阪と東京で西洋文明に深く触れるとともに、父を通して自由民権運動にもかかわり、自由党の機関紙ともいえる「自由新聞」の姉妹紙「絵入自由新聞」にも参画するのである。

芳谷炭坑の経営

このように、明太郎が政治の世界へ深く足を踏み込んでいた時、突然父からこんなことを言われた。

「明太郎、お前、わしらがやっている芳谷炭坑の経営をみてくれないか。いや、やってくれ」

明治十九年一月のことである。明太郎は驚いた。即座に返事ができるようなことではない。今までの政治とは別世界である。しかしその口調からして、綱はもうそのことを決めているようであった。

芳谷炭坑は、佐賀県松浦郡北波多村にあった。明治十八年八月に綱が鉱山開発のため払い下げを政府に出願し、芳谷炭坑合資会社としてスタートを切ったばかりだった。出資者は、綱をはじめ、炭鉱開発の調査にあたった高取伊好、京都の鉱山師・外村宗次郎、兵庫県の魚澄惣左衛門の四人。資本金は十二万円だった。

綱は、その芳谷炭坑の経営を、息子の明太郎に任せるという。それまで父からの感化を受けて自由民権運動などにずっとかかわっていた明太郎は事業などやろうとは思ったこともなかった。しかし、明太

郎は一も二もなく父からの申し入れを黙って受け入れざるを得なかったのである。

綱が初めて炭鉱経営に手を染めたのは、大蔵省を辞職した後の明治七年にさかのぼる。以前から親交のあった後藤象二郎のつてで、長崎県の高島炭鉱の経営に乗り出した。伊藤博文から高島炭鉱の民間払い下げの動きを聞いた綱が、後藤象二郎に働きかけて大蔵省に払い下げを出願し、経営権を得たのである。

高島炭鉱は、日本で初めて開発された炭鉱とされる。イギリス人のグラバー（長崎県のグラバー邸の邸主）とオランダ人のボラトインの二人の外国人が肥前藩から石炭採掘の許可を得て経営に当たっていた。しかし、この外国人が日本人の鉱夫をうまく使いこなせず、生産性を上げることができなかったため、政府に働きかけて買い上げてもらった。これを綱と後藤象二郎が共同で経営権を得たものである。明治六年には「日本坑法」が制定され、鉱山の民間払い下げが進められていた。

綱は明治八年にも高島炭鉱の近くにあった端島大島香焼三島炭鉱の経営権も手に入れ、本格的な炭鉱経営に乗り出した。ところが、明治十一年から十二年に、綱が土佐挙兵計画に関与した罪で獄中生活を送っていた間に経営上の問題が生じ、後藤象二郎がこの二つの炭鉱を岩崎弥太郎に譲渡してしまった。

綱は大いに失望したが、炭鉱経営への綱の情熱は衰えるどころかますます盛んになり、新たな炭鉱探しにかかった。たまたま調査をまかせた炭鉱技師の高取伊好が探し出したのが、芳谷炭坑だったのである。北波多村の芳谷地区にあった海軍用地の中の九十余万坪の鉱山だった。

同炭坑は、現在の唐津市に隣接する標高約二百メートルの山間地帯にある。唐津港まで約十キロと、

掘り出した石炭の運搬の便もよいが、炭層が三層からなり、調査の結果では炭質が九州の炭鉱では上位にランクされ、開発は有望視されていた。

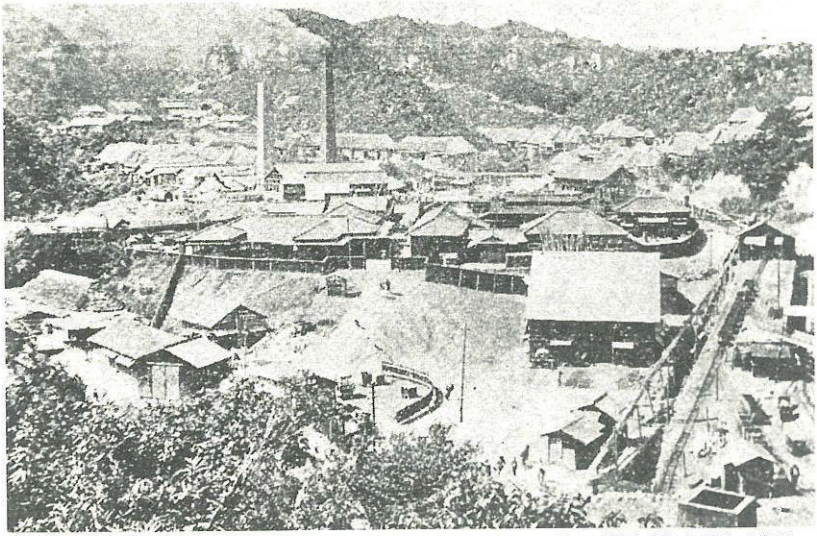
綱から芳谷炭坑を任せられた明太郎は、すぐに現地入りした。四人の共同出資による合資会社だが、それ以後の経営はほとんど明太郎の手にゆだねられたのである。政治の世界から実業の世界への大きな転身である。この時、明太郎はまだ二十六歳だった。

技術革新と合理化

明太郎は、炭鉱経営に若い情熱をぶつけていく。

実業の世界は初体験である。炭鉱は、父の綱が関係していたので、どんなものかはある程度分かっていたが、自分が経営するとなると別。ゼロからの出発であった。そこで明太郎は「現場を踏み、現場を知ることがなによりも大事」と、まず芳谷炭坑の実態をつかむことから始めた。そして、とにかく毎日、現場へ足を運んだ。分からないことや疑問があれば、作業員をつかまえて直接、説明させた。その一方、専門知識を得るため、国内はもとより外国からも鉱山に関する書物を取り寄せ懸命に勉強した。

芳谷炭坑は明太郎が経営にタッチするようになった前年に政府から払い下げを受けたばかりで、採炭技術もまだまだ稚拙なものだった。採炭効率も悪く、とても利益を出せるようなものではなかった。その点では、かつて綱が後藤象二郎と経営していた長崎県の高島炭鉱の方が機械化なども進んでいた



最盛期の明治三十年代後半から四十年代にかけての芳谷炭坑(佐賀県松浦郡北波多村)

とみられる。高島炭鉱では、大蔵省から払い下げを受けると、すぐに貿易商社を通じて、イギリスから炭鉱用機械を輸入していた。しかし、その新鋭機械がかなり高価だったうえ、せっかく輸入した機械を十分に使いこなせなかったため、生産性を上げることができずに失敗した。

明太郎が芳谷炭坑の経営にあたって、まず取り組んだのは、採炭技術の改善・改良による合理化であった。そのため、炭鉱については先進国で近代化が進んでいたイギリスから技術者を招いて直接指導にあたらせるとともに、ロックドリルやジャックハンマーといった各種の炭鉱用機械もイギリスから輸入するなど、当時としては最新技術を次々に導入していった。

明太郎は高島炭鉱のようにイギリスから技術者を招いているが、鉱夫たちへの技術指導にたっぷりと時間をかけた。このため、輸入した新鋭機械も効果

的に稼働し、生産性も格段に上げることができた。このようにして芳谷炭坑では、技術革新とそれによる合理化が順調に進展した。

炭鉱用機械にしても、輸入だけに頼らず、自社でできるものは極力内製化しコストダウンを図った。このため明治二十五年ごろから炭鉱内に鋳物場、鍛冶場、仕上げ場、木工場、木型場などを有する付属工場を設けた。そこで約五十人の職工を使い、修理はもちろん、主だった機械は全面的に製造した。「必要な機械類等はすべて製造し、これを他に仰がず」というのが明太郎の経営方針であった。

相前後するが、明治二十三年には採掘した石炭を唐津港まで輸送するため、延長三キロ余りの松浦河畔まで軽便軌道を敷設し、機関車による送炭が開始された。松浦河畔からは上荷船で唐津港に運び込まれた。さらに明治三十一年には軽便軌道は複線化した。同三十二年の唐津鉄道完成後は同線を経由して石炭車五輌で毎日、千五百トンを長崎まで輸送した。

なお、芳谷炭坑合資会社は明治二十七年に株式会社に改め、竹内綱が専務取締役に、明太郎も取締役に名前を連ねた。この時炭鉱と唐津港の間に専用電話も開通したが、これが佐賀県では第一号の電話架設とされている。

こうした炭鉱の技術革新や合理化などによって芳谷炭坑の採炭量は年々、着実な伸びをみせた。北波多村史によると、明治三十五年の石炭の年間生産量は約五万四千トンだったのが、同三十八年には約十九万トンと約四倍に伸びた。さらに、明治四十一年には約二十五万トンとなり、国内では大規模の炭鉱になった。その利益金も年間で数十万円に達したという。また、採炭方法にも大改良が行われたため、

上質炭の採掘が可能となり、芳谷炭坑の声価は海外にも広がったといわれる。

ちなみに、当時と現在の貨幣価値を米価で比較すると約千四百倍になるというから、芳谷炭坑の年間の利益金を五十万円とすれば、現在に換算するとざっと七億円になる。明治四十年前後の芳谷炭坑では、巨額の利益を上げていたわけである。

生産量の増加に伴って、芳谷炭坑では従業員の数も膨れ上がった。特に明治末期の事業拡大によって躍進的な増加をみた。明治四十一年の従業員数は、男女合わせて三千百六十人。炭鉱周辺だけでもその家族も含めると五千人から六千人に達した。

芳谷地区の炭鉱街には細長い棟割りの住宅が密集し、商店街も形成された。こうなると、炭鉱街には教育機関も必要になり、明治三十二年には芳谷炭坑の中心地に炭鉱従業員の子供専用の小学校が開校した。芳谷炭坑が設立したものだが、開校から四年後の明治三十六年三月には芳谷尋常小学校として村立校になった。同校は最盛期の明治四十年代には児童数が千人を超え、何度も校舎の増築と、運動場の拡張が行われている。

この芳谷炭坑の開発、隆盛が、地元の北波多村にも大きな恩恵をもたらしたことはいうまでもない。同村の郷土史家、山崎猛夫は「芳谷炭坑は明太郎さんによって開発された。それまでは寒村だった北波多村の主要産業として村を潤してくれた。明太郎さんは炭鉱経営ばかりではなく、村の教育にも強い関心を持っていて、それが炭鉱街への小学校の設立となっている。明太郎さんは優れた経営者であるとともに立派な教育者でもあった」と評価している。

ともかく明太郎にとって初めての炭鉱経営は、その卓越した手腕と若い情熱によって成功をおさめ、父の期待に見事に応えたのである。明太郎はこの間の明治二十四年に南国市出身の政治家で実業家でもある山本忠秀の妹、亀井と結婚している。

竹内鉱業設立と炭鉱の買収

綱と明太郎は明治二十七年に、新たに竹内鉱業を設立（本社・東京）し、それまでの芳谷炭坑もその傘下に入れた。また、これを機会に、さらに鉱山事業に意欲を燃やし、炭鉱や鉱山を次々と手に入れていった。明治二十六年には既に大夕張炭山の所有権を得て採掘を開始していたのをはじめ、明治二十九年には茨城無煙炭鉱を創業、ほかにも白水炭鉱や橋立金山などを次々に手中に収め、その経営にあたった。

茨城無煙炭鉱については、こんな話がある。同炭鉱の石炭は、燃焼すると白煙は出るが黒煙は出ない。だからといって無煙炭ではない。なぜ無煙炭と呼ばれるようになったのか。

その昔、磯原というところに伊藤と山田の二人がいて、石炭を掘っては江戸へ送って売りさばいていた。が、どうも売れ行きがよくない。そこで、二人は江戸で各地の石炭やコークスを見ていろいろと研究した。結果、これは生のままではだめだということになった。それで、一つ焼いてやろうと、ガラ焼きにして、ちょうど中塊くらいの大きさの塊を俵詰めにして江戸へ送ってみた。すると、今度は煙も出ないし臭気も少なくなってなかなか評判がいい。そこで、伊藤と山田の頭の文字をとって「伊山炭」と

名付けた。これに無煙炭という名前を付けたのが綱で、設立した会社名にそのまま使って「茨城無煙炭鉱株式会社」とした。

綱らは特に「無煙」の二字に力を入れて宣伝と販売に努めた。それでも、無煙炭鉱創業時代は販売に随分苦労したようで、折角東京まで持ち込んだのに売れず、夜間ひそかに品川の海に投げ捨てて帰ってきたこともあったという。

こうした苦しい時代はしばらく続いたが、ねばり強い経営努力でどうにか乗り切り、同社もだんだんと実績を上げ、創業から数年後にはそこそこの利益を出すようになり、ようやく軌道に乗った。

もう一つの大夕張炭山の経営にも、綱や明太郎はかなり手を焼いたようだ。明太郎の日記にはこんなことが記述してある。

明治四十三年四月十三日／大夕張資金調達の件協議　現在資本金百万円を七十万円に減じ、優先株八十万円募集のことに取り極む。

同年九月二十三日／大江、今幡、大夕張会社、今日の状態にては責任の帰す所なく、事業の進ちょくむつかしきに付き、中心点を取り極めありたき旨談じ置く。

同月二十七日／今幡を呼び、大夕張予算調製等のこと談ず。

同年十二月九日／大夕張より帰京の横山熊太郎来社、工事（鉄道）の工程降雪の模様を聞き、隧道煉瓦石巻並切拡は、降雪中も進行することとなし、軌条敷設は四月より着手のこと定む。

同月三十一日／本日、大夕張炭山より二万五千円、機械代として受け取りのはずなりしも、先方の

不信実のため受け取りできず、手違いの来るのみならず、大夕張炭山経営の前途は……

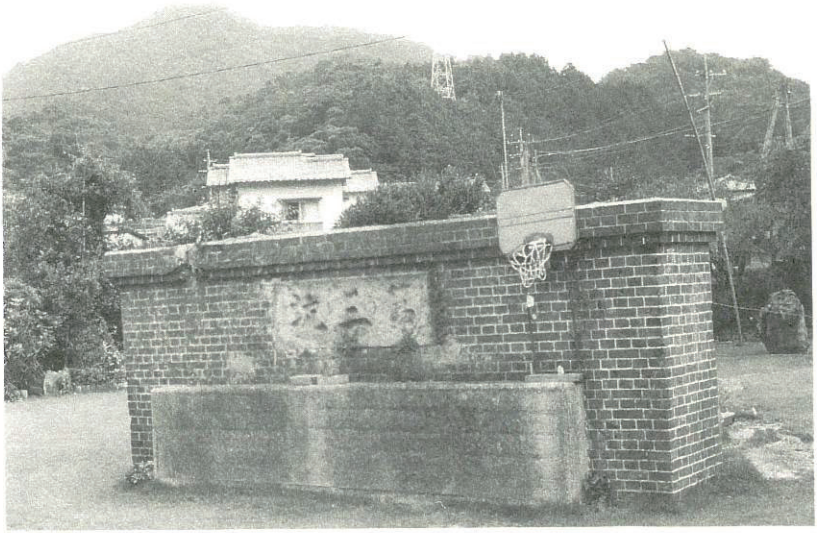
この日記からも、大夕張炭山の苦しい経営の一端がのぞかれるのである。

ところで、綱や明太郎が芳谷炭坑をはじめとして、茨城、福島、北海道など全国各地で炭鉱開発を行い、その経営にこれほど情熱を注いだのはなぜだろうか。

炭鉱の操業能率が飛躍的に向上したのは、何といっても蒸気機関が発明され、実用化された十八世紀の中ごろからで、これが石炭の増産を促した。そして、石炭が動力源として広く利用されることによって産業革命にまで発展するのである。このころから石炭の本格利用が始まり、十九世紀の終わりごろに始まった電力利用のための発電も、最初は石炭が利用された。以降、人口の増加、動力機械化の進展に伴って、石炭の消費量は増大の一途をたどる。わが国で石炭の採掘が本格化したのは、石炭の輸出が開始され、国内での消費も拡大した明治期に入ってから。西欧での産業革命の波が次第にわが国にもおよび、動力用(蒸気機関、船舶、特に軍艦、工場)、製鉄、発電などと急速に需要が伸びた。特に、明治三十年代に入ると需要が急上昇した。

西は九州の北部や西部、東は茨城や福島を中心とした地域、そして、北は北海道と日本中で炭鉱探しが始まり、中、小の炭鉱が各地に誕生していった。

綱と明太郎は、こうした時代の流れを読み取り、冷静に、しかも積極的に対応した。炭鉱を設立したり買収する場合は、慎重に調査を行っていた。そして、その経営にあたっても、明太郎が芳谷炭坑で行ったように技術改革など合理化を進めるなかで、コスト低減を図りながら採炭量を増やしていき、巨額の



かつての芳谷炭坑の第三坑口。今は、レンガで固めて記念に残してある。周囲は変わり果て、昔をしのぶものはほとんどない(北波多村芳谷地区)

富を得たのである。

芳谷炭坑は、明太郎の徹底した合理化などによる経営努力で、順調に業績を上げた。明治四十年代に入ると佐賀県内の炭鉱の全出炭量の五〇%を占めるほどの有力炭鉱になっていたが、明治四十四年、三菱鉱業株式会社に買収併合されていく。経営など万事が順調だった芳谷炭坑がどのような事情で三菱鉱業に買収されたのか、その理由は明らかでない。明太郎の日記にも

明治四十四年四月十三日／三菱譲渡の件決定、芳谷炭坑百九十万円で授受

同月二十六日／芳谷鉱区本日移転登録済の旨報知あり

同年五月一日／三菱より五十万円受領

同年六月九日／芳谷炭坑売却

と、ごく簡単に事実関係を記述しているだけなの

である。当時はまだ隆盛を極め、竹内鉱業にとってはドル箱的な存在だった芳谷炭坑を、なぜこの時期に三菱に売却したのか。

三菱鉱業は、その翌年には、やはり北波多村内の岸岳炭坑を買収併合している。同炭坑は年間出炭量も九万トン弱の小規模炭鉱だが、そのころ、三菱が周辺の炭鉱を買収にかかっていたことは事実のようで、芳谷炭坑も三菱鉱業のそうした経営戦略のなかで買収されていったのだろうか。

三菱鉱業に買収された芳谷鉱業所（前の芳谷炭坑）は、大正時代に入っても好調な経営を続けたが、大正末期から昭和にかけての大恐慌で、炭鉱も深刻な不況に見舞われ、昭和八年に芳谷鉱業所は閉山している。芳谷炭坑をはじめ、多くの炭鉱を抱えた北波多村は、炭鉱の最盛期には村人口が一万七千人を超え、佐賀県内百三十余りの町村では第三位を占めたというが、現在はその三分の一にも満たない五千人そこそこの静かな農村に姿を変えている。かつて三千人を超える従業員が働き、隆盛を誇った芳谷炭坑も、今では第三坑口が記念に残されているだけで昔のおもかげは全くない。炭鉱街の中心地のほぼ全面が雑木林に覆われていて、わずかに一部が村営住宅や工場用地として利用されているにすぎない。その工場用地も誘致企業が少なく、空き地が目立つ。炭鉱街の変わりようは驚くばかりである。

遊泉寺銅山の経営

竹内鉱業は、明治三十五年に石川県小松町（現在、小松市）近郊にあった遊泉寺銅山を買収し、その

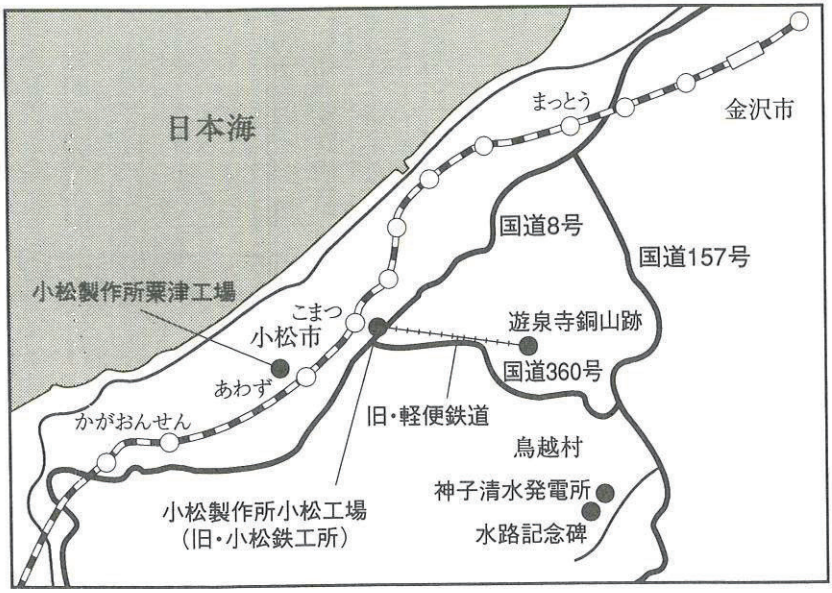
経営に乗り出す。芳谷炭坑の共同出資者の一人、外村宗次郎が所有していたのを譲り受けたものである。この銅山経営が、後の小松鉄工所から小松製作所へとつながるのである。

遊泉寺銅山は、現在の小松市を流れる梯（かけはし）川中流に注ぐ仏大寺川に沿った丘陵地帯から山間部にかけて広がる銅山で、江戸時代中期の安永元年（一七七二年）に開坑したと伝えられる。一時採掘が中断されたことがあるが、文政三年（一八二〇年）に加賀藩が再興し、明治四年、民間に払い下げられ、外村が所有していた。当時の生産高は年間六トン前後といわれた。

その生産高が飛躍的に伸びたのは、竹内鉱業が買収し、明太郎が経営に乗り出してからである。明太郎はかつての芳谷炭坑の時のように、経営にタッチすると同時に、遊泉寺銅山のそれまでの経営内容を全面的に見直した。そして、技術革新など合理化を進めていった。

その第一弾が全国の鉱山に先駆けて欧米の新しい技術をどしどし導入したことである。旧式の生産機械類などは次々に一新し、近代的な生産体制を確立した。炭鉱と銅山の違いはあったが芳谷炭坑での経営ノウハウなどが、この遊泉寺銅山の革新に大いに役立った。

明太郎は、銅山に小型コンバーターをはじめ、電気分解精練装置などの最新設備を購入して、全国の鉱山関係者の注目を集めた。銅山敷地内には、最新設備を導入した電気分銅所を開設し、アメリカ留学で技術習得をしてきた岩井興助にその技術開発を担当させた。岩井は、明治三十年代の後半、明太郎の援助を受けてアメリカに留学、デンバー大学を卒業してイリノイ製鋼で研修を重ね帰国後、遊泉寺銅山における精練技術の第一人者として活躍。同銅山の経営でも明太郎の右腕的な存在であり、銅山の所長



も務めた。彼は四十年代に入って新たに明太郎によって設立された早稲田大学理工学部の教授にもなった。

明太郎は「企業経営にはまず人材が必要である」として、既にこのころから人材養成を進めていた。優秀な技術者は、どんどん海外に留学、研修を行わせ、帰国後はその成果を存分に発揮させた。

遊泉寺銅山は明太郎が経営に乗り出した時には、鉱区は約十二万坪だったが、年々、拡大を図り、十四年後の大正五年には十倍近い百十四万坪にもなっていた。生産高は、年間六百十二トンにのぼった。明太郎が経営に着手する以前の年間生産高の百倍強という飛躍的な伸びである。明太郎は、芳谷炭坑で技術革新などの合理化を図って、生産高を急激に伸ばしたように、遊泉寺銅山でも同じような経営手法で、やはり大きな成果を上げたのである。

遊泉寺銅山は生産量の増加に伴って従業員数も増

え、最盛期には千六百人にもなり、銅山の周辺部には理髪店から魚屋、八百屋などが並んで、かなりの規模の商店街が形成され、鉱山の街として隆盛を極めた。明治四十年には、銅山専用の軽便鉄道も敷設された。銅山から八キロ余り離れた遊泉寺銅山小松出張所までの運搬用鉄道である。この鉄道は、従業員はもちろん、一般住民にも開放され、地元民らは銅山の恩恵を大いに受けたのである。

明太郎自身もこの鉄道はよく利用したようで、当時、遊泉寺銅山の従業員で、後に小松製作所の理事長、支配人にまでなった森本嘉一は、昭和十年に小松製作所が編さんした『竹内明太郎先生追憶集』に、そのころの明太郎について次のような一文を寄せている。

「私がまだ二十七、八歳のころのこと。大正六、七年ごろまで北陸線小松駅の東側に遊泉寺銅山の出張所があって、明太郎先生が銅山にお越しになる時は、いつも出張所で待ち合わせている。銅山専用の軽便鉄道によられるのが常であったが、時には巻脚絆、草鞋ばきという野人さながらの姿で銅山まで二里半の線路みちをすたすた徒歩されることもよくあった。先生は何ごとにも興味と関心を持たれる方で、歩くにも決して無為には歩かない。目に触れる事物に付いて不審とされる点は、農夫であれ、だれであれ、親しげに言葉をかけて話を聞かれた。疑点があれば、すぐに『何故』と反問され、理くつに合わないと『それはおかしい』と突っ込まれる。仕事のことでも他のことでも、決していいかげんなことでは済まされない。それに、先生は驚くべき博学博識な方で、いつも怖れをなしていた。しかも、それでいて慈父のごとく慕わしく懐しく思ったのは、その高潔な人格のしからしむるところであったと思う。常に若い者に進んで研究心を持たせ、書に親しむべく仕向けられて、しらずしらずのうちに人格の陶冶、

知識の向上をはかられていたのであった」

明太郎の人柄がしのばれる。

明太郎は、明治四十年の軽便鉄道敷設と同時期に、合理化の一環として銅山の電化を図った。そのため遊泉寺銅山の南東にある石川郡鳥越村の神子清水地区に銅山専用の発電所を開設し、電力を銅山まで送電した。この電化が銅の生産量を飛躍的に伸ばしたことはいうまでもない。

このように、明太郎が遊泉寺銅山の経営に乗り出してから、わずかの間に同銅山は大変革を遂げた。竹内鉱業も、それによって大いに潤った。こうした事業の順調な成長ぶりには、綱はもちろん明太郎自身も満足していたのではないか。

遊泉寺銅山の電化のための発電所建設をめぐって、いかにも明太郎らしいエピソードがある。

明治三十年代の後半、隆盛期を迎えようとしていた遊泉寺銅山では、銅山用電力の必要から発電所の立地場所を探していた。銅山から近いこと、豊かな水源があることなどの条件にかなったのが当時の能美郡別宮村（後に合併して鳥越村となる）であった。だが、発電所の建設には発電用の水路がなくてはならない。明太郎の指示を受けた社員が適地を探していたところ、同村神子清水地区にまったく使われていない水路があるのを見つけた。よく調べてみると、地元の神子清水、渡津地区の住民がかつて水稲栽培を夢見て掘った水路であることが分かった。この工事が難航の末、地元の農民の手に負えなくなって中途で放置したままになっていたのだった。社員からの報告を受けた明太郎はこの水路を改修して発

電用の水路にすることを決めた。

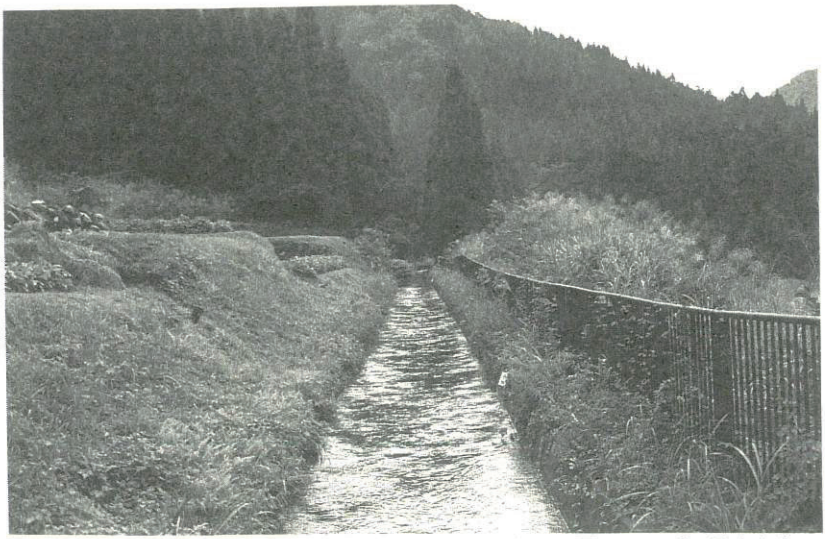
しかし、地元住民との交渉が必要である。銅山側から地元に、この造りかけの水路の活用という計画を申し入れると、住民側は「発電所建設や用水路の建設への協力は惜しまないが、完成したら発電用水路から、水稲栽培に必要な水を供給してほしい」との条件を出してきた。要求には山間地で生活する農民にしか分からない願いが込められていた。代理人として交渉にあたった社員はすぐにこの要求、条件を持って帰り、明太郎に報告した。

すると、明太郎は「検討などする必要はない。もちろん、ＯＫだ」と地元農民からの条件を、全面的に受け入れたのである。

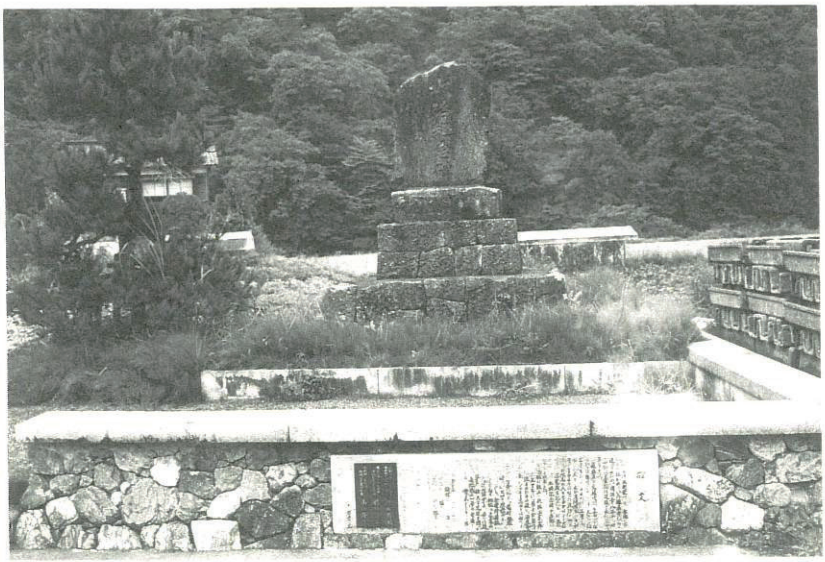
明太郎には、地元農民の気持ちが痛いほど分かった。明太郎はこの放置された用水路を発電用の水路に利用すると決めた時から、地元農民側からそうした要求、条件が出ることは百も承知だったのである。「放置用水路を発電用水路として開発すれば、遊泉寺銅山のためになることはもちろん、地元農民の悲願にも報いることができる」――そのことは、明太郎も当然、考えていた。

明太郎は農業用水としての分水だけでなく、発電所関連の工事にあたっても地元住民を優先して雇用した。水稲栽培の悲願もむなしくこれといった換金作物のない地元農民にとっては、貴重な現金収入源で大歓迎だった。明治三十八年から工事に着手したが、その労働力の大半は地元の住民だった。

銅山用発電所と、そこまでの延長約四・五キロの用水路の工事は、二年後の明治四十年に予想を上回る早さで完成した。地元農民の四十年来の水路に対する執着心と、明太郎の好意にも報いるという気持ち



発電用と農民のかんがい用にも使われた水路。今も発電、かんがい用水として利用されている(鳥越村渡津地区)



地元民が建てた用水路。完成記念碑(鳥越村渡津地区)

がこのような結果をもたらしたといえよう。

この用水路は、渡津地区の大日川から取水している。水路の幅は約二メートル。岩盤をくり抜いたり、山の中腹を横切ったりして約四・五キロ下流の神子清水地区に建設された発電所につながっている。当時、この発電所の出力は、わずか二百八十キロワットだったが、遊泉寺銅山の貴重な動力源となった。

発電所と水路の完成した翌年には、地元住民が感謝の気持ちを込めて渡津地区に水路記念碑を建立している。碑文には「為　芳谷炭坑株式会社　竹内綱　水路記念碑　工学士　樺島益三　測量師　衛藤宏平」とある。

芳谷炭坑は、明治十八年に綱が所有権を取得、翌十九年に明太郎が経営を任せられたが、その代表は綱になっていた。記念碑には代表者である綱の名が刻まれたとみられる。

この記念碑は、昭和五十八年になって小松市の商工会議所や地元民の協力で改修されたが、住民は今でも明太郎の恩を忘れずに毎日、この記念碑の清掃を行っている。その記念碑の近くに建てられた案内板には、概略こう書かれている。

「神子清水発電所は、当地に古くより拓かれていた遊泉寺銅山への送電のため、明治三十八年から四十一年に至る間に建設された。当時としては大変な難工事で、それだけに工事に参加した人々、かんがい用水に利用できるようになった渡津、神子清水の地元民の喜びはことのほかで、この完成を記念し、明治四十年に水路記念碑が建立された。当地域に鉄工、機械工業が隆昌し、大正十年に小松製作所が創設されたが、その礎に遊泉寺銅山があったことを忘れてはならない。このような意味で『農村地域に工業

を興す』という理念の上に、この地を開発し、発電所建設により、文字通り地域に産業の灯をともしたことの偉業を、さらに後世まで伝え、偉大な先達をしのぶことは当地域の一層の発展を期する上に意義あるものと信ずる。この趣旨により、小松商工会議所は鳥越村や渡津村落の関係者の協力で、ここに記念碑を移築改修するものである」

最盛期には千六百人もの従業員を擁してにぎわった遊泉寺銅山だが、第一次大戦の不況のあおりを受けて大正九年の閉山後は地区全体が衰退の一途をたどった。今では銅山の跡形すらなくなった。

ただ、当時の銅山の入り口付近の道路わきに、ちょっとした広場があって、その中にかつての遊泉寺銅山や鉱山街を示す案内図や記念の碑が設置してある。また、最近、小松商工会議所などが、銅山を開発した明太郎の等身大の像を建立しており、記念公園としての整備が進められている。



遊泉寺銅山跡に近い記念公園に建立された明太郎の銅像

第二章　鉱山事業から機械工業へ

明太郎は芳谷炭坑を経営していた明治三十二年から約一年間、西欧諸国を回って鉱山業、機械工業、造船業などの視察をしている。この時の外遊の大きな目的の一つが、明治三十三年四月から十一月までの二百十日間、フランスのパリで開催された万国博覧会視察であった。

万国博が初めて開かれたのは産業革命の波が一巡した嘉永四年（一八五一年）、会場はロンドンのハイドパークであった。その後、フランスも三度の万国博を開催したが、明治二十二年（一八八九年）のパリ万国博では、エッフェル塔を建設して話題を呼んだ。高さ三〇〇・六五メートル、百五十万フランの国庫補助を受けて完成したこの塔は、大胆な外観で物議をかもしたが、第一次大戦中、無線の送受信基地となって、その存在価値を高めた。

それから十一年後の明治三十三年のパリ万国博には、日本も日清戦争後の国威発揚の場にしようと、なみなみならぬ力の入れようだった。開幕四年前に臨時博覧会事務局を設置して準備を進め、二万六千四百六十点の美術工芸品や工業製品を出品したのである。そのかいあってか「わが国の清国における勇戦は大いに世界の注意をひき、ために、わが国の出品は一層の繁昌をきたせり」と時事新報は伝えている。

万国博熱で、日本人見物客も大勢繰り出した。六月には川上音二郎・貞奴の一座が会場内のロイ・フラー座で上演し、三回も公演を延長する大ヒットとなる。イギリス留学中の夏目漱石もパリに立ち寄り、この万国博を見物している。実業家の大倉喜八郎も万国博に行き、会場で蒸気自動車を買い入れ新技術の輸入をしている。

この年の万国博には呼び物が二つあった。一つは、ほとんどの陳列館が前世紀に絶頂に達したアールヌーボー（新芸術）の装飾様式を取り入れ、曲線と華れいな色彩を組み合わせて建築美を競い合っていた。構造は最新の鉄筋コンクリートだった。もう一つが、新世紀の大量生産時代を予告する工業機械類の展示である。明太郎がぜひ見ておきたかったのもここであった。なかでも、この分野で大きな革命をもたらした高速度鋼バイトを使った切削用機械は世界の工業関係者をうならせるほどのものだった。

明太郎はこの切削用機械をはじめ、これまで見たことのないような最新の工業機械類を目のあたりにして、ただ驚くばかりだった。ここに展示されているヨーロッパ諸国の工業技術水準の高さは日本とは比較にならないものだった。パリ万国博とともに、ヨーロッパ諸国の視察においても、各国の工業技術のレベルの高さは目を見張らせるものがあった。明太郎は、日本の工業技術の遅れを痛感するとともに、これからの日本の工業技術の育成の重要性を再認識させられたのである。

「工業富国基」――工業こそ国を富ます基である。明太郎は、この時の西欧視察旅行で、この言葉を身をもって体験した。明太郎が、この貴重な体験を鉱山経営に生かしたことはいうまでもない。

芳谷炭坑では、当初から海外の新技術を導入していたが、帰国後はさらに欧米の最新技術を積極的に

取り入れた。明太郎は帰国二年後の明治三十五年から経営を始めた遊泉寺銅山でも早速、この経験を生かし、欧米諸国の新技術を次々に導入していった。

芳谷炭坑や遊泉寺銅山が明太郎が経営に乗り出してから飛躍的に生産効率を向上させたのも、パリ万国博を含む約一年間の欧米視察旅行によるところが大きい。この経験は後々に関係する事業の中でも存分に生かされることになる。

唐津鉄工所の設立

明太郎は明治三十三年のパリ万国博を含む欧米諸国の工業事情の視察の結果や、日清、日露両戦争の教訓。それに、炭鉱や銅山経営の経験などから、機械工業の重要性に早くから着目していた。

鉱山経営にあたって、常に明太郎の頭にあったのは「資源は有限。石炭や銅も掘り進めば、いずれ鉱脈はつきる。鉱脈はあっても、それが奥深くなれば生産コストが上がり経営を圧迫し、いつかは行き詰まり、閉山に追い込まれる」といった危機意識である。

しかし、産業革命の歴史などからみても分かるように、工業技術は尽きることがない。それどころか、熟練すればするほど新しい技術を生み出し、生産効率を上げることができる。そして、さらには新しい産業を生み出すなど無限の可能性を秘めている。だから、明太郎は「自分が鉱山事業の次にやるべきは工業、それも機械工業の育成である。そして、ポスト鉱業として、できればその地域に新たな産業を興

したい」と早くからそのことを意識し、パリ万国博など海外視察で、ますますその意を強くした。帰国すると着々とその手を打ってきたのである。

その一つが、唐津鉄工所である。明太郎が経営していた芳谷炭坑から十キロ余り離れた石炭積み出し港の唐津港隣接地に立地した。現在唐津鉄工所がある同じ場所（唐津市二夕子三丁目）である。

芳谷炭坑の付属鉄工所として明治三十九年に発足したが、正式な開業は明治四十二年四月である。明太郎が五十歳、油の乗りきった年齢で、新たに機械工業の経営者としてスタートした。この時は、まだ芳谷炭坑や遊泉寺銅山も経営しており、最盛期を迎えていたが明太郎は鉱山が隆盛期のうちに機械工業への移行を考えた。

明太郎は唐津鉄工所の設立にあたって、かねてからの知人で東京高等工業学校（現東京工業大学）の校長、手島精一に「鉄工所を任せられる人物を紹介してほしい」と依頼した。彼は長年、校長として工業技術者を育成してきた。当時手島が育てた優秀な技術者が全国各地の工場で活躍しており、明太郎もそうした手島を信頼していた。その手島が明太郎に紹介したのが、同校を優秀な成績で卒業した竹尾年助だった。

竹尾は明治六年愛知県豊橋の生まれで、地元の中学を卒業後上京。この時福沢諭吉の講演を聴いて感銘を受け「これからの日本は工業立国しか発展の道はない」と確信し、東京高等工業学校機械科に入学した。卒業後アメリカへ留学。胃腸薬・ジヤスターゼで有名な高峰錠吉博士の研究所で語学の修業をしながら手伝い、ニュージャージー州のスティーブンス工科大学の三年に編入。デントン博士のもとで当時

アメリカに初めて輸入されたディーゼル機関を研究した。その後三年間、アメリカの機械工業の中心地ニューイングランドで勤務。エンジン、繊維機械、各種大型機器の設計、工作、工場管理を学んだ。

竹尾はアメリカに帰化するつもりだったが、家庭の事情などから明治三十六年に帰国。その年に東京高等工業学校の同窓生である友人の経営する福岡県の幸袋工作所に入った。ここで同工作所の熟練工らに工作機械や工作技術の指導を行った。明治三十六年には大阪鉄工所（現在の日立造船）に移り、機械部門を担当し、その生産能力を大きく向上させた。

大阪鉄工所に勤務していた時に、竹尾は恩師の手島を通じて明太郎に紹介され、唐津鉄工所に迎えられたのである。竹尾が大阪鉄工所を退職する時、同鉄工所は「絶対に辞めさせない」と強硬に引き止めたが、明太郎の熱心な勧誘と、「新天地で思いっきりやってみたい」という竹尾の固い決意を翻させることはできなかった。



唐津鉄工所の初代所長、竹尾年助

こんなエピソードが残っている。

当時、唐津周辺には芳谷炭坑をはじめいくつか炭鉱があって、唐津も石炭の積み出し港としてにぎわっていた。しかし、港を一歩離れると何もない片田舎。明太郎から声をかけられた竹尾は、正式に返事をする前に、唐津とはどんなところか一度、見ておきたかった。それで、大阪からわざわざ唐津へ下見にやってきた。まだ唐津まで鉄道も通じていない時代で、途中、人力車に乗るな



創業当時の唐津鉄工所の工場建物の一部。今も工場内に残っている

どして唐津に着いた時には、日もとっぷりと暮れていた。

竹尾は、出迎えてくれた芳谷炭坑の従業員の案内で唐津港の周辺を歩いて回った。青白く冴えた月光に輝く浜辺の白砂青松の光景がとてもロマンチックで、竹尾の胸を熱くした。「よし、この美しい土地でやってみよう」と竹尾はその場で心に決めた。こうして竹尾は大阪鉄工所を退職すると、すぐに唐津入りした。竹尾の長男で現在、唐津鉄工所の会長をしている彦己は「明太郎さんからの話を受けて唐津を見にきたのが満月の夜だった。父は、その浜辺の美しさに強く引かれたようだ。もし、まだ明るいうちに唐津に着いて、別のところを見ていたら、父が唐津にきたかどうか」と話している。

こうして竹尾は唐津鉄工所に迎えられた。明治三十九年十二月のことである。翌年四月、竹尾は明太郎からの指示もあって、鉄工所建設準備のために再

び渡米して、具体的にどのような設備をし、どんな工作機械を製造していくかなどについて一年かけて調査研究し、レイアウトプランを練った。

明太郎が経営者としても優れていたのは、こんなところにもある。普通の経営者なら、既に十年間もアメリカに留学し、外国の企業でも研修を積んできた人物を、さらに一年間も渡米させ、調査研究を行うなどはしないだろう。明太郎は、新たな事業に着手する場合、このように十分な時間をかけて事前調査したうえで始動する。そして、その人物にすべてを任せ、これを全面的にバックアップする。決してことを急がず沈着、冷静に対処する。明太郎が並の経営者にはないスケールの大きさを感じさせるところである。

竹尾は一年間の調査研究期間を終え、新工場に設置する機械を買い付け、レイアウトプランなどを持って帰国した。そして唐津鉄工所の所長に就任し、工場の建設にかかった。用地は唐津港から約一キロの海岸に近いところに数千坪を確保してあり、ここの松林を切り開いて整地し、新工場を建設する予定だったが、資金的な事情でそれが不可能となった。たまたま付近で廃校となった学校の建物があり、これを移築して工場とし操業を開始した。明治四十二年四月である。

こうして、炭鉱事業とともに「より長期的な地域振興、産業振興のために機械工業を興す」という明太郎の理想に向けて、ともかく第一歩を踏み出したのである。一方、竹尾も開業後は明太郎の期待にたがわず、長いアメリカ留学の経験を存分に生かし、次々に優れた製品を開発し、唐津鉄工所の名声を高めていく。

次々に新製品

唐津鉄工所が操業を始めたころは、芳谷炭坑の炭鉱用機械の補修、製造と、唐津港に出入りする内外の石炭運搬用船舶のエンジン、機械の修理が中心だった。この船舶の修理では、特に外国船の間で「唐津港には英語の達者な機械エンジニアがいて、鉄工の仕事がうまい」と唐津鉄工所の評判が高く、これで相当の収入を得たといわれる。

唐津鉄工所は設立早々から、東京高等工業学校の卒業生ら人材を相次いで採用。また、かつて竹尾が勤務した福岡県の幸袋工作所からも熟練工を迎えるなど、優秀な技術者集団を抱えており、いつまでも芳谷炭坑の機械補修や入港船の修理などをやっているつもりはなかった。できるだけ早い機会に新しい工作機械を開発、製造することを狙っていたのである。

アメリカで買い付けた工作機械などが入ってきて鉄工所の施設が整ってくると、竹尾は独自の製品開発に取り組んだ。最初に着手したのはアメリカ式の六尺旋盤で、明治四十四年には早くも製造に成功した。同年十一月から大正元年九月にかけて同型旋盤が次々に完成し、外販第一号の旋盤は北九州にあった戸畑鋳物と京都の奥村電機へ納入した。これが「唐津の旋盤」として全国に名前を広めた始まり。以後、大正三年までに平削盤、万能フライス盤、万能研削盤などの製造にも着手している。

唐津鉄工所は工作機械メーカーとしての基盤が固まりつつあった大正五年には、竹内鉱業から分離独

立し、さらに、大型の工作機械に分野を広げていく。プラノミラー、ロール研削盤はその代表的なもの。製品重量が百トンを超えるこの種の大型機械は、戦前には唐津鉄工所以外では製造できなかったといわれる。それまで「大型工作機械は輸入でなければ」と思われていたものが、唐津鉄工所によって初めて国産化されることになった。わが国の工作機械の歴史にも一時代を画したのである。

大正十年には歯車ホブ盤という工作機械を完成させた。以後も、ヤマバ歯車削盤、カサ歯車歯切盤、歯車型削盤などの開発に成功している。歯車用工作機械は、当時はまだ他のメーカーではうまく造れない分野で、唐津鉄工所の独壇場だった。

昭和に入ってからも、フェロウ型の歯車型削盤、サンダーランド型の歯車平削盤、グリーソン型傘歯車創成歯切盤など歯切機械のシリーズものを完成させている。また、スプライン軸切削用のホブ盤も開発し、わが国では唯一のスプラインホブ盤メーカーと言われたこともある。このように、あらゆる種類の歯切盤を製作する工作機械メーカーは、そのころ世界でも唐津鉄工所だけだったという。

こうした製品開発を支えたのが、竹尾所長をはじめとする優秀な技術者集団である。大正二年には全従業員は百九十人にのぼったが、この中に東京高等工業学校出身者十人を含む大学、高等工業学校の卒業生が十五人もいた。

明治の末期から大正初期。しかも地方の企業でこれだけの人材をそろえていたというのだから驚く。

科学的な工場管理

竹尾は優秀な技術者であると同時に、優秀な工場経営者であった。特に、唐津鉄工所が操業を開始した時から導入していた科学的な工場管理は注目に価する。その代表的なものが原価計算方式の採用である。

竹尾は鉄工所の設備機械の管理にあたって、各機械ごとに毎日の運転時間を詳細に記録し、それぞれの機械についての一時間当たりの工賃、償却費、経費を算出した。そして現場作業にあたって各工程ごとの作業伝票に、その機械加工時間の始めと終わりを記入、消費時間を算出するなどして機械一時間当たりの所要経費と加工費を厳密に原価計算した。これを明治四十二年の操業開始以来、ずっと実行していた。当時、これほど厳密な原価計算を行っていた工場は他になかったであろう。

機械の良否、加工の難易。原価の高低は設計によって決まる。この点を竹尾は特に重視し、設計ミスを絶対に許さず、設計不良があると設計者が現場で手直しさせられた。製品が完成すると、竹尾は一機ごとに検査した。唐津鉄工所の独特の品質管理方式が顧客からも好評を得た。

竹尾は在庫生産にもこだわった。在庫するためのロット生産は、原価を下げ、売価を低くして顧客の要望にこたえるという工作機械メーカーの良心と信念に基づくものである。ただ、在庫生産は好況時は完売できていいが、不況時には売れ行きが悪く、製品を大量に抱え込み資金難に悩まされ、経営を圧迫

する。それでも竹尾は在庫生産主義を曲げなかった。

このため、昭和四、五年ころまでの不況時には、在庫製品を鋳つぶさなければ新しい機械が造れないという危機にも襲われた。が、たまたま満州事変が起きて、大量の在庫製品が一掃され、やっと危機を脱した。

竹尾が明太郎の要請で唐津鉄工所に迎えられた時、二人の間でこんな経営方針が挙げられた。

一、他の同業者が製作を欲しないものを製作する。

一、他の同業者より、よい物を安く供給する。

一、先進工業国の新知識の導入に努め、国家を益する有意義な仕事をする。

一、一日も早く、現在の輸入機械の国産化を図る。真の国産化とは、独創の製品を輸出することである。

この四項目は、明太郎と竹尾の共通の理念でもあり、唐津鉄工所の経営のすべてを任せられた竹尾は、この理念を貫き、明太郎の期待に見事にこたえたのである。

明太郎は、唐津鉄工所に続いて設立する小松鉄工所でも、この四項目をそのまま経営方針として掲げている。

唐津鉄工所が創立されたころは、わが国の機械工業、とりわけ工作機械メーカーが相次いで勃興し、その黎明期であった。

わが国に最初に近代的な機械工場が登場したのは安政三年（一八五六年）ごろで、幕府が長崎の飽の浦に建設した長崎製鉄所といわれる。製鉄所といっても当時は製鉄だけでなく、造船や機械の製造までやっていたようで、同製鉄所も幕府が艦船の修理や改造を行う必要性から、溶鉄、造船、兵器製造（鉄砲）、機械製作などを目的に設立された。

工場設備はオランダから一括して購入したが、そのなかに中ぐり盤、平削り盤、ボール盤、ねじ切り盤、研削盤などの工作機械も含まれていた。これらのほか、オランダ人技術者、ハーディスと熟練工十人が派遣され、職工たちに技術指導を行った。これと相前後して、佐賀藩や薩摩藩が、やはり艦船の建造、鉄砲の製造、機械類の製作などを目的に、幕府と同じような機械設備を購入した。

結局、わが国の機械工業の発祥は、艦船の建造、鉄砲の製造が主であって、機械類の製作はそれらに伴うものであった。

明治に入って新政府は、幕府や諸藩が持っていた施設を引き継いだ。その中で、明治三年、殖産興業の中核として工部省が設置され、産業全体の近代化を推し進めることになった。この工部省の機械製作部門が東京芝・赤羽橋の旧久留米屋敷に「赤羽工作分局」として設置され、佐賀藩の機械設備が移設された。そして、イギリス人技師のダニエルを迎え、イギリス製工作機械や工具を導入、増設して面目を一新した。このころからイギリスの技術がわが国に入ってきた。この「赤羽工作分局」は、明治八年にはイギリス式旋盤を造り、二千錘（すい）の紡績機械を完成したりして功績を上げたが、同十六年に閉鎖した。

一方、民間の機械工場といえば、わが国で初めて機械を造った田中製造所である。経営者の田中久重は、久留米の出身で佐賀藩に招かれ、藩の機械工場で大砲や蒸気缶（ボイラー）をはじめ、旋盤まで造った。後に工部省の招きで東京へ出て、明治八年、田中製造所を設立した。ここでは、海軍の兵器や電信機器、工作機械などを製造、一時期は工員四百五十人を抱え、当時、民間では最大の機械工場に発展した。

機械工業が国防産業の礎にもなり、非常に重要であるということを認識させたのは、明治二十七年に勃発した日清戦争で、海外依存から脱却して国産化を盛んにすべしという機運が高まった。さらにこれを決定的にしたのが明治三十七年の日露戦争であった。

日露戦争の前年の明治三十六年に、大阪で第五回内国勧業博覧会が開かれた。これにアメリカ系のF・W・ホーン商会が工作機械、工具、器具など合わせて三千二百点を出品し、すべて実演してみせて国民を感嘆させた。これを契機に、わが国の生産技術は幕末のオランダ方式、明治初期のイギリスなどのヨーロッパ技術からアメリカ技術へと移っていった。アメリカは当時、既に大量生産を行っており、生産技術、生産管理、設備すべてが量産方式となっていて、ヨーロッパよりも進んでいた。そうした意味でもこの勧業博覧会は有意義な催しで、わが国の機械工業の飛躍の出発点ともなった。

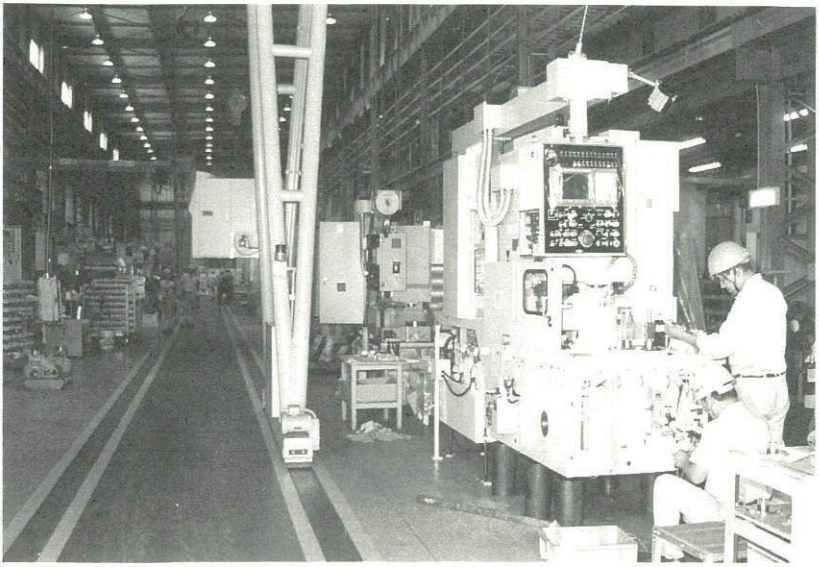
五大メーカーの一つに

田中製造所で機械づくりの修業をしていた池貝庄太郎は、明治二十二年に独立して池貝工場（後の池貝鉄工所）を設立し、同年にはイギリス式旋盤を初めて完成した。わが国の工作機械メーカーのはしりである。

この池貝工場に、東京高等工業学校で指導教官をしていたアメリカのプラット・アンド・ホイットニー社出身のチャールス・A・フランシスが技術顧問として入った。明治三十九年のことである。さらに、庄太郎の実弟で優れた技術者であった池貝喜四郎が加わり、フランシスと組んで工作機械づくりに励んだ。そして、東京高等工業学校からアメリカ式旋盤の受注に成功したほか、ドリル、カッター、リーマ、測定器などを次々と完成させた。

フランシスは、日本の機械工業発展のために多くの功績を残している。その一つは、豊田佐吉翁が発明した織機を商品化する目的で明治四十二年に設立した豊田式織機（現在の豊和工業）に呼ばれて行ったアメリカ式の生産方式や工場設備の技術指導。ちなみに、佐吉翁は大正十五年、豊田式自動織機を設立しているが、ここでのアメリカ式生産方式がトヨタ自動車の原点になったといわれる。

明治二十二年に設立された池貝工場に続いて、同三十一年には大隈栄一が製麺機を製造する大隈製麺機商会を設立、その後、大隈鉄工所として工作機械の製造を始めた。さらに、明治三十九年には明太郎



近代化された現在の唐津鉄工所の工場

が芳谷炭坑の付属工場として設立した唐津鉄工所も工作機械メーカーとして登場。また、日本石油の付属工場だった新潟鉄工所も同四十三年に工作機械メーカーとして独立した。同鉄工所の創立者の一人、笹村吉郎は唐津鉄工所の所長、竹尾年助と同じ東京高等工業学校（竹尾と同期）を卒業しており、同校の指導教官をしていたハーバート・A・スチーブンスを招いて技術指導を受け、旋盤などの工作機械を開発、製造している。

このように、明治の中ごろから末期にかけて工作機械メーカーが次々に登場し、わが国の機械工業の歴史に新たなページを加えた。ここに上げた池貝、大隈、唐津、新潟の各鉄工所に、東京瓦斯工業（明治四十三年設立）を加え、大正時代から昭和初期にかけての「工作機械の五大メーカー」といわれた。

唐津鉄工所のその後の推移をみると、昭和三十年

に初代の社長でもあった竹尾年助が引退して、その長男の彦己が社長に就任。さらに平成七年になって彦己は会長となり、現在、その長男の啓助が社長を引き継いでいる。

最近は、専用加工機類にも実績を上げ、シリコンウエハー加工機械、ＩＣ組立機械、ニューセラミックス加工機械など新分野を次々に開拓している。時代のニーズに即応した近代的な機械類の生産体制を確立しつつあり、伝統的な工作機械メーカーが、今や大きく生まれ変わろうとしている。

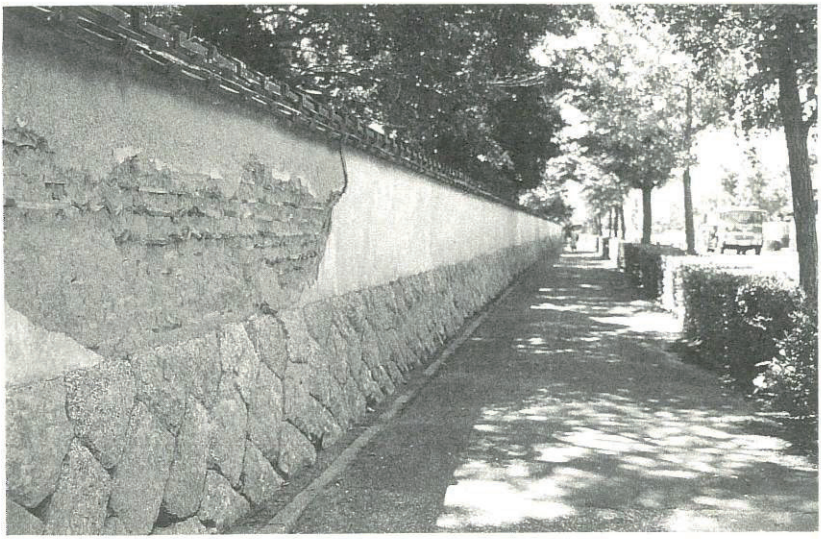
同鉄工所の現在の従業員数は約百七十人で、年商は約十五億円と中堅工作機械メーカーだが、伝統に支えられたその技術力は今も高く評価されている。中でも歯切り技術は世界の最高レベルとまでいわれている。明太郎が目指した「最高の技術で、最高の製品を造ること」という理念は今も生きている。

また、唐津鉄工所のオーナーでもある竹尾家でも、初代社長の年助はもちろんのこと、二代目の彦己、三代目の啓助も、ずっと明太郎の理念を貫いてきた。「技術の唐津鉄工所」といわれるゆえんでもある。

同鉄工所の応接室に入ると、創立者、明太郎の大きな写真が飾ってある。そのすぐ前には、竹尾年助を唐津鉄工所に紹介し、その後も人材を送り込んだ東京高等工業学校の手島精一校長のミニチュア像。

昭和十年に小松製作所が出した『竹内明太郎先生追憶集』に、竹尾年助が一文を寄せているので引用しておこう。

「明太郎先生は純潔にして聡明品行方正の師表たりし人であった。世人が逡巡、手を下し得なかった難事も、国家に必要と認めるや、平然と断行された。直轄の企業には用意周到を極められ、部下に任じた事業に対しては大度宏量をもって終始された。先生の行動は常に合理的であって、同時に崇高な情味に



明太郎が住んでいた広大な屋敷跡の一部。白壁がはげ落ちているところもある（唐津市内）

あふれていた。従って、その遺業は多く堅実な進歩発達をとげ、部下にあったものは永き歳月を経た今日においても、一段、敬慕の念に燃えている」

この文面からも、竹尾年助の明太郎に対する畏敬の念が伝わってくる。

ところで、明太郎は唐津が大変お気に入りのようであった。唐津鉄工所を設立した当時、鉄工所からやや離れた海岸に近い所に、三千坪を超える広大な屋敷を構えた。そして、日記にもあるように毎年夏になると東京から家族を連れてきてひと夏を過ごすことが多かった。時には、その屋敷に従業員を集めて観桜会や月見の会なども催していた。竹尾彦己会長が、まだ小学校のころの明太郎の思い出を語る。

「小学生の時だったが、はっきりと覚えている。庭に紅白の幕を張りめぐらせて、それは盛大な宴会だった。私も家族に連れられてその席に出させてもらったことがある。子供心に、あれが竹内さんとい

う偉いお人かと思った」

彦己は、その後、明太郎からボートをもらった。芳谷炭坑も三菱鉱業に売却し、唐津鉄工所の経営も彦己の父、年助に譲って、明太郎が唐津を引き揚げる時だったらしい。そのボートは、明太郎がよく家族たちと遊んだもので、それを彦己にプレゼントした。

「坊ちゃん、ボートをあげるよと言われた。竹内さんから声を掛けられたのも初めてだったし、それはうれしかった」

彦己は、今でも明太郎のその言葉をはっきりと覚えている。

明太郎は、広大な屋敷の庭で農園なども作らせていた。竹尾家は明太郎の屋敷のすぐ近くにあったこともあって、いたずら盛りの彦己は時々、留守を見はからって屋敷へもぐり込み、農園で栽培していたスイカやブドウなどを失敬して食べたこともあった。その広大な屋敷跡は今も一部が残っている。道路に面したところには、白壁のへいがずっと向こうまで続いている。二百メートルはあろうか。ところどころ白壁がはげ落ちている。明太郎が唐津を引き揚げた後、半分ほどを芳谷炭坑の共同経営者だった高取伊好が買い取り、今もその子孫が所有している。残りの一部は、その後、市が購入し臨時に駐車場などとして利用しているが、広大な屋敷も今はわずかに昔のおもかげをとどめているにすぎない。

小松鉄工所の設立

明太郎は佐賀県の芳谷炭坑の付属工場として唐津鉄工所を設立したように、石川県小松市の遊泉寺銅山にも、いずれ鉄工所を設立しようと考えていた。

「炭坑と同様に、銅山も資源は有限であり、いつかは鉱脈がつき閉山に追い込まれる。その時に従業員はどうなる。そして、この地域は――。だから、それ以前に手を打っておかなければならない」

唐津鉄工所がそうであったように、炭鉱や鉱山などの付属工場から発展して、異業種にも適用する汎用性の高い工作機械などの新製品を開発し、生産、販売する鉄工所の設立事例はほかにもあった。

例えば日立鉱山もほぼ同じ時代に日立製作所を設立している。同所の場合は工作機械ではなく、電気機械類の開発、生産、販売を始めている。その背景には、当時、国内でも工業技術の進歩が著しく、また市場でも一定の成熟があり、そうした新製品を受け入れる素地ができていた。唐津鉄工所も明太郎がそうした時代背景をもいち早くとらえ、芳谷炭坑の付属工場としてだけでなく、異業種向けの工作機械類の開発、生産に着手しているのである。

明太郎が遊泉寺銅山で当面、鉱山用機械を製作する目的で小松鉄工所を設立したのは大正六年一月である。唐津鉄工所から遅れることちょうど十年。

大正三年に第一次世界大戦が始まると、わが国には諸外国から各種の物資の注文が殺到し、産業は目

覚ましく発展した。しかし、なお工業技術は欧米先進国に比べて相当に立ち遅れていた。明太郎は、明治四十五年三月から約五カ月間、二度目の外遊をする。この時は、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、スイスなどの工業事情を視察し、帰国の時、開通して間もないシベリア鉄道をわざわざ利用している。モスクワとウラジオストクを結ぶこのシベリア鉄道建設工事はウラジオストクとウラル山脈東側のチェリヤビンスクの双方から進められたが、言語に絶する難工事だったといわれる。最大の難関は工事を阻むように横たわるバイカル湖で、結局、この湖をう回する路線の開通を急いだ。

そして、旧満州領内の通過を清国政府に承認させ、東清鉄道と結びつけ、ついに全長八千三百十四キロのシベリア鉄道を完成させた。日露戦争では、この鉄道で大量の兵員、物資がヨーロッパ、ロシアから極東に輸送されたという。

何事にも強い興味、関心を示す明太郎が、西欧先進諸国の工業事情を視察した帰りに、ロシアからシベリアを経由したのは、完成間もないシベリア鉄道などロシアの交通事情を視察するという目的を持っていたことが十分に考えられる。

ともかく、明太郎は、この時に改めて西欧先進国とわが国との工業技術水準の大きな格差を実感した。そして、機械工業の役割に対する認識をさらに深め、唐津鉄工所を自立させる一方で、新たに小松鉄工所を開設することにした。

小松鉄工所の構想にも「地方産業の発達に寄与する趣旨で、農村地域に工業を興す」という考え方を織り込み、その用地をあえて遊泉寺銅山に近い当時の能美郡小松町（現在・小松市）に求めた。

明太郎の「大都市にでなく、地方にこそ工業を興すべきである」という従来からの理想、哲学が一〇〇％この小松鉄工所に集約された。

明太郎は小松鉄工所の開設に備えて、大正五年の初めから機械、冶金技術者を欧米に派遣し、最新の技術、知識を吸収させた。遊泉寺銅山の所長、岩井興助には、アメリカで設備機械の研究と冶金製鋼業の調査研究を、また、明太郎も出資していた快進社の社長、橋本増次郎を工作機械の実情を調査させるため、やはりアメリカへ派遣した。

明太郎はこれと相前後する形で長岡乙次郎に電気機械技術、滝川廉雄に電気冶金、山下誠太郎にディーゼルエンジン鍛圧機のそれぞれ研究のためアメリカへ。さらに、真野官一をモスクワへ。矢野政義をアメリカとヨーロッパへ次々に派遣し、必要な工業技術の調査、研究をさせた。そのための資金を惜しげもなく投入した。一方で、先発した唐津鉄工所からも必要な人材をどんどん送り込んでもらった。だから、当時唐津鉄工所と小松鉄工所は兄弟会社のような関係にあった。このように小松鉄工所は当時とすれば、これ以上ない技術陣を擁してスタートしたのである。

明太郎は小松鉄工所の事務所として、遊泉寺銅山専用鉄道の起点（現在のＪＲ北陸本線・小松駅付近）にあった同銅山小松出張所を用いた。この出張所は、明太郎が遊泉寺銅山へ行く時に、銅山行きの専用鉄道に乗るためよく利用した場所である。小松鉄工所はこの出張所に隣接して約二百坪単位の工場を三棟建てた。その第一棟を機械工場、二棟目を鋳物工場、もう一棟を鍛造、木型工場兼事務所にあてた。実は、この工場のレイアウトは、唐津鉄工所の竹尾年助所長が、アメリカへ調査研究に行った際、唐津

の工場用に、現地の建築設計事務所に依頼して製作してもらったマスタープランだった。だが、この設計図は当時の唐津鉄工所の資金事情などから同鉄工所には生かすことができず、倉庫に眠ったままになっていた。

明太郎が唐津鉄工所から取り寄せたこの設計図は、思いもよらぬ形で日の目を見ることになった。この新工場が後に同鉄工所の生産効率を大幅に向上させることになる。

同鉄工所の初代所長には明太郎とも親しい快進社の社長、橋本増次郎が兼務で就任した。かくして、小松鉄工所は大正六年一月から操業に入ったのである。

自信の持てる製品を

小松鉄工所はかつて唐津鉄工所が竹内鉱業の翼下の芳谷炭坑で使用する鉱山用機械の補修、製造を当面の業務としたように、遊泉寺銅山の機械類の補修、製造を目的に設立されたものだが、やはり発展的に新製品の開発を行うようになる。

もちろん、同鉄工所でも明太郎の理想が強く打ち出された。「自信の持てる製品ができるまでは外部への販売は行わない」ことを基本方針としたのである。同所は、もっぱら自家用高級工作機械と鉱山用機械を生産していたが、その製品の外販を始めたのは、設立、操業開始から三年が過ぎた大正九年のことである。

明太郎は、実際に事業を進めるにあたって次のような心得を述べている。

一、事業の施設はすべからく無駄なきものに。
一、製品は欠点なき完全なものに。
一、研究は一時も怠ってはならぬ。
一、人の養成は将来を考えて努めて多く。
一、なるべく人の手を下さぬものを。
一、将来、国産化の見込みをつけて輸出の方途を見極めよ。
一、儲けはその次でよい。

この経営上の心得は非常に簡潔、明りょうで、しかもいつの時代にも通用する経営の哲学とも言えるものであろう。

小松鉄工所では、当初から機械部品に至るまで必要な鋳物は、その素材まで厳選した。機械加工では、現場合わせの非能率を避けるために、設計図は一品一葉方式によることとした。部品の互換性を保たせるためにリミットシステムを採用。さらに加工度を高めるために、機械工場には唐津鉄工所製の旋盤、平削盤、形削盤、ボール盤、万能研磨盤、工具研磨盤をはじめ、アメリカから輸入したシンシナチ万能フライス盤、ランツ研磨盤、アクメ・ターレット旋盤など、すべて一流品を備えた。ほかにも、鋳物工場には三トンキューポラ、鍛造工場には四分の一トンエアハンマーをそれぞれ新設している。

運営面では、唐津鉄工所からアメリカのプラッド・アンド・ホイットニー社で技術研修を積んだ技師を

招き、カードシステムによる原価計算方式を採用した。技術指導には欧米の技術研修に派遣された橋本らそうそうたる技術者があたっている。最新の設備で、最新の技術開発を最高のスタッフの指導で行う。万全の体制でのスタートである。いくらかでも先進工業国との差を縮め、それらの技術水準にまで近付づけようという明太郎の意気込みが感じられる。

電気炉製鋼の草分け

明太郎は炭鉱、鉱山での機械使用や鉄工所での工作機械製作の経験に基づいて、国産機械が欧米の機械に劣るのは技術面だけでなく、鉄鋼素材の材質が悪いことが大きな理由であると悟っていた。また、機械、工具用などの特殊鋼鋼材の重要性を痛感し、その国産化を計画した。

そのため、大正五年末にレンナフェルト式二分の一トン電気炉をアメリカに注文した。しかし、この電気炉は第一次大戦のため輸入が不可能となった。それでも特殊鋼鋼材の国産化をあきらめなかった明太郎は、大正七年、組立図によって同型電気炉の自家製造に乗り出すとともに、小松鉄工所に隣接して工場および事務所（約二百坪）を新設し、特殊鋼鋼材の研究試作を始めた。

この工場が竹内鉱業の小松電気製鋼所で、所長は遊泉寺銅山の所長、岩井興助が兼任した。ところがそのころはまだ特殊鋼鋼材の需要は少なく、それに資金難もあって圧延設備の調達ができなかったので、方針を変更して機械の重要素材でありながら開発の遅れていた鋳鋼の研究に力を注いだ。

そうこうしているうちに第一次大戦が終わり、大正八年、アメリカからレンナフェルト式二分の一トン電気炉の輸入が実現した。このため自家製のものと合わせて二基の電気炉で鋳鋼の生産を開始した。

当時わが国の鋳鋼メーカーは十数社を数えたが、いずれも平炉、または小型転炉によるもので、電気炉鋳鋼はそれらの鋳鋼に比べて品質が優れていた。こうして電気炉鋳鋼は、電気製鋼所（後の大同特殊鋼）と小松電気製鋼所が日本の電気炉製鋼の草分け的な役割を担うことになるのである。

そのころ小松電気製鋼所は月二十～三十トンの生産量を上げていたが、橋本が経営する快進社からの注文に応じるくらいで、外部からの注文はほとんどなかった。このため自社の鉱山で使用する鋳鉄車輪を耐久性に富む鋳鋼製にしたり、自家用の鍛鋼部品を安価な鋳鋼製に代えるなど、鋳鋼の研究開発に努めた。従って、当時は工場というよりは研究所のような形で運営されていたのである。しかし、この時の鋳鋼研究が、後に「鋳鋼の小松」といわれるほどの高い信頼を集めることになる。

新生・小松製作所

小松鉄工所が設立され、研究、開発した製品に自信が持てるようになり、外販方針を打ち出したのは三年後の大正九年になってからであったことは先に触れた。同鉄工所が三年間も自家製品の製作と新製品の開発に時間をかけたのは「製品は欠点なき完全なものを」という明太郎の経営方針によるものである。それに、当時、親会社的な存在であった唐津鉄工所の経験豊かな技術陣の指導、協力などによる技



小松製作所の旧本社社屋。平成８年秋に取り壊され、復元の計画がある

術移転にも、ある程度の時間は必要であったろう。しかし、小松鉄工所が外販方針を打ち出した時期とタイミングが悪かった。そして、大きな転機が訪れるのである。

大正七年に終結した第一次大戦の反動から、大正九年ごろの日本経済は深刻な不況に陥り、整理段階にはいっていた。このため、竹内鉱業やその関連企業は、いずれも経営不振で事業規模の縮小も避けられない状況に至った。そこで、明太郎は小松鉄工所の分離独立を考えた。企業として独立させ、独自に採算ペースを追及させる道を選択したのである。分離独立の準備作業は、大正十年一月から始まり、同年四月に新会社となる小松製作所の設立総会を開催、五月十三日には新会社の設立登記を完了した。この日が、事実上、小松製作所の誕生の日である。

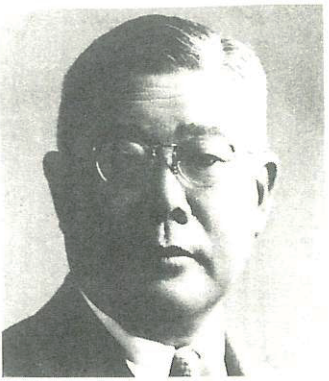
小松製作所の発足時の資本金は百万円（株式の額面百円、一万株）で、うち払込金は五十万円。株主

と所有株式は、次の通りだった。

竹内鉱業九千株／竹内明太郎二百株／白石多士良百株／橋本増次郎百株／松本俊吉百株／田中哲四郎百株／吉岡八二郎百株／西尾輝治百株／竹内強一郎百株／岩井興助百株／計一万株

役員は、取締役社長に白石多士良、専務取締役に橋本増次郎（快進社社長）、取締役に田中哲四郎（元唐津鉄工所工作部長）、吉岡八二郎（竹内鉱業技師長）、監査役に松本俊吉（竹内鉱業取締役支配人）。明太郎は相談役に就任した。

出資者の一人、竹内強一郎は明太郎の長男。この時にはまだ東京大学を卒業しアメリカに留学中だったが、明太郎は息子の将来を考えて布石を打ったのだろうか。あるいは単に身内の強一郎の名前を使っただけなのか。ともかく、新生、小松製作所は、これらの役員六人と、従業員百二十一人、総勢百二十七人で、小規模ではあったが歴史的な第一歩を踏み出したのである。



小松製作所の初代所長、白石多士良

初代社長となった白石多士良の父は直治で、母の菊が明太郎の妹になるので、多士良は明太郎の甥ということになる。

ここで多士良の父、直治について触れておこう。直治は高知県南国市の出身で、東京大学理学部土木工学科を卒業すると、明治十六年に文部省から外国留学の辞令を受け、アメリカの工科大学で学び、橋梁会社や鉄道会社で研修を積んで帰国した。直ちに東

京大学の教授に迎えられたが、鉄道工学の権威として、三十三歳の若さで関西鉄道株式会社の社長に就任している。関西鉄道が完成すると、九州鉄道や築港関係の役員、社長も歴任した。この間、石炭埠頭の機械化、浮船梁の選定、輸入など、明治時代では最先端技術の成果を次々と生み出した。さらに、明治四十三年には猪苗代水力電気株式会社の専務として同発電所と高圧送電線の建設を主導し、首都の主要電源となる同発電所の完成にも貢献した。

直治は明治、大正のわが国土木界を代表する大学者、大事業家だったが、晩年は政界でも活躍した。忘れてならないのは、高知県民の宿願でもあった四国鉄道の土讃線の建設促進にも政治家として、国会の内外で尽力し、大正七年の鉄道敷設法改正によって、同線を第一期線に編入することに成功するなど、土讃線建設の大恩人でもあることだ。

直治の息子（長男）で小松製作所の初代社長となった多士良も、父、直治に負けない経歴を持っている。多士良は、明治二十年十月、東京神田駿河台の竹内家で生まれている。母、菊との関係であろう。旧制一高、東京大学理学部土木科を卒業後、鉄道院に就職。大正七年に辞職して、土木工事の視察のためアメリカに留学した。帰国後の大正九年には、アメリカから機械を輸入する東京商業貿易株式会社の経営に参画した。その翌年の大正十年に姻戚関係にある明太郎から強い要請を受けて、小松製作所の初代社長に就任したのである。

多士良はその一方で、アメリカへ渡り先端技術を学んだ。その成果の一つが圧気潜函工法といって、ニューヨークの超高層ビルに採用されていた特殊な基礎工法である。当時、ニューヨークの摩天楼の大

多数が圧気潜函を基礎とする構造で、多士良はその工法のような最先端技術をじっくりと研究してきた。

圧気潜函工法は、欧米では十八世紀後半から橋梁基礎など、大規模な構造物基礎に実用化され、明治二十二年に完成したパリのエッフェル塔の基礎の一部にも、この工法が採用されている。

大正十二年十月、東京を襲った関東大震災の復旧工事の際、この工法は一気に脚光を浴びることになる。

多士良が関東大震災を知ったのは、アメリカからイギリスへ渡る大西洋航路上で、予定を繰り上げ帰国の途につくが、当時のことで帰国したのは十一月末になっていた。帰国すると多士良は、震災局土木部長をしていた一高、東大の先輩である同じ土木技術者の太田円三郎に要請され、崩壊した隅田川など多くの橋梁の再建にアメリカから圧気潜函工法を導入する交渉役を命じられる。技術指導の技師の招へいと、必要なケーソン用機材の導入など輸入を進め、隅田川に圧気潜函工法による橋を次々に架けていった。

関東大震災の復旧工事に用いたこの圧気潜函工法は、その後、新潟県や愛知県など全国に波及し、わが国の橋梁基礎に大いに貢献した。後に圧気潜函工法を中心にした白石基礎工業を設立（昭和八年）するのである。

小松製作所の本社は、それまでの小松鉄工所の所在地である石川県能美郡小松町八日市町（現在の小松市）のものをそのまま引き継いだ。新会社の設立を機会に、その拠点を地方から東京、大阪などの大

都市に移転することもできたが、明太郎は新生、小松製作所のスタート地点として、あえて小松町を選んだのである。

明太郎は佐賀県の唐津市に唐津鉄工所を設立した時も、芳谷炭坑との関係もあってやはり地方に創設してそこから動こうとしなかった。「なぜ地方なのか」――それは、明太郎の独自の経営哲学である。明太郎はその理由を五つ挙げている。

一、その地方に受けた寄与に報いんがため。
一、鉱山廃止後におけるその地方の衰退に影響をきたらしめんため。
一、優秀な製品、理想的な製品は、特殊な技能ある工手を要す。これには純朴で質実なる地方の子弟を訓練養成すること最良とするため。
一、国家的見地より、工業の地方分散主義などを主として考え、その地を適当とする。
一、良品に国境なし、いずれにおいて製作するも問題とならない。

これらが唐津鉄工所と小松鉄工所を、それぞれ鉱山に隣接する地方都市に置き、そこを出発点とした原点であった。さらに、明太郎は、小松鉄工所を設立、新生、小松製作所も小松から動かさなかった理由として四点を指摘している。

一、竹内鉱業遊泉寺銅山に近く、施設、物資、人員など相互の便益が保たれる。
一、北陸線、小松駅にも隣接し、引き込み線による資材の搬入、製品の輸送が便利である。
一、純朴、質実で、しかも定着力のある地方農村出身者の子弟の採用および育成が期待できる。

一、手取川流域を中心に北陸一帯にわたって水力発電所の開発が有望で、電気製鋼事業に不可欠な豊富で安価な電力の供給が期待できる。

特に、小松周辺地域における労働力の質の高さに加え、水の豊富さを重要視していた。明太郎が地方都市に固執した五つの理由と重ね合わせて考えると、明太郎の経営理念がはっきりと見えてくる。

わが国では最近、事業所、工場、そして人口などの大都市への集中、過密化の弊害が顕著になってきており、逆に地方分散が強く呼ばれるようになった。そして、現実に企業の大都市からの撤退と地方への分散という現象がみられるが、明太郎は、既に、明治、大正の時代にそのことを予見していたともいえよう。

それと、明太郎は小松製作所の究極の理想を国産機械の輸出に置いていた。明治三十三年、パリの万国博や欧州諸国を視察し、それらの先進工業技術に追いつき追い越すことが、日本の国力を豊かにする最善の道であるという執念にも似た思いが、この小松製作所の経営理念に集約されている。

そして、この経営理念は、いずれも単に自社の業績を上げ、規模を拡大するなどというものではなく、一地域、一企業の枠を越えた国家的な見地からの発想である。これらは、そのまま現代の経営にも通ずる。困難への挑戦、独創性のある製品の開発、国家的な利益の追求、国産品の輸出を究極の理想とするなど、明治の先覚者としての明太郎の気概がうかがわれる。

発足時の小松製作所は、遊泉寺銅山から種々の物資、施設、人員を受け継いだ。また、翌大正十一年

四月には、竹内鉱業小松電気製鋼所の電気炉などの設備資産を吸収した。

そのころ、鋳鋼の需要増加に応じて小松電気製鋼所の拡張が計画されたが、機械加工や鍛造などの付帯作業設備は小松製作所のものを活用すれば重復が避けられたので、この措置がとられたのである。

これによって、機械を製作する鉄工所と、素材の鋳鋼を生産する電気製鋼所とが一つの経営のもとに置かれ、小松製作所の特色である鋳鋼・機械加工と組み立てまでの一貫生産体制が芽生えた。これが、後に小松製作所が全国から世界にまで飛躍していく原動力になった。

特に、鋳鋼部門は「薄物、小物など手の込んだ鋳鋼は小松」という高い評価を受けることになる。創業当初こそ機械部門は不振をかこったものの、鋳鋼部門は好調を保ち、機械部門が軌道に乗るまで小松製作所の屋台骨を支えていく。

いずれにしろ、この鋳鋼部門の内製化が鋳鋼部品の多い農耕用トラクターを生み出し、このトラクターの改造から昭和十八年のわが国初のブルドーザーの誕生へとつながっていく。

小松製作所の創業は、「工業技術の発展こそ国家の発展」という明太郎の理想への企業像が凝縮されたものであり、その理想を追い求めるが故に経営的に厳しい状況が続いたといえる。しかし、明太郎の哲学からすれば、「それは当たり前のことで、それを気にしているようでは工業技術の発展、国家の発展は望めない」――ということになるのだろう。

創立直後の不況

第一次大戦中、飛躍的に伸長したわが国経済も、戦後は大正九年の株価暴落をきっかけに一挙に不況に突入した。そのうえ、小松製作所創立後の大正十一年二月に成立したワシントン軍縮条約や、同十二年九月の関東大震災などの影響が重なったため、産業界は沈滞から抜け出ることができず不況は長引いた。

小松製作所は不況の中でも、高マンガンの研究、小物、薄物鋳鋼品の製作、高級機械部門への進出など、事業内容の点ではその特色をよく発揮し健闘したが、第一次大戦後の長期不況で経営的には振るわず、創立者の抱負、理想を実現するにはほど遠い状況にあった。加えて、親会社の竹内鉱業も大資本の背景を持たず、中小炭鉱、鉱山をかかえているに過ぎなかったので経営は苦しく、運転資金の捻出にも苦労する状況で、その支援を得ることもできず、小松製作所も財務、金融面で行き詰まってしまう。

同製作所は、深刻な不況からの脱出を図るため、経営陣のテコ入れを行い再建の道を探ることになった。その目玉は、財界に幅広い人脈を持ち、専務取締役、岩井興助の親友でもあった中村税（みつぎ）を役員に迎え入れることであった。

中村は明治の後半、日本郵船ロンドン支店長を務めた後、帰国して猪苗代水力電気株式会社の創業に参画、後に同社が東京電灯株式会社に合併された際、東京電灯（東京電力の前身）の役員に就任した。

その時の猪苗代水力電気の社長は、高知県出身の仙石貢(後の満鉄総裁)、専務がやはり高知県出身の白石直治であった。直治の息子、多士良が小松製作所の社長で、直治と明太郎は義理の兄弟にあたる。中村を小松製作所の役員に迎え入れる背景には、こうした関係もあったのである。

新役員人事を決める臨時株主総会が開かれたのは大正十四年十月で、社長の白石多士良が会長になり、社長は当分空席とし、専務取締役に従来からの岩井と新加入の中村が就任することになった。会長となった多士良は、その後も経営に参画し続け、会長から監査役などを歴任し昭和十八年に退任するまでの約二十三年間、小松製作所の役員を務めた。同社の草創期を築いた一人である。多士良は、また白石基礎工業の社長としてもわが国の基礎工事技術の発展に大きな役割を果たしている。

新人事の結果、小松製作所の実質的な経営は、中村の手に委ねられた。中村は専務に就任すると財界での顔の広さを存分に発揮し、さらに財界の大物たちを役員に加えることによって資金運用面の強化を図る一方で、経営方針も明太郎の理念を踏襲する方向で進めた。つまり、小松製作所伝統の技術優先をさらに徹底し、経営基盤の確立、拡大を積極的に図った。

中村は、技術者の養成という点でも明太郎の理想を引き継いだ。現場の技術者を東北大学金属材料研究所に派遣し、高マンガン、銅、ステンレス鋼の材料研究を進める一方、東京など都会地の優秀な工場へ技術者を派遣し、研修にあたらせた。明太郎が昭和三年三月、病気で亡くなった後も、明太郎の意志をきちんと引き継ぎ、小松製作所の経営再建に全力を挙げた。そして、昭和九年に専務を兼任のまま社長に就任し、太平洋戦争後までの経営をあずかることになる。

強一郎の入社

そのころ小松製作所には、明太郎の長男、強一郎が入社して、同社の再建に努力していた。

強一郎は、明治二十七年十二月二十九日に生まれた。明太郎が亀井と結婚して三年後である。そして、大正九年に東京大学電気工学科を卒業し、アメリカ・ダウトマス大学院へ留学する。大正十二年七月に帰国しているが、この留学も欧米先進諸国に大勢の留学生を私費で研修に出している明太郎の強い意志が働いていたのであろう。強一郎は帰国後、小松製作所に入社するが、明太郎が亡くなった昭和三年にいったん退職する。



小松製作所の専務取締役などを務めた竹内強一郎

父、明太郎が創立した小松製作所に強一郎が入社したいきさつや、退職した時の事情など詳しいことは分からない。

強一郎は、小松製作所を退職すると横浜高等工業学校（現在の横浜国立大学）の教授となり、昭和九年まで電気工学の教鞭をとった。強一郎はダウトマス大学院でマスターズオブサイエンスの称号を受けており、電気工学の分野では当時、一級の研究者の一人に挙げられていた。

強一郎は昭和九年、突然横浜高等工業学校を退職して再び小松

製作所に入社する。学校側では再三にわたって慰留したが、強一郎の意志は固かった。このとき三十九歳である。父、明太郎が他界して六年が過ぎている。不況打開のために招かれた中村税専務が社長に就任し、本格的に経営を引き継いでトラクターの開発、製造に全力を注いでいた。

強一郎は父、明太郎が健在だった時に入社し、死去とともに退社。教授に転向して六年後に、再び小松製作所に戻った。やはり「父が興した会社であり、それが経営不振の打開に懸命に取り組んでいる。息子として、何か役に立ちたい」――そんな気持ちがあったのではないか。もちろん、中村社長からの勧誘ということも考えられる。強一郎の輝かしい経歴からしても、小松製作所での活動の場は十分にあったはずで、彼も自負を持っていたのかもしれない。

東京在住の強一郎の長男、啓一（一橋大学名誉教授、駒沢大学教授）は「父がなぜ小松製作所に入ったのか。また、一度、退社して再び戻ったのか。そのへんがどういう心境だったのか、どうしても分からない。そのことについて、父は何も言ってくれなかった」と言う。

また、強一郎の妻で今も健在の靖子（東京・武蔵野市在住、土佐市出身）は「いつか、小松製作所で働いていたら、父から『親の光のあるところで働くな』と言われて小松を辞めたと話したことがある。その強一郎が、父の亡きあと、なぜ教授の職を投げ打ってまでして、再び小松へ戻ったのか。その時も何も言ってくれなかった。学校を辞めて小松に戻ることは事前に全く知らされていなかった。ある日、突然、『これから小松へ行く』と言っただけで、その時には、強一郎はもう小松で働いていた」と語っている。

これは推測にすぎないが、当時の中村社長が創立者の子息、強一郎の将来を思い引き戻したのではないか。中村社長が強一郎を小松製作所の工場長という要職をもって迎えていることからしても、それは考えられる。強一郎は創立者の子息といっても、電気工学の分野ではわが国でも一級の学識者で、実力は十分。実際に、強一郎は工場長として、その能力、実力にふさわしい活躍をするのである。

強一郎が再入社した昭和九年は、小松製作所にとっても新しい第一歩が始まりつつある年でもあった。その年の七月には東京株式市場に、翌十年一月には大阪株式市場にそれぞれ上場を果たし、一流企業としての地歩を着々と固めていったのである。

強一郎が工場長に就任してから、トラクター生産用に新規に粟津工場（現在の小松市符津町）の建設計画が持ち上がった。強一郎は、その最高責任者として、施設計画に加わっている。当時の小松製作所は、昭和六年の満州事変の勃発を境に軍需産業のニーズが高まり、活況をみせはじめていた。この満州事変は、昭和十二年の日中全面戦争への引き金となった。昭和十三年には、軍の管理工場の指定を受けた。粟津工場建設は、満州開拓を主眼に置いたトラクターの開発であった。当時、粟津工場は小松市郊外の敷地四万三千坪という大工場で、昭和十四年からトラクター、農機具の生産が始まった。

昭和十二年七月に起こった日華事変が長期化するにつれて、わが国の戦時体制色は次第に深まった。同十四年には第二次大戦が勃発し、それにつれて小松製作所も軍需の伸びで順調な業績を上げていった。太平洋戦争が始まった昭和十六年以降も軍需は衰えなかった。こうしたなかで、海軍からブルドーザー生産の指示を受け、わずか一カ月で製造した。その組み立てが粟津工場で行われたが、これが国産ブル

ドーザーの第一号となった。小松製作所が戦前に開発、製造したブルドーザーは約三百台におよび、後に「ブルドーザーの小松」といわれるようになった。

強一郎は、昭和十六年に小松製作所の専務取締役に就任する。中村税社長の片腕として経営の一端をになう立場になったのである。

小松製作所は、戦時中、日本工業界において先駆的なメカトロニクス設計を実行したが、電気工学の権威といわれた強一郎があらゆる意味において電気関係のすべての領域で指導的な役割を果たした。電気工学の専門家で、実業家というよりは学究肌の強一郎は、終戦から戦後の動乱期、小松製作所の厳しい経営の舵取りに立ち向かうことになる。

昭和二十年の終戦に伴い、軍需産業の存立基礎が崩れ、小松製作所にも厳しい時代がやってくる。会社の休業、従業員の解雇などである。小松製作所の戦後の再出発にあたって、重要なポイントを握ったのがトラクターである。政府は戦後の食糧難解決策として「開拓五カ年計画」を立て、全国で百五十五万ヘクタールの新規農地を開墾することを決定した。この計画に飛びついたのが小松製作所で、トラクターの生産によって再出発のメドが立つからである。

昭和二十年十一月、中村社長はかねてから親しくしていた農林事務次官の河合良成を訪ねて相談した。その時、河合から「開拓五カ年計画」を知らされ「トラクターを作ったら」と示唆されたのである。

小松製作所は、ただちに企業活動再開の準備に入った。その実質的な指揮をとったのは専務取締役の

強一郎だったのである。そして、小松製作所は農林省からトラクターの受注を受け、生産準備にかかった。

ところが、そのころ日本中で吹き荒れていた労働運動は、小松製作所でも組合の先鋭化で経営側と対立した。しかも、頼みのトラクター生産がＧＨＱからトラクターへの燃料の供給停止命令が発動されるという二重の不運に見舞われ窮地に陥った。

先鋭化した労組との交渉にあたったのが、強一郎ともう一人の専務、真野官一だった。強一郎ら会社側は、柔軟な姿勢で交渉に臨んだが、組合側は要求を譲らなかった。強一郎らは心身の疲労から倒れ込む場面もあったという。

そのころ会長となっていた（社長は空席）中村は、労使闘争で閉塞状況になっていた事態の打開策として、同郷（富山県）の仲で親しかった河合良成（レットパージで厚生大臣を引退させられて間もない時期）の招へいという決断を下す。

河合は、戦後の小松製作所がトラクターの製造によって再出発を期すきっかけを与えた。中村は河合にまず小松製作所の相談役の肩書きを与えて組合側との交渉の席についてもらった。河合の登場で「百日闘争」と言われたさしもの労働争議も解決の端緒をつかみ収拾、ただちに生産が開始されたのである。

小松製作所にとって救世主ともいえる河合は、昭和二十二年、臨時株主総会で空席だった社長に就任した。小松製作所に吹き荒れた空前の労働争議の収拾をきっかけに、経営は河合社長の手に委ねられた

のである。

こうした中で経営陣に大きな異動があった。河合の登場まで厳しい労働組合の攻勢に対抗し奮闘した強一郎は、新体制になって経営の中枢から遠ざかっていった。昭和二十四年八月、小松製作所が神奈川県相模に相模作業所を開設。小松からは強一郎が責任者となって同作業所へ赴任した。約百人の従業員も一緒に転勤してきた。

この作業所は、在日米軍が破損した重機械類を修繕する目的で開設したもので、小松製作所と日立製作所が共同受注し、両社の共同事業としてスタートした。

相模作業所は、在日米軍の重機械類の修繕が目的とはいえ、小松製作所にとっては、中央進出の足がかりを確保しようという河合戦略の一つでもあった。同作業所は昭和二十六年一月には、小松製作所と日立製作所の共同出資によって相模工業株式会社として新発足し、強一郎は当初、専務に就任、同三十四年からは社長として新会社で腕をふるったが、昭和四十二年、七十三歳で経営の第一線を退いた。

彼は平成元年、八年余りの闘病生活の末、神奈川県茅ケ崎市の自宅で九十四歳の天寿を全うした。

物静かで実業家というより学究肌だった強一郎には、戦時から戦後の混乱期に小松製作所で経営の中枢にいて懸命に経営改善に取り組んだが、必ずしも思ったようには進まず、無念も残ったのではないだろうか。

平成二年に出された追悼記『強一郎さんを偲んで』には、大勢から思い出が寄せられているが、元小松製作所副社長の佐久間志郎は次のような一文を寄稿している。

「小松製作所入社のため、氷雨降る北陸の地、小松を訪れてご挨拶してからは、一貫して竹内さんは清く澄んだ泉のようなお人柄であった。高く位置して座っておられた時も、危機に臨んで率先陣頭に立たれた時も、この印象に変わることはなかった。特に、昭和二十年、終戦直後の動乱の時代、小松にあって激しい労使交渉のいわゆる百日闘争の時、その温容と言動で労組の激しい行動を治められたことが思い出される。横浜高等工業の教授から、父上で小松製作所の創業者、明太郎氏の後を追って製作所の発展に尽くされ、戦後は一転して相模工業のリーダーとして日立製作所とともにその活動に采配を振るわれた。その間、あの清澄な人柄に社員の全てがその命令に喜んで従い働いた日であった。最後にお目にかかったのは茅ケ崎のお宅であったが、庭先に自らの発案と思われる装置で噴水の上にボールを躍らせ、これを見つめておられたあの澄んだまなざしが忘れられない。今、あの澄んだ天上の泉の中で何を見つめているのだろうか」

強一郎という人物が語り尽くされている。

強一郎は亡くなる少し前、妻の靖子に「この世の中で、やりたいことはすべてやらせてもらった。みなさんもよく協力してくれた。もう思い残すことはない。感謝しているよ」と言い残した。

昭和四十二年三月、強一郎が経営の第一線から退いたことによって、創業者、竹内明太郎の直系は小松製作所にはいなくなった。しかし、明太郎の理想は後継者たちによって引き継がれていく。

「世界のコマツ」へ

「欧米各国に負けない工業製品の生産と輸出を」――小松製作所の創業者である明太郎が追い求めたこの理想は、太平洋戦争後の混乱の中でも、河合良成の登場でしっかりと受け継がれる。

河合は、再建の第一歩として昭和二十六年八月、本社機能を東京に移す。その年の十一月には鶴見工場を建設。翌二十七年には池貝自動車製造を吸収合併し、川崎工場として稼働させた。

これら一連の企業行動から、小松製作所の中央進出戦略がはっきりと読みとれる。単に「北陸の小松」ではなく、「日本の小松」、そしてさらには「世界の小松」を目指す河合のグローバル志向で、その発想は明太郎の理念と見事に一致する。

小松製作所のグローバル戦略にとって最も大きな試練となったのは、政府が貿易為替の自由化を打ち出したことから、機械類の輸入の自由化が進んだことである。それが昭和三十五年に始まる「ブルドーザーの巨人」キャタピラー社の日本上陸で、翌三十六年春からわが国への資本進出を本格化させた。同三十七年には、新三菱重工業株式会社との合併で新会社を設立する計画が発表され、わが国の建設機械業界に大きなショックを与えた。とりわけ、小松製作所の受けた衝撃は大きかった。キャタピラー本社が本格的に日本へ上陸してブルドーザーを生産すれば、小松製作所は三年で沈没するだろうとさえいわれた。



小松製作所のメーン工場の一つ粟津工場（小松市符津町）

このキャタピラー社の進出に対して、河合は政府に猛烈な反対運動を展開した。その一方で、キャタピラー社の製品に負けないブルドーザーづくりを徹底的に進めた。キャタピラー社の進出をできるだけ遅らせ、その間にキャタピラー社が上陸しても質的に絶対に負けない製品づくりを進めたのであった。

その結果、新会社キャタピラー三菱株式会社の設立認可は引き延ばされ、その間に小松製作所の技術陣は着実にキャタピラー社に引けをとらない高品質のブルドーザーを製造する力を蓄積していった。キャタピラー三菱との闘いを乗り越えて「ブルドーザーの小松」といわれる基礎ができ上がっていったのである。キャタピラー社の進出を契機に、小松製作所の技術レベルは一気に世界のトップレベルにまで引き上げられた。

河合良成は、小松製作所が世界レベルの企業体質を整えた昭和三十九年六月、会長に就任し、後任に

は長男の良一を充てた。河合良成が飛躍させた小松製作所の基盤は、後継者になってさらに盤石なものになり、現在の安崎暁社長へと継承されている。平成三年の創立七十周年には、小松製作所の統一略称を「コマツ」とし、ロゴマークなども一新して、さらに大きな飛躍を目指している。

建設機械、産業機械の生産販売を柱とした「コマツ」は、今や「世界のコマツ」として、この業界で重きをなしている。

現在の「コマツ」は、発祥地である石川県小松市にある小松工場と粟津工場をはじめ、一〇〇%出資工場を含めると国内に九工場を持ち、海外では東南アジア、アメリカ、ヨーロッパなど十七カ国で建設機械を生産しており、その関連企業は二百三十社にのぼっている。「コマツ」のほかに上場企業も多く、また、エレクトロニクス、ロボット、地下建材、環境事業等を中心に幅広い最先端分野で事業領域を拡大している。その売上高は、年間、「コマツ」単独で五千億円を超えている。関連企業を含めた連結決算では、その売上総額は九千九百九十三億円で、平成九年度中には一兆円突破は確実とみられている。従業員も、小松工場、粟津工場の四千人を含めた総数は、「コマツ」だけで一万四千人、グループ企業と合わせると三万人近くなり、文字通りのビッグ企業に成長している。

佐賀県唐津市の唐津鉄工所の応接室には、今も創立者である明太郎の大きな写真が飾られているが、ここ小松製作所の粟津工場の応接室にも、やはり明太郎のミニチュア像が置かれる。その前にある案内板には

「当社創立者　明太郎／大正十年五月、竹内鉱業ＫＫの竹内明太郎は、同社小松鉄工所を分離独立させ、

小松製作所を設立した。明治維新の志士で自由党の領袖であった土佐藩士、竹内綱の長男であり、元首相、吉田茂の実兄にあたる。農村地帯に工業を興す考えのもと、小松の地に工場を設置したが、今日、世界に羽ばたく企業へと発展していく基礎をつくった生みの親である」という添え書きがある。

このように大正六年、明太郎が理想に燃えて小松の地にまいた機械工業の種は、今や大きく実った。地域への貢献度も極めて大きい。小松製作所をはじめ、その関連企業や下請け企業を含めると、小松市内の全就業労働者数の三四・六％を占めるといわれている。実に三人に一人は、何らかの形で小松製作所に関係しているわけである。この点でも、かつて明太郎が挙げた経営方針の一つ「その地方に受けた寄与に報いんがため」という方針も、きちっと守られているのである。

明太郎の理念は小松製作所だけでなく、その関連企業にまで深く浸透している。

例えば、「コマツ」の協力企業の一つで株式会社・板尾鉄工所（小松市工業団地一丁目、代表取締役、板尾昭栄）である。板尾の父、伊三栄が遊泉寺銅山、小松鉄工所、そして小松製作所に勤務。戦後、独立して板尾鉄工所を創立し、小松製作所の協力企業となった。

その息子の昭栄も、明太郎が創立した早稲田大学理工学部機械科を卒業後、小松製作所へ入社、技術本部などで新製品の開発にあたった。同社を退職した後に父の経営する板尾鉄工所を引き継ぎ、従業員が十人足らずだった同鉄工所を、百人を超える中堅企業に成長させた。

板尾昭栄は現在、「コマツ」の協力企業群で組織する「コマツみどり会」の副会長を務めているが、それらの企業を代表して次のように話す。

「小松鉄工所創立の理念は、今でも通用するもので、協力企業の経営者たちでもその理念を掲げてやっているところが多い。もちろん、うちでも明太郎さんの理念を受け継いでやってきたし、これからもやっていきたい。父も私も小松の地に生まれ、小松製作所で育てられた。根っからの〝小松マン〟で、それを誇りとして、その精神を後世に伝えていきたい」

明太郎が掲げた小松鉄工所創立の理念は、「コマツ」はもちろんのこと、その協力企業の間にまで深く浸透し、経営者たちに引き継がれている。

人材の育成

明太郎は、芳谷炭坑や遊泉寺銅山の経営にあたってもそうであったが「企業経営の基本は人づくりである」として、特に、人材教育には力を入れていた。明治三十九年に設立した唐津鉄工所、それより遅れて大正六年に設立した小松鉄工所（後に小松製作所）においても、社是の第一に、「人づくりを進めること」を揚げて、それを実践している。

小松鉄工所の人材養成から紹介しよう。

明太郎は、同鉄工所の設立と同時に、修業年限三年の見習生養成所を鉄工所の中に設置した。中堅技術者の養成が主な目的だったが、同時に人間形成のための学習も取り入れている。

「技術の習得はもちろんだが、まず、一個の人間としての学習も欠かせない。双方が相まってこそ一人

前の技術者といえる」というのが明太郎の理想とする技術者像であった。

見習生養成所への入所者は、当時の高等小学校卒業程度の者の中から選抜して採用、養成を始めた。

そのころ、石川県下には中等学校は七校しかなく、小学校を卒業して進学する者は極めて少なかった。小学校の成績が優秀な者でも、進学しないで家業を継ぐ者が多かったが、こうした学業優秀な農家の子弟が小松鉄工所の見習生養成所へ入ってくるケースが多かったという。

初代校長には、小松鉄工所の創立者、明太郎がなった。養成所を設置したものの、当初はまだ校舎がなく、工場の一部や食堂を利用して授業が行われた。はじめは生徒数がわずか十五人と少なかった。この人材養成機関は、小松製作所になってからも引き継がれていくが、昭和の年代に入ると生徒数もだんだん増えていき、一学年がなんと百人を超えることもあった。企業内の人材養成機関としては異常なことである。

授業内容は、午前中、工場の作業に必要な数学、物理、化学、製図、機械工作法、金属材料、英語のほか、人間形成に欠かせぬ道徳教育などにも重点が置かれた。午後は、それぞれ決められた職場で実技の習得練習に励んだ。

大正十四年に青年訓練所令が公布されると、一層の内容の充実を図り、私立工業補習学校に組織を改め、これに青年訓練所も併設した。さらに昭和五年と十年に青年学校令の公布などによって呼称が変わり、同十年には私立小松製作所青年学校と改称。同時に木造校舎や実習工場も建設された。

第二次大戦後の昭和二十三年には、青年学校令が廃止となり、最終的に小松製作所工科学校となった。

小松工場だけでなく、粟津工場が設立されると粟津にも同様の工科学校が設置された。

こうして、社内に設置された見習生養成所は時代とともにその名称も変わり、昭和四十八年にその役割を終えて閉校したが、この間、優秀な工業技術者を数多く輩出した。そして、この人材教育こそ小松製作所の大きな飛躍を支えたのである。

昭和五十三年に発行された「小松製作所工科学校史」は、大正六年の見習生養成所の発足から昭和四十八年、工科学校の閉校までの教育の流れを①初期教育（戦時体制以前）②戦時の教育（太平洋戦争）③現代教育（太平洋戦争後）の三期に大別している。

初期教育といえる大正六年の開校当時は、鉄工所そのものが鉄を削る機械工場と驚異の目で見られた。機械工業としても、小松唯一の企業で、しかも、企業内で教育を実施することは極めて進歩的な方針で、また、画期的なことでもあった。

第一回卒業生の吉田三吉によると、見習生は若者労働者で向学心のある希望者から選考された。同級生でも、二、三歳の年齢差があった。教育単元に満たない者は、満たされるまで教育を受けた。年一回の卒業でなく、単位満了者には随時、見習生修了証書とメダルが授与され、卒業資格を与えられた。その後、二年間は同鉄工所での勤務が義務づけられていた。

従って、教育機関三年、二年勤務の五年間は一人前の職工としての扱いではなかったが、五年勤めあげれば一挙に給料も上がり、当時としては大金であった五十円の賞与が支給された。普通の企業では考えられないような待遇であった。

ちなみに、当時の給料は、日給三十銭、義務年限の五年間で七十銭になり、所定の義務年限を修了すると一円になったという。三年教育、二年拘束の見習生制度は昭和三年まで続き、後に二年教育、二年拘束とか、三年教育、五年教育制などがとられ、昭和十六年の太平洋戦争の勃発で、一年繰り上げられ、四年教育制など速成科が設けられた。戦争という時代的な背景が、教育にも影響を与えたわけだが、いかに小松鉄工所（後に小松製作所）が従業員の教育に力を入れていたかが分かるだろう。

教育科目は年次によって異るが、公民、国語、数学は代数、幾何、三角で構成、工学は工作、工材、工鋳、工要に四分され、物理、製図、英語、教練、実習が主体となっていた。

このように、鉄工所または製作所の見習生養成所といっても、かなりレベルの高い教育が工場内で行われていたのである。

教育の内容は違ったが、企業内での教育は太平洋戦時下はもちろん、終戦後もずっと続けられ、毎年、卒業生が送り出された。戦時下は当然、軍部の影響が企業内の学校にも強く反映されたが、終戦後は次第に本来の教育が行われるようになった。

その後、法令の改正などもあって、石川県認定の職業訓練所となり、多くの技術者が養成された。民間企業内の学校が、公的な職業訓練所としての役割も果たしたのである。

石川県認定の職業訓練所となった小松製作所工科学校職業訓練所の学則には「本校は生徒の徳性の涵養を図るとともに、当工場事業に必要な知識、技能を習得させて、思想堅実で教養ある中堅の技術者を訓練することを目的とする」となっていた。

修業年限は三年で、教科は社会、国語、英語、体育、数学、物理、化学、機械、材料、鋳造法、溶接法、機械工作、仕上法、原動機、電気工学、製図、実習（基本、応用）など三年間の学習時間は二千時間を超えた。

企業内の見習生養成所から出発した教育機関だったが、石川県認定の職業訓練所となったころには、こうした教育内容からして、実質的には、現代の工業高校のレベルに近いところまでアップしているのである。

戦後、五期にわたって小松市の市会議員を務めた渡辺正徳は、昭和十六年に小松製作所の工科青年学校に学んだ一人である。その渡辺は「工科学校史」の編さんにもかかわっているが、当時について次のように話している。

「私が小松製作所に入社したころは、採用人員も多く、同期が百人もいた。すぐに養成所（工科青年学校）に入れられ、そこで勉強した。入学倍率は八倍にも達し、小松中学（旧制）生が受験しても落ちることがあるといわれたほどの難関だった。授業も難しく、途中でやめていく者もあった」

見習生養成所から工科青年学校になってからも教育科目には、技術面ばかりでなく数学、幾何、物理はもちろんのこと、修身、公民などといった科目もあり、単なる技術者の養成だけでなく、全人教育的な面が強調されていた。

渡辺は三年生の時に選抜されて早稲田大学理工学部の鋳物研究所に国内留学させてもらっている。当時、小松工場の工場長は、明太郎の長男、強一郎。その指示で渡辺は留学した。

鋳物研究所で研修する一方で、夜間は製図の専門学校に通って勉強した。留学期間は約一年半におよんだが、夏休みなど休暇があると小松に帰り、工場長の強一郎にその成果を報告し、レポートの点検を受けたりした。

「恐る恐る工場長に報告すると、強一郎さんは、しっかりと目を通し、時々、出てくる自分の書いた英語のつづりを見て、『君、これはスペルが違うよ』といって訂正してくれたのをよく記憶している。強一郎さんは、そんな時も柔らかな物腰でしかも優しく『これは、こうじゃないかね』などと、まるで子供を諭すような口調だった。学者肌というのだろうか、あの強一郎さんの姿が忘れられない」と渡辺は話す。

この企業内教育機関は、大正六年に発足してから、名称や教科などその内容は変わったものの、技術面に加えて全人的な教育という目的は一貫していた。昭和四十八年に閉校するまでの半世紀余りの間の存在はあまりにも大きい。この企業内教育機関が、現在の〝コマツ〟への飛躍の原動力の一つとなっていることは間違いないだろう。

小松製作所は、戦後も幾度か不況に見舞われているが、そうした厳しい環境を乗り越えて大きく飛躍できたのも、明太郎の「企業は人なり」という理念が社内にしっかりと根を張っていて、その危機に耐え克服することができたといえるのである。

小松工業学校の誘致

明太郎の「人づくりこそ、企業の礎であり、また、国を興す礎でもある」という理念は小松鉄工所の創業以来、ずっと引き継がれているが、企業内の人づくりだけでなく、小松市の教育振興にも大きな貢献をしている。

それは、明太郎が亡くなってから十年がたった昭和十三年、小松製作所時代のことである。

当時、石川県は県立工業学校の建設を計画していたが、その立地をめぐって小松市と七尾市が猛烈な誘致合戦を展開していた。最初、形勢は小松市側に不利で、七尾市の方に決まるかにみえた。が、この時に小松製作所が決定的な役割を果たしたのである。

県立工業学校をあわや七尾市に持っていかれる寸前に、小松製作所が工業学校の建設費二十一万五千円を全額負担することを申し出たのである。し烈を極めた県立工業学校の誘致合戦は、これで小松市側が断然有利となり、結局、同市内への建設が決まった。

小松製作所のこの英断がなければ、県立工業学校は七尾市に設立されていただろう。小松製作所が県立工業学校の誘致に巨額を投じたのは、地元の小松市に工業学校があれば、そこで中堅技術者の養成ができ、企業としても技術者の確保が地元で容易にできるというメリットはあろう。

ただ、それなら小松製作所では従来から、かなりのレベルの技術者教育を企業内でも実施してきてい

る。だから、そうした利害だけでなく、同製作所に浸透している明太郎の「人づくり」と「地域の発展に寄与する」という思想が、この英断をもたらしたともいえるのではないか。

こうして翌昭和十四年、小松市桜木町に県立小松工業学校が建設されたのである。同校の最初の入学志願者の倍率は、定員の六倍にも達したという。その後、学制の改正で県立小松工業高校となり、昭和三十八年に現在の同市郊外の打越町に移転拡張した。

これまでに多くの工業技術者が同校を卒業し、小松製作所など地元をはじめ、県内外の企業に就職し活躍している。もちろん、小松製作所との関係も深く、かつては一クラスの半分くらいは同社に採用されたことがある。最近は、同社が海外に工場を新設するなどの影響で同校卒業生の採用者数は減っているという。

それでも、小松製作所では何かと地元の小松工業高校には配慮、五十周年にはブルドーザーを寄付しており、平成八年度には安崎暁社長が同校を訪れ、二日間にわたって実習工場を視察して帰るなど親密な関係が保たれている。

同校の山本外喜男校長は「以前に比べ小松製作所への卒業生の採用数は減っているが、今でも何かと気を配ってくれるので有形無形のメリットがあり、同社の存在は当校としても心強い」と話している。

前後するが、明治三十九年に設立、同四十二年四月から開業した唐津鉄工所でも、明太郎は所内に三年制の見習生養成学校を設置している。そして、入社してくる若い工員の養成を行ったのである。もちろん、小松鉄工所と同じように、単に工場で必要とする基礎的な技術の習得だけでなく、普通の学校で

行っているような科目も取り入れて、人間形成のための教育に力を入れた。

当時、唐津では、裕福な家庭の子弟は唐津中学（旧制）へ入ったが、一般家庭や農漁村の子弟で勉学を希望する者は「唐津鉄工所へ入れば勉強できる」と、高等小学校を卒業すると進んで同鉄工所へ入社し、工場内の見習生養成学校へ進学したといわれる。

唐津鉄工所内の見習生養成学校への入学希望者は、勉強と就職の両方がかなえられるというので優秀な子弟が集まり、試験は難関を極めた。大正初期には、定員八十人のところへ二百人を超える応募者があり、鉄工所では選考に困るほどだったという。同校は、あくまでも唐津鉄工所の工員たちの技術教育、人間教育が目的ではあったが、一般家庭の子弟たちの教育機関としての役割も果たしていたのである。

同校の卒業生が素晴らしい技術者となったのは当然で、大正から昭和にかけては唐津鉄工所で勤務した経験があるといえば、東京や大阪などどこの機械工場へ行っても一目置かれ、高給で迎えられたといわれる。唐津鉄工所の出身者が全国の機械工業に散っていった結果、わが国の機械工業全体の技術をレベルアップさせたことはいうまでもない。

唐津鉄工所の見習生養成学校では、衆議院議長などを務めた故保利茂もこの付近の出身だったので同校へ入校して学んでいる。

ダット号の開発支援

「ダットサン（ＤＡＴＳＵＮ）」という名称は、日産自動車の代表的な車名として広く知られているが、その元の名前は「ＤＡＴＳＯＮ」である。これは日本で最初に造られた国産乗用車「ＤＡＴ号」の息子という意味で日産自動車は「ＤＡＴＳＯＮ」と命名していたが、後に「ＳＯＮ」は「損に通ずる」ということで「ＤＡＴＳＵＮ」に変更したということである。

この「ダット号」を造ったのは、快進社の橋本増治郎であるが、橋本は独自の研究により、自動車を設計し、外国部品を使わずに完成車を造りあげた。自動車を設計・試作するには莫大な資金を必要とする。部品をすべて外国から購入して完成車を製造する方式（ノックダウン方式）はすでに実施されていたが、橋本はエンジンをはじめ、ほとんどの部品を国内で調達したのだから、予想外の大きな資金を使った。この資金援助をしたのが、田健治郎・青山禄郎・竹内明太郎の三名である。この三名はその後十数年にわたって資金援助を続けることになる。橋本は、最初の試作は失敗し、二回目に成功したが、この自動車に「ダット一号」と命名した。これは三人の恩人に対する感謝の意味で、田のＤ、青山のＡ、竹内のＴをとって「ＤＡＴ」と名付けたものである。

ところでどうして明太郎は、快進社の社長橋本増治郎を支援する事になったのだろうか。これについて「沈黙の巨星」に簡潔に記されているのでこれを引用する。

――「小松鉄工所の初代所長、橋本増治郎は、わが国自動車産業の草創期を彩った自動車産業史には欠かせぬ一人だ。その橋本のことについて触れてみよう。

小松鉄工所の初代社長就任から遡ること六年の明治四十四年四月のことである。東京の渋谷広尾に快進社と呼ばれる小さな自動車工場が誕生した。従業員は社長の橋本を含めて七人。この快進社こそ、企業として存続した自動車工場としては日本最初のものである。

その創業者が橋本であった。

橋本は明治八年愛知県岡崎に生まれた。明治二十八年に手島精一の東京工業学校（後に高等工業となり、さらに現在の東京工業大学となる）機械科を卒業し、明治三十五年には農商務省海外実業訓練生として三年間、ニューヨーク州オーボン市マッキントッシュ会社で学んだ。

帰国後、中島鉄工所の技師長となるも、会社は倒産。この中島鉄工所を買収したのが、九州炭鉱汽船社長の田健治郎であり、明太郎はこの九州炭鉱汽船の役員であった。

橋本は、こうした経緯から九州炭鉱汽船の鉱業所長に就任し、田健次郎や明太郎の知遇を得ることになる。

橋本が明太郎に初めて会ったのは、橋本の赴任先の長崎県崎戸島に、明太郎が視察に訪れたときである。橋本によれば、その後、唐津と崎戸で何度か会う機会があり、何かと不便な崎戸での生活に明太郎が同情を寄せ、唐津から新鮮な野菜を何度か送ってもらったことがあるという。

しかし、この頃から橋本の胸中には自動車製造の夢が脹らんでおり、九州炭鉱汽船での契約も、新しい鉱区の開発が軌道にのるまでとなっていた。

こうした経緯を経て橋本は、悲願の自動車製造に着手するために、明治四十四年に九州炭鉱汽船を退職、直ちに快進社設立の準備にとりかかった。

この際、橋本は九州の唐津に明太郎を訪ね、自動車製造の夢を語っている。

しかし、明太郎は自動車製造に情熱を傾ける橋本をこう諫めた。

『自営業というのは大変難しい。妻子があるのだから給料のしっかりしている会社に勤務したらどうか』と。

橋本は、『自動車製造は自分の夢であり、どうしてもやりたい』と明太郎に訴えた。

明太郎は、橋本の意気込みが生半可でないことを知り、『それでは、君の自動車製造を応援しよう』と物心両面の支援を約束した。

また、九州炭鉱汽船の田健治郎も、橋本の自動車製造を支援することになる。

明太郎らの支援を受けて、橋本が快進社をスタートさせた頃、東京の自動車登録台数は凡そ二三五台。もちろんすべてがフォードなどの輸入車であった」――

もう一人の橋本に対する支援者は、幼少の頃からの竹馬の友である青山禄郎である。彼は橋本にとっては最後まで支援しつづけてくれた大恩人である。

余談になるが、明太郎と田とは随分古くから交友があったようである。日記によれば、「明治二十二年一月二十一日、午前、銀行にて金子を受け取り、出嶋の普請場とモンドレルを訪れんとし、その途中田氏と逢う。久闊の情を述べ直ちに別れを告げ……」とある。文中の田氏とは健治郎のことと思われる。

また、明太郎が我が子のように熱愛し面倒を見ていた妻亀井の甥山本忠興と、土田綾子が共に一番町教会で洗礼を受けた信者であり信仰を通して、結婚の意志を固めたとき、最も強烈に反対したのは叔父の明太郎であった。この叔父を説得し縁談をまとめてくれたのは、牧師植村正久と田健治郎であった。土田綾子は勉学のため、伯父の田健治郎を頼って但馬から上京し、植村牧師の教会に通ううち牧師から山本を紹介されたのであった。二人はそれぞれ理想の伴侶を得、生涯夫婦として終えることになるが、明太郎・田も不思議な縁と思ったことであろう。

さて、橋本増治郎の快進社はダット一号を大正三年に完成し、上野公園で開催された大正博覧会で銅牌を受賞。翌四年には「ダット三一型」乗用車を完成。さらに大正五年には彼が目標としていた一五馬力の「ダット四一型」を完成させ、これを標準型として量産化の計画を立てた。

株式会社快進社の発足

大正六年一月、明太郎は石川県の遊泉寺銅山で鉱山機械を製作する目的で小松鉄工所を設立した。これより先、大正五年、橋本増治郎は明太郎の指示により渡米し、小松鉄工所に必要な設備機械の調

達と併せて自動車製造用の最新機械の調査を三カ月にわたって行い、同年八月十三日に帰国する。橋本にとっては快進社の社長業務をやりながら、小松鉄工所の初代所長として工場建設をはじめることになる。この時期に橋本を初代所長に任じた明太郎の意図を明らかにする資料は何もないが、自動車工業研究家のなかには、国産自動車の開発の上からはマイナスであったとの説を唱える人もいる。それは、完成した「ダット四一型」を早く製造に移したいと考えていた橋本にとって二カ年の空白の時代ができたからである。

橋本は小松鉄工所長を兼務中ではあったが、大正七年八月に京橋区明石町三一の竹内鉱業株式会社内に、「株式会社快進社の創立事務所」を設け設立準備にかかった。その趣意書のなかで、日本における自動車工業の必要性と有望性を挙げ、資本金を六十万円とし、さらに小松鉄工所の設備五十万円を利用できると付け加えている。この趣意書から考察すると、自動車事業に対する戦略として小松鉄工所を重要な部品生産工場と考えていたのかも知れない。それなれば、明太郎が橋本を渡米させ、小松鉄工所長に任命した理由も分かるような気がする。

そして、新会社の発起人は橋本増治郎のほか、竹内明太郎・青山禄郎・田篤（田健次郎の子息）・白石多士良（明太郎の甥で後に設立された小松製作所の初代社長）・松本俊吉（竹内鉱業取締役支配人）・岡本宗之（竹内鉱業）の諸氏が名を連ねており、明太郎のこの事業に対する意図が伺える。

株式会社快進社は白石多士良の用地提供により、東京郊外の北豊島郡長崎村（現在の豊島区東長崎）に、工場面積六千坪、建坪六百坪の当時としては堂々たる工場を建設し、グリーソンのベベルギヤー歯

切盤など、最新の機械を設置した。従業員も同社の最盛期には五十人から六十人だったといわれ、広尾時代とは格段の相違があった。

「ダット四一型」乗用車は、大正十一年の平和記念東京博覧会では、金牌を受賞しているが、結局、販売不振のため倒産に追い込まれることになる。

四一型は外車に負けない堅牢さと実用的性能を具備していたにかかわらず何故外車につぶされたのか。それは価格の上で圧倒的な差があり、また、デザイン的な見劣りがあったため、国内のお客の目は完全に外車に向いていて、見向きもされなかったのである。この状態は他の国産車も同様であった。

国産車の不振は政府としては軍事面から見ても、国策的に見ても極めて憂慮すべきこととして、「軍用自動車補助法」を制定したが、株式会社快進社にとっては時期的には間に合わず、四一型は合併した実用自動車製造株式会社によって貨物自動車として世に出ることになる。

日本の自動車工業が誕生しかけた大正中期には、日本における自動車の保有台数も急速に増加の傾向にあった。明治四十一年には僅か九台であったものが、大正六年には二、六七四台、九年には一万台に増加している。何れも輸入の外国車である。さらに、十四年には三万台にも達しており、急激な伸びを示しているが、「ダット号」は一台も入っていない。

このような日本の状況に対し、欧米ではすでにモータリゼーションが始まっていた。欧米での自動車の保有台数は、一九二五年には二、二七六万台を越えたとの調査結果が発表されている。

また、フォード社では一九二四年六月二十六日には、延生産台数が一千万台に達していた。さらに驚

くべきことに、その販売価格が一九〇九年の発表当初に一台八五〇ドルだった「T型フォード」が、一九一四年には五四〇ドルに値下げを断行している。これは前年の一九一三年にハイランドパークに大工場を建設し、大量生産が可能になり、原価低減ができたからである。

この頃の日本における国産自動車の開発は、研究試作を終えて量産試作に入りかけた状態であった。したがって「質」「量」「コスト」何れも欧米の量産車に遠く及ばない実情であったといえる。産業革命五十年の遅れは、自動車産業の上にも大きなハンディとしてのしかかっていたのである。天才的技術者橋本増治郎の技術はDATSUNによって僅かに生き残ったとはいえ、事業としては失敗に終わった。

快進社の自動車開発に巨額の資金を提供しつづけた明太郎も関東大震災と経済大恐慌により大打撃を蒙ったのと、事業の見通しのたたないことからついに快進社と断絶することになった。（大正十四年七月十七日　明太郎の日記）

第三章　竹内鉱業の経営

竹内鉱業株式会社といえば、綱と明太郎が経営していた鉱山事業を統括する企業体として、明治二十七年に設立し、芳谷炭坑をはじめ新たに買収した炭坑や鉱山、事業所などの運営にあたった。

その竹内鉱業の営業報告書と決算書の一部が残っている。高知工業創立者調査研究委員会が唐津鉄工所の相談役、竹尾快助から入手した貴重な資料である。竹内鉱業に関係したすべての人が亡くなっている現在、この営業報告書と決算書は当時の会社の経営ぶりをなによりもよく物語るものである。

入手した営業報告書と決算書は、明治四十四年下半期と大正七年上半期、同九年上半期のわずか三期分だが、当時の竹内鉱業の経営内容の一端がうかがえるので、ここにその概要を紹介しておこう。

明治四十四年下半期（七月―十二月）の営業報告書によると、決算の承認、利益の配分と予算を決議。任期満了監査役の改選を行い、この監査役の一人に山本忠秀が選任されている。忠秀は明太郎の義兄（忠秀の妹、亀井が明太郎の妻）にあたる。高知県議会議員や貴族院議員を務めるとともに実業家としても知られている。またこの期には鉱山技師の柳田友麿を欧米諸国の鉱山業を視察させるために海外派遣している。

事業については、富山県で銀、銅、亜鉛などの試掘を出願。岩手県の大萱生金山と新潟県の橋立金山の仮譲り受け契約をし、それぞれ探鉱操業を開始しているほか、秋田県でも鉱山の試掘を行うなど、このころでも、まだかなり手広く鉱山事業を進めていたことがうかがえる。

当期末の雇用者数は、竹内鉱業の東京本店の役職員三十六人をはじめ、唐津鉄工所や大阪出張所、橋立金山、大萱生金山などの従業員を含めて総勢九十一人となっている。

石炭の売買状況については「清国革命動乱の障害ありたりしにもかかわらず、大いに荷さばきに努めた結果、相当の利益を見たるは、大いに幸いとするところなり」としている。ちなみに、当期間の取扱い石炭量は、買い入れが約四万四千トンで、そのほとんどを売りさばいている。

明治三十九年に設立した唐津鉄工所についても、その設立のいきさつから敷地の買入、諸施設の整備などを行ってきたこと。同所で製作した機械類は、明治四十四年上半期に三菱に譲渡した芳谷炭坑をはじめ、茨城無煙炭鉱や大夕張炭山などに供給。この間、工場設備の拡大に迫られ、四万円余りを投じて海外から新鋭機械を買入し、さらに、使用人の増員などで工員だけでも百二十二人になるなど、唐津鉄工所の経営は有望のうちに本期を終わった――などと詳しく報告している。

資産の状態を示す貸借対照表によると、総資産は土地、鉱区、貯蔵または輸送中の石炭、工場で製作中の物件、有価証券など合計で百三万一千円余りにのぼっている。

当期の「損益決算調書」では、この下半期は、石炭だけの売買益金が三万三千七百七十二円で、ほかに、利息、有価証券配当金などの収入金合計は七万六百三十五円。これに対して、営業費用、人件費、

支払い利息などの諸経費と特別支出金などの支出合計は五万二十一円となり、差し引き当期純益金は二万六百十四円、前期繰越金と合わせた利益金合計は二万七千五百五十三円となっている。

当時の貨幣価値と現在のそれとを換算することは難しいが、米価換算で単純に比較すると、この期の利益金合計の二万七千五百五十三円は、最近の価格では約三千七百八十万円となる。

いずれにしても百人足らずの企業で半期にこれだけの合計利益金を計上できるということは、経営もまずは順調とみていいのではないか。

社員は一千人台に

大正七年上半期（同年一月―六月）の営業報告書や決算書からも竹内鉱業の経営はまずまずで安定しているようにみえる。

同期は、石川県をはじめ、山形、秋田、滋賀の各県でも炭鉱や、金、銅の鉱区での試掘を新規に始めたり、継続しており、このころでも鉱山事業へはかなりのウエートを置いていたようである。

役員や使用人数は、明治四十四年下半期で総勢九十一人だったのが、この期には、東京の本店や小松鉄工所、遊泉寺銅山などの工員らを合わせると一千五十二人と十倍強に増えているのが目立つ。

鉱山経営の概況も報告されているが、遊泉寺銅山では「この冬、未曽有の降雪にて、春陽の季に至りては雪崩の被害も多く、すこぶる作業に支障を与え、四月に至っても、なお貨車が止まり、滞貨がます

ます激増した」とある。

大正六年一月に設立したばかりの小松鉄工所についても触れ、「当所は、いまだ設備中で順次、整備に向かいつつあり、もっぱら設計図の進ちょくと工作訓練に努力し、著しき進境を見るに至る。製作高も相応に多きを加え、資金に対し相当の金利を負担し、なお、いくぶんの剰余を見るを得たり。さらに、次期は設備の整備を加えるとともに、製作高多きを致し、成績良好となるべし」とし、「要するに、当所は普通の製作程度に甘んぜず、極めて優良なる高級機械の製作を目的とする故、所期の目的を達するには比較的、日時を要すれども、唐津鉄工所の実験に照らし、堅実な発展を期待し得らるるなり」と報告している。

また、唐津鉄工所についても「当所は事業の基礎確定とともに、大正五年一月独立、株式会社組織に変更し、以来、逐次成績良好にして、当初、期待の理想的優良品製作経営の実績を上げるに至り、当期は対資本差益が年率七割に相当せり、しかして、製作要求が殺到し、その一部を引き受けたに過ぎないが、明年末までの製作能力の大半に相当する長期契約を完了したり」としている。

これらの概況報告には、特に明太郎が理想とした「事業の施設は、すべからく無駄なきものに」また「製品は、欠点なき完全なものに」「儲けはその次でよし」「なるべく人の手を下さぬものを」などという事業の心得が強くにじみ出ている。

同期の貸借対照表では、遊寺泉銅山など諸鉱山や小松鉄工所をはじめ、金融資産などを含めた総資産は約百八十万四千円と、八年足らずの間に二倍近くに増えている。「損益決算調書」でも、総収入十万六

千五百三十七円に対して、営業経常費などの支出合計六万六千七百三十六円で、差し引き当期の純益金は三万九千八百一円、前期からの繰り越し金と合わせた利益金は五万百七十三円となり、同期も順調な経営ぶりがうかがわれるのである。

電気製鋼部門も計画通り

大正九年上半期（一月―六月）の営業報告書では、まず、総務の概要で、小松鉄工所、小松電気製鋼所、遊寺泉銅山、炭化石灰工場の製品販売、材料品の購買事務を処理統一のため、小松町に小松出張所を開設したことが報告されている。

小松鉄工所については「前期から引き続き製作中の鉱山用機械のほかに、工作用諸機械の製作にも意を注ぎ、ますます優良品の製作に努め、今春来の物価暴落の影響も受けず、資金に対し利息を支払っても、なお相当の剰余金を得て、これを別途償却金に充てるなど、さらに経営基盤の強固を図りつつある」としている。

大正七年に設立した小松電気製鋼所については「当期は主として各種鋼鉄鋳物の製造と研究に努力した結果、ほぼ理想的な製品を産出できるまでになり、自動車、鉄道貨車、諸機械付属品など向けに二万余貫を生産、販売した。なお、特殊鋼の製造については実験の結果、優良品を生産できる十分な経験と自信を得、適当な時期に実現できることを予期しつつある」と新設の電気製鋼部門も計画通りに進んで

いることを報告している。

ただ、遊寺泉銅山の概況については「前期より引き続き稼業している採鉱のうち、鉱況ますます良好というところもあり、採鉱操業を開始すれば相当量の産銅が見込まれるものの、銅価が依然として低廉で、しかも、近く回復という兆候もみられない。そのうえ、物資は高く、まだ採鉱操業開始の時期ではなく、今期末限りで一時、その稼業を中止し、適当の時期をまって採鉱、探鉱を開始することとせり」という厳しい報告が行われている。

第一次大戦後の反動不況は、このころ次第に深刻化し始めており、銅価の低迷、物価の高騰などで竹内鉱業の関係する事業所は、小松鉄工所や唐津鉄工所（この時は分離独立済み）など一部を除き、とりわけ炭鉱、鉱山事業は経営不振に陥りつつあり、次々に閉鎖せざるを得ないような状況だったのである。事実、遊泉寺銅山は、その年のうちに閉山に追い込まれている。

翌年の大正十年下半期（同年七月一日―十二月三十一日）の営業報告書は入手できなかったが、この期には竹内鉱業と竹内一族十三人が所有していた唐津鉄工所の株式合計八十五万一千円を、同社長の竹尾に売り渡しており、この売却代金を前年の巨額増資（百万円）のための借入金返済にあてたともいわれる。

竹内鉱業の巨額増資と、所有していた唐津鉄工所の株式売却という一連の操作は、経営不振に陥り、資金不足に悩んでいた竹内鉱業が、運転資金を捻出するために行った窮余の一策だったのだろうか。

このように大正三年に勃発した第一次大戦による好況後の反動不況の影響で、既に衰勢にあった竹内

鉱業は、大正十二年の関東大震災による大量の貯蔵炭焼失などの損害と震災不況、さらには昭和二年に始まった金融恐怖など二重、三重に壊滅的な打撃を受けて、会社の整理、解散へと追い込まれていくことになる。

第四章　工業教育に尽力

明太郎は「企業は人なり」という高い理念を掲げ「人づくりこそ企業の礎であり、国を興す礎である」として唐津鉄工所や小松鉄工所（後の小松製作所）でも、企業経営の中の最重要事項として実践してきた。しかし、明太郎はそれだけでは満足しなかった。

そのころには既により高度な工業技術者を養成する専門機関（学校）の設立を頭に描いていた。それが工科大学設立の構想である。

明太郎は、海外視察の経験と、企業経営者としての反省から「欧米の高度な工業技術に比較すると、わが国のレベルはあまりにも低く、先進国に追いつくためには、まず、産業教育、工業教育が必要である」と常々、考えていた。その夢の一つが、工科大学の創設だったのである。

そのため、明太郎は、まだ唐津鉄工所を設立するずっと以前の明治三十五年ごろから、大学を卒業した優秀な技術者や学生たちを、工業技術の習得とレベルアップのため、次々と海外へ送り出していた。機械、電気、建築、採鉱、冶金関係などと、その数はかなりにのぼるといわれる。しかも、その費用はすべて会社が負担、明太郎自身が出すようなこともしばしばだったという。

こうして、将来、工科大学を設立した時の中心的な教授陣となる人材の養成を進める一方で、明治三

十九年ごろには工科大学設立の具体的な準備に取りかかった。

その設置場所は、中央の都市部ではなく、地方都市、それも明太郎が個人的にも気に入っていた唐津鉄工所がある佐賀県唐津市と決めていた。設立の準備も、手島精一を通じ、手島がその片腕と信頼していた同校教授の牧野啓吾と協議しながら、着々と進めていた。

早稲田でも理工学部設立の計画

これは偶然というしかない。明太郎が工科大学の構想を進めていたのと、ちょうど同じころ、東京の早稲田大学でも、それまであった政治経済、法律に加えて、理工学部開設（当初の呼称は理工科だったが、大正九年四月の大学令によって理工学部と改称された。本書では理工学部に統一した）の計画が持ち上がっていた。明治四十年に同大学が創立二十五周年を迎える記念行事の中の拡張計画の柱として、理工学部の新設ムードが高まっていたのである。

もっとも、同大学の前身である東京専門学校が明治十五年に創立された時、政治経済学科、法律学科とともに理学科が開設されていた。しかしこの時は設備や教授陣も十分でなく、肝心の志望者がほとんどいなかったため、わずか三年足らずで廃止の憂き目を見ている。それが、二十五周年記念事業として再び脚光を浴びることになったのである。

創立者の大隈重信は、明治三十年の創立十五周年記念式典で「理科、物理学は、私はどうしても学問

の土台となるものと考えた」と述べ、創立時に理学科を設けたことに言及し、わずか三年で廃止のやむなきに至ったことにも触れて「この理科の失敗は千歳の遺憾である」と残念がっていた。

大隈には自然科学を尊重する態度が一段と強くあり、単に便宜主義としての学問ではなく、科学の力は精神上の変革にも力を持ったものであることを重視する姿勢があった。それを理工学部の中で最大限に発現したいという念願があった。

ただ、創立時の失敗でもはっきりしているように、理工学部の新設は簡単にできることではない。まず、資金である。そのころの金で百五十万円という巨額な資金をどうするかがまず大きな問題であった。こんな大金をおいそれと出資するところはなく、結局は寄付金によるしかない。それにしても時間がかかることで、しかも、寄付が集まるかどうかは保証の限りではない。大隈総長はじめ、大学幹部、教授、職員らが、あらゆる手をつくして全国を回って協力を求めた。

この拡張計画にあたっては、宮内省から三万円の御下賜金が贈られ、時の学長、高田早苗は「大隈総長はじめ、学園関係者は欣喜雀躍、手の舞い、足の踏む所を知らざるほどだったは言うまでもない。殊に、理工学部開設という難事業を控えていた私としては、ほとんど言語をもって言い表すことのできないほどの力を得た」と話している。それでも全体の募金計画の方は、遅々として進まなかった。

理工学部新設となれば、教授陣の確保も大きな問題である。大学では資金集めと同時に、教授陣の確保のために八方へ手をつくしていたが、なかなか集まらなかった。

そんな時、学長の高田早苗が相談を持ちかけ、教授陣確保の協力を依頼したのが、やはり、東京高等

工業学校校長の手島精一だったのである。そして、この手島への協力依頼が、後に早稲田大学の理工学部設置計画を急展開させることになるのである。

工業教育の慈父、手島

ところで、手島精一とは一体、いかなる人物なのか。ここで、ちょっと触れておこう。

手島は、わが国の工業教育がようやく軌道に乗り出した明治二十三年、四十二歳にして東京工業学校の校長となった。同校は、明治三十四年に東京高等工業学校と改称、昭和四年に現在の東京工業大学となった。手島は大正五年までの約三十年間、同校の校長として名利に走らず、栄達を求めず、その高まいな人格と剛健な意志でひたすら工業教育の普及、工業の発展に全力を挙げ、工業教育の先覚者としてわが国工業の発展への礎石を打った。


東京高等工業学校の手島精一校長。勲一等瑞宝章を受章した時

手島は東京工業学校の校長になる前の明治十一年、パリで開かれた世界博覧会に文部書記官の随員として派遣され、素晴らしい博覧会を目のあたりにした。フランスを中心にヨーロッパ各国の物産が研を競って出展され、わが国からは豪華な古代織物や漆器、陶器など工芸品が出品された。

手島は、この博覧会で欧米の産業文化のレベルの高さを痛感し

た。精巧な工業製品の生まれる陰には、広く国民教育に根ざした工業知識が普及していることを認識させられた。これに対して、わが国の工業教育、産業教育の遅れと、そうした教育の必要性について随行した文部書記官に「博覧会にあらわれたヨーロッパ工業力の発達は素晴らしい。将来の日本を富強にするには、どうしても工業の培養に意を用いるべきだ。何よりも産業の振興だ。この際、知識を授ける工業学校を設置することだ」などと熱心に説いた。

文部書記官も博覧会の偉容に大いに感服、手島の主張に賛意を表明した。これが後に東京工業学校の設立と、手島がその校長に就任したことに通ずる。このことは、安達龍作氏著「工業教育の慈父・手島精一伝」にも書かれている。

幸運なめぐり合わせ

さて、早稲田大学の理工学部設置の計画が急展開をみせるのは、実は手島が同大学の高田学長から相談を持ちかけられる以前に、既に明太郎からも佐賀県唐津市に独自の工科大学設立構想への協力を依頼され、手島の片腕でもある牧野が着々と調査、準備を進めていたことと関連する。

手島は早稲田大学側から理工学部設置計画への協力を求められた時、明太郎から持ち掛けられていた工科大学構想が重なり合っていたのではないか。早稲田大学の理工学部設置計画と、明太郎の工科大学構想とのドッキングである。

明太郎の工科大学構想も、早稲田大学の理工学部設置計画も「国家的見地から、工業教育機関を開設し、高度技術者を育成することが緊急の課題」という同じ目的、狙いをもって進められているのだが、明太郎の構想は個人のもので、それも地方の小都市への創設ということで大きな問題があった。

仮に資金的な問題と教授陣の問題はクリアできたとしても、唐津市という地方の小都市に大学を設置しても、肝心の学生を集めることができるかどうか。ただ数さえ集めるのなら必ずしも不可能ではなかろうが、質のいい学生を確保するとなるとなかなか難しい。

明太郎からの要請で、手島の片腕の牧野が唐津市で工科大学開設のための調査活動などにあたっていた。その牧野からも「唐津では学生の確保がままならない。施設や教授陣はある程度そろっても、学生が集まらなければ大学の運営もできない」との情報が手島の元には入っていた。実は明太郎にとっても、その点が一番の悩みの種であった。

一方の早稲田大学側での最大の課題は「ツブのそろった教授陣を、どうやって確保するか」であり「その確保のメドがつけば、資金的な問題などは何とかなる」との目算があったのである。

双方からの協力要請を受けて、手島はしばらく考えたすえ「両者の目指すところは、わが国の工業教育と産業の振興で同じこと。うまく双方の計画を併合させることができれば、問題は一気に解決する」との結論に至った。

「このことを竹内さんに話してみたら、ひょっとして協力を得られるかもしれない」

手島には、こんな思惑もあって、ともかく明太郎に会ってみることにした。そして、自分の考えを伝

えた。つまり、明太郎が描いていた工科大学設立の構想を、早稲田大学の理工学部設立の計画の方にドッキングさせる。明太郎が独自に養成していた教授陣をそっくり早稲田大学に譲渡してもらうことだった。

手島のこの申し出は、明太郎にとっても十分、検討に値するものだった。明太郎の対応も柔軟なもので、手島は「これは、いける」との感触を得た。そこで、手島は高田学長と明太郎とを会わせたのである。

高田は手島から「早稲田に理工学部を開設するには、第一に必要なのが教授陣。幸いに竹内さんが留学させている人が数人はいるはずだから、その人を早稲田にもらったらいい」と知恵をつけられていた。高田は、これ幸いと明太郎に面会を求め、手島の言う通りに教授陣の譲渡を申し入れた。

すると、明太郎は「いいでしょう。教授陣は譲渡しましょう」と快諾したうえ、さらに自分で費用を出して新たに一、二人を選抜し、研修のため海外に派遣することまで約束してくれたのである。これで、早稲田大学は、理工学部開設にあたって最も困難な問題とみられていた適任教授の招へいの件が、明太郎の好意と全面的な協力からあっさりと解決し、明治四十一年四月に理工学部としてスタートを切るのである。

このことについて明太郎にためらいがなかったわけではない。早稲田大学の創立者で総長の大隈重信といえば、明太郎の父、綱が所属していた自由党とは対立する立憲改進党のリーダーであった。それに、これまで独自の工科大学設立を夢見て着々と構想を進めてきた。それを「こともあろうに早稲田大学の二十五周年記念事業の柱である理工学部設立計画にドッキングさせるなどとは」と思うのも当然である。

しかし、そんなことにこだわりを持つような明太郎ではなかった。「先進諸国に負けない工業教育の早期確立こそ最優先させるべきだ」――これが明太郎の信念でもあった。だから、手島や高田からこの話を持ち出された時も、明太郎は迷うことなく懇請を快く受け入れたのである。

後年、高田はこの時のことを自著に書いている。

「手島君が竹内明太郎君を私に紹介し、それがために非常な便宜を得て理工学部建設の歩を大いに進めたことは、私が今においても忘れることのできないところで、心からこれらの諸君に感謝している」

また、高田は「竹内明太郎先生追憶」集の中でも

「早稲田大学に理工学部を設置せんと決意したるも、その際、最も困難を感じていたのは専任教授を得る事の至難なるの一事であった。ここにおいて竹内明太郎氏が海外に留学せしめて育成せる最も優秀なる数名の適任者を推薦してくれたほか、幾多の物質的後援を寄せられ、ここにおいて初めて早稲田大学理工学部創設の事業がその緒につくに至った次第である。竹内氏は自ら工学に関する学校を起こすべくその準備として学校卒業生中の優秀なる者を外国に留学せしめられ、その計画がまさに成らんとせるの際にもかかわらず、惜しげもなくこれを早稲田大学に譲られたのであるが、これ実に常人の到底なしあたわざるところである」

と最大級の言葉を贈っている。

ともかく、早稲田大学に理工学部を設立する計画は、手島を間にして、明太郎と高田らの幸運な巡り合わせで実現したのである。

早稲田大学のエピソード集の中で、現・総長室長の村上義紀がこのことを記録している。

――「早稲田大学は、私学として初めて理工学部を創設した。大隈、高田をはじめとする大学当局者は、いわば背水の陣でこれに当たった。募金によって資金を集めつつ、理工学部の実験室等の設備にも意を注いだが、いかに設備ができても人間、すなわち理工学部で教える適当な教授を得ることは容易ではなかった。

『これには、ほとほと当惑した』と高田は語っている。

当時の早稲田大学理工学部要覧（特に、一般の父兄と入学志願者の便のための募集要項）には、理工学部の講師について次のように記されている。『およそ学校の良否の別れるところは、設備より教師に人を得るか否とにある。しかるに、幸いにも本大学ではある篤志家が三年前より学問ならびに実地に経験ある人材を選んで外国に留学させていた数名の専門学者を、同氏の好意により教師として迎えることになり、これらの教師は授業開始とともに主として本大学理工学部で教鞭をとられるはずである』

このある篤志家が竹内明太郎氏である。竹内氏は小松製作所の創立者として今日、知られているが、当時は佐賀県唐津市で芳谷炭坑を経営されていた。ところが、欧米に比べ日本の工業技術が幼稚であることを嘆かれ、日本の工業技術者の養成の必要を痛感、独力で工科大学を創設する計画をされた。そこで、私財をもって東京大学等の卒業生を欧米に留学させておられたが、この時、早稲田の計画を知り、そのそうそうたる七人の新進学者を挙げてわが理工学部の教授陣として『寄贈』された。そればかりか、その給与をも数年間援助され、実に二万九百七十円の巨額に達した。理工学部学生の学費が五十六円の

時代である。

『実をたっとんで名を喜ばず。公益を重んじて私利を忘る』人であったため、同氏の偉功を知る人は少ないが、決して忘れてはならない大学の功労者である。今思えば、大学の求めに応じて人と資金の提供をされた竹内明太郎氏こそは、わが早稲田大学寄付講座の第一号の人であった」――

理工学部スタート

ともかく、独自の工科大学設立を断念した明太郎は、自分が私財まで投じて大事に育てていた教授陣のほとんどを早稲田大学理工学部の設立のために寄贈した。そればかりか、その給与まで面倒をみるという常人にはとても考えられないようなことをやってのけてしまう。さらに、理工学部の開設資金にも私財を投入するほどの力の入れようだったのである。

明太郎の度量の太さ、人間の大きさ。

こうして早稲田大学の理工学部は、明治四十一年四月に予科の開始でスタートを切った。その翌年に本科を開設し、九月十三日に、理工学部としての始業式も行われた。

その当時の理工学部は、機械、電気、建築、採鉱の四学科で、後に土木、応用化学科などが設置されていった。開設後の教授陣としては、機械学科長に遠藤政直、電気学科長に牧野賢吾、建築学科長に佐藤功一、採鉱学科長に小池佐太郎、教務主任に牧野啓吾、後には中村康之助、機械科教授に西岡達郎、

採鉱科教授に岩井興助なども招へいされた。いずれも明太郎が援助した欧米仕込みの新進の学究教授であり、早稲田大学理工学部の名も次第に高まっていった。

特に、「早稲田に理工学部あり」と言わしめたのが、後に理工学部長となった山本忠興で、その彼を早稲田大学に招へいしたのも、忠興の叔父にあたり同学部の創立者でもある明太郎だったのである。

早稲田大学の理工学部も、スタートは切ったものの、開設したばかりは施設面では必ずしも十分ではなかった。このことは、明治四十二年四月に二回生として同学部の予科に入学、後に小松製作所の専務を務めた真野官一が「竹内明太郎先生追憶」集に寄せた一文の中で次のように記している。

「当時、理工学部としての設備は全然なく、青雲の志を工学に抱いて入学したわれらは失望と不安にかられ、私学として工学部の創設がいかに困難かということを知らされた」

だが、その年の七月ごろから実験室など理工学部としての設備建築などがひんぱんに行われるとともに、工学専門の教授連が次々に就任した。施設の整備にしろ、教授陣の充実にしろ、これらのほとんどは明太郎が関係したものであったことはいうまでもない。

真野は次のようにも書いている。

「今から当時のことを回想すると、ちょうど竹内明太郎先生の工科大学という感があった。しかし、当時、われわれ学生には単に竹内という篤志家が関係したというくらいで、その名前しか知られていなかった。その後、理工学部は急速な発展をとげ、設備にしても教育の方針にしても、竹内先生の理想に従って進展してきたと信じられる」

まさにその通りで、大学側でも教育方針や施設の整備充実などが明太郎の理想に沿って進められていったことはもちろんである。

これに対して早稲田大学では、明太郎を理工学部商議員として処遇するとともに、理工学部が発足した明治四十一年には、特別に校賓制度を設け、明太郎を第一号の校賓としてそれに報いたのである。そして、大正五年十月二日、明太郎が理工学部の創設に寄せた功績と、その後の商議員としての功労に対して、講堂でわざわざ表彰式を行っていることからも、大学側が明太郎に強い恩義を感じていたことがわかる。

時の学長、天野為之はその表彰式で、次のような式辞を明太郎に贈っている。

「貴下が、わが早稲田大学理工学部創設に際し、人々がその成否を疑い看視するような状況下で、ひとりふるって資金と人材を提供し、よく理工学部を設立し、ついに今日の声望を持するに至ったことは、本大学の深く感謝するところなり。本大学は初め、東京専門学校の名前で政治、法律、理科の三科あったが、理科は事情があって数年にしてやまり、文科を加えて早稲田大学と改称。さらに、商科を増設した。しかし自然科学を基礎とする理科、工科の教育を要求すること日に日に急なり。本大学は、その施設に苦心していたところ、故牧野啓吾教授が貴下の計画を知り要請したところ、当時、貴下がまさに経営せんとするにかかる工業学校の事業を挙げて本大学に寄与することを承諾したうえ、さらに、貴下が特派して欧米に留学させた青年俊秀の学士たち七人を併せて理工学部教授の任にあたらしめ、かつ、その報酬まで給付せられたること前後数年、その金額は二万九百七十円におよぶ。

当理工学部は、ここに初めてその基をはじめ、その根を固くし、本大学の宿望を達することができた。貴下のかくれた徳は実に天下に光り輝くことであろう。本大学は貴下の高義と同情とを感謝してやまず、ここに当大学は貴下の肖像を理工学部教室に掲げ、永く貴下の偉功を記念する」

式辞に続いて、高田名誉学長と、その実現を支えた東京高等工業学校の手島精一校長が明太郎の功績をたたえる演説を行ったが、それに対しても明太郎は、ただ「ありがとう」という短い答辞で式を終わったという。

山本忠興のこと

ここで「早稲田に理工学部あり」と全国にその名を高めた山本忠興について触れておこう。

忠興は明治十四年六月、高知県香美郡岩村（現・南国市）の出身で、県会議員や貴族院議員を務め、実業家としても知られた山本忠秀の長男として生まれた。明太郎は、忠秀の妹、亀井と結婚しているので、忠興にとっては叔父にあたる。

一高から明治三十五年、東京大学電気工学科に入学してから、東京・麻生の明太郎の家で世話になり、そこから大学に通った。だから、忠興は明太郎を「叔父さん」と呼び、明太郎もそんな忠興を、わが子のようにかわいがった。忠興が必要なものは何でも買ってやり、万年筆や時計なども一流品を買って与えた。東大を卒業すると、すぐ芝浦製作所に設計技師として入社。その傍ら、東大の講師も務めた。

そんな時、明太郎は忠興に「国内で勉強するだけでなく、外国へ出てみないか」と海外留学を勧めた。忠興も学生時代から「海外で勉強してみたい」と常に思っていたので叔父からの勧誘に乗って留学を決心した。明治四十二年、忠興が二十八歳の時である。

同年四月に出発、まず、ドイツのカールスルーエ市の工科大学で電気工学界では世界的な権威者、アルノルト博士の門下生として約一年半、電気機械設計を研究した。さらに、アメリカに渡りニューヨーク州のジェネラルエレクトリック社のスタインメッツ博士について電気機械設計を学び知識を深めた。

そして、明治四十五年六月、三年余りの留学生活を終えて帰国すると、芝浦製作所へ戻った。忠興は、その帰国の前に工業事情の視察で欧米各国を回っていた明太郎とニューヨーク州オールバニで落ち合い、その時に「自分が創立した早稲田大学の理工学部で教えてもらえないか。海外留学で学んだ知識を後輩に伝えてほしい」と懇請されていた。さらに、帰国すると、間もなく早稲田大学理工学部の電気工学科長、浅野応輔からも「ぜひ、うちへきてほしい」と強く勧誘された。

忠興は迷った。芝浦製作所にいれば、名誉にも物質的にも恵まれた華々しい電気事業家という将来が約束されていた。一方、当時、世間からまだ認められてもいなかった私学の早稲田で、一学科の教授として技術者の養成のために働くことは地味な仕事である。迷い悩んだ忠興は「機械を造るよりも、人間を造る方が意義がある」と、大学教授の道を選んだ。

こうして忠興は芝浦製作所を退社し、大正元年九月、早稲田大学の理工学部電気工学科教授に就任したのである。その一年後には早くも同科の主任教授になっている。

忠興が教壇に立つと、たちまち学生の注目を集めた。世界最高の学者から最新の電気工学を学んだ教授とは思えないほど、少しも高ぶるところがない穏やかで優しく円満な講議ぶりが評判になった。また、学生たちとも親しく話し合い、大きくふところに包み込んでしまう包容力といい、学生たちの信頼感は高まるばかりだった。

大正十年九月、理工学部長になってからは、着々と教授陣を充実させ、また、設備の拡充にも務め、授業内容の改善も図った。科目も、さらに応用化学科、工業経営科、通信学科など順次、増やしていった。機械工業の発展には、機械を造る金属工業の進歩が必要だと鋳物研究所も設立した。

早稲田の理工学部を世間から認めさせるためには、学内の充実とともに卒業生の就職先を探して後輩に道を開くことが必要と思えば、講義や校務の合間を縫って企業回りまでして就職のあっせんにも努めた。

こうして理工学部長、山本忠興の名は実業界にまで広がり、理工学部を大いにアピールすることになった。だから、早稲田大学においても忠興の存在は大きく、後に「総長にしたら…」という声も上がったほどだった。

リンゴ禍事件解決に一役

忠興は、教授としての実績はもちろんだが、工学博士として早大式テレビジョンを開発するなど発明

家としての輝かしい実績もある。それに大変なスポーツマンで、一高時代は野球部で活躍した。そして、早稲田大学の野球部にも大きな足跡を残している。昭和八年十月、東京六大学野球の秋の早慶戦で起きたあの有名な〝リンゴ禍事件〟の解決に一役買ったのが、実は忠興なのである。

この〝事件〟は、同月二十二日、早慶一勝一敗のあとを受けて行われた三回戦の九回裏に起きた。慶応の水原三塁手が守備についたとき、早大側スタンドから食べかけのリンゴがグラウンドに投げ込まれた。これを同三塁手が拾って早大応援団席めがけて投げ返した。二個のうち一個が学生の顔面に当たったからたまらない。

試合はそのまま続けられ慶応の勝ちに終わったが、リンゴを投げ返された早大応援団の一部が、反対側スタンドの慶応応援団席に乗り込み、塾長から贈られた指揮棒を奪い取るという騒ぎで球場は大混乱した。

この事件はその場でけりがつかず、さらに紛糾して両校野球部の問題から大学当局にまで波及した。早稲田は慶応野球部の一、二の選手の処置とリーグの除名を主張。慶応は早稲田応援団の暴行に対し、野球部が責任を取ることと、野球部長、監督の引責辞任を要求して互いに譲らなかった。こうして一時は早慶戦の中止も憂慮される事態になった。

この時、早稲田は体育会会長をしていた忠興が慶応側と折衝を重ねた結果、事件の発生後、約一カ月目にして次のような条件で解決した。「早稲田は野球部長が引責辞職する」「慶応は選手に謹慎を命ずる」

会議を終えた忠興は新聞記者に次のように語った。

「六大学リーグ委員会の空気は早大の除名をやりかねまじき険悪な状態で、慶応も強硬条件を持ち出し、このままでは会合が決裂し、六大学リーグの将来にも禍根を残すものと考えたので、一身を犠牲にするつもりで調停案の字句に抱泥せず、独断で処理した。まったく、勝安房守の江戸城明け渡しのような気持ちだった」

こうした忠興の献身的な努力で事件は解決をみた。今なお早慶戦が伝統的に行われているのも、忠興なしには語れない。リンゴ禍事件の解決に手腕を発揮した忠興は全学生の衆望を集めた。時の田中総長の信任も厚く、その年の暮れ早稲田大学の野球部長に就任した。

忠興とスポーツといえばもう一つ秘話がある。

幻に終わったが、昭和十五年、東京で開催されることになっていたオリンピックの最初の提案者が、実は忠興だったのである。

忠興が早稲田大学の理工学部長で、体育会の競走部長をしていたころ、たまたまパリオリンピック（大正十三年）の三段跳びで六位入賞した織田幹雄が入部してきた。この織田青年からオリンピックなどの知識を吸収した忠興は、たちまちオリンピック熱をかき立てられた。そして、昭和四年に東京で開かれた国際電気工学会で、同じ電気工学の大家でＩＯＣ委員をしていたスウェーデンのエドストロームに会い「日本でのオリンピック開催の可能性はあるだろうか」とたずねた。答えは「可能性あり」。

ここから忠興のオリンピック東京招致運動が始まった。忠興は各関係者に「オリンピックを東京へ誘致しよう」と呼び掛けるとともに、渡欧するたびにエドストロームに会い、東京招致を働きかけた。

一方、当時の東京市長、永田秀次郎も「オリンピック開催年の昭和十五年は皇紀二千六百年にあたる。その記念行事に、ぜひ東京で開催したい」と忠興の提案に乗ってきた。東京市会も昭和六年、「国際オリンピック大会東京開催に関する決議案」を満場一致で可決し、その翌年にＩＯＣに対して正式に立候補した。こうして昭和十一年七月のベルリンでのＩＯＣ総会で、日本は有力なライバルを押しのけて、昭和十五年のオリンピック東京開催が決定した。しかし、この決定も昭和十二年七月、盧溝橋で日中両軍が衝突し、日本が戦争に突入したため中止となり、忠興らの提案もむなしく幻に終わった。日本で晴れてオリンピックが開かれたのは昭和三十九年（東京）のことである。

忠興は早稲田大学理工学部長を二十三年間務め、昭和十八年に同大学理工学部研究所長に就任。その翌十九年、同大学名誉教授に推された。

竹内記念ラウンジ

平成四年二月、理工学部のある大久保キャンパスに、新研究棟のツインビルが完成しているが、この時に理工学部の創立者である明太郎の名前を永久に残すため、竹内記念ラウンジを設置することを決めた。そして、平成六年に同ビル二階の一角（約百三十平方メートル）を取り仕切って、ここを「竹内記念ラウンジ」とし、ＯＢをはじめ、一般学生らの会合などにも利用してもらえるように開放している。

明太郎の表彰式が行われた際、式辞で天野学長が「貴下の肖像を理工学部教室に掲げて永くその偉功

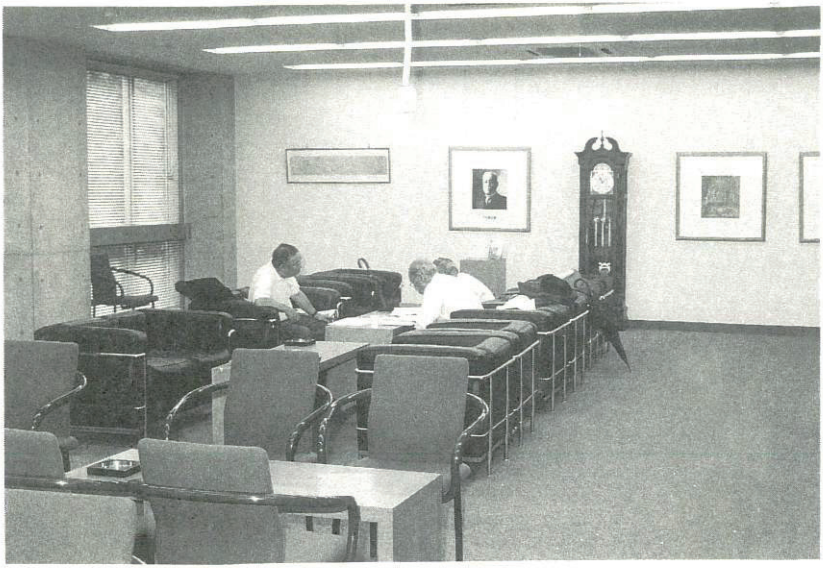
を記念する」と述べたあの肖像は、改めてこの竹内記念ラウンジに、当時の感謝状とともに飾られている。

同大学ではこれまで創立者の大隈は別格として、学校運営のために寄付するなどの協力者の功績をたたえてその人の名前を冠した施設をつくったりしないことを建前としてきた。竹内記念ラウンジの設置は、その〝哲学〟に背くものだが、宇佐美昭次・理工学部長は「竹内記念ラウンジの開設は、当大学の前例を破るもので、いわば思想転換といえる。これが最初のケースだ」と言う。



早稲田大学理工学部のある大久保キャンパス。前方の超高層ビルは新研究棟のツインビル

早稲田大学が今も明太郎の功績をいかに高く評価しているかがこの一事をもってもわかる。そして、同部長は「早稲田大学創立の父が大隈重信なら、理工学部創設の父は竹内明太郎さんといってもいい。資金援助もそうだが、特に、自身で育てられた教授陣をそっくり寄贈してくれたことは大きい。



ツインビル内に設けられた竹内記念ラウンジ

それで理工学部が開設できたのだからありがたかった」と教授陣の寄贈を特に強調する。

わずかに機械、電気、建築、採鉱の四科でスタートした早稲田大学理工学部は、今や十四学科（機械工学、電気電子情報工学、資源工学、建築学、応用化学、材料工学、電子通信学、経営システム工学、土木工学、応用物理学、数学、物理学、化学、情報学）にもなっている。時代に即応した新学科が次々に新設されているのである。

十人前後だった同学部の教授陣も、現在は約七百五十人（うち専任が二百三十三人）。学生の数も一万人近くにのぼっている。校舎も、理工学部のある大久保キャンパスだけでもツインビルをはじめ高層ビルが何棟も林立。キャンパスというよりは、ちょっとしたオフィス街といった感じである。先見の明にたけていた明太郎でも、理工学部のこんな光景はとても想像できなかったのではないか。いや、あの明

太郎なら、きっと今日のこのような状況も予想していたかもしれない。

早稲田大学と小野梓

早稲田大学の理工学部創設者は明太郎だがその早稲田大学の創立に深くかかわったのが、明太郎と同じ宿毛出身の小野梓であったことを忘れてはならない。この同郷の二人が早稲田大学に深くかかわったのはくしき因縁といえるかもしれない。

早稲田大学の創立者大隈の片腕として、実際に早稲田大学の前身である東京専門学校設立の実務にたずさわったのは小野梓だった。

小野は嘉永五年（一八五二年）二月二十日、宿毛に生まれた。明太郎より八歳年上である。九歳の時、宿毛の儒者、酒井三治の門に入り勉強した。後に東京に出て昌平校に通学、やがて海外にも留学し、語学だけでなく経済や法律を学んだ。この時の経験、知識が後に国憲汎論を著して英国型の立憲政治を鼓吹し、また、自由独立をとなえて東京専門学校を創立する基となった。この東京専門学校が早稲田大学の前身である。

ところで、小野は帰国後の明治九年から司法省に勤めたが、藩閥政治の旧弊を脱しきれず各省の情実や因縁による政治の弊害は目を覆うものがあった。それを除去するため、会計検査院の設立を提言し、それが実現した時、彼も会計検査官になった。しかし、明治十四年、三十歳の時、検査官を辞めた。

大隈重信とはこのころ知り合い、大隈が改進党を組織した前後から度々会って議論するようになった。この中で私学の話も出て、同じ考えを持っていた二人が意気投合して、後に大隈は小野に学校設立の準備を一任したのである。

大隈は政治だけでなく学問、教育にも深い関心を持ち、維新前に既に長崎で英語学校を開いていた。西南役後は、国会を開設して国民多数の意見による政治を行うためには、まず、政治や経済に理解のある人材を養成しなければならない。また、当時の官立の大学は官僚の意のままで独立の精神もなく、諸外国の模倣に過ぎない間違いが教育方針で運営されていることにあきたらず、私学を盛んにして自由の学府を盛り立て、学問の独立を図らねばとの考えを持っていた。それが、東京専門学校の設立につながるのである。

大隈から、そうした目的を持った学校の設立準備を一任された時、小野は既に若い学徒を集めて「鴎渡会」を組織し、政治、経済の学術研究をしていたが、この人たちを中心に早稲田にある大隈の別邸に学校を開く準備を始めた。

明治十五年七月には校則を作り、大隈を訪ねてそれを示している。学校名も早稲田学校、戸塚学校、東京学校などいろいろ考えられたが結局、東京専門学校に名称が決まった。小野が学問の独立について考えていたのは若い時からで、明治八年に執筆した「勤学の二急」にそのことを論じている。当時の学問の独立とは、日本語で学問をするというほどの意味であった。

そのころの東京大学では日本人の教師までが英語で講義をしており、英語の講義でなければ学問でな

いように考えられていた。小野は「外国の文書と言語をもってのみで子弟の教育をしていては、学問の独立はとうていできない。ぜひとも日本語で教え、日本語で学ぶということにしなければならない」と学校創立の時の演説で述べている。

この東京専門学校の校舎の建設は、明治十五年の中ごろには既に着手されていた。校舎は三棟で、一棟は講堂、他の二棟は寄宿舎だった。いずれも木造二階建てで、当時としては素晴らしい洋風建築だったという。

校長には大隈の養子、大隈秀磨がなり、小野らは議員となった。開校式は明治十五年十月十二日に行われ、小野は、十数年後には専門学校を大学の位置に進めたいこと。学問を独立させて国民精神の独立を図ること。学校を政党、政治の外に置いてその本質をまっとうさせること――などと学校に対する希望、態度、抱負について熱弁をふるっている。

講師は大学の秀才、新進気鋭の学者であるというので、立憲政治にあこがれ、自主独立を慕う青年論客が続々と集まった。開校の際は七十八人だったが、その年の十一月に六十人、十二月に十四人の途中編入が相次ぎ、明治十五年末には既に百五十二人におよんだ。

小野は学校が開設されると毎日のように出掛けていった。彼は、単に議員というだけで講師にもなっていなかったが、事実上、校長の事務をとり、また、課外講演として日本財政論や国憲汎論を講義した。小野が勤王と立憲政治とを結びつけて論ずる時などは、学生も泣き、小野も泣くという実に感動深い講義であったという。今の大学では、とうてい考えられないような講義風景である。

創立の母、小野記念堂も

こうして小野の尽力で開校した東京専門学校が、後に早稲田大学となり、明治四十一年には明太郎の全面的な協力を得て理工学部の創設となって、現在の発展ぶりをみせているのである。

早稲田大学の本部キャンパスには、創立者の大隈重信の名前を冠した大隈講堂や等身大の像も建っているが、その大隈像に隣接した七号館の一階には、小野梓の名を冠した小野記念講堂がある。同大学の実質的な創立者として、小野の功績をたたえたものである。

大学側が小野記念講堂という形でキャンパスに今も忘れず彼の名を残していることは、小野への最大の敬意といってもいいだろう。また、同大学では大隈重信が〝創立の父〟であるのに対して、小野梓を〝創立の母〟とも呼んでいる。

小野梓は、国憲汎論のほかに多くの法律書を著作し、自ら東洋館書店を経営するなど良書の普及にも努めている。しかし、惜しいことに明治十九年一月、胸を病んで亡くなっている。数え年で三十五歳の短い生涯であった。この偉大な小野の功績をたたえ、後世に残すために、同志らが郷里の宿毛・清宝寺に記念碑を建立している。

私立高知工業学校の創立

明太郎は「現場の実務にも精通し、高度技術をも吸収できるような中堅技術者を養成する工業学校が必要である」と考えていた。そして、その構想は早稲田大学の理工学部となって実を結んだ工科大学構想とほぼ同時進行の形で具体化の方向を探っていたのである。

この工業学校の必要性については、明太郎の郷里である高知県でも明治四十年前後から論議が高まっていた。工業学校設立に積極的だった一人に明太郎と同じ宿毛の出身で、しかも同じ万延元年（一八六〇年）生まれの竹馬の友、織田信福がいた。

織田は後に高知市へ出て歯科医を開業する傍ら、やはり医師で政治家でもある町田旦龍らとともに自由民権運動にもかかわった。明治二十年、時の政府による不当弾圧を粉砕しようと、土佐の有志らと自家製の爆弾を持って上京したという話は有名である。

その織田が工業教育の必要性を訴えたのは明治四十年、県会議員となる以前からで、人に会うと「高知に産業を興し発展させるためには工業学校を作って工業技術者を養成しなければならない」と説いた。当時、高知県内には農業学校や商業学校はあったが、工業学校はなかった。県も工業学校の必要性は認めていたが、施設や実習機械類を整備するなど費用がかかりすぎるため見送られていたのである。

そんな時だった。織田は親友の明太郎が「郷里のために何か役立ちたい」と考えていることを思い出

した。そして、すぐに明太郎に連絡をとり、ことの次第を説明したうえで、率直に「ぜひ、高知へ工業学校を作ってくれ」と申し入れた。

明太郎は、親友の織田からのこの突然の申し入れに驚いた。というのも、明太郎が常々、「郷里のために何かしたい」と考えていたのも事実で、しかも、明太郎にとってその「何か」とは、実は織田から申し入れのあった「工業学校」だったのだから―。

明太郎が、織田からのこの申し入れを受け入れたことはいうまでもない。「よし、やろう。ただ、自分は鉱山事業などで忙しくて手が回らない。金は自分が出すから、お前がやってくれ。立地場所や用地の確保などには万全を期して話を進めてほしい」と明太郎が言えば、織田も「ありがとう。分かった。責任をもってやる」と応じた。

織田は早速この話を町田や、自由民権運動にもかかわり、政治家で教育者でもある大先輩の山本幸彦らに持ちかけて協力を求めた。こうして工業学校の設立問題は、町田や山本をはじめ地元の有力者らの全面協力を得て、とんとん拍子で進んでいったのである。

この高知工業学校設立の問題については、平成八年七月、明太郎の孫にあたる竹内啓一が保管していて公表した明太郎の日記の中にも断片的にではあるが、その動向がはっきりと記述されている。

その辺のところを明太郎の日記から一部、拾ってみた。

明治四十年二月三日／芝佐久間町の山本幸彦を訪い、高知市に明年、父（綱）古希寿記念のため、工業学校設立のことを託す。

同年六月五日／山本幸彦、一昨日、高知より帰京の趣をもって来社。工業学校設立の事に付き話あり。
同年十月一日／山本幸彦も来る。高知市内の高等小学校の校舎敷地（高工学校用として）買入の件は調談の旨話あり。
同年十一月十三日／手島精一、山本幸彦、牧野啓吾と晩食、高知工業学校設立のことに付き協議。

この日記から、かなり早い時期に、既に高知工業学校の設立を計画していたことがわかる。しかも、その設立は父、綱の古希寿の記念事業としてのものであったのである。

結局、この日記などから、明治四十年の時点で明太郎は工業学校よりレベルの高い学校、つまり、工科大学と、もう一つ実践的な工業学校と、この二つの学校の設立を考えていたと推測できる。そこで、高知工業学校用地として、明治四十一年六月、当時、高知市北与力町（現在の永国寺町）にあった土佐郡第一高等小学校の敷地、約二千四百六十七坪とその建物二棟を父、綱の名前で購入している。

高知への工業学校設立は明太郎の長年の夢でもあった。父、綱とともに、明太郎にとっても高知は古里である。だが、これまでは県外で活動することが多かった。鉱山事業や鉄工所の経営にしても、どういうわけか古里から遠く離れていて、あまり郷里に帰ることがなかった。それだけに事業にも成功して余裕もできてくると「古里である高知のために何かしたい」という思いが強くなった。

明治の末期ごろの高知といえば、農業、林業、漁業などの一次産業が基幹で、工業には目ぼしいものがなかった。また、教育の分野でも高知は他県に比べると遅れていた。

こうしたなかで、私立の工業学校の設立計画は、明太郎の趣旨に賛同する協力者たちの手で着々と進

められていったのである。もちろん、その資金は明太郎がすべて持った。高知工業学校用地とその建物二棟の購入資金も、明太郎が出している。

高知市北与力町にあった土佐郡第一高等小学校の跡地を高知工業学校用地として購入する際、こんなことがあった。

購入を予定していた旧校地のすぐ南隣に当時、高坂高女があった。このため県の一部から「女学校の近くへ男子校を建てるのは好ましくない」との反対意見が出た。

これに対して明太郎は、

「馬鹿なことをいうな。欧米へ行って見よ。もう、男女の区別などなく、学校教育そのものが男女共学になっている。わが国でも、遠からず男女共学になる」

といって県の反対を押し切ってしまった。わが国で本格的に男女共学制度がとられたのは、太平洋戦争後の昭和二十一年のことである。

このような経過をたどって、私立高知工業学校の設置申請と財団法人設立の申請手続きが行われたのは、明治四十五年二月である。

財団法人私立高知工業学校の役員には、設立者として明太郎ではなく父の綱、評議員に明太郎と東京高等工業学校校長の手島精一、監事が明太郎と織田信福、理事には同校の初代校長となる吉崎七次郎らの名前が挙げられていた。

手島は、明治期の産業教育のリーダーでもあり、明太郎とは唐津鉄工所の設立や早稲田大学理工学部

の創立以来の仲で、私立高知工業学校の設立にも、校長をはじめ教員の人事などの面で大きな役割を果たしている。理事に就任した吉崎も、手島の東京高等工業学校機械科を卒業して、兵庫県立工業学校で十年余り教鞭をとっていたところを手島からのたっての要請で、高知への赴任となったもので、吉崎は明太郎らの期待にこたえて、後に校長として大いに手腕を発揮し、高知工業学校の基礎をつくるのである。

当時の財団法人私立高知工業学校の「寄付行為」第一条には「本財団法人は、工業学校を設立して学力と実技を兼備した技術者を養成するをもって目的とする」とあり、「資産」については「竹内綱は本財団を設立するために、学校資金として金三十万円を寄付する」（第四条）となっている。が、実際にこの資金を出したのは明太郎とみていいだろう。

明治末期の三十万円というと現在に換算するとどれくらいになるのだろうか。恐らく数億円という単位になるであろう。そのように巨額の資金を投入しての工業学校の設立である。明太郎が、いかに工業教育に力を入れていたか。そして、郷里の産業振興に情熱を注いでいたかがわかる。

しかも「竹内綱とその家督相続人は、明治四十五年から毎年、学校設備の進行に伴い必要な金額を払い込み、明治五十年までに払い込みを終わるべし」としている。このことは、創立後、五年間は竹内家が高知工業学校を丸がかえで面倒をみるということである。とても常識では考えられないような行為だが、明太郎は早稲田大学の理工学部設立に際して既に実践済みであった。

私立高知工業学校、開校へ

財団法人私立高知工業学校は、明治四十五年三月十一日に文部省が認可したことによって、正式にスタートする。だが、私立高知工業学校は、全国にあった工業学校とは異なって、独自の教育方針を掲げていた。既存の工業学校への追随、模倣ではなく、技術や知識に偏らず、実技とともに人間形成にも重点を置いたカリキュラムが組まれていた。もちろん、それは明太郎の教育理念でもある。

学則では、同校は本科と予科をおくことになっている。本科は機械科と電気科で、修業年限は本科が三年、予科が二年である。それまでの工業学校の修業年限は、高等小学校の卒業者を対象に三年となっていたが、明太郎は工業学校での基礎学力の充実を図るため、高等小学校より二歳年少の尋常小学校の卒業者から入学させたのである。

当時、全国の工業学校の修業年限は三年で、予科と本科を合わせて五年の修業年限にしたのはまれであった。後に文部省は、工業学校規定を改正し、五年制を導入することになる。

開校への準備は順調に進み、入学志願者の募集も始めた。明治四十五年三月二十六日に行った第一回の入学試験には、募集人員七十人のところへ二百五十六人もの応募者がどっと押しかけた。現在のように宣伝も十分に行われなかったにもかかわらず、競争率は四倍近い高率となった。このことはそのころ高知県でいかに工業教育が必要であったか。また県民もそれが私立であれ公立であれ、工業学校の開設



明治四十五年五月の開校間もないころの私立高知工業学校（旧北与力町、現永国寺町、現高知女子大学所在地）

をいかに切望していたかを物語っている。

初の入学式は、明治四十五年四月六日に行われた。入学者は予科一年生九十人だった。校長含みで招へいされた吉崎七次郎は、校長事務取扱いとなり、教師陣の多くは東京高等工業学校の手島によって集められた。授業は同月八日から始められたが、開校式は五月四日に県内外の関係者多数を招待して県公会堂で行われた。

この開校式には、創立者で校主でもある竹内綱をはじめ、校長の人選や教師陣の確保に協力した手島も来高、出席する中で盛大に式典が挙行された。ただ、この時、事実上の創立者である明太郎はちょうど海外の工業事情など視察に出掛けていたため、開校式には出席できなかった。

この開校式では、校主の綱がかなりの時間をかけて記念講演をしている。綱、明太郎父子の工業教育に対する考え方や、私立高知工業学校設立の趣旨な

ども述べられた。その要旨をまとめたものが同校にある。

「私が本校を設立するに至った来歴、および、私と明太郎が理想とするところをお話し致します。私は幡多の宿毛の出生で、高知藩の家老、伊賀家の家臣であります。宿毛は高知から四十里余りにして交通は不便、日本でもまれなへき地で、戸数はわずか二百戸に足らぬ片田舎です。しかるに伊賀家は、先祖代々、文武を奨励、田舎には比較的まれなる学校を設けて、家臣の教育をしてきました。このため、明治維新に際して伊賀家の家臣百人足らずの中より若干の有志の士を出しまして、多少、国事に尽くしました。

かような思いから、私は先年来、明太郎と相談し、小規模でもいいから中学校のようなものを設け、郷国子弟教育の一助にと思い立ち、その計画を明太郎に一任して、ようやく今日、本校の創立をみるに至りました。

さて、私たち父子の理想におきましては、わが国は古来、農業国で農をもって立国の基としてきました。しかし、今日では単に農業本位では一国の経済を立てるわけにはいかなくなった。むしろ、農をもって国内を養い、工業をもって国外に対抗しなければならない時勢になってきたのであります。しかるに、日本は政治、軍事においては一等国たる地位にありながら、経済的に富の程度は、まだこの地位にない。もし、この地位を持続するには、これに伴う富力を増進しなければならない。そして、その富を造るのは工業の発達を図る以外にないのであります。

工業の発達は、このようにわが国の目下、急務であります。工業の発達を図るには、とりわけ工業教

育を盛んにして優良な技術者を養成することが必要で、欧米諸国の工業先進国が今日のように発達したのは、一に工業の基礎たる科学の進歩を図り、技術者多数を輩出した結果にほかならない。要するに、工業を発達する根本は技術者である。故に、工業を発達させるには、まず技術者の養成を図らなくてはならないということなのである。

しかし、技術者の養成は決して容易な業ではない。私は、明太郎とともに多年にわたって工業の実際に関係しておりましたが、その経験からして技術者は次のような素養を持つものでなければならないと考えた。

（一）身体の強壮なること。
（一）技術上の学問の素養あること。
（一）学問の素養と相まって、これにそうだけの実地上の手腕のあること。
（一）右の三つの能力を発揮するに足る人格を備えること。

そこで、工業教育の理想も、こうした人物を作ることでなければならないと考えたのである。世上、工業に関する学校はたくさんあるが、それらの学校が果たして私の考えたような理想をもってやっているかどうか。私は、多くの工業学校の教育法が学問に偏って、実地を軽んずる傾向があるのではないかと思ったことである。できるならば、自分の考えたような理想の教育をやってみたいと私たちは本校を設立するに至ったわけであります。

次に、私が本校を当地に設立するに至った事由ですが、私は土佐を郷里としている者であり、この土

代議士工学博士　白石　直治

前代議士　山本　幸彦

早稲田大学教授　中村康之助

東京高等工業学校長　手島　精一

高知県知事　杉山四五郎

校主　竹内　綱

高知市長　藤崎　朋之

校長　吉崎七次郎

県事務官　植木半次郎

県内務部長　和田　世民

県教育会長　安藝喜代香

教諭　森澤　菊吾

監事　織田　信福

検事正　吉良辰次郎

会計　岩松　昌

教諭　村井　義孝

教諭　島田　比樂

県属　中野　浩氣

教諭　溝淵　守

助教諭　佐竹　弼三



（開校記念写真５月４日）

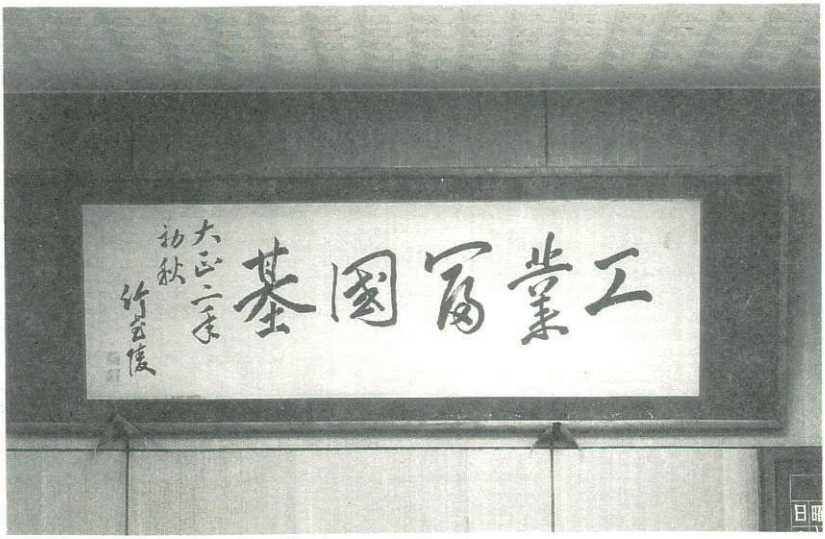
地が発達して土佐の子弟が続々と立身出世をすることを願う精神においては人後に落ちないと信ずるものであります。へき地ではありますが、古来、天下の人物が土佐からは出ている。明治維新の際には最も華やかであった時代かと思うようなわけで、その後も社会のあらゆる方面で活躍しています。

しかし、今日のわが国は、工業立国でいかねばならない。それなのに、わが高知県にまだ工業教育の機関ができておらぬのは、どうしても物足りない。もちろん、国家には国家として相当の工業教育機関がありますが、軍隊でいう士官以上は国家がそれを育成、それ以下はどうしても地方で養成しなくてはならぬのであります。ここに本県において、かの中学校や師範学校に並んでいくだけの工業学校がどうしてもなければならないという結論に達するのであります。

私が学校の設立を思い立った理想と、工業学校を当地に開校しました理由は、右申す通りであります。幸いに、諸賢の庇護により、ここに開校式を挙行するに至りましたが、私の微力であるがため、学校規模ははなはだ狭小であるのみならず、創立そうそうのこととて、校舎をはじめ、すべての設備が不完全でありましてざんきにたえません。

しかし、私の力のおよぶ限りを尽くすつもりでありますれば、本校の職員、生徒におきましても深じんのご忍耐をもって、ご勉励あらんことを希望するのであります。また、来賓諸君に対しては、この点に関しひとえにご同情をもってご賛同下さるよう特にお願いする次第であります。

私は、この開校式に臨みまして、私ども父子が感想を陳述、ご清聴をわずらわしました。来賓諸君、願わくは私たち父子の微衷を諒とせられ、これから将来にかけて本校の教育に深厚なるご高配とご援助



綱が書いた「工業富国基」の扁額。現在も県立高知工業高校の校長室に掲額してある

をたまわり、もって本校の創立の趣旨を貫徹し、相応の成績をみるに至らんことを懇願する次第であります」

以上が綱の講演の概要である。分かりやすく、出席者たちに語りかけるようで、綱と明太郎父子の高知県の工業教育の発展にかける情熱がほとばしる講演である。

綱は、私立高知工業学校が開校した翌大正二年秋に同校を訪れて「工業富国基」（工業は国を富ます基なり）と揮ごうしているが、県立高知工業高校となってから、現在も校長室に掲額してある。この「工業富国基」の五文字こそが、綱の、そして明太郎の理念でもある。

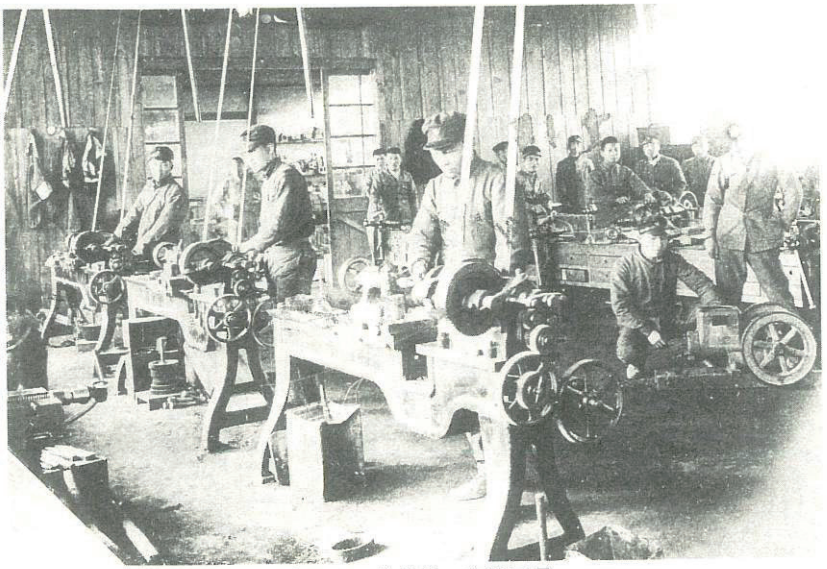
高知県の機械工業の原点に

私立高知工業学校はスタートしたものの、綱自身が認めているように開校当初は、すべての施設が貧弱で狭少だった。が、綱と明太郎父子は「寄付行為」の規約（第五条）、つまり「竹内家は明治四十五年から五年間、学校設備の進行に伴い必要な金額を払い込む」ことを忠実に履行し、年々、諸施設を充実させていった。

開校した明治四十五年九月には、鋳造工場と鍛冶工場が落成したのをはじめ、大正三年には新築本校舎がすべて完成。翌大正四年には第二工場の新築工事に着手している。機械科と電気科の二学科には、当時としては最新鋭の機械を備えた実習工場もできた。

私立高知工業学校は、大正六年には第一回の卒業生を社会に送り出したが、そのころの機械実習工場には六呎、八呎の旋盤をはじめ、円筒研削盤、シカル盤などがずらっと並んでいた。もちろん、当時、県下の民間工場では他に例がなく、恐らく四国でも最先端の設備であったろう。

この間の大正四年には、二気筒六馬力のガソリンエンジンを製作し、翌五年には早くも六呎旋盤を製作しているのである。大正七年になると、機械科の生徒が三台の六呎旋盤を製作。それ以後も引き続いて製作し、機械工場に据え付けて生徒の実習に利用していた。機械科で製作した旋盤の一部は、高知市内の工場にも据え付けられた。また、これらをモデルにした八呎旋盤も民間工場で製作されるようになっ



高知工業製の六呎旋盤を使っての機械科の実習風景

た。当時、中央では工作機械メーカーの池貝鉄工所が旋盤の市販を始めていたが、これに遅れることわずか十年余りで、これが高知県における工作機械製造の原点といえる。

昭和十六年ごろの実習工場の旋盤は、十四呎大型旋盤をはじめ、ほとんどが同校の製作による機械で、昭和十九年には軍の要請で六呎旋盤の生産納入もしていたといわれる。また、このほかにもガソリンエンジン、焼玉エンジンなどを多数生産、市販し「KOCHI・TECHNICAL・SCHOOL」の略「KTS」マークの入った機械は優秀品としてもてはやされた時代があった。

高知県機械工業会が発行した「高知県機械工業史」は、私立高知工業学校が高知県の機械工業の発展に果たした役割について、次のように指摘している。

「高知県における工作機械の歴史は、明治四十五年に宿毛出身の竹内綱、明太郎父子により創立された

私立高知工業学校にさかのぼる。これにより工業教育が行われ、中堅技術者が養成されるとともに、この工業学校で製作される旋盤や焼玉エンジンは、県の工業界をリードするものであり、その発展に大いに役立ったのである」

実習工場を民間に開放

綱、明太郎父子が創立した私立高知工業学校は、高知県の産業界に大きな刺激を与えた。とりわけ、機械金属関係の業界にとってはモデル的な存在となったのである。このため、学校側でも積極的に民間工場には窓口を開放し、地元の工場主らの見学の申し込みにこたえるだけでなく、工場側からの相談や機械の設計から技術指導にも前向きに応じた。実習工場の機械を使って依頼のあった製品を製造したり、機械の修理まで行った。民間の工場にとっては、まことに心強い存在で、私立高知工業学校は次第にその名を高めていったのである。

竹内鉱業の取締役支配人を務めた松本俊吉が、明太郎の追憶集に寄せた文中に、こんなことが書いてある。

「先生の郷里、土佐は政治論や理屈の発達したところで、工業面は非常に遅れをとっているのを嘆かれていた。そこで、工業学校を設立し、工業技術を習得した学生の養成有用の材を作るほか、工業思想啓発のため、機械や化学の利用を促進し、もって県の工業振興を図り、わが国の工業隆盛に資せんために

なされた。従って、学校は開放主義をとって実社会に進んで接触させ、工業上、諸般の相談にあずかり、これを指導し、あるいは実習工場にて機械類の製造をなして提供し、あるいは難事なる機械の修繕をも引き受けて利便を与え、一面、工業上の知識の普及に努めた。

かくして新時代をかくせるごとくに反響覚醒を促し、以来、同地の工業の振興は目覚ましきものありて、その効果は実に大きなものがあった。現在（昭和十年）においても、依然として学校は県民の工業上の指導、助力者としての使命を尽くしつつある。実に、県下工業の事業中心は学校にあるといってもよい状態で、指導的立場にあり広く貢献している。

このようなことは、他の工業の諸学校においては類例のない情景である。また、人格養成のために、特に牧師に委嘱して毎週、精神講話のためバイブルを講述させるなど、この種の学校ではほとんどまれなる存在で、類例のない特色である」

同じ明太郎の追憶集に、初代校長で、校長事務取扱い期間も含め、創立時から二十年以上も同校長を務めた吉崎七次郎も、概要、次のような一文を寄せている。

「私立高知工業学校は創立時、わが国の工業学校中、毛色の変わったものとして世間に注目された。竹内明太郎先生が鉱山業、機械製作業など各種工業界で活躍した豊富な経験と、欧米で研さんした高まいな学識とをもって、青年工業技術者を養成するために創建したもので、他の府県立工業学校と設立趣旨がおのずから異なっている。

わが国従来の工業教育をみると、帝国大学は、ただ欧米の工業教育の模倣で、専門学校まで大学にな

らい、はなはだしきは工業学校、徒弟学校の教師までが大学で教えられるノートそのままを講義している。竹内先生は、その教授指導の無定見さを大いに嘆いていた。そして、わが高知工業学校には決して他人のまねをするな。他の学校に追随してはならぬ。わが国独特で青年工業技術者に適切なる教育をなすべきであると懇々力説した。

高知工業学校の学科は当初、機械科と電気科でスタートしたが、その後、応用化学、土木、建築が新設され、五科になっている。地方としては珍しいと識者からよくいわれた。いずれの科も明太郎先生の理想抱負を実現されたものである。

学校創立以来、歴代の知事、部長からは『この海南の土佐へ、機械科、電気科のごとき設備に経営の多額の財費を要するものを創設するのは県営としては容易に成立し得ない。それを独力で企画経営された先生の卓越した識見と偉大さには、ただ感嘆し敬服せざるを得ない』とよく言われたものである」

明太郎が理想とした私立高知工業学校の運営の特色をよく言い表している。同時に、また吉崎校長も、明太郎が意図する工業学校の教育方針を貫き、多くの優れた工業技術者を社会に送り出した。

高知工業学校では、専門外の科目も重視した。機械、電気などの専門科目は当然のこと、国漢、数学、外国語、地理、歴史等の基礎学科も専門科目と同様に重視した。その時間数も、文部省規定を超過していたことは異色であった。これも、従来の工業学校の教育が専門学校、大学にならって、あまりにも専門的に偏っていた。従って、常識に欠けるところがあり、発展性の少ない技術者を作るという弊害を生んでいた。

専門外の科目を増やし、それを重視したのは、そうした弊害をいくらかでも除去し、より弾力性のある人間として、また、技術者として養成したいというのが明太郎の狙いであったことはいうまでもない。こんなところにも、明太郎の高まいな理想と識見がうかがわれるのである。

学校は教職員まかせ

明太郎は、高知工業学校を創立後は、帰高すると、よく学校に立ち寄った。やはり、自分たちが創立した学校でもあり、それがどのように運営されているかは常に気にかかっていたのであろう。とりわけ、自分の理想とした教育方針が生かされているかどうかは、自分の目で確かめておきたかった。

しかし、学校に寄って教職員らがあいさつに出ると「それにはおよばん」と言って、あいさつすら断るほどの気の使いようで、自分が創立者であるといった態度はみじんも見せなかった。校舎も一巡するが廊下を通るだけで、教室にも入らなかった。授業の邪魔になり、教師や生徒にいらぬ動揺を与えたくないと思っていたのであろう。

そして、明太郎に「せっかく来校されたのだから、生徒に講話を」と校長らが頼んでもなかなか応じなかった。明太郎にしてみれば、講話を嫌ったというより、それは学校の業務に関することであり、余計な口は出したくない、いや、出すべきではない——といった配慮もあったろう。また、それ以上に「生徒の指導は校長以下、教職員にすべてまかせてある」との信頼感から「あえて自分が出るべきではない」

というのが明太郎の主義であったのかもしれない。とにかく、学校の施設などについては明太郎がすべて責任を持ち、業務に関してはすべて学校にまかせていたのである。

明太郎は、「生徒を教育するにはまず、教師から」ということを持論としていた。だから「学校の教師は、すべからく工場の体験を要する」として、学校が夏季休暇中とか、春の短い休暇の時にも現場での研修を勧めた。

これには一般教師はもちろん、吉崎校長自らも明太郎が経営する唐津鉄工所や茨城県の炭鉱、小松鉄工所などへ度々、出掛けて現場での学習を行った。

吉崎校長は、その時の体験を明太郎の追憶集の中で次のように書いている。

「私どもが工場内で作業服を着て、まっ黒になって仕事をしているのを竹内先生が見られた時は、会心の笑みをみせられ、その夜は竹内先生の宿泊所に招待され、ごちそうになった。先生は座談に富まれ、魅力ある談笑のうちに多年研さんの学理を説かれ、貴重な事業経営の体験を話されるので、時のたつのも忘れ、私どもはいつも夜十二時を過ぎて、ようやく帰宿するのが常だった」

明太郎は、学校での生徒の指導はすべて教職員に任せていたが、教職員に対しては常日ごろから自己研さんを課した。しかし、ただ研さんを課すだけでなく、教職員とのコミュニケーションを図ることも忘れなかった。こんなところにも明太郎の人間性がうかがわれる。

大家族主義の校風

吉崎校長は、私立高知工業学校の創立前の明治四十四年末から昭和八年五月まで奉職したが、大正十二年四月に県に移管されて県立高知工業学校となったので、私立時代十二年、県立時代十年の合計二十二年間に私立と県立の両方の学校経営を体験したことになる。

そして、この前半の私立時代は大家族主義であった。明太郎を大家長に、職員、生徒は、いってみればその家族で、みんなが学校を自分たちのものと思い、相寄り、相助け合って教師は生徒を指導、生徒は教師から学んだ。吉崎校長の言によれば「竹内明太郎先生の宏量、海のような資性をもって、その大家族を統率し学問の研究に、人格の修養に、ともに精進したので生徒も職員も親船に乗り、洋々たる春の海を航行するようだった」。

明太郎の統率下の当時の校風が、いかに自由かっ達だったかがうかがわれるのである。

同校の自由かっ達な校風は、先にも触れたが、学校を民間企業だけでなく、一般にも開放することにも表れている。そもそも「学校は単に生徒が使用するだけでなく、世間一般の人にもこれを使用させよ」というのが明太郎の主義であった。

だから、創立当時から一年おきくらいに日時を決めて各実習工場を開放して、一般の人たちに参観してもらい、工業に対する認識を深めてもらうなど公共の利益を重視していた。高知工業学校の〝工場開

放〟といえば、高知の名物の一つにも数えられていたくらいである。実習工場ばかりでなく、運動場などまで放課後や日曜日には開放し、近所の子供たちを入れて自由に遊ばせていたなど異例なことで、産業界ばかりでなく、広く県民からも歓迎されていた。同校の自由な校風は、こうしたところにもみられるのである。

吉田茂が講話

ところで、大正五年十二月、竹内綱の五男で明太郎の弟にあたる吉田茂が、アメリカ大使館員として赴任する直前に休暇をとって帰高した折、父と兄が創立した私立高知工業学校を訪れている。そして、兄の明太郎からの要請でもあったのであろうか、あの演説ぎらいの吉田茂が、同校予科二年生以上の生徒に対して講話を行っているのである。そのテーマも、明太郎の意を受けたのであろう、「工業」となっている。若き日の吉田茂の講話は珍しく、テーマも示唆に富んでおり、以下その概要をまとめた。

「およそ、工業の成立については四要件を必要とする。まず第一は人。すなわち、工業に従事する人材なき時は、いかに精巧な機械があり、販路の広い市場を控えていても工業は成立しない。だから、生産に従事すべき技術者たる技師、職工を第一の要件とする。

第二は市場。生産した商品を販売する市場がなければ、工業は成立しない。幸いにも、わが国は東にアメリカ、西に中国あり。ともに広大な市場があり、工業家、実業家は優良な商品を生産し、利潤など

も考慮し、その地に適した品を輸出するよう心掛けるべきである。不適当で粗悪品と見なされ、一度、信用を失ったら信用の回復は困難で、十分に市場調査したうえで生産、輸出することに留意すべきである。

第三の要件は原料で、ある人は土佐は物産が豊富というが、私は、むしろ物産に乏しいと言いたい。土佐だけでなく、日本そのものが原料に乏しい国で、原料のないところに工業は起こらない。しかし、隣国の中国は最善の原料供給地であり、日本はもうすこし中国、朝鮮、台湾を研究して当地方を誘導、開発すれば、わが国の工業界に貢献することができる。

第四の要件は動力で、これまでは石炭に依存してきたが、石炭は将来、採掘しつくされることを考えれば、わが国は水力発電をもって石炭に代えることが可能である。つまり、水力の利用を図らなければ工業は衰退していく。

日本は近来、工業が勃興してきたといわれるが、私は、わが国には純然たる工業は存在しないと思う。英国や米国の機械ありで、学者も米国に留学し、帰国後はしきりに米国のことを話す通弊がある。しかし、それぞれ長短があり、その長所をとって生かすことが必要である。

私が車中で西洋人に会った時のことである。彼は私に向かって『貴国民ほど世界においてウエイスト（浪費）する民は他にあらじ』と言う。その時、私は『何とや、貴国は多くの貴重な人命を戦争のためにウエイストなしつつあらずや』と言い返しておいた。しかるに、ひるがえってわが国民の状況を観察すると、はなはだ寒心にたえないものがある。日と時間をウエイストすること。金をウエイストするこ

と。人と相争って、ついに生命をもウエイストするに至る――と数えれば枚挙にいとまがない。しかれども私は信ずる。土佐人くらいウエイストする人は他にあらざるべし。感情に駆られて他人と相争いて生命をウエイストする事多きを見れば、時をウエイストし、金をウエイストするがごとき事は思慮せざるがごとし。諸君、土佐をして進歩開発しようとすれば、上下相一致し、もってこの悪習を打破し、進路を切り開くべきなり」

短い講話だが、前半は工業の要件を挙げながら、わが国の工業の在り方を示し、後半は土佐人の気質にも触れ、土佐を発展させるためには短所をなくし、新たな進路を探るべきであると締めくくっている。大正五年の講話だが、その内容は現在のわが国、そして、わが高知県にも通ずるところがある。

明太郎も卒業生に講話

この年の同じ十二月、弟、吉田茂の講話と相前後して明太郎も、翌年春に卒業していく本科三年生一同に対して、評議員として講話を行っている。それまで明太郎は、ほとんどといっていいくらい講演や演説などをしたことがなかった。明太郎をよく知る人たちの間では「竹内さんは座談はなかなか上手で、よく話し、また、人の話もよく聞いてくれた。でも、大勢の人の前でかしこまって話をしたりすることは苦手のようで、むしろ避けていたようだ」などと言われていた。

当人が衆議院議員に立候補した時でも、選挙運動で演説らしい演説をしたことがなかった。学校に立

ち寄って、吉崎校長から「生徒に訓辞を」と懇請されても固辞していた明太郎である。それが、卒業を控えた生徒に講話をしたのである。自分が創立した学校で学び、やがて巣立っていくかわいい生徒たちに一言、訓辞をしておきたかったのだろうか。たまたま同校の会報に、明太郎の講話の筆記が掲載されていたので、ここに転載しておく。

「今日は、明年三月卒業する方に一言致したいと思います。もちろん、平常、校長はじめ他の先生方より十分の教訓を受けておられるので、あまり多くを申し述べる必要もありませぬから、ここでは卒業後の就職の点について一、二気付いたことをお話します。

まず、卒業後、いかなる方面に就職すればよいかということは、みなさんにとって大事なことだと思います。これについて私は、みなさんがなるべく困難な方面を選んで苦痛な仕事にあたられるようにしたいものと思います。若い時に楽をして、年寄ってから奮発して難儀なことをしようと思ってもなかなかできるものではありません。

青年時代には、困難な仕事をしてもそれほど苦痛を感ずるものではありません。苦痛を感ずるにしても、その半面、前途の希望によって必ず愉快を伴うものでありますから、心身の鍛練ができます。とにかく、若い時に困難な仕事にあたるということは、身を立つるうえにおいて最も必要なことであります。

故に、卒業後、工場に行くにしても、なるべく実地作業につく方を選ばれるように希望します。製図室とか運転とかいう方面よりも、工場服を着て実地にマシンツールを取り扱うようなところがよいと思います。この機械を実地に扱うことに熟練する時は、いずれの工場へ行ってもあまり違ったものでもあ

りませぬから、役に立てる人になれると思います。運転の方にしても、自らハンドルを取って機械を運転するようなところならよかろうと思います。

次に、報酬の多少についての希望でありますが、報酬の多きを望むは人情の常であります。しかし、始めから多くくれるものではありません。また、もらう方から考えても報酬は努力の結果であるから、報酬の多きを望む前に、まず、勤勉努力をせねばなりませぬ。自己の実力が認められたならば、報酬は自然に多きを得られるようになるものでありますから、あまり報酬の点についてかれこれ言わぬ方がよかろうと思います。

次に、吉崎校長よりもお話のごとく、明年卒業の方は就職口がいくらでもあるようで、これは誠に結構なことと思います。学校においても、それぞれ適当な所へあっせんすることはもちろんですが、みなさんの方でもこれは大事なことでありますから便宜問い合わせて、なるべく適当な所を探してもらいたいと思います。それで、もしよい所がありましたら、決定する前に一応、学校へご相談なさるようにしたいものであります。卒業、就職にあたってお話したいことはこれだけであります」

評議員として、卒業、就職を間近に控えた一期生に対して、わが子を諭し勇気づけるように就職の心得を歯んで含めながら言い聞かせている。明太郎の珍しい講話であるが、工業技術者の養成に情熱を注いできた明太郎らしい人生訓話である。

私立から県への移管

明るく自由かっ達で、家族主義的な校風の私立高知工業学校も大正十二年に大きな転換期を迎えた。私立高知工業学校の県立校への移管問題である。

そのころになると、高知県でも工業の振興と工業教育の強化という世論が急速に高まってきていた。特に工業教育については「私立高知工業学校も公立とし、県へ移管。さらに、諸施設を充実させ、より効果的な工業教育を行うべきだ」との意見が県民の間で起こり、県も黙視しているわけにいかなくなった。

明太郎は自分たちが創立し、ここまで苦労して発展させてきた私立高知工業学校の県立への移管には反対で、とうてい認められるものではなかった。私立であればこそ、創立者の理想に沿った教育方針を貫くこともできた。また、私立であったからこそ自由かっ達な校風がはぐくまれ、生徒たちものびのびと勉学にいそしむことができたのである。

一方で、明太郎は竹内鉱業などの経営上の問題を抱えていた。第一次大戦後の不況の影響で、竹内鉱業も経営不振に陥っていたのである。こうしたなかで、私立高知工業学校への資金援助も次第に厳しくなってきた。それでも学校経営にはかなりの設備・運営資金が必要で、経常費用は当初計画の約三倍にも増加するようになった。

竹内鉱業は深刻な不況下でこれ以上の学校への投資の継続ということは難しい状況になっていた。明太郎はそれでもあれこれと苦心していた。

この時に、明太郎と県の間に立って折衝したのが創立の段階でも協力した町田旦龍である。昭和十六年に発行された『町田旦龍伝』には、県立移管に関して次のようにある。

「竹内は元来、県営反対論者であった。それは竹内の教育方針と県の方針とが一致しないためであった。しかし、そのころ県下の工業教育はようやく勃興し、一私人の経営では設備、その他種々、支障があった。旦龍は県民の世論と時代の要求を察し、山本、織田らとともに、これが移管を小幡知事に交渉し、大正十二年、県営として移管し、今日の隆盛を見るに至ったのである」

結局、明太郎は町田や山本、織田といった創立当時の協力者たちの説得に折れて、自分たちが創立し育成してきた私立高知工業学校の県営移管を受け入れることになった。明太郎にとっては無念であったろうが、周囲の状況や時代の要請などからして、これを受け入れざるを得なかった。

こうして財団法人私立高知工業学校は解散、学校の施設はすべてそのまま高知県に寄付することによって、県側がこれを引き継ぐことを了承し、同年四月一日に大臣認可を得て高知県へ移管されることが正式に決まり、同日から高知県立高知工業学校と改称された。生徒の定員も五百人となり、公立工業学校として新たなスタートを切ったのである。

県立高知工業学校は県に移管される前年の大正十一年に文部省の制度改革があって、それまでの修業年限三年が五年制になった。従って同校も私立時代に予科二年、本科三年制をとっていたのを廃止して、

文部省の改革に沿って五年制とした。さらに、県立へ移管後は土木科と建築科の増設などもあって、諸施設も年々充実していった。もちろん、県立になってもある程度の規制は避けられなかったが、吉崎校長をはじめとする私立時代からの教職員らによって、創立者である綱と明太郎父子の教育理念はずっと引き継がれていった。

高知工業学校が私立から県立に移管される前後、同校にとっては悲しい出来事が相次いだ。それというのも、創立者の一人、竹内綱が大正十一年一月九日、東京で亡くなった。それから六年後の昭和三年三月二十三日には、実質的な創立者である息子の明太郎が風邪をこじらせて神奈川県茅ケ崎の自宅で亡くなった。

綱の訃報が翌日学校に届くと、全校で授業を休止し創立者の生前の偉業をしのんで講話を行い、哀惜の意を表した。創立者を相次いで失ったことは、同校にとって大きな痛手ではあったが、それが二人の掲げた教育方針に影響を与えることのなかったことはいうまでもない。

第五章　政治家としての存在

明太郎にはもう一つ、政治家としての顔がある。

明太郎はまだ二十代のころ、父、綱が自由党員として活動していた時に父とともに自由民権運動にもかかわっていた。たまたま綱から炭鉱事業の経営を任され実業界へ足を踏み入れたが、もともと政治には強い関心を持っていた。

その明太郎が再び政治の世界へ首を突っ込むことになったのは、大正四年三月に行われた第十二回衆議院議員選挙に、郷里の有志らに推されて立候補したのがきっかけとなった。この時、明太郎は原敬総裁が率いる立憲政友会からの推薦を受けて、高知県の幡多郡を地盤に立候補した。時の内閣は、立憲改進党の大隈重信が総理で、外交、国防問題で国民の信を問うとの理由で議会を解散、総選挙に臨んだ。立憲政友会とは対立関係にあったが、選挙前から立憲政友会の苦戦が伝えられ、原総裁は選挙応援のため東奔西走していた。

立候補したといっても、明太郎は当初からこの選挙には乗り気でなかった。政友会高知県支部から推され、政友会本部の推薦も受けていたが、まだ立候補する意志はまったくなかったのである。明治四十五年から衆議院議員となり、この選挙にも既に立候補していた義弟にあたる白石直治も「明太郎は、政

友会支部の推薦を不承諾である」ということをもらしていた。

大正四年といえば、明太郎はまだ炭鉱事業や唐津鉄工所などの経営にもタッチ。さらに、早稲田大学理工学部と高知工業学校の相次ぐ設立で、それらもようやく軌道に乗りかけたところであった。だから、出馬の要請を受けても、政界進出への関心は薄かった。

当時、政友会系の土陽新聞の選挙解説記事には「政友会は、竹内候補を推薦したが、東京でのうわさでは候補謝絶の電報を支部に打っているそうな。今後、政友会の策士がいかに竹内君を説得するかが興味で見ものである」などと書きたてている。

政友会高知県支部としては、面目にかけても明太郎をくどき落として立候補させようと必死だった。そして、支部長名でこんな電報が明太郎にあてて打たれている。

「キミタタネバ　ボクシヌル　ダクセズトモオス　バンジセンキョゴダ」

この電文を分かりやすく書けば

「君が立候補しなければ、僕は死ぬ。承諾しなくても推す。万事は選挙後だ」

となる。推薦、立候補させる方もなかなか強引で、明太郎に有無を言わせず、何がなんでも立候補させようというのである。その電報は、もう脅しといってもいい。政友会幹部たちのろうばいぶりが、この電文からもよくうかがえる。それほどに追い込まれていたということである。

それも無理はない。選挙の立候補締め切りの間際になっても、当てにしていた立候補予定者がなかなか首を縦に振らないのだから、推薦した方はあわてる。もう、切羽詰まってこの電文になったのであろ



前列中央の和服姿が原敬政友会総裁。その左隣が白石直治。前列右から二人目が明太郎。（大正五年ごろ、東京・麻生笄町の明太郎の自宅で撮影したものらしい）

う。

この電報を明太郎に打った政友会高知県支部長が、町田旦龍だった。

ここで町田旦龍と土陽新聞について少し触れておこう。

町田は本来は医師だが政治にも深い関心を持ち、明治三十一年には高知市会議員、同三十四年に県会議員、同四十一年に衆議院議員となった。その後は長い間、政友会高知県支部長として活躍した。

文化人としても知られ、大正四、五年ごろには土陽新聞の社長を務めた。この土陽新聞時代に、こんなことがあった。

紙面によほど面白い記事がなかったのだろう。ある時、家のお手伝いさんら数人を連れてお遍路姿となり、札所もうでに出た。その道中で宗教、医学、政治などに関するエッセイのようなものを書きつづって宿泊先から新聞社に投稿している。また、自

ら筆をとって、趣味の釣りの記事を書いたり、記者と連れだって夜釣りに出掛け、それをルポ風の記事に書かせたりもしたという。

土陽新聞といえば、明太郎も義弟の白石直治とともに一時期、共同あるいは単独で社主を務めたことがある。二人が社主になったのはともに衆議院議員時代の大正六年のことである。

土陽新聞は明治十一年ごろ、板垣退助らの機関紙として創刊されたが、その後、幾多の変遷を経ている。絶えず政争に関与し、政党も土陽新聞には強い関心を払っていた。

大正時代に入ると、板垣の崇拝者で茨城県選出代議士だった飯田新右衛門が私財を投じてその経営にあたっていた。しかし新聞経営は苦しかったようで、やがて政友会支部への譲渡の話が持ち上がり交渉に入る。だがその時には土陽新聞は、既にかなりの負債があり、オーナーでもある飯田はその負債（五万五千円）を処理することを譲渡の条件として出してきた。

交渉には政友会側から当初、町田が出ていたが進展せず、後に白石直治と岡田栄の両代議士らも出て折衝にあたった。それでも譲渡の条件で折り合わず、交渉は決裂した。引き続き水面下での折衝は行われていたとみられ、「白石直治伝」には「爾来、政友会支部内の軋轢絶えず、土陽問題も幾多の話題を呈したが、先生（直治）義兄、竹内明太郎氏の代議士当選により、新聞管理の具体案成り、はじめてここに一段落を告げるに至った。即ち、竹内、白石両社主経営がそれである」とあり、明太郎の登場で土陽新聞譲渡の問題が決着したことを示唆している。

こうして大正六年の夏、明太郎と直治が土陽新聞の共同社主となった。それまでの旧債の一切を支弁

し、更生の計画を立て新聞社の刷新を図るなどして本来の姿に戻っていった。直治の没後は明太郎が、さらに明太郎の亡き後は、実業家、橋田早苗へと引き継がれた。

明太郎は社主として大正六年から亡くなるまでの十年余りの間土陽新聞にかかわったが、新聞経営への執着はあまりなかったとみられる。その土陽新聞は太平洋戦争中の言論統制政策によって、昭和十六年十月、高知新聞と合併し姿を消した。

立候補に異例の覚書

選挙となれば支部長の権限は大きく、また、その責任も重い。この時の衆議院議員選挙でも、町田は候補者の選定から推薦、選挙運動に至るまで、一切の権限を握っていた。従って、自分が中心になって明太郎を推した手前もあり、何としても立候補を受諾させなければならない。

そこで、町田は明太郎の親族にも手を回した。父の綱はもちろん、親類筋にあたる山本忠秀をはじめ、竹馬の友、織田信福らにも協力と助言を求めた。

町田の八方手を尽くしての説得作戦が功を奏して、立候補の締め切りぎりぎりのところで明太郎にともかく承諾させることができた。明太郎は最終的に衆議院議員選挙への立候補を承諾し、町田も「シヌル」ことなく済んだ。が、明太郎もしたたかである。すんなりと「うん」とは言わなかった。町田や政友会支部にとっては異例ともいえる厳しい条件を付けたうえでの承諾だったのである。その時、明太郎

と町田支部長との間で、こんな覚書が交わされた。

一、竹内の選挙は一切、町田が責任を負って引き受けること。

一、当選後の歳費は全部、政友会支部に寄付し、党費に充てること。

一、選挙運動の実費は、竹内において負担のこと。

一、竹内は有志、有権者へのあいさつに回らぬこと。また、演説会を開かぬこと。

一、当選後、竹内は有志、有権者の上京に際し、これを招待、優遇し、政府その他の運動に使われぬこと。

随分、思い切った内容ではないか。大体、これから厳しい選挙を戦わなければならない立候補者が、有志、有権者へのあいさつ回りをしない、演説会も開かないなど考えられない。

条件を出す立候補者といい、受け入れる支部といい、どちらにしても尋常ではない。明太郎にすれば、有権者にいちいち頭を下げてあいさつして回ったり、出来もしない公約をあれこれとしゃべることは、とてもがまんのならないことであったに違いない。

そして、一見、無茶だと受け取れるこの覚書も、おたがいをよく知りつくした明太郎と町田だったからこそ成立したのであろう。

ともかく町田支部長は、明太郎を立候補させることに成功した。が、ひと息つく間もなく、町田や支部の幹部たちはまたまた明太郎の頑迷さに頭を痛めることになるのである。

選挙前から立憲政友会の苦戦が伝えられ、原総裁をはじめ党幹部は自派の候補者の応援に懸命なのに、

明太郎は選挙戦が始まっても一向に腰を上げようとしない。ずっと東京にとどまり、選挙区である高知へ帰ろうとしないのである。支部としては「とにかく選挙区入りをして、選挙民にその顔ぐらいは見せてほしい」と明太郎に帰高を促すが、当人は東京で悠然としている。

「有志、有権者へあいさつに回らぬこと」「演説会を開かぬこと」などの覚書の条件があるからといっても、選挙戦に入れば別のはずだ。が、明太郎はそれら覚書の条件をたてにまったく動こうとしない。そこで支部では、思案の結果、明太郎に対してまたまた電報作戦に出た。

「タケウチセンセイノ　キケンオマツ」。毎日、こんな内容の電報を支部から東京の明太郎のもとへ打ち続けたのである。まったく世話の焼ける候補者である。この電報作戦と関係者たちのねばり強い説得で、明太郎もようやく重い腰を上げて高知へ帰ってきた。

しかし、帰県して演説会場へ来ても、本当に顔見せ的で選挙演説らしい演説はほとんどしない。せいぜい「今回、立候補したのでよろしく…」といったぐあいのあいさつだけで済ましてしまう。党の主張などにこだわらず、応援弁士の演説内容とは逆の演説をし、裏方を困らせることもあった。

そのことについて長い間、明太郎のもとで働いた元竹内鉱業取締役支配人、松本俊吉は『竹内明太郎先生追憶集』の中で次のように述べている。

「先生は自己の吹聴を嫌い、同情や援助を求めて当選せんとするごときは最も嫌われた。従って、かくのごときことは絶対に口にせず、同情を受けての当選を恥じと思われた。当選しても祝賀を受けた人々のみ答礼するだけで、当選はわれ関せずという態度だった。初めて候補を受諾した時は、期日が切迫す

るにおよんで『ちょっとでも帰県してくれ』との電話に、しぶしぶ数日間帰県する以外、選挙の関係では帰県しなかった。帰県した時は、やむなく数回、選挙演説会場であいさつ的談話をしたことはあるが、党の主張などは眼中になく、従って、前座の弁士の所論の後を受けて演壇に立っても、少しもこれを意に介せず、むしろ、この論を打破するごとき説を述べられることもあった。それで『前の人の述べたのと反対の説だけは、ご遠慮願いたい』との申し入れにも『フフン』と苦笑するだけで、弁士はすこぶる閉口したという。

また、反対党の地方機関新聞記者に、政党の弊害や所属党の不可なる点をきたんなく語り、紙上に表れて問題をかもしたこともあった。第一回の候補の時、原総裁より『奮闘努力必勝せよ』との激励電報を見て『自分は原の命令で候補者になったのではない』と、その電報を破り捨てたこともある。

先生の性情をうかがうにたるべきか。とにかく、ある意味ではかような横着な候補者や議員は天下一品というべきか」

明太郎と長い間、仕事をともにしてきた松本らしい見方である。

吉田茂との共通点

明太郎の立候補にあたって町田支部長と交わした覚書や、政治に対する考え方などから、すぐに思い浮かぶのは、明太郎の実弟で総理大臣にもなった吉田茂との共通点である。吉田も明太郎に似て選挙運

動は嫌いだった。

吉田は、本籍地である高知を選挙区としながらも、帰高して選挙運動をすることは極めて珍しいことであった。明太郎に似たのか、帰高しても、有志へのあいさつ回りくらいで、選挙演説らしいことはほとんどやっていないというのが実情であった。

地元から有志らがそろって陳情に上京しても、気嫌の悪い時には会ってくれないということもあった。陳情書を手渡しても、「あゝ、そうか」とそっけなく受け取った。そして、その内容によっては「これはダメだ」ときっぱりと断ることもあって、陳情に行った人たちを嘆かせることしばしばだった。

明太郎も吉田茂も、選挙区は地方であっても国家としてどうあるべきかというしっかりとした大局観を持っていた。地方のこともおろそかにはできないが、「国会議員たるもの、まず国家のことを考えなければならない」というのが信念であった。そこのところがまことによく似ている。血筋は争えない。

すったもんだはあったものの、立候補した明太郎は初当選を果たした。この時は本県（定員六人）では明太郎のほか、同じ政友会で義弟の白石直治と、浜口雄幸（同志会）、石本鑽太郎（同）、仙石貢（同）、富田幸次郎（同）が当選している。政友会二に対して、同志会は立候補した四人全員が当選（政友会は二人が落選）している。同選挙では当初から政友会の苦戦が伝えられていたが、全国でも政友会が大幅に議席を減らしたのに対して、同志会は議席を増やして第一党に立った。

この選挙ではこんなエピソードもあった。

直治と明太郎は義理の兄弟だが、直治と対立する仙石とは猪苗代水力電気会社時代に、仙石が社長で

直治が専務を務めていた。仙石は明治四十一年の衆議院議員選挙で当選したが、同四十五年の選挙で落選し、今度はいわば雪辱戦だった。一方の直治は、四十五年の選挙で初当選し今回、再選を目指した。

しかも、当初の予想では両者がともに高知市を地盤に出馬するとのことで、直治の方が「いかに選挙とはいえ、かつての上司と同一の市より争って出るのは困る」といって郡部の香美、長岡に回った。ところが、いざ立候補してみると、仙石も高知市ではなく、香美、長岡、高岡と、直治とほぼ同じ地盤から出ていたのである。これは推測にすぎないが、仙石の方も「かつての部下と争いたくない」と急きょ、地盤を変更したのではないか。

結局、双方の陣営や両者の思惑がはずれて、ほぼ同じ郡部を地盤に選挙を争うことになった。それで直治は自陣営に対して「選挙では仙石に対する人身攻撃は絶対にするな」と厳しく戒め、正々堂々と戦った。

開票の結果、仙石は前回の雪辱を果たし、直治も苦戦したが見事に再選した。選挙後二人は二日間の休日をとり、仲良く遊びに出掛けている。今の選挙ではこんなことは考えられない。当時、直治のフェアな態度は広く賞賛されたという。

それはともかく明太郎は大正六年と同九年の衆議院議員選挙にも立候補し、それぞれ当選している。町田は大正五年に支部長を辞任したが同七年に再び支部長に就任している。

選挙では、あれほど面倒をかけた明太郎だが、町田らはそれにこりることもなく、よく明太郎の世話をした。人間関係とは不思議なものである。

明太郎にとって二期目の大正六年四月の衆議院議員選挙の時には、前回のような大きな混乱こそなかったが、今回も明太郎には自分から立候補する意志はなかった。地元や政友会支部から強く推されての出馬であった。

この二回目の時に政友会支部が出した明太郎の推薦状が当時の土陽新聞に掲載されている。

「明太郎君は憲政のため、最も功労ある竹内綱君の令息にして幼年、中村敬宇先生らに学び、泰西の学術を修め、つとに実業に志し、鉱山業に従事し、ついに本邦屈指の鉱山王となられるは世人の熟知するところである。

また、君が工業家としての知識、技能はまことに天才ともうすべく、その設営にかかる唐津鉄工所のごとき設備製作、優に欧米先進国をしのぎ、本邦において唯一無二のものとせられる。君、常に心を郷里に致し、これが開発進展に務む。その工業の最も振るわざるを見るや、私費数十万円を投じ私立高知工業学校を創立し、工業家の養成を図るとともに、産業発達の基礎を作り県教育と県工業界のため寄与貢献するところ最も著大なるは、県民のひとしく感謝おかざるところにある。

君、欧米各国を巡遊すること前後数回、し細に各国機械工業の視察研究をなし、その最新の知識を持ってその経営する事業に応用し、わが機械工業の刷新向上を促進したること実に少なからず。

殊に、早稲田大学理工学部のごとき君の豊富なる財力と知識との寄与により、初めてそのまったきを得るものである。なお、前議会において、君が代議士として国家憲政のため貢献するところ大なりし。

要するに、君の地位、閲歴、人格識見等は、わが政界、実業界の偉材としてまことに国士の典型とい

え、ここにわが党は帝国興隆の前進にかんがみ、現下政界の形成を考え、同君を再び候補者に推薦するところで、有権者諸君においては、国家憲政のため、同君の当選を期し、ふるって投票相なる」

明太郎は、こうして政友会からの推薦を受けて立候補した。投票の結果、最高得票で当選を決めているのである。父、綱の名声やバックアップなどもあって、明太郎の名前も県下一円に深く浸透していて、一回目と同様に十分な選挙運動もしないのに、最高得票を取っている。

この選挙では、明太郎の義弟、白石直治も立候補、当選しているが、直治は、大正八年二月に死亡したため、補欠選挙が行われ、岡田栄が当選した。同七年九月には、原敬が政友会内閣を組織している。同八年七月には板垣退助が逝去。なお、原は同十年十一月四日、東京駅で暴漢に襲われ非業の死をとげている。

支部が勝手に

明太郎は三回目の大正九年五月の衆議院議員選挙にも立候補することになるが、この時も頭から立候補の意志はなかった。最初は、香美郡出身者が幡多郡を中心に既に立候補の準備をしていたが、政友会系の同郡のある郡長が「候補者の入れ替えをせよ」と注進してきた。

そこで政友会支部ではまたまた明太郎をかつぎ出すことにして、勝手に手続きをとり立候補させてしまった。その後で在京の明太郎に対して、同支部から「リッコウホシタ　カヘレ」と電報を打った。同

月四日の明太郎の日記には「今朝、高知、町田より立候補要請の至急電あり」と書いているが、十日が投票日であることから察すると、町田はその時明太郎の立候補手続きを終えていたのではないか。

しかし、明太郎には出馬の意志がなく、「帰れ」の電報にも従うことはできなかった。その代わりに明太郎は、竹内鉱業の今畑西衛という人物を代理格で高知へ送り込んできた。そこで町田はやむなく立候補者不在のまま選挙戦に臨むことになった。

当人の承諾も得ずに勝手に支部が立候補の手続きをとり、立候補者がいないまま選挙をやるというのだから、支部の方も強引だった。町田支部長ら幹部たちは明太郎の最初の立候補に際してのゴタゴタでこりているから、今度も「どうせ立候補してくれと頼んでもひと筋縄ではいかない」と踏んで、この強行戦術に出たのであろう。

選挙の結果は、対立候補を僅差で破って当選している。五月十三日の明太郎の日記には「代議士当選の電報に接す」とあり、まるで他人事のような冷めた受け取り方なのである。

今度は、当選してからが大変だった。またもひともん着なのである。

支部としては、候補者の顔見せなしで僅差ながら、ともかく明太郎を当選させたのだから、ほっとしたところだった。が、当選を知らせても肝心の明太郎が「当選なんて認められない」といってきかないのである。それどころか、明太郎は「おれは当選を承諾しない。今度は相手を当選にしてやるのが順序だ。おれは辞任する」と、とんでもないことを言い出した。明太郎は本気だ。

これには支部長の町田もあわてた。考えた末、町田はとりあえず独断で県庁へ明太郎の当選承諾書を

提出しておいた。すると、明太郎は「おれが承諾しないのに、だれが承諾したか」と東京から詰問してきた。町田は「わが輩が承諾した」と電報を打ち返す。

選挙が終わり、めでたく当選し、その承諾書まで出ているのに、明太郎と町田の間では、こんな電報でのやりとりが毎日続いた。しばらくして、結局、明太郎は根負けしたのか、うやむやのうちに承諾した格好になったのである。

いや、これくらいで黙って引き下がる明太郎ではなかった。この選挙には約三万円の費用、運動費がかかったといわれるが、明太郎は「一厘半銭とも出さぬ」と言い張って譲らない。で、町田はやむを得ず当面、自分が借り主となって山本忠秀ら支部の幹部が連帯保証のうえ、借金して選挙費用の穴埋めをした。町田は「あんなに言い張っても、竹内はいずれ金は出すであろう」と決めてかかっていたが、明太郎はついに頑張り通して一銭も出さなかった。

このため、町田は支部長を辞任後、かなりたって、支部とは一切無関係になってから、自分の責任として、自身が完済することになった。明太郎が明太郎なら、町田もまた町田である。

ともかく、明太郎と町田は三回にわたって衆議院議員選挙で行動をともにしたのをはじめ、町田は私立高知工業学校を明太郎とその父、綱が創立する際にも、学校の用地などの確保にも協力しており、二人の間は深い関係にあった。

その一方で、明太郎と町田は、双方の先鋭的で土佐人特有の非妥協的な性格から、衆議院議員選挙をめぐってみられたような衝突が時にはあった。

大正八年のことである。政友会支部の重要な件で、最高幹部の宮地元治が東京の本部を訪問するために上京した。その時、宮地が突然、中風になった。町田は医師でもあることから、いろいろと宮地の面倒をみた。その際、宮地を病院に運ぶのに明太郎が所有している自動車を借りようとして、明太郎に「すまんが、君の車を貸してくれんか」と申し入れた。

が、どうしたことか明太郎は即座に断った。町田は大いに怒った。「宮地は支部の最高幹部ではないか。それが重大用務で上京し、たまたま病気にかかって病院通いをするのに、その車を貸すのは当然のこと」と憤慨した。

これに対して明太郎は「いつ死ぬかも分からぬ病人を乗せてそちこちするなんど、なんぼ支部の幹部でもまっぴらごめん」と取り合わない。それだけならまだしも、明太郎はさらに「自動車を用立てぬのが気に入らぬなら、今回限り代議士は辞職じゃ」。英国流の紳士で識見もあり温厚といわれた明太郎にしては随分と無茶な言い分で、その時、よほど虫の居どころが悪かったのであろう。

近くにいた人たちはハラハラしながらその結末を見守っていたが、そこは両人のこと。けんか別れになるようなことはなかった。そばにいた人たちが取りなすのを機会に、その場できれいさっぱり仲直りした。そして、今度は町田が高知へ帰るという時には、明太郎は自分の自動車で東京駅まで送り、固い握手をして別れた。また、町田が経営していた新聞社の社長や政友会高知県支部長を辞任して悠々自適の境遇にあった時、明太郎は父、綱と設立した私立高知工業学校に設備する予定だった撞球台を、町田のためにと当時、帯屋町にあった町田邸に運び込み、町田の退屈しのぎに使ってもらった。すると、町

田は撞球場の規則として「玉突きに入るものは一切、政治を語るべからず」と書いた張り紙を入り口に掲示したという。

議員としての条件

明太郎は国会議員としての条件に

一、自ら当選運動をなさざること。

二、国家の大局より見てなすべきことのほか、地方的種々なる問題に関係せざること。

三、党幹部のほか、有志には特別の事情のない限り、東京では面会せざること。

の三つを挙げている。

これから立候補して当選のあかつきには、国民、国家を代表して国益のために活動しなければならない国会議員が、当選したいがために自分で運動し、有権者にいちいち頭を下げて回っているようでは大きな仕事はできない——という意味であろう。裏を返せば、本来、国会議員たるものは推されて出るべきであって、そうでなければ大局的な見地に立った仕事はできない。地元からのこまごまとした陳情などの処理に追われているようでは、国会議員としての資格はない——というのが明太郎の持論で、実際、明太郎は選挙にあっても、国会議員としてもその持論を貫いた。

明太郎は、権力に屈せず、主張を曲げず、妥協することを極端に嫌った。議員としては、こんな話も

残っている。

明太郎が初めて衆議院議員に当選した翌大正五年のこと。義弟の白石直治にとっては、前回（明治四十五年）に続いて二度目の当選になる。その年の十月、第二次大隈内閣が総辞職して寺内正毅内閣が誕生した。明太郎と直治が所属する立憲政友会は寺内内閣に協力し与党的な立場にあった。この時野党に転じた立憲同志会は多数派工作を行い、同会を母体とする憲政会を結成し、寺内内閣との対決色を強めた。そして、同年十二月に開かれた議会に内閣不信任案を提出した。明太郎が所属する立憲政友会はもちろん、不信任案には反対である。

ところが、明太郎と直治は、党議を無視して野党の提出した寺内内閣の不信任案に賛成した。政党内閣樹立を強く望む明太郎らの立場からすると、寺内内閣も長州閥と官僚が主流であって、到底容認できるものではなかった。だから、二人は政友会からの除名、脱党も覚悟で、野党の内閣不信任案に賛成したのである。

それにしても、明太郎といい、直治といい、義兄弟がそろいもそろって、よくもやったものである。結局、寺内内閣は「不自然に膨張した多数党と、不自然に激減した小数党の是正」を理由に翌大正六年一月、議会を解散し、同年四月二十日に衆議院選挙が行われることになった。そんなことがあったにもかかわらず、明太郎、直治の二人は、この選挙でもともに原政友会総裁から「わが党候補として立たれたし」と熱心に勧められて立候補、仲良く当選している。

土佐は政争の国で、県政をはじめ、市町村の議会に至るまで党派的な対立がよく見られる。言論機関

も例外ではなかった。土陽新聞は、自由党以来の伝統をもって政友会のために代弁し、その土陽新聞から分離創刊した高知新聞は、改進党系の国民党、同志会、憲政会、民政党を支持し、両派の抗争は産業界にも及んだ。

そして、政党の力が次第に強くなり、大正七年に原敬が政友会内閣を組織した時には、高知県知事に阿部亀彦が就任して党勢拡張に熱中した。そのため、県下各地に多くの弊害を残した。政治は党利党略によって行われ、道路や橋梁が不必要に架設された。「政友」道とか「憲政」橋などと呼ばれるものまで見られるようになったが、もちろん、明太郎はこうした政争には巻き込まれることなく超然としていた。

金なき者は政治家の資格なし

明太郎は、政治家の資格として「金」のことに触れている。

「政治には金がかかる。だから、金のない者は政治家となるべきではない。金のない者が政治をやるから腐敗するのである」――明太郎の政治家論である。

明太郎は父、綱の影響もあって、若いころ政治家を志していた。実際に、自由民権運動にも深くかかわり、政治運動もしていた。その時に「金がなくては、思うように政治運動はできない」ことを身をもって体験した。

明太郎によると「金がない者が政治をやろうとすると、その金を得るために無理をして企業や特定の

人物から寄付を求めたりする。そこに利害関係が生じ、汚職などの腐敗が起こる。そして、一度そうした関係ができると、なかなか手を切れなくなり、だんだん泥沼にはまって動きがとれなくなってしまう」。

明太郎が政治とのかかわりを断ち切り、父、綱の勧めがあったとはいえ、実業界へ飛び込んだのも、その資力を得るためとの見方もできる。

元竹内鉱業取締役支配人の松本俊吉は、やはり「竹内明太郎先生追憶」集に寄せた一文の中で、こう述べている。

「竹内先生は、金なきの政治運動の弊害は、すべて来たるべく、いわゆる職業政治に堕すること必至なるを痛感し、まず、その資を得るべく決然と実業界に身を投じた。そして、この社会の情勢を観察するにおよび、その進歩の後れを嘆かれ、鉱業ならびに工業の振興の大切なことを感じ、政治の世界に対する使命よりも工業界に対する使命の重大性に思い至り事業に従事し、もっぱら啓発者としての使命を果たされ、ほぼ業績が上がり理想の実現におよびしころ、郷党の懇請切なるものあり。また、政治に対する志もあったことから、その懇請を受け入れ、再び政治の世界に飛び込み衆議院議員となった。そして、連続三回当選したが、この方面におけること志と違い、さらに、政党の弊害や政治の内幕を知り、この世界にとどまることを潔しとせず、大正十三年一月三十一日、衆議院の解散に伴い、これを最後に勇退した」

以来、明太郎は政治にかかわることはなかったのである。

明太郎が衆議院議員として政治の世界に身を置いたのは、大正四年三月から同十三年一月までの十年

足らずではあったが、明太郎が掲げた国会議員としての資格や条件などは、現在の政治家にも求められる要件として示唆するところが多い。

四国縦貫鉄道の建設促進に功績

政治家として、国会議員として、地方のこまごまとしたことにわずらわされないのが明太郎の信念であった。が、地方の問題といっても、四国の鉄道敷設に関しては、義弟の直治とともに、明太郎も無関心ではいられなかった。

四国鉄道、土讃線の促進運動については、「小松製作所の誕生」の項の白石直治の経歴の中でも少し触れたが、ここでもう少し詳しく紹介しておこう。

白石直治は、明治から大正時代にかけて土木業界の第一人者で、とりわけ鉄道建設については権威があった。かつて、関西鉄道や九州鉄道の建設にも、そのトップとして深くかかわっており、わが国では鉄道といえば直治の名前が出るくらい知名度も高かった。

その直治が衆議院議員になったころには、「四国にも鉄道を」という声が高まっていて、四国四県共同で四国循環線建設の動きが出ていた。とりわけ、土讃線の建設促進は政友会高知県支部としても選挙公約の柱にすえて戦ってきた。

そんないきさつもあって、鉄道の権威者でもある直治が当選すると、その年の八月に四国鉄道土讃線

促進問題について、直治をはじめ、同じ政友会の岡田栄、光森徳治の両代議士、これに、元代議士の山本幸彦、元貴族院多額納税議員山本忠秀らに支部幹部も加わり、東京の白石邸に集まって話し合った。

当時、四国鉄道確定予定線中、琴平―須崎線は、大阪湾の背面防備という軍事上の面からも早期開設が望まれていた。この席で、山本幸彦は、特に、土佐鉄道の軍事的、経済的価値から説き起こし、政友会同志が多年、このために粉骨砕身してきた経緯を話し「将来、絶対に欠かせぬ交通網で、促進期成の必要がある」と述べ、一層、提携尽力することを誓い合った。これが、直治の当選後、鉄道敷設促進運動の第一回会合となり、以来、何十回となく会合を重ねたのである。

その一方で、高知県民世論をさらに盛り上げ促進させるため、鉄道期成会を組織し国会や政府へ陳情を行った。


白石直治

明太郎も四国鉄道の建設促進には、衆議院議員に初当選した時から義弟の直治と行動をともにした。四国山脈を貫く四国縦貫鉄道の開設は、高知県民の宿願でもあった。当然、明太郎のところへも鉄道開設の陳情団が再々、立ち寄り、早期敷設の国への働きかけを要請した。そのことは明太郎の日記からもうかがえるのである。

大正七年九月四日／政友会本部にて、高知県より土佐鉄道早期開設の件で上京委員と面会。

同十日／県選出貴、衆両院議員と上京の委員三名と会食。池田

―山田間鉄道の事協議。

同十月十日／四国政友会代議士六名と会食。四国縦貫鉄道のこと協議。四国一致して政府へ交渉の事に決定する。

また、この年の五月には原総裁を迎え、政友会四国中国大会が高知市で開かれている。この時もまず第一に鉄道問題が取り上げられ、須崎―池田間の四国縦貫鉄道の決議が行われた。その際、原総裁の言質によって、大正八年度から十カ年継続事業として〝大正十八年〟完成の法律案となって、その年の議会で決議されている。

四国中国大会で原総裁一行は最初、神戸から海路で来高する予定だった。ところが、神戸出港後、暴風に遭い、海上が荒れて原総裁が乗った船は和歌山に引き返し避難することになった。原総裁は大弱りして船室で真青になって横たわっていた。結局、一行は海路をあきらめ、陸路、北山越えで来高した。

政友会高知県支部長の町田旦龍が一行を出迎えたが、このことが「原総裁、吹き流される」と新聞にセンセーショナルに取り上げられた。結局、この〝海難事件〟が原総裁をして、四国鉄道敷設の緊急必要なことを実体験させ、速急に法律案を国会に提出、決議させたといわれる。

このような経過をたどって、四国縦貫鉄道の高知県分は、まず大正十三年に須崎―日下間が開通。以後、同年十月に高知まで、同十四年に土佐山田まで延長、開通した。四国山地を縦貫するまでにはさらに長い年月を要し、県境の土佐岩原まで通じ高松まで結ばれたのは昭和十年になる。そして、同四十五年に土讃線は中村まで延長され、その四年後の同四十九年には愛媛県を結ぶ予土線も開通するなど、よ

うやく幡多地区にも鉄道の恩恵がおよんだのである。

そして今、四国縦貫鉄道から四国の海岸線を一周する四国循環鉄道の建設が進められている。高知県西部では、中村から宿毛までの延長工事が急ピッチで進んでおり、平成九年十月には竹内綱、明太郎父子の出身地である宿毛に鉄道線路が到達、開通する。明太郎が四国の鉄道開設運動にかかわってから約八十年ぶりということになる。

第六章　晩年の明太郎

竹内鉱業株式会社は、芳谷炭坑や遊泉寺銅山をはじめ、全国各地の鉱山を次々と手に入れて開発し、巨万の富を築いた。

また、ポスト鉱業として設立した唐津鉄工所（大正五年に分離独立）や小松鉄工所（後の小松製作所、大正十年に分離独立）も、明太郎の予想通り順調な経営ぶりで、次第に規模を拡大し、やがて、さらに大きく飛躍していくのである。もちろん、両社が分離独立したとはいえ、その後も明太郎は直接、間接的に深くかかわっている。

しかし、竹内鉱業の経営は必ずしも盤石ではなかった。明太郎の経営理念が、一般企業のように利潤を確保して、ただ規模拡大を図ることだけでなく、それらの企業活動を通じて、工業力を強化し国の産業振興を図るという大局的な見地に立っての事業経営であったから、会社の規模拡大や金もうけにはこだわらなかった。「世界全体を見通し、わが国の将来を考えた場合、産業の振興が先決で、そのためには工業技術者の養成が必要である」というのが明太郎の理念でもあった。

だから、これまで見てきたように、明太郎は産業振興と工業教育には異常なほどの情熱を注いだ。そして、事業経営で稼ぎ出した利益や私財までも惜しむことなくそれらに投入したのである。

とりわけ、工業教育には力を入れた。それは、企業内においては唐津鉄工所や小松鉄工所における見習い技術者の養成学校の開設であり、指導者クラスには海外留学などの機会も与えた。また、外に向けては、早稲田大学理工学部や、郷里での高知工業学校の設立である。

かつて明太郎のもとで働いたことがあり、後に日本炭鉱専務取締役となった島本徳三郎は「竹内明太郎先生追憶」集に寄せた文中でこう言っている。

「あの大きからぬ会社（唐津鉄工所や小松鉄工所）で、年々多数の学士、または専門学校出身者を採用させたこと。毎年、留学生を五、六人も欧米に出しておられたこと。社員を交代で欧米視察等に出されたことなどは、いずれも竹内先生の理想の発露でないものはなかった」

また、採算を度外視してまで研究開発や人材教育に金を注ぎ込む明太郎を指して「私は芳谷炭坑の一幹部から『竹内さんは道楽と実業を一緒にやる方だ』と聞かされたことがある。見方によっては、まさにその通りであろう。芳谷炭坑もそうだが、竹内の会社の雰囲気は、多分に学校のようなものがあった」この一文からも経営者、明太郎の理念の一端がうかがわれるのである。一般的に、企業経営の常道からすれば「どうかな」と思えるようなことでも、明太郎にとっては、それこそが常道であったのである。

しかし、明太郎が採算を度外視してまでも貫いてきた経営理念は、やがて襲いかかってくる不況の大波にさらわれ、竹内鉱業にも危機が訪れるのである。

欧州戦争で好況から不況へ

その不況の引き金となったのが第一次世界大戦である。大正三年、バルカン半島のサラエボで、オーストリアの皇太子がセルビアの一青年に暗殺された。これが三十六カ国を巻き込む世界大戦の導火線となった。戦乱は全ヨーロッパに広がったが、わが国も日英同盟を理由に参戦した。

大正七年まで続いたが、この戦争は規模が未曽有に拡大したというばかりでなく、兵器の発達で、人命と物資の驚くばかりの消耗戦となった。

四年間の戦争を通じて、戦死者九百万人、戦傷者二千二百万人、ほかに非戦闘員一千万人が死んだ。この非戦闘員の犠牲が大きかったのが第一次世界大戦の特色だった。結局、連合国の勝利で終わった翌大正八年、パリのベルサイユ宮殿で講和条約が調印された。

この大戦は、わが国にまたとない好況をもたらした。大戦前の日本産業は、重工業部門の発達が遅れ、工業の中心は軽工業部門にあった。綿糸、綿織物は朝鮮、満州市場へ、絹織物はアメリカへ盛んに輸出されたが、軍需品や重工業資材の輸入が多く、貿易収支は赤字を続けた。

だが、大戦が始まると、各国の需要が激増した。ロシア、その他の国から軍需品の注文が、イギリスからはメリヤスなどの注文が殺到した。欧米からの輸入が途絶えたアジア、アフリカ、ことに東アジア市場は、その代わりを日本に求めた。国内でも染料や薬品はドイツ薬品に代わって国産品の生産が増大

した。ことに、世界的な船舶不足は造船業、海運業を繁栄させ、船成金が続出した。

このように大戦で潤った日本経済も、大戦が終わると間もなく、一転して不況に陥るのである。戦後の復興が進むと、西欧諸国はアジア市場へ怒とうのごとく進出してきた。排日運動の激化で中国市場も狭まるなど、大正八年末ごろから貿易は輸入超過に転じた。

そして、大正九年三月に始まった株式暴落をきっかけに戦後恐慌に入った。恐慌は慢性化して、大正十一年には銀行恐慌、同十二年には東京を中心に死者不明十四万人余り、家屋の全壊焼失五十七万戸余りという関東大震災による震災恐慌、さらには昭和二年の金融恐慌と続く。これまで、なんとか取りとくろってきた日本経済の矛盾が一気に吹き出した感じで、わが国の経済界は不安定になり、不況は深刻化の一途をたどった。こうしたなかで、多くの中小企業が破産に追い込まれるか、大企業に吸収合併されていくのである。

使命果たす

大戦の終結直後からの不況の長期化、深刻化は、竹内鉱業株式会社にも容赦なかった。特に、大正十二年九月一日、関東大震災では、東京にあった竹内鉱業の石炭貯蔵庫も類焼し、中にあった大量の石炭が焼失してしまった。

このように相次ぐ恐慌で、竹内鉱業が経営する炭鉱事業も大きな痛手を受けた。佐賀県の芳谷炭坑(同

四十四年、三菱鉱業に売却）とともに同社を支えてきた石川県小松町（現・小松市）の遊泉寺銅山も閉山せざるを得なくなった。

竹内鉱業の大正九年上半期の営業報告書でも「探鉱も相当の成績を示しており、採鉱操業を開始すれば、相当量の産銅を見得ることは明らかだが、銅価は依然として低廉であるのみならず、近く回復に向かう兆しも認められず、今期末限り（大正九年六月）で操業を中止し、適当の時期をまって採鉱、探鉱を併せて開始することにした」としている。しかし、遊泉寺銅山は結局、操業を再開することはなかったのである。

その翌大正十年には、竹内鉱業と竹内一族が所有していた唐津鉄工所の株式を手放し、同所社長の竹尾年助に売却している。竹内鉱業は、そのころから既に資金繰りにも相当困っていたとみられる。

そんなところへ関東大震災による震災恐慌や、年号が変わって昭和に入ると金融恐慌に襲われ、竹内鉱業は手をほどこすこともできないまま再建の望みを断たれた。明太郎も、ここへきて会社整理の道を選ばざるを得なかったのである。

そして、明太郎は東京・築地の本社事務所をはじめとする会社の資産はすべて処分。麻生笄（こうがい）町の自宅や自分の貯蓄、養老保険まで解約して負債の返済に充当した。明太郎と最後まで行動をともにした同社の取締役支配人、松本俊吉も私財をはたいて職員の退職金の一部に充てたといわれる。

かくして、かつて巨万の富を築いた竹内鉱業株式会社は、昭和三年になって整理、解散した。

松本は後年、「竹内明太郎先生追憶」集の中で、この時のことをこう述べている。

「第一次世界大戦のパニックに続いて、関東大震災と加うるに炭坑におけるアクシデントは財政的な行き詰まりをきたして経営に支障を生じ、ついに経済的破局に陥った。が、その回復をなし得ずして先生の事業終局を見しは実に千秋の恨事なり。要するに先生は、いわゆる利益主眼の事業家ではなく、時代に先んじて理想的な設備による経営をなし、その範を示し、もって社会工業教育家としてその使命を果たされたるものなり」

つまり、明太郎は相次ぐ恐慌で会社の経営が行き詰まっても、何としてもこれを回避し、他からの援助を得るなりして再建しようとはしなかった。板垣退助らとともに明治維新に活躍し、政治家、実業家としても知られた父、綱や、明太郎自身の幅広い人脈などを併せて考えると、竹内鉱業株式会社を再建、存続させることは、それほど困難なこととは思えない。

だが、明太郎はそのようなことはしなかった。明太郎は、これまでもだれに援助も求めることなく、事業の遂行を単独で思いのままにやってきた。そして、ひたすら自己の理想の実現に最善の努力をし、実際、その実績も残してきた。だから、今さら他の有力者に協力を求めようとはしなかった。いかにも名利を求めぬ理想主義者の明太郎らしい。

「既に、これまで自分の使命は果たした」―と明太郎は達観していたのではないか。

竹内鉱業は、確かに長くて深刻な不況で行き詰まり整理、解散に追い込まれた。しかし、明太郎にしてみれば、竹内鉱業は唐津鉄工所、小松鉄工所（後に小松製作所）などの事業所を相次いで設立、育成している。また、特に力を入れていた人材の養成、工業教育に関しても、早稲田大学理工学部や高知工

業学校の創立という形で念願を実らせている。

晴耕雨読の生活

明太郎は、竹内鉱業を経営する一方で、大正四年から同十三年まで三期にわたって衆議院議員を務めている。この間の政治家としての活動ぶりは、明太郎の日記からもうかがうことができるが、同年一月に衆議院議院の解散で議員を退任した後は、政治や事業経営に関する記述がほとんどなくなっている。

特に、大正十四年に入ると、明太郎がまるで農業でも始めたかのように、収穫、出荷のことで日記帳が埋められているのである。茅ケ崎にあった広大な別荘地の一部を利用して、農作物の栽培や家畜の飼育などをやっていたのだろうか。

このころの明太郎は、いわゆる「晴耕雨読」といった生活であったのではないだろうか。読書好きの明太郎のことでもあり、天気の良い日には農園に出て、気が向けば農夫の作業を手伝い、雨が降ったりして天気の悪い日には、家で書斎にこもって読書にふけっていた。そんなことも想像できるほど澄んだ心境にあったようにも読みとれるのである。

この時期には、経済界は深刻な不況に見舞われ、竹内鉱業も厳しい状況にあったはずだが、明太郎の日記は、そうしたことにはほとんど触れていない。推測ではあるが、晩年の明太郎は次々に襲いかかってくる不況に対して、かなり早い段階で「竹内鉱業の再建は難しい」と断念していたのではないか。

竹内鉱業の取締役支配人だった松本も、明太郎が深刻な不況に対して、これといった対応策もとらず、なすがまま自然の流れにまかせ、結局、竹内鉱業が整理、解散の道をたどったのも「これまでに、自分のできることはほどんどやった」「竹内鉱業も、企業として社会的な責任、使命を十分に果たした」との判断が働いていた――との見方をしているのである。

明太郎、逝く

だが、そんな日々もそう長くは続かなかった。健康には自信があった明太郎だが、竹内鉱業の整理も進んでほっとしたのか、年が明けた昭和三年正月早々から風邪を引き、床に伏せってしまった。その病いの模様も明太郎の日記に克明に記録されている。その主なところを抜き出してみた。

昭和三年一月四日　午後、悪寒発熱、臥床す／同五日　前日同様、高橋医師呼ぶ。気管支カタルの診断あり。最高三九度まで昇／同七日　最高三九・六度／同十六日　あご下の腫物大分はれ、手術の必要あり。横浜青木病院長、渡辺氏の来診を乞い、明日を約す／同十七日　渡辺および高橋医師立ち会いの上、切開手術をなす。手術のため少し発熱／同十八日　肺炎の方は次第によろし／同二十日　平熱に服す／同二十七日　床の上に座して昼食をなす／同三十日　はじめて廊下歩行／二月一日　頭髪を洗う／同五日　今日より食堂にて食事なす／同十四日　梅子（四女）散髪してくれる。

そして「三月十四日　昨夜、就寝後、少し悪寒を感じた。体温三八度以上に達せるにより、高橋医師を呼び診療をうく。流行感冒なりという。」

「同十五日　午前中に熱気去り平常に。」――

明太郎の日記は、ここで終わっている。この年の正月早々に引いた風邪は、だんだん回復に向かい、散歩に出掛けられるまでになった。しかし、三月に入って再び流行性感冒にかかり、いったんは熱も下がったが、十六日以降、日記帳が空白になっているところをみると、その直後に病状が急変したものとみられる。

結局、明太郎は風邪をこじらせ肺炎を併発。日記が空白になってからわずか八日後の昭和三年三月二十三日に急逝した。享年六十八歳。父、綱が亡くなってから（大正十一年一月九日、八十二歳）六年後、その子息、明太郎の死であった。

竹内鉱業の取締役支配人の松本俊吉は、明太郎が亡くなる五日前の昭和三年三月十八日、神奈川県茅ケ崎市の別荘に、病床の明太郎を見舞っている。

松本は、その時の模様を「竹内明太郎先生追憶」集に寄せた一文の中で、およそ次のように書いている。

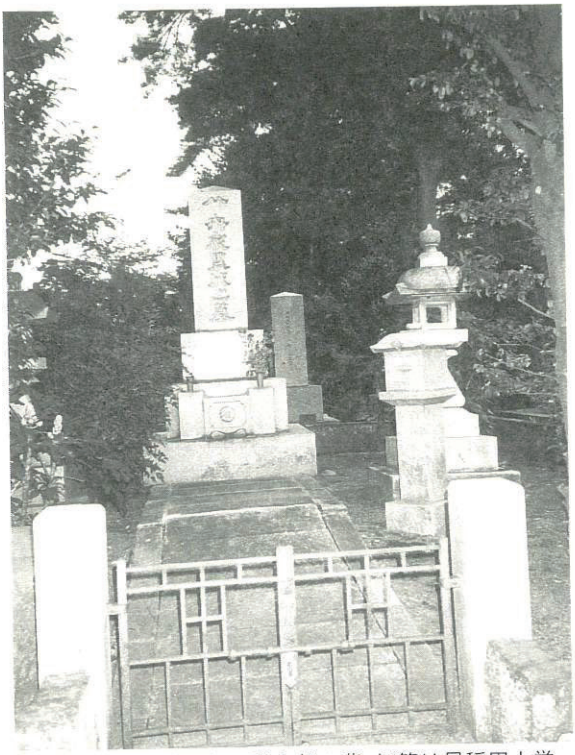
「私が見舞った時、先生は非常に気分も良さそうで『もう、病気は治った』といって迎えてくれ、いろいろと話をした。その中で先生は『自分は従来、健康で病気をする者の苦痛を察することができなかった。が、今になって初めて病人の苦痛を体験した』としきりに反省していた。

そして、私は竹内鉱業の整理、解散のことについて『私の無力の結果、会社は破たんに陥り、誠に申し訳ない』とわびた後、

『ただ、あなたは不幸にも経営的にはこのような結果になったけれど、あなたがやった事業はほとんど成功し、社会に貢献したことも多く、その理念は実現させた。唐津鉄工所や小松鉄工所の設立当時の理念も、目的通りに発展している。あなたの創立した高知工業学校も、実によく期待に沿うように立派になった。また、力を入れていた早稲田大学理工学部も今日の隆盛をみており、たとえ財産的には失敗したとはいえ、あなたのなさった事業は確かに成功している。だから、世にいうところの失敗ではなく、成功者である。私も、あなたの理念に基づく事業に参与できたことを生涯の幸いと思う』

と言うと、先生は

『まあ、そんなものだ。心配にはおよばない。自分もそう思ってい



東京・多摩霊園にある明太郎の墓。灯籠は早稲田大学が、名刺受けは高知工業高校同窓会がそれぞれ寄贈

る』

と満足そうに答えた。

それで私は、ほっとした気持ちで先生の自愛を祈って辞去した。その時、玄関に出て靴をはこうとしていると、先生は病をおしてわざわざ玄関先まで送り出し『ありがとう』と名残り惜しげに目くばせをした。私は、先生の方を数回、振り返りながら差し回してくれた車に乗り込んだ」

ところが、松本が見舞った五日後の三月二十三日、「明太郎、危篤」の電報を受け取り、あわてて茅ケ崎の別荘へかけつけたが、間に合わなかったという。

社会に大きな足跡

明太郎が父、綱から「鉱山経営をやってくれ」と言われて実業界に足を踏み入れたのが明治十九年である。以後、綱とともに、あるいは独自で多くの鉱山を経営した。また、ポスト鉱山として、新たに唐津鉄工所や小松鉄工所などを設立し、わが国の機械工業の発展に尽くした。さらに、その一方で、工業技術者の養成など工業教育にも情熱を注ぎ、産業振興に大きな役割を果たした。

明太郎は「工業富国基」の理念のもとに、鉱山事業などで得た利益は、すべてその理念実現のために惜しげもなく投入した。早稲田大学の理工学部設立しかり。また、私立高知工業学校の設立しかり。そして、そのいずれもが大きく成長し、幾多の優秀な人材を世に送りだし、それらの人々が産業界などで

貢献している。

明治二十七年に綱と明太郎が設立した竹内鉱業は、大正九年から昭和初期にかけての長期不況などで整理、解散し、今は何一つ残るものはないが、綱、明太郎がまいた種は、いずれもが見事に成長し大輪を咲かせているのである。

明太郎の孫の竹内啓一（東京在住、駒沢大学教授、一橋大学名誉教授）は「祖父は実業家として巨万の富を築いたといわれるが、最後には財産といえるものは何もなかった」と言う。

しかし、唐津鉄工所、小松製作所、そして、早稲田大学理工学部、高知工業高校など、産業界にも教育界にも、大きな大きな財産を残してくれた。

啓一は、祖父、明太郎のことを聞かれると、決まって「祖父はヤマ（鉱山）師だった」と答えるが、それはもちろん謙そんであって、明太郎がただの〝ヤマ師〟ではなく、優れた経営者で教育者であったことは、今や万人の認めるところである。明太郎のようなスケールの大きな人物は、もう二度と出ないであろう。

第七章　貴重な日記を入手

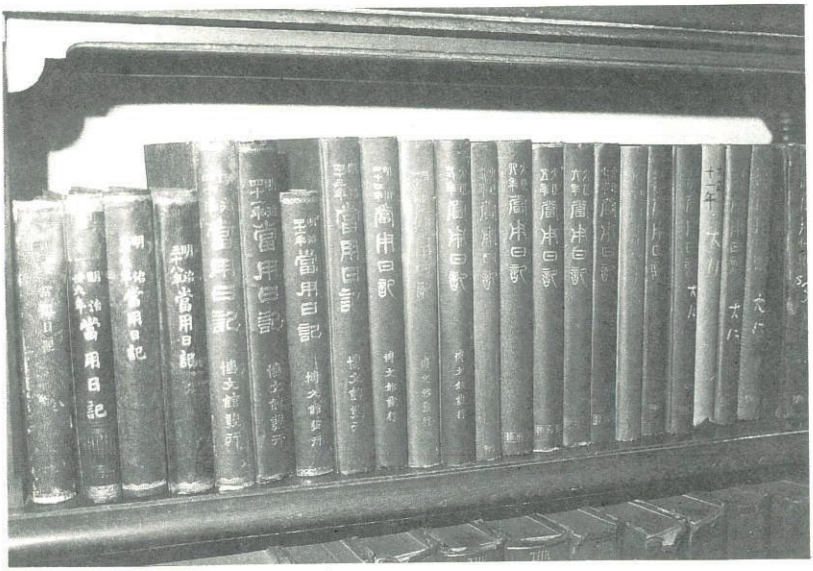
「綱や明太郎に関する資料はなにかないだろうか。どんなものでもいい」――平成六年五月に発足した創立者調査研究委員会（山田通委員長）が、高知工業高校の創立者である竹内綱、明太郎父子の伝記をまとめるにあたって、一番心配したのは、彼らの関係資料をいかにして、どれだけ集めることができるか――だった。

幸い、綱に関しては自身が書いた自叙伝的なものがあった。もちろん、十分なものではないが、それでも大まかな流れはつかめる。

しかし、明太郎については、父の綱とともに、少年時代、出生地の宿毛を離れてからは、主に県外で活動しており、その足跡らしきものが、少年時代を含めてほとんど残っていない。後年、衆議院議員になるころには、高知県から立候補していることもあって、その動向はわずかではあるが分かる。

ただ、明太郎が父の要請を受けて、実業界に身を投じてからの資料はほとんどない。そこで、調査研究委員会ではメンバーを手分けして、資料探しに全力を挙げた。竹内家の親族や友人関係先などを通じて、どんな小さな情報でも収集して回った。

そんな時、調査研究委のメンバーで高知工業高校の同窓会長でもある宗竹啓介らから「どうも明太郎

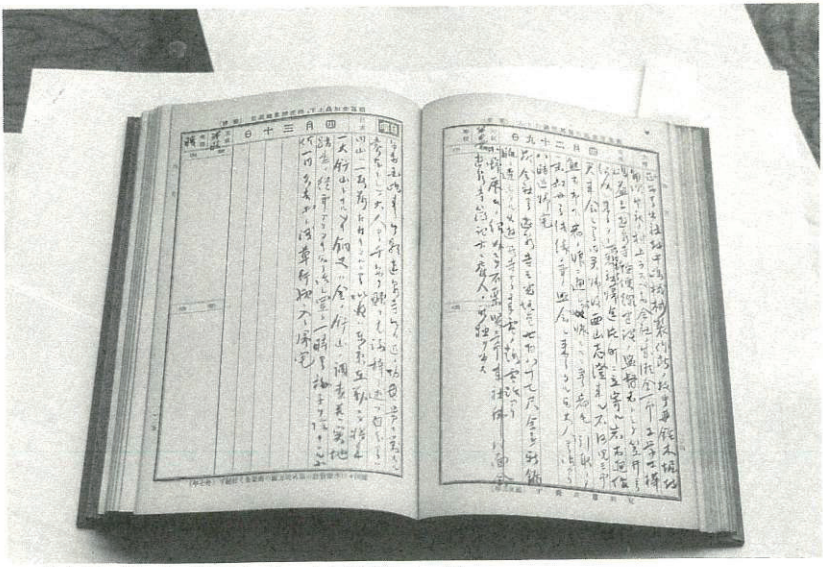


保存されていた明太郎の日記帳

の日記が残っているらしい」という有力な情報が同委員会に入ってきた。しかも、その日記を保管しているのが、明太郎の孫にあたる竹内啓一氏（東京・国立市在住、駒沢大学教授、一橋大学名誉教授）というのである。

平成六年十月二十日。宗竹と、やはり同調査研究委メンバー、尾崎翹彦（現・須崎工業高校校長）の二人が、明太郎の資料探しのため、東京・丸の内の株式会社「白石」を訪ねていた。同社の相談役、白石俊多と唐津鉄工所の相談役、竹尾快助に面会していたのである。

白石俊多の父、多士良は小松製作所の初代社長で、祖父の直治は高知県南国市の出身で衆議院議員にもなった。直治、多士良は、ともに明太郎とは親戚関係にもあり、特に親しい間柄だ。また、竹尾快助は父の年助が明太郎の設立した唐津鉄工所の所長を務めた——などの経緯もあって、明太郎につながる話



明太郎が克明に記録していた日記帳の一部

を聞き出そうとしていた。

その中で、俊多から「当社の専務に竹内純一郎（明太郎の孫）がおり、祖父、明太郎の日記の一部を保管しているらしい」という耳寄りな情報を得た。宗竹らは、こんな形で「明太郎の日記」の所在を知るなど予想もしていなかった。そんな予想外の〝情報〟に身の引き締まる思いだった。

帰高すると宗竹らは早速、この情報を調査研究委に報告。それから本格的な日記探しが始まったのである。

翌平成七年八月。明太郎の日記に関するさらに詳しい情報を得ることができた。俊多からの情報をもとに竹内純一郎氏に連絡をとると、どうも純一郎とはいとこの啓一氏が明太郎の日記や写真類などをかなりまとまって保管しているらしいことがわかった。

そこで、今度は啓一氏に接触することになった。

大学の教授や外交官をしていて海外出張などもあり、なかなか連絡が取れず苦労をした。が、ようやく電話がつながり、事情を説明すると、啓一氏は明太郎の日記などを保管していることを認めた。それも、二年や三年分ではなく二十年以上もまとまっているとのことだった。

明太郎の日記は、明太郎が最後まで住んでいた神奈川県茅ケ崎市の別荘にあった。ただ、現在、その別荘にマンションを建設中のため、日記類は別の倉庫に保管してある。公表するにしても、マンションが完成し、倉庫に保管してある日記も整理した後になるという。

この時、宗竹らは、啓一氏から「明太郎の日記類を公表してもよい」との感触を得、当面はマンションの完成を待ち、改めて日記の公表について了承を求めることになった。マンションの完成は平成八年四月の予定だった。調査研究委のメンバーは、じりじりとした気持ちでその日を待った。

マンションが完成する年の平成八年四月十七日、たまたま小松製作所が石川県小松市内に建立した明太郎の銅像除幕式が行われた。その席には主賓の竹内家を代表して啓一氏が出席していた。高知からも調査研究委の宗竹らが招かれており、除幕式後に面会する機会を得た。

この時に啓一氏から「祖父、明太郎の日記が二十年分余りある。必要なら見てもらってもいい。古い写真もあり、その撮影も差しつかえない」と極めて好意的な返事をもらった。マンションの方も同月中に予定通り完成した。

結局、啓一氏の好意で平成八年七月七日に茅ケ崎市の別荘地に完成したマンションの一室で、明太郎の日記や写真などを公表することになった。明太郎の資料探しを始めてから三年余り、彼の日記の所在

を知ってからでも二年近い日時が経過したが、宗竹ら調査研究委の執念が、埋もれていた明太郎の貴重な日記入手につながったのである。

こうして創立者調査研究委員会の山田委員長、宗竹副委員長らメンバー四人と、同窓会の東京支部長山本洋明、事務局長森田保夫、支部員六人もコピー機二台を持って約束の日の平成八年七月七日、明太郎の日記が保管してある茅ケ崎市の竹内啓一氏所有のマンションを訪れた。啓一氏とは、あらかじめ日記をコピーにとることも了解を得ていたので、同窓会東京支部員がわざわざコピー機を用意してくれていたのである。

一行が訪れた茅ケ崎市の菱沼海岸一帯は、もともと別荘地だったが最近はマンションや一般住宅が建ち並んで、かつて別荘地だったとは思えないほど開発が進んでいる。

明太郎は、その一角に家族名義で約三千坪の別荘地を持っていた。昭和三年、竹内鉱業の会社整理の時、東京の自宅などすべての私財を売却してその処理にあてた明太郎だが、たまたまこの別荘地だけが家族名義になっていたので残っていたといわれる。明太郎が子孫に残した唯一の財産（土地）だったわけである。

さて、一行が訪ねると啓一氏はすぐに明太郎の日記が保管してある部屋に案内してくれた。その書棚の中段あたりに明太郎の日記がずらっと並べられていた。博分館とか東京図書出版といった古い出版社が発行した当用日記帳で、明治二十二年と同三十六年から四十一年まで。さらに、同四十三年から大正を経て昭和三年までの二十六年分がそろっていた。明治二十三年から三十五年までが欠落しているが、

その所在は不明だ。

早速、メンバーが日記帳を手に取ってページをめくってみる。墨筆で書かれている。達筆だ。あまり長くはないが毎日、たんねんにその日の行動が記入されている。行動日誌といった感じで、全体に当日何をしたか、どんな人と会ったか、また、その用件などが簡潔に書かれている。

炭鉱事業をはじめ、唐津鉄工所、小松製作所、早稲田大学理工学部、高知工業学校の設立のことなど、詳細な記述はないがおおよそのことは推測でき、資料としては大変、貴重なものだ。

ひと通り目を通した後、一行は「明太郎の行動や考え方などを知るうえで非常に貴重な資料」と判断し、二十六年間の日記をすべてコピーさせてもらうことになった。調査研究委と同窓会東京支部のメンバーが一緒になって、持ち込んだ二台のコピー機をフル運転させ、結局、午前十時過ぎから午後六時過ぎまでたっぷり八時間かけて一ページも残さずコピーした。

啓一氏は、日記のほかに竹内家に伝わる古い写真も多数保管しており、それらも見せてくれた。竹内綱、明太郎、強一郎などの珍しい写真があり、調査研究委のメンバーが複写させてもらった。

日記のコピーは合計九千枚余りになったが、これらは帰高後、同調査研究委員会のメンバーが分担して整理することにし、日記の公表などに積極的に協力してくれた啓一氏に厚く礼を述べ、その日マンションを引き揚げた。

明太郎の日記をコピーさせてもらって帰高してからがまた大変だった。なにしろ二十六年分、四半世紀にもわたる日記である。さらに、書体にも独特のものがあり、字句を判読するのが大変な作業だった。

日記には人物名が相当出てくるが、それぞれがどんな人で、明太郎との関係はどうかなどもある程度調べておかなければならない。それらの調査にもかなりの時間がかかった。

結局、日記のコピーを整理し、きちんと読めるものにするだけで六カ月を要した。調査研究委のメンバーが急がしい時間をさいての作業で深夜までかかることもしばしばだった。また、再々、委員会も開き、夜遅くまで日記の検討なども行った。こうして明太郎の日記の整理が完了したのは平成九年一月のことであった。この日記が、明太郎の伝記をまとめるにあたって大いに参考になったことはいうまでもない。

理想主義者だった明太郎

明太郎の日記のコピーに立ち会ってくれた啓一氏は、その合間に明太郎に関する調査研究委員会のメンバーの質問にも、気持ちよく応じてくれた。短時間だったが、その一部をまとめた。

――明太郎さんの日記のあることは、前から分かっていたのですか。

啓一　祖父が亡くなるまで住んでいたここの別荘にあることは分かっていた。祖母の亀井が、ずっと大事に持っていたものと思う。何年か前、この別荘地を処分し、その後へこのマンションが建つことになったので、別荘は取り壊すことになった。その時に、家の中を整理していたら、一連の日記帳が出て来た。

――お父さんの強一郎さんは、この日記のことは知っていたんでしょうね。

啓一　祖母の亀井から引き継いで、大事に保存していたと思う。でも、父は明太郎の日記のことはだれにも言わなかった。だから、私も最近まで知らなかった。

――大変貴重な日記ですが、明治二十二年があって、その翌二十三年から三十五年までの十三年間分がありませんが……

啓一　どうして欠落したのか分からない。これは推測だが、そのころ、仕事が忙しくて書いていなかったのかもしれない。

――この日記は、明太郎さんを知るうえで非常に貴重な資料です。啓一さんが今度、この日記を公にする気持ちになったのは、どうしてですか。

啓一　祖父が亡くなってから、もう半世紀以上たっているので、公にしても迷惑のかかるようなことはないと思った。それに、創立者調査研究委員会からの強い要請もあったので、この日記が役に立つのなら発表してもよいと考えた。

――啓一さんは、明太郎さんの日記は読みましたか。

啓一　もちろん。一応は目を通している。内容は行動日誌のようなもので、他人についての批判的なことはまったくなかった。

――実際に、明太郎さんは人を批判するということはしなかったと聞いています。日記にも書いていないとは、明太郎さんらしいですね。ところで、ここ茅ケ崎は明太郎さんの別荘で、本宅は東京の麻生



インタビューに答える明太郎の孫、啓一

笄町と聞いていますが。

啓一　大正から昭和初期にかけての大不況で、祖父の会社（竹内鉱業）が破産した。東京の自宅も担保に入っていて取られてしまった。私の知る限りでは、祖父、明太郎が持っていた財産で、残ったのはこの茅ケ崎の別荘地だけだった。ここが残ったのは、たまたまその名義が明太郎でなく、親族名義の共有財産になっていたからだと聞いている。

――ところで、お孫さんの啓一さんからみた祖父、明太郎さんはどんな人だったか。また、その評価は……

啓一　そう聞かれても、私は祖父を知らない。私の生まれる（昭和七年）前に亡くなっているのだから……。祖母の亀井や父、強一郎を通じて間接的に聞いたことはあるが。若いころからよく勉強はしていたようで、外国の書籍などを手放さなかったという。英語やフランス語もしゃべったとか。とにかく、

勤勉な実業家、経営者だったようだ。そして、自分ではほとんど表面に立たない。社長と名のついた役職には就かなかった。それに祖父は、いつも私財を私財とは思っていなかったのか、すぐに公共のものに使ってしまった。国のため、工業振興のためにということで、常に公共を優先していた。本当の理想主義者だったと思う。人を大事にしていた。そして、優秀な人はどんどん海外に派遣し、新しい技術、知識を勉強させていたと聞いている。

――実の弟、吉田茂さんとの関係ですが……

啓一　いろんな見方があるようだが、祖父は吉田さんをかわいがっていたというし、吉田さんの方も実兄である祖父に親しみを感じていたようだ。吉田さんがまだ若いころ、ここ茅ケ崎の別荘へ来て勉強したことがあるほどで、仲が良かったのではないか。

第三部　理念を引き継ぐ

竹内綱、明太郎を相次いで失った私立高知工業学校は、創立者二人の信頼を一身に集めていた初代校長の吉崎七次郎に引き継がれる。明太郎は、存命中も学校運営のことはすべて吉崎校長に任せ、同校長もまた創立者の意を受けて「工業富国基」の理念のもとに、懸命に学校運営にあたった。創立者を失い、精神的支柱がなくなったショックは大きかったが、それによって教育方針が変わるなど学校全体が動揺することは少しもなかった。

吉崎は、大分県中津市で生まれた。同県師範学校を出た後、一時、小学校に奉職するが、明治三十三年には東京高等工業学校の機械科を卒業し、兵庫県立工業学校に勤務していた。その時に、東京高等工業学校の手島精一校長からの推薦で高知工業学校へ招へいされた。そして、明治四十五年の創立時から校長事務取扱い、大正四年四月から同校長となった。以来、創立者の明太郎と一身同体となって高知工業学校を支え、その草創期を築く。校長であるとともに一教師として、他の教職員と同校のために尽くした。

彼は高知工業学校の運営が軌道に乗った昭和八年に退職することになった。学校関係者や父兄らの強い慰留にも決意は変わらず、同年五月に勇退した。

吉崎校長の数々の功績については、退職した時の同窓会誌に「吉崎先生の功績の大要」として詳しく載っている。

「竹内綱、明太郎両先生の絶大なる信頼と幾多の困難を排し、良く創立の精神に立脚し、一意校運の隆昌発展に努力し、学校の教育方針を確立せられ、その経営よろしきを得て、特色ある校風を作らる。

大正十二年、県営移管後は当局の信頼を受けて逐年、科の増設、校舎、工場の増築、校地の拡張、内容の充実を図り、現在、機械、電気、応用化学、土木、建築の五科が完成され、生徒定員七百名、卒業生二千余名に達し、校運ますます隆昌を加え、学校の基礎盤石のごとく、今や高知工業の名、県の内外にとどろく。卒業生の成績は極めて良好にして全国の会社、工場等に活躍しつつあり、これら同窓生はみな先生の偉大なる人格の感化を受け、一致団結、先生を敬慕すること慈父のごとく、真に一家族のごとし。

本校は、いまだかつて不祥事件ありたるを聞かざるは、これがためなり。先生は、創立以来、二十二年、前後合わせると三十七年間、ほとんど全生涯を教育に傾倒さる。

なお、今後、学校のため、本県工業教育のため、先生に待つもの多大なる折、昭和八年五月三十一日をもって勇退せられ、同十月二十三日、県地を去られしは、学校に関係あると無きにかかわらず、痛惜にたえざる次第なり。

卒業生において、先生のご功績、ご高徳を永久に追慕し、報恩感謝の微意を捧げんとして種々お願いせるも、ご辞退せられたるをもって、やむなく記念事業として吉崎記念図書館建設の計画あり。子弟の情濃なるを見る」

この大要の一部からも、吉崎校長が同校のためにいかに心血を注ぎ、また生徒や卒業生らからも信頼され、慕われていたかがうかがわれる。第二代校長には松本政良が就任した。

引き継がれる理念

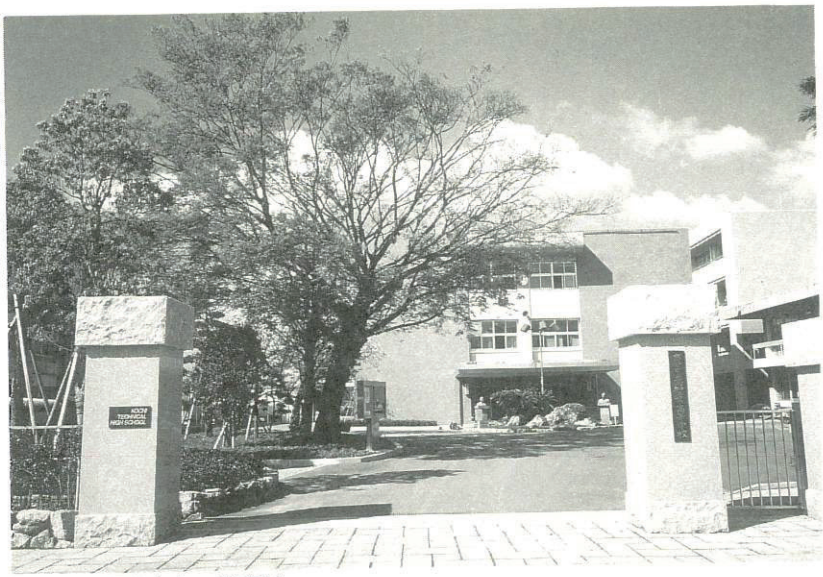
松本が校長に就任すると間もなく、校舎の移転、拡張問題が持ち上がった。高知市北与力町（現在の永国寺町）にあった県立高知工業学校は、校舎の老朽化が進み、また、施設そのものも狭あいとなり、移転、拡張に迫られた。

県当局も用地を物色、結局、昭和十四年になって同市桟橋通二丁目に適地を確保、着工した。新校舎の完成は、同十七年で旧校舎からの移転も完了した。敷地総面積は九千七百坪、うち校舎など建築面積は二千四百三十七坪、運動場が三千七百八十坪だった。

しかし、この新校舎は昭和二十年七月の太平洋戦争による高知市大空襲で、そのほとんどを焼失してしまった。このため、分散授業を余儀なくされ、本校事務所は県工業試験場に置き、授業の方は同試験場をはじめ、市立商業学校、海南中学校、長岡組合立小学校、県造船葛島工場、高須小学校、須崎小学校などを借りて行った。

この高知市大空襲では、主要地区の焼失家屋二千五百戸、被災市民四万二千人、死者は四百一人にのぼった。八月六日には広島に、同九日には長崎にそれぞれ原子爆弾が投下され、人類史上、未曽有の被害を出し同月十五日、わが国はポツダム宣言を受諾し、無条件降伏したのである。

終戦後の翌二十一年十二月二十一日には、安政以来といわれた南海大地震が発生、中村、須崎、高知



現在の県立高知工業高校

などで大きな被害が出て、死者は六百七十九人を数えるなど、戦災を上回るほどの大災害となった。

戦災、大震災と、県民は二重の災害に見舞われたが、ただちに復興に立ち上がり、被害を受けた県立高知工業学校も、昭和二十五、六年ごろまでには新校舎がほぼ完成し、生徒たちはようやく分散授業から開放された。

この間の昭和二十三年四月、新制高等学校令によって、県立高知工業高等学校が設置され、それまでの県立高知工業学校の四、五年生は旧制の卒業時に同高等学校へ、二、三年生は併設の新制中学校(昭和二十四年三月廃止)へ編入された。翌年九月には、県下高等学校の再編成によって県立高知工業高等学校と高知市立工芸高等学校が統合し、県立高知工業高等学校となり、全日制の課程は機械、電気、工業化学、土木、建築、木材工芸の六科となった。また、昭和二十三年六月には定時制の課程が設置され、戦

後の高等学校の新体制が固まった。

平成九年現在、全日制は木材工芸科がインテリア科と改称され情報技術科が加わり七科、定時制は機械、電気、工業化学、土木、建築の五科であり、在校生徒は、全日制八百七十二人、定時制二百九十一人となっている。創立以来の卒業生は二万三千余りに達し、県内はもとより、東京、大阪など全国各地の産業界などで活躍している。

明治四十五年、綱、明太郎父子によって創立された私立高知工業学校は、このように幾多の変遷を経てきたが、創立当時の建学の精神は引き継がれ今日に至っている。

現在「モノづくり」の考え方や手法について、また人材育成についていろいろ論議されているが、明太郎は唐津鉄工所、小松製作所の社内でも実技を中心とした実践教育を徹底的に行ってきた。綱も高知工業学校開校にあたって創立の趣旨説明の中に「技術上の学問素養、そして、これにそうだけの実地上の手腕、その能力を発揮するに足る人格の具備」を強調している。

綱、明太郎の考えは現代でも輝きを失っていない。これは教育方針として初代吉崎校長を始め代々の校長に受け継がれ生きている。

今度の卒業生に対するインタビューで、高知県の工業界のリーダーの一人である大久保長幸氏（昭和十年卒）や中国農業大学で農業機械技術指導員として活躍している山本義輝氏（昭和二十九年定卒）らも「高知工業で学んだ基礎的学問や実験実習が卒業後の技術活動に極めて役立った」と異口同音に述懐

している。また画期的な世界的発明である「アバランシェ増倍現象を利用した超高感度撮像管の開発」で平成八年度恩賜発明賞を受賞した谷岡健吉氏（昭和四十一年卒、ＮＨＫ放送技術研究所勤務）は「よく考え、問題を解決しようとする姿勢を学び、身につけることができたことに対し感謝している」と語っている。

また、高知工業高校の野町幸一校長は、平成八年度卒業式（平成九年三月一日）で次のような式辞を述べている。

「本校は開校以来、創立者の『工業は富国の基』の建学の精神のもと、八十五年になんなんとする校史の中で、先輩が営々として築いてこられた輝かしい伝統と、ゆるぎない社会的評価を伝承するという幸せに恵まれている。今後は、これらの成果を礎として、輝ける将来と限りない未来への飛翔のために、本校をさらに発展させなければならない。この高知工業高校の精神と魂を育み、さらに先輩からの伝統に夢と若さを加えながら、光輝ある伝統を未来に伝えるべきリレー走者としての自覚に立って、新しい校友の立場から、母校の発展に寄与して欲しいと願うものである」

竹内綱が揮ごうした「工業富国基」の扁額は、今も校長室に掲げられている。この扁額は、ただの飾りではなく、「工業富国基」を理念とする綱、明太郎の教育方針が、歴代の校長や教職員たちによって、きちんと引き継がれていることの何よりのあかしといえる。

須崎工業学校の誕生

県立高知工業高校は、竹内綱、明太郎父子によって設立されたが、その竹内父子の薫陶を受けた第一期生が、成長して後年、やはり郷里の工業学校設立に大きく貢献している。

参議院議員などを長く務めたあの寺尾豊である。そして、氏が創立にかかわったのが現在、須崎市多ノ郷にある高知県立須崎工業高校である。

寺尾は明治三十一年、当時の高岡郡須崎町新町（現・須崎市）で白石純成の三男として生まれたが、寺尾英吉の養子となった。地元の小学校を卒業すると、明治四十五年に創立したばかりの私立高知工業学校へ入学する。大正六年に同校を卒業すると、佐賀県唐津市の唐津鉄工所に就職。さらに、昭和四年、立正大学高等師範部を卒業後、明電舎の社長秘書を経て同社の子会社である関東製作所を設立し、その社長となる。さらに、県造船社長なども歴任、昭和二十二年には戦後初の衆議院議員選挙に出て当選、政界に入る。その翌年、参議院に転じて以来、連続五



県立須崎工業高校の玄関前にある寺尾豊氏の胸像

期当選。昭和四十六年までの二十五年間、政界で活躍した。同三十三年の第三次岸内閣では郵政大臣を務め、その後も参議院予算委員長、同副議長など要職に就いた。

実業界、政界において輝かしい経歴を持つ寺尾だが、彼に大きな影響を与えたのは私立高知工業学校時代で、とりわけ創立者である綱、明太郎であった。

私立高知工業学校へ入学した寺尾青年は、開校式では綱にじかに触れた。その時に「工業富国基」を基調にした綱の講演を聴き、大きな感動を受けた。開校後は明太郎もしばしば学校を訪れており、父子の薫陶を受けた。その寺尾が同校を卒業すると直ちに明太郎が設立した佐賀県の唐津鉄工所へ就職したことからも、綱と明太郎にいかに心酔していたかがわかる。

寺尾の頭には学校を卒業してから、いつも「工業富国基」という理念がこびりついていた。そして「自分もいつの日か、綱、明太郎のように、郷里の産業振興、工業教育に一役買いたい」と、考えていた。

寺尾にとって、その夢を実現するまたとない機会が、やがて訪れる。それは、寺尾が明電舎（東京）の社長秘書から独立して関東製作所を設立、その社長をしていた昭和十五年ごろのことである。

大正末期から昭和初年にかけて、竹内鉱業をも飲み込んでしまったあの大恐慌の嵐もようやく収まり、産業振興や人材の育成が強く叫ばれるようになっていた。たまたま、そのころ須崎町に中学校の誘致運動がわき起こった。当時、同町には中学校（旧制）がなく、高知市か佐川町へ出るかしなければならなかった。また交通事情も悪く、勉学をしたい子弟は高知や佐川で下宿するか、親類の世話になるしかなかったのである。そこで、須崎町をはじめ周辺の町村住民まで巻き込んだ中学校誘致運動が急速な広が

りをみせた。

郷里を出て当時、東京で事業を興して成功していた寺尾のところにも、時の須崎町長、池内実吉から「中学校の町への誘致にぜひ協力してほしい」との要請があった。寺尾にとっては、待ちに待った時がきたのである。池内町長の協力要請を寺尾は受け入れ、全面的な協力を約束した。

寺尾には一つだけ条件があった。それは、綱、明太郎の「農をもって国を養い、工をもって国を富ましむる」という理念に基づいた「工業富国基」の実現に向けて、工業技術者を養成すること。つまり「設立する中学校は、工業学校とすること」だった。池内町長にとっても、異存のあるはずがない。

寺尾の協力によって中学校の誘致計画はとんとんと進んだ。用地は、須崎町が現在の須崎市紙町に確保して提供する。学校の建設費三十五万円のうち、半分近い十五万円は寺尾が寄付する。さらに、機械類など諸設備も、すべて寺尾が購入し寄付することで話がついた。もちろん、県当局や須崎町を中心とする物心両面にわたる協力もあった。

県立須崎工業学校はこうして昭和十六年二月、文部省の設立認可を受け、同年四月十九日、開校式を行った。スタート時は機械科のみで、一種、二種合わせて定員は百二十人。修業年限は五年。初代校長には、県立高知工業学校教諭の中内知章が迎えられた。

教諭陣もほとんどが高知工業学校の出身者で固められていた。当時、県下で工業学校といえば高知工業学校しかなかったのだからそれも当然であろう。

須崎工業学校が開校式を行った時は、まだ校舎が完成しておらず、当時の須崎国民学校の施設を借り

て挙行された。第一期生は、機械科一種五十人、同二種四十人の合計九十人だった。学校の敷地面積は四千五百二十八坪、校舎は延べ面積千八坪で、竣工したのは昭和十八年五月二十五日で、この日を須崎工業学校の開校記念日とすることになった。

同校も昭和二十三年の新制高等学校令によって県立須崎工業高等学校になった。科目も設立時、機械科だけだったが、その後、だんだん増えて、現在はほかに造船科、化学工業科、電気科の合わせて四科となった。また、校舎の狭あい化などから、昭和四十七年には今の須崎市多ノ郷の新校舎に移転を完了した。

同校では昭和十六年の創立以来、これまでの五十五年間に約八千五百人の工業技術者を社会に送り出している。尾崎翹彦校長は「当校は寺尾先生の巨額な私財提供に端を発し創立された。当然、寺尾先生の理念を教育方針に盛り込んである。その教育方針には、寺尾先生がかつて私立高知工業学校時代、大いに薫陶を受けた創立者の竹内綱、明太郎さんの教育理念に通ずるものである。当校では、これまで寺尾さんが考えておられた教育方針を一貫してきており、これからもその方針に変わりはなく、有能な人材を養成していきたい」と話している。

寺尾に竹内父子の強い影響

県立須崎工業学校創立の功労者、寺尾は同校の三十周年の記念誌に「苗木を植えて三十年」という題で回想文を寄せている。この一文に寺尾と同校とのかかわりや工業教育に対する理念がよく表れている。

「私は私立高知工業学校の開校と同時に同校へ入学し、技術などの薫陶を受ける過程で、同校の創立者、竹内綱、明太郎先生の『農をもって国を養い、工をもって国を富ましむる』――この先生の座右の銘ともいうべき精神に立脚し、立国の大本は農をもってその基盤を築き、国土は狭く繊細な技術を持つ国民性を生かして、工業の隆盛発展により文化ならびに生活の安定と経済の高度化をその基盤とすべきだとの信念をかたくしました。

この考えを実行に移すため、東京に会社を設立したところ、先輩ならびに志を同じくする郷土の青年同志の協力を得て、会社は目的の方向に発展しました。

私は、その余力をもって、郷里、須崎に工業教育の施設を致したいと考えておりました矢先、たまたま友人、池内実吉・須崎町長より、町内に中学校の誘致運動を起こしているからと協力方の要請がありました。私はここぞとばかり今までの信念からして、須崎には工業学校の必要性ありと強く説きました結果、幸いに関係者ならびに町長の賛同を得、一致してその運動を展開し、私も建築資金等を寄付するとともに、当時、特に調達困難であった実習用機械器具全部を提供し、優秀な指導陣と相まって、完全



現在の県立須崎工業高校（須崎市多ノ郷）

な教育機関ができたことは、私にとって生涯忘れることのできない最高の喜びでありました。

このようにして本校は、太平洋戦争に突入しようとする昭和十六年に機械科のみではあったが、待望の開校をみたのであります。

しかし、本校の歩んできた道は決して平穏ではありませんでした。戦争の深刻化に伴い、関係者の応召、社会的混乱、ついには敗戦を迎え、日本のすべてがそうであったように、いろいろな困難に遭遇しました。

その後、教育制度の改革により、工業高等学校として発展し、機械、電気、化学工業、特に全国にも例の少ない造船科を設置し、その内容とともに校名は上がり、人材および技術教育の高度化は社会的にも信頼を得て、創立の目的を達成しつつあり、当初、百人の生徒は、現在、毎年、二百余人の卒業生を世に送る盛況となり、ようやく校舎等の拡充に迫られ、

今回、大間地区に広大な敷地を得て、理想的、近代的な施設の充実に向かっておりますことはまことに喜ばしい次第であります。

私は、以上のような関係で、須崎工業高校の関係者各位とは血のつながりを覚え、身近な問題として今後のご活躍を心から期待申し上げる次第であります。本校がますます発展し、創立ならびに教育の目的に向かって、さらにまい進することを祈念してやみません」

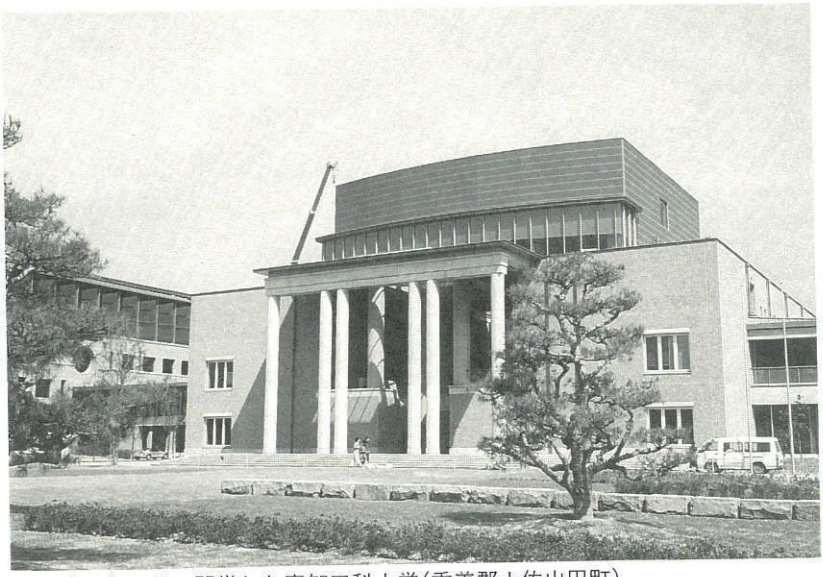
実業家として、さらに、政治家として歩んだ寺尾の人生も、時代こそ違っても綱や明太郎のそれと何と似ていることであろうか。

県立須崎工業高校は、昭和四十七年十一月二十五日、その二年余り前から着工していた移転新築校舎などが完成し盛大な落成式と三十周年記念式典が行われたが、同校創立の功労者、寺尾はその翌々日の二十七日に新校舎の完成を待ちわびていたかのように他界した。享年七十四歳。

高知工科大学との縁

ところで、平成九年四月一日に香美郡土佐山田町に開学した高知工科大学は、明太郎や彼が創立した私立高知工業学校とはくしき因縁で結ばれている。

高知工科大学の初代学長に就任した末松安晴と、同副学長の鈴木朝夫は、ともに東京工業大学の出身で、同大学の教授となり、末松は同学長も務めている。東京工業大学といえば、前にも触れたが、その



平成９年４月に開学した高知工科大学（香美郡土佐山田町）

前身は東京高等工業学校であり、同校の校長を長年務めたのが「工業教育の慈父」とも呼ばれた手島精一である。

手島は明太郎が鉱山事業から機械工業への転身を図り、佐賀県唐津へ唐津鉄工所を設立した明治三十九年に、明太郎からの依頼で手島が育てた竹尾年助を紹介して以来の親友。明太郎が明治四十一年に、早稲田大学理工科を設立した時にも深くかかわっている。また、綱と明太郎が私立高知工業学校を設立する際にも、初代校長の吉崎七次郎をはじめ、手島の教え子である東京高等工業学校出身者を多数、教師として送り込んでいる。特に、私立高知工業学校の設立にあたっては、設立趣意書から校則、教育カリキュラムの作成まで手島によって行われたといわれるほどなのである。

そして今、その手島の流れをくむ東京工業大学の学長や教授を務めた末松と鈴木が、高知工科大学の

学長と副学長に就任しているのである。末松と鈴木だけでなく、教授陣の中には東京工業大学の出身者が多数、迎えられている。

明治の末期に、工業教育の振興のため明太郎と手島が手を組んだように、あれから約九十年という長い歳月を経て、今また同じ目的をもって手島の流れをくむ東京工業大学の出身者たちが、明太郎の郷里に開学した高知工科大学に深くかかわることになった。

こうした関係を見ると、手島と明太郎、東京工業大学と高知工科大学や高知工業高校が、時代を越えて、どこか強い絆のようなもので結ばれているようでもある。

末松学長は、感慨をこめて語る。

「私の母校である東京工業大学には、その前身の東京高等工業学校の校長、手島先生の功績を記念した財団法人『手島工業教育資金団』もある。わが国の工業教育に生涯尽くされた大先輩であることはよく承知している。その手島先生と明太郎さん、さらに高知工業高校との関係については知らなかった。そして、手島先生の東京高等工業学校を継承した東京工業大学出身の私たちが今度、明太郎さんの郷里に設立された高知工科大学に赴任した。橋本知事からの熱心な要請に応じたわけだが、そうした事情を聞かされると、何か不思議な因縁めいたものを感じる」

「私は高知では明治維新の志士の一人、坂本龍馬を尊敬、心酔している。その龍馬の出身地に招かれ、工科大学の創設に関係し、これからここで仕事ができることは大変うれしい。新しい大学でやりがいがある。最近、わが国でも情報化が急速に進んでいる。そういう時代に高知工科大学が設立されたわけで、

龍馬のように変革の時代をリードしていける人材を育てていきたい」

鈴木副学長もまた言う。

「私も手島先生と明太郎さんや高知工業高校とのかかわりについては知らなかった。そこへ、手島先生と深い関係のある東京工業大学を出た私たちが、明太郎さんの郷里にできた高知工科大学に招かれたことについては、目に見えない糸でどこかでつながっているような気がする」

「高知工科大学の地元からは、著名な科学者で早稲田大学の理工学部長を長年務めた山本忠興先生も出ていると聞かされた。大発明家の一人で、テレビジョン放送の草分けでもある。このような情報化の先駆者を生んだ地元に高知工科大学が設立され、高度情報化の時代を担う人材を育成することになったのは、不思議な因縁と思う。高知工科大学では、自由な学風の中で実学を大事にするとともに、人間教育や国際性にも重きを置いている。これらは明太郎さんの掲げた理念とも共通するのではないか。これから県内の教育機関や民間企業との連携もとりながら、特色のある大学にしたい」

綱、明太郎の人材育成への思いは、ここにもまた引き継がれようとしている。

資料編

竹内明太郎の日記
竹内綱と明太郎の年表
竹内家周辺の系図
参考文献

明太郎の日記抜すい

明太郎の日記入手のいきさつなどは、「第七章、明太郎の貴重な日記入手」の項に記した。またその内容についても、この本の中でも随時、引用している。この日記のおかげで従来の不確かな部分を補強し、伝記をより信頼性の高いものとすることができた。そうした点でこの日記は伝記をまとめるにあたって第一級の資料となった。

なにしろ四半世紀にわたって記されており、本文で引用したのはほんの一部にすぎない。明太郎を知るうえで、この日記帳にはまだまだ貴重な記録が数多く残されている。そこで、創立者調査研究委員会がコピーした九千ページ余りの日記の中から、重要と思われる部分を紙数の許す限り抜すいして資料として掲載した。

明治22年

1月

1日　唐津在

21日　午前銀行にて金子受け取り出嶋の普請場にモンドレルを訪わんとし其の途中　田氏と逢　久濶の情を述べ直に別を告げ深塘商会にて宇都宮を訪　高取来たらざるを以て帰宿
今夕出帆の東京丸に乗船の用意を為す

2月

1日　陸上東京に決したるは憲法発参列人乗船多数なるによる

11日　一時三十五分汽車出　金虎館に至り池田、浜田に逢い共に石川島に至り片岡、星等の出獄を迎ふ　浜田を伴い先発　星に立寄金虎館に帰り巡覧のため丸内宮城前より日本橋通に出て芝口の処洋食、金虎館に至り皆に辞別帰浜

3月

5日　午前より登山、夕景前帰唐小林に鉄道のこと、寺谷借区処分の事等相談　借区一件に付同人を長崎に明日出発さすることとなす　昨日芳谷巻機械土台竣功せる趣なり

25日　一昨日鋳物師一名大工棟梁一名　昨日鍛冶三名長崎より来着の趣なり

4月

15日　芳谷にて初めての鋳物至極立派に出来たるを見る　坑内水量余程増加の趣にて昨夜一時半より午前十時三十分まで十吋二台間断無く運転したる趣なり

29日　長崎十二吋喞筒一昨夕より運転始めた趣具合頗る宜しい

6月

13日　東京行き柏組より愛宕町に板翁を訪ひ　金虎館に至り小林、池田に面会　再び柏組に至り帳簿記入方相談　終列車にて帰浜

16日　午後二時二十五分汽車にて大磯に至り吉田病気を見舞一泊

28日　英一に至りウォートルに小蒸気車取寄の事等(二十吋のもの二千八百円也)を談じグロッセル方に至る。今朝吉田来たり芳谷処分苦情談を聞く

7月

30日　瀧君帰濱

11月

17日　東京に至り深川安宅町製錐所に至る　スチームハンマー並にスクルー・カッチングマシンの事談じ置

12月

1日　正午前吉田危篤の旨報知あり　池至りたるも終焉の後なりし

4日　吉田葬送　降雨道路太悪　埋葬を終わり吉田に至りたる七時過ぎなりし

5日　お菊昨日午後一時頃男子分娩の旨報知あり

17日　十二時過横浜着　家君昨日より在京の趣に付二時の汽車にて上京池田を訪う不在、山本を政論社に訪ひ西山志澄よりの頭金を渡す池田に会す　柏組に至り家君に面会す　外村を呼び金融のことを相談す

19日　正午前着、停車場にて土居に会い同伴西照菴に

至、金融の事を談ず　今日板垣の催に係る旧友懇親会開会の由　夜土佐堀五丁目渡辺方に片岡を訪西山、北川等十六、七名集会なし居たり　大井、内藤等今日を以て関東自由党結党の準備会を開く

21日　夜板翁を訪い加藤、松田等十余名の集会の席に列す

23日　金剛丸神戸出発

25日　正午前馬関上陸一時過ぎ同所発、八時前唐津着

明治36年

2月

20日　今夕6時汽車にて厳君選挙のため高知へ出発（3／1第8回総選挙当選）

3月

16日　午後5時より横浜埋立工事につき家君、山本幸彦、大野清教、広瀬爲與と会談

19日　午後6時汽車にて家君韓国出発、諸井同行

4月

6日　午前本家に至る母堂危篤におちいる。午後父君釜山乗船仁川に向かう。

8日　母堂死去、（今朝3時5分）父君9時仁川着の電報来る。

10日　午後1時10分過ぎ出棺、3時20分各中斎場着、5時10分埋棺終わり帰につく　晴天にて好都合なり

24日　正午板垣伯を訪う、小川結納の式あり

5月

4日　午前8時半家君新橋着

6日　ランド圧搾空気機械（百五十余馬力）三井に注文す

8日　玉屋にて忠興所用電気技術家用時計（55円）を買入

6月

3～16日　唐津　芳谷で執務

7月

1日　強震あり（6日も）

2日　自宅引用電燈を今夜より点火せん由

8月

28日　7時30分声の湯出発　湯本迄芳子、忠興と徒歩10時10分湯本発電車に乗り、11時20分頃国府津着、11時36分同所発汽車にて2時17分新橋着、

会社に立ち寄り4時過ぎ帰宅、麻子、芳子、忠興は大磯にて下車吉田に至る。

10月

8日　新橋発唐津へ

17日　九鉄技手中村芳谷支線の事にて来宅、自分意見は純粋なる運炭鉄道とせず、後日九鉄にて普通鉄道となす時に便利となるべき設計にて敷設の旨返答せり

22日　虎治より父君病気のこと昨日委細郵便出した安心すべき旨電報あり

23日　父君入院手術受けたるも少しも痛みなく手術後平常の通りにて一両日中退院出来安心すべき旨電報来り安心せり

30日　唐津発遊泉寺へ

11月

12日　遊泉寺発(13日新橋着)

16日　大人　7時30分列車にて韓国へ向け出発につき新橋停車場に至る、板垣、林、尾崎、山本幸彦兄弟等来会

12月

9～16日　磯原

18日　大人帰京　二宮と新橋停車場に至る

明治37年

1月

4日　新橋発唐津行、京都より小倉行の岩村高俊同道、新橋唐津間鉄道全通後始めての旅行なり、鉄道賃一等23円24銭

5日　唐津着　西門小路の新宅に入る(2月2日まで滞在)

16日　大人より川舟1万斤積以上200艘程買入たし何程なるか、仁川釜山汽船にて運漕の見込立つや返事待つと来電あり

21日　相談の上当地川舟は八千斤積なり　それにて宜しければ一艘七千円にて二百艘買入出来る見込、汽船の事は其地にて引受けありたしと返電

22日　大人より過日電報の川舟は白石に頼み筑前川舟買入の事となしたる旨電報あり

23日　本日金融の談をなしたるは唐津銀行にて日露事件の為め引締の方針を取りたるによる

芳谷行　75キロワット発電機150キロワット発電機に各自専用の配電盤を設けず、共同配電盤を

置く事を相談す
第一坑捲機械大歯車のスピー飛出し　運転中のクランクとベッドプレートの間に挟りためにベッドプレートに損所出来せりし　運転に差支なし

2月

4日　午前小松着、午後遊泉寺事務所着　此地方2月1日を以て、正月元旦となすにより休業中なり（2月9日迄滞在、坑内建造物の工事を命ず）
23日　茂　佛国行の事等相談のため来る
29日　六時前より片町（麻布区飯倉片町の綱の自宅）に至る　大人未だ京釜会社に在り

3月

15日　廣瀬為興　山内家所有北海道鉄道株式を以て金策の件にて来社
22日　上野発　磯原着（3月29日まで）

4月

1日　山本幸彦、横浜埋立地金談の事にて来社（4月5日も同様）
8日　内国保険会社に山本　大野と会合　横浜銀行より七七銀行へ四十万一ケ年間預入の事協議　七七銀行支配人成澤来社　七七より支払利息は年七分五厘の事に相談あり
9日　山本幸彦来社山内家所有北海道株五百の処分談あり　横浜銀行より七七銀行へ預金は明後日午前取引の筈
11日　新橋発（唐津へ）
26日　日露事局の結果金融逼迫を来たすべきに付諸費節減其準備をなすべき旨談す
28日　芳谷事務を事業部と事務部に区分し事務の敏活をはかり、出来丈職員減少の事相談す

5月

2日　解職の職員に対する慰労金の事を談す（与吉は十数年勤務の者に付重役名義にて五十円給与の事とす）
15日　芳谷職務規程協議決定（16日唐津発）
18日　小松着（危険個所等指摘し直す事、人事評価と解雇通知、事務取扱方等、28日帰京）
30日　国嶋　山田と遊泉寺職務章程並救恤期間協議をなす

6月

1日　栗塚省吾一昨日京城より帰京　釜山近傍に大人

と協議　地所四十余町四千八百八十円にて買入たるにより其送金方に付来社

18日　廣瀬為興　自分留守中虎治の周旋にて山内家入用金藤本手配店より借入済に付御礼の為来社
英語研修用会話書、自用露語会話編ウェブスター中字書買入　注文の大英百科全書続編11冊出来受取り　大人は昨日釜山着の旨京釜鉄道会社より電話あり

19日　戦地より負傷兵百人以上赤十字病院に着するを見る

22日　大人二時前新橋着

24日　茂来り上郎と其地所分配の事協議あり　茂現住の広尾地所を茂方引取り、東京地所二ケ所横浜所在分四、五ケ所を上郎に渡し現金にて二万円ばかり受取る定なり

25日　岩村通俊君　病気の為昨日御料局長を辞す

7月

12日　片町に至る(大人より)茂の佛国遊学を止め東京大学法科入学の事となすべき旨談あり
茨城炭坑会社に至る伊藤　樋口来会樋口の常務を止め自分にて以後常務受理の事に協議

17日　茂来る、大人より話ありたる同人佛国行を止め東京大学入学の事談し置り

26日　東京発　鉄道列車運転　開戦前に復旧す

27日　小松着(8月8日迄滞在、遊泉寺の発電所・撰鉱所諸機械据付、組立試運転・調整をする)

8月

10日　唐津着(9月24日迄滞在、お菊、芳子、良三、冬子、強一郎老婆、亀井、お友、麻子、梅子の名前あり)

9月

26日　小松着(11月15日迄滞在、坑内外諸機械点検自ら試運転、材料道具の管理方改善、人事、服務、炭坑買収方針指示等)

11月

16日　新橋着　大人に遊泉寺の状況報告

22日　芳谷小学生徒送りの絵草紙等買求め

12月

1日　過日注文の人力車出来代43円　旧車を3円にて売却新車にて帰宅

5日　芳谷小学生用ブランコ等を買求め
押川正治　出征歩哨勤務中胸より背部へ貫通銃

創を受けり旨お静へ報せあり

10日　上野発（磯原、12月16日迄、坑内設備新設、改良）

17日　片町に至る、去15日大人と結婚の式を挙げたる毛受キ子君に初めて面会す

19日　片町に至り虎治結婚の式に列し11時帰宅、中江方よりは母子　千谷孝子（千谷村事の未亡人）高橋安彦　朝川範彦夫婦　葛岡の妻　当方より親族総代として林有造列席、媒介人伊藤大八夫婦世話人中川澄なり

24日　内国保険会社に至り野村に面会山本負債処分の事を談す　千美に贈与の金剛石入指環を購入

明治38年

1月

15日　茂来宅　フランス公使館付佛人某方に同居の事相談の為めなり

22日　亀井継母死の電報

25日　浜田正稲、山本幸彦を呼び相談山本忠興を芝浦入所に決す

2月

7日　夕張炭山近傍の15鉱区を2500円にて買受の事取極、大人より小野義真胃ガンの旨聞く

8日　上野発磯原へ（15日帰京）

24日　唐津着（23日新橋発　4月2日までこの間3月16日～23日は朝鮮行　京釜・京仁両鉄道列車に乗車）

4月

4日　小松着（2日唐津発）

13日　別宮上流発電所設置の場所並に水路実地見分の為小野辰太を伴い午前9時事務所を出て原　上麦口　中峠　河野　別宮　杉森　神子清水　渡津を経同所上流の川原に12時30分着　昼食後1時発5時過帰山　夜山本　松岡来り軽便線遊泉寺通過の事同所の大地主の一人に談したるに承諾の旨話あり

17日　小松発（18日新橋着）

5月

17日　遊泉寺着（16日新橋発　6月3日帰京）

20日　磯原へ（26日帰京）

6月

12日　茨城会社上半期決算二万五千余円の利益あり

8月

9日　唐津着（7日新橋発）

9月

5日　小松着（2日唐津発）

23日　水力発電用水路の件にて小野別宮村へ出張　軽便線は本日より沈澱池下並に梯川河岸の両所より土功着手

28日　小松発（29日帰京）

10月

20日　片町に岩村来会しあり　伊賀家所有の神田末廣町の地所弐万四千円にて売却出来の旨話あり　右金員にて九鉄四百株買入の筈なり

30日　磯原へ（11月2日高萩　3日植田　4日町田各炭坑見分　8日帰京）

12月

18日　新橋発（19日小松着）

26日　軽便線路落成検分終り

27日　小松発（28日新橋着）

明治39年

1月

2日　昨夜三時　高俊君死去の報あり

19日　大人夫婦　明朝唐津へ出発の筈なり

21日　茂　遠藤忠彦来り醤油店昨年の決算表を見る　売却高は八万円にて純益は一昨年の倍額にて一万四千円余なり

2月

2日　大人より昨日土佐行の旨電報あり

3月

3日　今日東京電気鉄道廣尾信濃町間開通

6日　新橋発唐津へ（8日着）

9日　芳谷行　社員並抗夫居宅改築並に火災予防の為め居宅全体に電灯使用の事を談す

19日　唐津発　小松へ（21日着）

4月

1日　横尾帰山　別宮村水力工事は字別宮は百二十五円　字杉森外は百五十円にて示談調い昨日村会の議決を済したる由なり

8日　小松発東京へ（9日新橋着）

10日　大人は京釜鉄道の用事にて池田星耕を伴い夕六時新橋発朝鮮行（5・3帰京）

5月

15日　東京株式取引所に伊藤幹一を訪い茨城会社事務

は自分名義にて其実二宮局に当りたるを　名実共二宮を以て当局者とする事に談し置く

24日　織田信福妻竹子来宅（5／30・6／3・4・6・10）

6月

6日　大江卓　山本幸彦　今幡西衛　森岡某養子源三と韓国民海外移民出願の件協議

10日　識田信福昨夜上京　識田夫婦一泊

13日　外村宗次郎（京都）昨夜上京　工業学校設立の件等協議

14日　松本俊吉は大阪出張店開設の用事にて今朝上京　山本忠秀の代りとして濱田正稲来り活版会社株金として三千七百五十円を渡す

18日　上野発　東北・北海道へ（27日磯原着）

30日　磯原発　上野着

7月

7日　一時半より東京工業学校に至り校長手嶋精一に面会　実業学校設立の事を談す　四時帰社

9日　新橋発　唐津へ（10日着）　外村宗次郎京都停車場に来会　実業学校教員選定の事に付話あり

20日　唐津発大阪着　江戸堀南通一丁目に新設の出張店に至り松本と上季の決算を為し京都より来会の外村と要務を談話し大阪発

21日　十時小松着　出張所に小憩　十二時半事務所着

25日　別宮水力電気に係る村民との交渉一切終了の旨横尾より報告あり（本日村会も議決明日郡役場へ書類進達の筈）

30日　小松発（31日新橋着）

8月

1日　手嶋精一氏来社　海外派遣生は機械科遠藤某一人選定並学校設立主幹は現東京工業学校教授牧野啓吾に委託の旨話あり

3日　大人は明朝八時の急行列車にて遊泉寺へ出発の筈

7日　新橋発　箱根行（家族等同行29日まで）

30日　午前牧野啓吾来宅　箱根滞在中機械科留学生として選定せる旨通知ありたる芝浦製造所遠藤政直の事話あり

9月

1日　高等工業学校に至り手嶋　牧野両氏に面会電気科留学生として古河足尾鉱業所牧野賢吾を選定せる趣を以て同人も来会しあり面会す

6日　手嶋氏の紹介にて竹尾年助来店　妙見新設工場

主任として雇入の筈

8日　山本幸彦　京釜線水害破損の個所開通次第渡韓の趣を以て来社

10日　上野発　磯原着（15日迄）

17日　小池佐太郎　海外留学の件にて手嶋氏の紹介にて来社
遠藤政直明後日米国渡航に付送別の為め会食
牧野啓吾　虎治　坂田　岡本列席す
大人は上野発夜行列車にて鉱山並大船渡鉄道の件にて岩手県に出発

21日　一時前より浅草高等工業学校に手嶋氏を訪い今年休学中唐津に至り学校設立地選定並牧野啓吾米国渡航学制調査の事等を談し三時過帰社

29日　新橋発（30日唐津着　13日迄）

10月

14日　大阪駅来会の松本俊吉　竹尾年助に要務を談し出発　小松下車出張所に小憩事務所着

26日　別宮水力電気工事見分の為松村葦蕃　岡村宗三を伴い九時出発　十二時半渡津出張所着衛藤横尾の案内にて左礫に至り用水取入れの場所を見て引返し出張所にて昼食　三時前同所を出て発電所となるべき場所を経由神子清水にて衛藤に　別宮にて横尾と別し六時帰山（往復とも人力車なり）

31日　新橋着（30日小松発）

11月

5日　午前茂来宅　外交官試験に及第　多分年内に仕官の運となるべき旨話あり　昨夜養鶏十九羽盗れたり

16日　午前牧野啓吾来宅　在シカゴ岩井興助に来年一月より三年間学資給与（毎月米貨三十五弗）の事相談あり　茂も来る　同人は昨日付を以て領事補七等官に任命あり
小池佐七郎　明日独逸遊学出発に付関野、木村、二宮、坂田と会食　牧野啓吾も来会

24日　梯川　小松間軽便線路土地買収大略相談出来
今朝帰京の趣にて今幡西衛来社

26日　坂田　山田に明年欧米巡視を命す

27日　上野発　磯原行（12・1迄）

12月

3日　山本忠興徴兵の関係上　明春海外留学を為したき旨を以て来る

5日　新橋発（6日小松下車　鉱山着）
17日　近藤宏太郎に亀ヶ谷起業前　明春出発欧米視察の事を談し置く
24日　小松発（26日唐津着）
29日　牧野賢吾は去廿六日コーネル大学へ留学の為信濃丸にて出発の旨通知あり

明治40年

1月

1日　唐津滞在中（10日まで）
3日　高木来話　留学の為の発程日取り等の打ち合わせを為す

2月

3日　芝佐久間町の山本幸彦を訪ひ　高知市に明年父古稀寿記念のため工業学校設立のことを託す
4日　手嶋精一氏を浅草高等工業学校に訪ひ牧野啓吾列席学校のこと協議
18日　山本忠興を呼び妻帯の事に付談す（2／19、22、23、3／5、25、31に記あり）
25日　明石町京釜鉄道清算事務所に至り大人に面会

3月

2日　磯原（5日まで）
23日　片町には伊賀氏廣身上の事に関し林有造　織田信福　廣瀬為興会合しあり本人も楼上に在り大人説諭中なりし
25日　牧野啓吾来社　学校の件にて実地見分の為明日唐津出張の筈
27日　織田より同人妻の妹甥吉川季二郎身上の事にて相談あり

4月

2日　小松（12日まで）
24日　高等工業学校に手嶋　牧野を訪ひ　自分設立高等工業学校位置は唐津とすることに決定
27日　唐津（5月11日まで）

5月

13日　小松（16日まで）
25日　織田信福老母（73）来泊

6月

2日　山本忠秀方の子供3人来宅　忠興を呼び留学延期の上は結婚蔵旨話し置く
5日　山本幸彦　一昨日高知より帰京の趣を以て来社工業学校設立の事に付き話あり

6日　高知市商業学校長横山又吉来宅
7日　磯原着（11日まで）
20日　忠興徴兵検査の為今夜帰県

8月

3日　唐津（9月3日まで）
9日　欧米巡遊、坂田厚民去る四日帰朝の旨六日付文通あり
26日　熊本高等学校長中原淳造の紹介にて舶用機械科西岡達郎（海外留学生の候補者現今長崎三菱造船所在勤）来宅

9月

5日　小松（12日まで）
10日　昨夜　別宮水力電気隧道貫通の旨報告あり

10月

1日　山本幸彦も来る　高知市内高等小学校の舎敷地（高工学校用として）買入の件は調談の旨話あり
3日　手嶋精一氏　公用を以て徳島、高知、九州地方巡視の旨を以て来社あり
7日　牧野啓吾来社、手嶋精一氏公用を以て高知出張の筈に付高工学校設立準備のため出張のことを談す
11日　磯原（15日まで）
28日　山本幸彦　牧野啓吾（工業学校の件にて高知出張の処去る25日帰京）来社

11月

13日　手島精一　山本幸彦、牧野啓吾と晩食高知工業学校設立のことに付協議
18日　小松（28日まで）
29日　安治川にて高知丸乗船
30日　正午過ぎ高知桟橋着船、織田信福、町田旦龍来る城西館投宿　町田、織田も同道来宿、雑談の後升形織田宅に至り町田にて会食

12月

1日　一時より町田に至り織田に歯の手術を受け夫より織田、町田、同道　土佐郡第一高等小学校見分　両人に別し元与力町山本義妹を訪ひ四時寄宿　夜織田来話
3日　午前、安芸喜代香来訪　10時15分前出発須崎に至り徳永秀実を訪う不在家内に面会　某旅館にて昼食　午後三時帰途に就き八時過ぎ帰宿
4日　午前　織田老母　製紙組合耕崎鎧七　本多守一郎　村田喜久治（元田原虎治）　午後　福井議長

織田家内　荒川潔来話　織田信福、檜垣正義来たり共に県会議員開催の得月楼宴会場にいたり10時過ぎ帰宿

5日　佐々木甲象　旅宿主人梅原来話　町田を訪ひ織田同道汐江山に酒井三治、土居平左衛門の墓を弔い帰宿　源美正雄の母来宿　夜織田に至り晩食　石河兄弟も来会

6日　午前、本多、織田、同人家内、同母、県会議等来宿、正午旅宿を出て　高神丸乗船1時過ぎ出航　町田　本多等桟橋迄来る

8日　小松着（19・20（日記欠落）日まで）

11日　小松より五丁ばかりの處にて汽関車顛覆火夫負傷（13日運転再開）

明治41年

2月

5日　牧野啓吾出社　自分計画の工業学校を早稲田大学合併の事話あり6時帰宅

3月

13日　夜大人甲子君来訪あり、自分思い立の工業学校を早稲田大学に合併のこと大隈より相談ありたる由

18日　過日大隈伯より早稲田大学理工科維持費の事に付申込あり　一時半より同大学高田早苗を訪ひ同人同道大隈伯邸に至り五時半帰宅

24日　11時前より出社　高田早苗来社7時前帰宅

25日　来月末渡航の筈なる高木と留学中の取調事項を談す

4月

22日　高木文太郎今夜英国留学の為出発　来月四日門司より乗船の筈なり

24日　夜大人甲子君来訪あり　桂次郎よりの依頼の趣を似て崎戸炭鉱起業の事に付話あり

6月

2日　11時前より出社、山本幸彦来社、高野重三君来る　4時半より白石を訪い唐津大嶋築港の件につき相談　片町に至る九州炭鉱汽船会社の崎戸開坑の件につき相談あり

10日　織田信福妻死去の旨電報あり

14日　午前　高田早苗来宅　夜町田且龍来る

22日　夜大人来訪あり　九州炭鉱汽船会社より相談役依嘱せられたる由

本日　山本忠興男子出生の旨通知あり

9月

8日　九州炭鉱会社の技師橋本増次郎来唐　会社にて面談

17日　午前　今幡　山本幸彦来宅共に広尾吉田地所に至り　今幡同道正午半出社。3時前より九州炭鉱汽船会社崎戸起工予算の件にて銀座の同社に至り田植等に面会大人同席　6時半帰宅

23日　昨日九州炭鉱汽船会社重役会開会趣、自分の予算35万円にて起工のことを決議せる由なり。

12月

12日　11時前出社、松本俊吉今朝遊泉寺より出京の趣にて出社　外村兼吉来社　1時より早稲田大学にいたり高田並びに東京工業の手嶋、坂田と理工科大学設立のこと相談

25日　茂入院治療の旨お菊より電話ありたる由なり。夜お菊　虎治　茂結婚延期の事にて来る　牧野へ藤沢を介し相談の事とす

26日　午前九時片町に至る不在　加賀町京釜鉄道清算事務所に至り大人に面会、茂結婚延期の事を談す　三時半片町に至り牧野家親族　大久保侯爵兄弟　新婦等　自分方親族一同と晩食を共にし十時過帰宅。

27日　築地林病院に茂を見舞い　白石に至り媒介人藤沢利喜太郎来会　晩食を共にし九時半帰宅。

28日　茂結婚披露会あり　11時より華族会館に至り来会者二百余人にて頗る盛大6時帰宅

31日　片町に至る　大人　白石と茂結婚の時日に付相談　虎治も来会

明治43年

2月

10日　正午前より出社　崎戸炭鉱所工場機械買入の件にて2時より九州炭鉱汽船会社に田健二郎を訪ひ3時過ぎ帰社

19日　正午前より出社　3時より牧野伸顕氏を訪ひ雪子出産のため看護婦差替の事協議、6時帰宅

3月

6日　牧野妻君来る。伊太利　茂方行看護婦　高辻時出発準備の件なり

4月

13日　大夕張資金調達の件協議　現在資本百万円を七

十万円と減じ、優先株八十万円募集のことと取り極む、6時前帰宅

22日　磯原へ（5・2まで）

5月

13日　11時より出社、大夕張資本金は拓殖銀行並びに高藤借入金は当分そのままとなし優先株五十万円（内十八万円は京都の負債を振り替え）を募り進行の事に決議す

29日　明日丹後丸にて渡欧の手島精一氏乗車門司まで同行せり

6月

2日　雪子に女子分娩の旨報知あり　夕吉田茂の実印を片町より取り寄せ保管す

20日　11時半より出社、2時10分大人新橋着の報あり

29日　夜、中村康之助早稲田大学来年度経費の件にて来宅

8月

10日　山本忠興よりドイツ・カルルスルーへ7月18日出手紙、直流発電機を発明しその実験を要するところドイツにては不便なるにより米国に渡航し同国にてなすべきや帰朝の上なすべきや尋ねり来りたるにより　帰朝すべき旨発電せり

9月

20日　早稲田大学運動部長、安部磯雄来社、シカゴ大学野球選手旅費その他の費用に不足を生じたる節補助をうけたき旨依頼あり

23日　11時より出社　大江　今幡　大夕張会社今日の状態にては責任の帰する所なく事業の進捗六ケ敷に付中心点を取極めありたき旨談じ置く、5時帰宅

27日　今幡を呼び大夕張予算調製等のことを談ず

10月

27日　11時過ぎより出社、岩井興助出社初めて面会せり

12月

9日　11時より出社、大夕張より帰京の横山熊太郎来社、工事（鉄道の）の工程降雪の模様を聞き遂道煉瓦石巻並切拡は降雪中も進行することとなし、軌條敷設は4月より着手のことに定む

14日　正午前より出社。3時より銀座高田商会に立ち寄りバキュームクリーナー購入

15日　茨城無煙炭鉱にては去る10月2日坑内エンドレ

ス機　竪坑捲機械　撰炭機一斉に運転を試みたるに成績良好の旨話あり

31日　本日大夕張炭山より二万五千円機械代として受け取りの筈なりしも　先方の不信実のため請取りできず　手違いの来るのみならず大夕張炭山経営の前途危ぶむ事となりたるにより　昨今両日　今幡厳談し置きけり

明治44年

3月

27日　橋本増次郎来社　広尾吉田地所内に同人発起の自働車製作所建築の筈にて実地見分の為め同人同道広尾に至る

4月

10日　橋本増次郎来社　共に広尾吉田地所に至り同人に貸与の地所割りをなし六時過帰宅

13日　門司中沢より三菱譲渡の件決定　芳谷炭坑190万円で授受の旨電話あり

26日　芳谷鉱区　本日移転登録済の旨報知あり　大夕張専用鉄道本日山元まで到達せる旨報知あり

29日　芳谷木村より　本日芳谷坑場引渡終了の旨電報あり。今朝三菱より百万円受取る

5月

1日　三菱より50万円受領

6月

5日　会社名を竹内鉱業㈱と改め　本日より新社名を掲ぐ

7日　中村康之助の紹介にて田村清七(東京高工応用化学卒業生にて米国に渡航高峰博士につき研究せる者)も来る　横浜太田醤油造改良設計を手伝い貰う事とせり

8日　早稲田大学恩賜記念館等見分

14日　茅ケ崎に至る　先年買入れたる海岸の地所(約二千坪あり別荘地なり)見分

18日　茅ケ崎更に千坪買い入れ二千六百円

7月

31日　手島精一氏は依頼しある高知工業学校長の件にて来社

8月

17日　中村康之助を呼び高知工業学校(自分設立の積り)幹事教頭のことにつき手嶋氏に伝言の件を談じおく

21日　敷地選定のため中村を派遣

10月

8日　本郷　西片町に手島精一氏を訪う　夜中村康之助を呼び手島氏の末女と岩村道世縁談の事を談ず

19日　町田旦龍来社　帰途片町に至り立ち寄る岩村通俊氏在り

11月

8日　高知工業学校教頭に手嶋氏より推薦の吉崎七次郎を中村康之助同道来社

10日　吉崎七次郎来社（11日も同じ）

20日　四時高坂丸（大阪）にて出港　吉崎七次郎九時過ぎ神戸より乗船す

21日　午後一時高知桟橋着　城西館投宿　織田　森沢町田来迎共に旅宿に来り　昼食後工業学校敷地選定のため師範校、第二中学校前通過久万に至り農林学校前自分所有地見分　更に旭に至り夕前帰宿　織田と夕食を共にす　夜に入り森沢来会

22日　十時前より本与力町山本繁馬方に至り　夫より升形織田を訪い同家にて昼食　三時過ぎより町田に至り五時前帰宿　夜織田、森沢、上村、浜田来訪

23日　山本家墓参のため岩村に至り午後二時前帰宿　森沢、町田来宿しあり吉崎と工業学校校舎増築等のこと協議　夕森沢と晩食を共にす織田も来会

24日　午前織田老母　岩松昌来宿　正午吉崎神戸出発　正午過ぎ町田来宿　一時より同道市役所に至り市長藤崎に面談　同人の案内にて県庁に知事を訪問す　夫より町田と共に高知城祉の公園に登り転じて電車下の新地に至り更に五台山公園散歩　昏頃町田に立寄り晩食を共にし九時半帰宿

25日　午前織田親子、町田旦龍、森沢来る。正午森沢同道旅宿を出て滋賀丸乗船、一時半解纜　織田夫妻、町田来送

12月

15日　夜中村康之助来宅　早稲田大学理工科学生の牧野　西岡　中村等高等工業学校出身者に関する不平の始末終了せる旨話あり。夜十一時高知織田より老母急病にて死去の旨電報あり。

明治45年

1月

8日　大人ら発起の製糖会社製糖機械売込の件にて岡本良太郎来社

10日　岡本良太郎　砂糖製造機械技師オランダ人ガスペル同伴来社

11日　吉崎七次郎神戸より昨日上京の趣を以て来社、夕方より多士郎、宗城兄弟来る

22日　高田早苗、吉崎七次郎、森澤菊吾、内藤友衛来社

2月

2日　吉崎、森澤、中村と高知工業学校の事協議

10日　中村、森澤、吉崎来り、高知工業学校設立に関する事項協定終了6時半帰宅

13日　唐津着(23日まで)

24日　7時56分大阪発、神戸より高坂丸乗船、町田旦龍、吉崎七次郎偶然同船せり

25日　午後1時桟橋着、城西館投宿、森澤、岩松、吉崎来り学校敷地試錐の個所見分

26日　午前一円正興外一人銅山の事にて来る。織田夫婦、吉崎、森澤、町田来る。明日より北与力町学校敷地内の家屋に仮事務所を設ける事とし、岩松、森澤、吉崎三人必要品買入に出かけたり、4時過ぎより織田、吉川同道、小高坂の織田墓地に至り電車にて伊野町に至り、7時過ぎ帰宿、織田、吉川と晩食を共にす

27日　本日より北与力町学校仮教室にて執務の事とし1時過ぎより出勤、一先づ宿に帰り6時前より織田同道得月楼にて知事、官、市吏県会議員の開催に係る歓迎会に出席、毎日多数の来客あり、一々記さず

28日　10時より出勤　5時過ぎ帰宿

29日　10時前より出勤　夕方より公園花月亭にて知事、県、官、市吏県会議員を招き開宴　11時前帰宿

3月

1日　10時より出勤、前日通り花月亭にて開宴、諸学校長、県、官実業者を招き10時帰宿

4日　10時過ぎより学校に至り、正午半滋賀丸乗船1時解纜　吉川季次郎茨城帰任のため東京まで同道

5日　7時半大阪上陸直に梅田に至り　8時半急行列車にて出発　8時半新橋着

9日　私立高知工業学校　昨日文部省より認可の指令あり

12日　10時半より手嶋精一氏を浅草蔵前高工学校に訪ね不在、日本橋丸善に至り旅行案内書を求む

15日　11時半より手嶋精一氏を高等工業学校に訪い1時出社、高知工業学校へ雇入の電気教師長岡乙次郎来社　帰途片町へ寄る

22日　午後海外旅行の為の荷造りをなす、夜大人甲子君来訪あり

23日　9時半より早稲田に至り理工科各実験室実習工場等巡見、3時前出社

手嶋氏　遠藤忠彦、岡上麟蔵、岡部正樹来社　七時前新喜楽にて開催の送別会に出席

24日　午前白石夫婦、井関圭三来宅、午後高取伊好、山本忠秀、今幡西衛来る

25日　11時過ぎ出社、高取伊好、橋本増次郎、山本幸彦来社、帰途片町立寄り暇乞いをなし、(岩村通俊男在り)6時過ぎ帰宅

夜、町田旦龍来宅、白石直治、高知郡部より立候補者の件なり

26日　大人甲子君お菊ら来宅、11時自宅を出て11時50分新橋発車し、横浜停車場楼上にて昼食の後、水上警察に至り旅行免状の点検を受け2時前上船、3時10分解纜、5時出船

28日　高知工業学校より受験者256、入学者90、4月25日開校式挙行の入電

30日　今夜限りで日本との直接無線電信の通信外に脱するを以て自宅並に高知工業学校へ電報を発す。明日よりハワイ通信区域へ入る筈

4月

4日　11時半上陸車を賃し新柳亭にて昼食、それより水族館に至りダイヤモンドヘッド一周

11日　11時サンフランシスコ上陸、水頭夫婦来迎、正午過ぎより百貨店に至り、子供に約束のリボン人形を幾代に見立貰い両人の案内にてフェリーボートで同人居住のバークレイに至り大学構内巡見、オークランドに廻り帰る

13日　午前8時シスコ発サンジョーゼ、パジャロ、サンルイス、オビスポ経由、夜9時半ロスアンゼルス着

16日　ソルトレイク市着ユタホテル投宿、食堂で小笠原伯一行と出会う
19日　今朝5時過ぎ通過せるミシシッピ河より9時過ぎ通過点までは積雲あり
定刻にシカゴ着(18日は車中)、ホテルコングレス(先年当市へ来宿泊せるAuditorium別館の改称せるものなり)に投宿
20日　午前10時半より3時間を費し先づジャクソン公園に至り、シカゴ大学(ペンシルベニア州)を経て、広い並木の大通りをリンカーン公園に出て帰宿　午後5時40分ミシガンセントラル鉄道にて発車
21日　午前6時前瀧見物に5分間停車、ナイアガラ瀑布を観る。午後2時30分オールバニ着、テンイックに投宿、今朝降霜、また途中処々残雪あり。ナイアガラ瀑布には浮氷沢山なり、山本忠興停車場に来迎、旅宿にて雑談の後晩食を共にし辞去
22日　11時よりG.E.に至り山本忠興の案内にて工場見物、市中に出て午食をなし、再び工場参観、山本不快のため残部は明日の事とす
24日　午後0時25分オールバニ発、午後8時20分モントリオール着、ウインザホテル投宿、嶋本風邪気味にて服薬
26日　8時50分発往途(D&H.R.R.)と線路を異にしRuland　R.R.を経オールバニに出て同所より山本忠興同車、夜8時半N.Y.着
27日　11時半より公園に至り動物園見物、降雨のため野球見物を止め3時過ぎ帰宿山本同行　5時前より三人同道W.125街若松にて日本食を為す
29日　10時過ぎよりHobokenに至りスチブンス技術研究所参観　2時過ぎより高田商会支店に至り三上孝司に面会、N.Y.病院に岡田陽一を見舞い
6時前帰宿、午前、午后共山本同行

5月

1日　11時半より山本同伴40番街のニューヨーク図書館参観、バッテリに至り水族館を見、それよりブルークリンサスペンション橋を徒歩で対岸に渡り直に電車に引き返し1時半帰宿、昼食の後155番街の野球場に至りニューヨークジャイアンツ対フィラデルフィアの野球を見物7時帰宿
2日　午前10時半より山本同伴三上の案内買物、山本

同伴で8時半ボストン着

3日　午前9時半よりマサチューセッツ技術研究所に至り機械、電気、鉱山部を参観、11時半帰宿、それより自動車を賃し、1時間ボストン公有地、ハーバード総合大学、ハーバード医術大学に至り、1時前帰宿2時出発8時N.Y.着

7日　10時前より東部ピッツバーグに至り、酒井安次郎の案内にてウエスチングハウス電気工場見学、夜酒井来り晩食を共にし、同人の案内にて山本同道ピッツバーグのカーネギー図書館見物

8日　8時10分ボルチモアーオハイオ線にて発車4時40分ワシントン着、6時半よりホワイトハウスよりワシントン記念碑まで散歩7時帰宿小笠原一行に会す

10日　山本忠興は今朝8時10分当地を出発、N.Y.経由、21日シアトル発の讃岐丸にて帰国の筈、1時前帰宿、竹内中佐来り共に昼食、旅宿前にて別れを告げ3時30分ユニオン停車場発車

13日　(12日キーウエスト着)午前9時45分発船5時30分ハバナ着、検疫、税関の手続きを了し、ビラニュー停車場に至り荷物を托し、10時発車(14日アンチラ着)

15日　午後1時旅宿を出て埠頭にて2時間余を費し小蒸気にて4時乗船、キングストン着港の都合にて明未明出港のこととなり停船せるをもって船中の暑気堪へ難く終夜電気扇を動し漸く就眠(16日出船　17日キングストン埠頭　19日バロン着港)

20日　午前11時25分発車午前1時前パナマ着バルバオなる運河入口ら見物　午後5時25分発汽車にて7時50分コロシリ帰着運河工事は十中八九まで峻成(21日出港　22日カータゲナ　23日プエルトコロンビア　24日同港発)

27日　午前7時スペイン港着船　埠頭から3～4マイル沖碇泊　9時半より小蒸気で上陸農業試験場植物園(世界でも有数)参観

29日　午前過ぎブリジタウン入港1時過ぎより上陸、午後4時出港

6月

6日　今朝スントミチャールズジョージ着　上陸せず

7日　数回鯨の潮を吹くを見る、一頭は船の右側より左側へ船底を潜り通過せり(或外人は船に衝突

せりと云へり）生来今日の如く鯨の遊泳するを見たることなし

8日　夜、甲板にて又舞踏あり、我々日本人には同事を何度もくり返し何が面白きやら薩張り不分明、甚だ迷惑なるが欧米人には余程面白きものと思われ連日開会せり

10日　午前4時前チャーブルク入港、7時前出港午後1時カーサンプトン着廣根市郎ロンドンより来迎、3時過ぎ同所発、5時半ロンドンウォータルー駅着、トラファルガル広場のヴィクトリヤホテル投宿、廣根は自分らの荷物の都合により別汽車にて帰着来訪7時過ぎ辞去、夜食後グリーンパークを散歩。5月7日中村康之助手紙にて高知工業学校5月4日開校式前後の景況並に亀井4月21日手紙にて雪子3月28日男子出生の事並に良三、冬子入学試験及第の旨承知せり

12日　午前10時よりウエストミンスタ寺院、博物館等を見物

15日　午前10時より英国博物館見物、一時帰宿廣根来リズーロジカル庭園並にツーサウドワックス工場見学帰途リーゼント公園付近の生稲に食事す

19日　午前10時半より自然歴史博物館、サウスケシングトンに至り1時帰宿稲垣らの案内にて羅紗を専門の問屋で見立て日本へ送付依頼す

20日　正午より科学博物館、インド博物館らを見物し午後4時ラテン系英国展示場の開館式あり自分式後直に入場恐らく日本人で先登第一なるべし

22日　10時半よりマッピン・ウェッブ、クイーンビクトリアに至り食事用箱入ナイフ一揃　ルビー、金剛石らを求めロンドンブリッジより河蒸気船でグリーンウィッシュに至り昼食、それより汽車にてチャーリングクロス駅に引返し飛行機競争見物（風船の同所に来るや1個の飛行機は1つの風船の周囲上下を飛行し、その操の自由なる殆んど鳥に異ならず）

25日　自然歴史博物館に行き鉱石の部見学

28日　現地人マーチンの案内にてグラスゴー工科大学見学

30日　午前10時過ぎよりマーチンの案内にてメーヴォアー式自働車にて造船所を望見し湖畔をドライブし5時帰宿

7月

1日　9時前よりマーバ（マーバ会社）の紹介にて旅館附近の事務所にｇｉｂｂ（10ヶ所余の炭坑を管理せる手腕家）を訪ね同人が理想とせる坑内設計図らを見10時帰宿、1時半柳田に別れを告げ発車　7時15分マンチェスターのビクトリヤ駅着投宿　グラスゴー滞在中は柳田日々午前より来宿深更まで外出の時は勿論内に在るときも終始一所にあり大いに便利を得

2日　ビクトリヤ駅を中心に鉄道地下鉄を利用し各地を4日まで訪向

5日　午前11時ビクトリヤ駅発高田商会の諸氏の来送をうけ定時2時40分パリー着、ロッテホテルに投宿、昨年11月開業せるものにて華美広大設備行届万端申し分なし、食事頗る美味パリーだけあり

6日　午前11時ホテルの自働車にて1時まで周辺を疾走一巡す。3時前より美術館見学

7日　電車汽車にて周辺見物　8日見物買物の後ナポレオン墳墓に詣ず

10日　8時40分河汽船にてケルン発沿岸の勝景観賞午後9時過マインツ着

11日　午後1時半マインツ発　3時半ハイデルベルグ着、ホテルの近くの酒場に行く同店の顧客は主に大学生にて然らずんば上流社会の人なるにより出入は頻繁なるに係らずその場所の空気如何にも清潔なり

12日　ハイデルベルグ発チューリッヒ着　13日内湖往復　ハイデルベルグ着

15日　ハイデルベルグ発ベルリン着　16日ボツダムに至る　17日ハンブルグに至る

18日　9時42分発　午後11時ロシヤ国境ワイバーレン着、自分旅行券は雑書と共に日本に送り返したること発見、旅館に引返す

20日　8時半より日本大使館に至る　未だ開館せず旅館に引返し10時過再び同館代理大使畑良太郎に面会旅行券作製の事を説し　大使館玄関番同道にてロシア領事館に赴き12時前帰宿　夜11時過フリードリッヒ駅発車　日本人数名あり

22日　午前7時頃税関の検査を受け、3時18分急行車満員のためブレストに至り4時40分モスコー行直通車に便乗、ロンドン新聞記事により天皇陛下大病のこと聞く

25日　シベリア旅行は砂塵のため非常に不愉快なりとの事にて無用の心配をなしおりしも、昨夜来湿気多く稍寒さを覚ゆる位にて頗る安気なり。夜停車中雨になる　26日ウファ通過

28日　ウラル山脈を離れたる後は一望千里際涯なき平野を横切りたるも今夕前より凸凹ある土地に達したり

29日　カンスク通過汽車の経過する所は山間なり

30日　イルクーツク・バイカルコ通過、バイカル湖畔にて複線工事のため午後4時前から7時前まで約3時間停車、線路は山間並に平野を通る

31日　午後6時過チタ通過、線路の様相昨日と同様にして平野に出るも始終両側に山脈を望見せり、チタ発行の新聞に掲載ありたる趣にて天皇陛下崩御の事を傳聞す

8月

1日　朝マンチュリ　夜ハルピン通過

2日　今朝来山脈の間を上下通行ニコルスキー通過、夜12時15分ウラジオストック着(定時より3時間余遅着)直に敦賀行汽船に乗船

5日　午前6時前敦賀着船、外村宗治郎、松本俊吉来迎、8時30分着京、大人甲子会社員、茨城社員、早稲田理工科員らの来迎を受け橋本増次郎の自働車　大人　良三　春雄同乗9時帰宅　お菊　茂　雪子来る、吉田茂、中村鹿之助は国府津まで来迎同車帰京

6日　正午前吉田雪子　午後手嶋精一氏　夜廣尾山本夫婦来宅

7日　11時より片町に至り1時前出社、茨城会社種々の事情により更に不振なるにより根本的改革を要するため、木村、二宮、関野と協議の上古館、山本、吉川に出京を命ず

8日　午前橋本増次郎来社　夜山本忠興来訪

9日　正午過出社古館、山本、吉川出京来社、夜茂雪子来宅

10日　9時半より手嶋精一氏を訪ひ、それより先日相談ありたる坑内現場員の件にて有楽町九州炭礦会社に至り、田健二郎　各務らに自分意見を陳し置く2時出社

11日　夜茂来り醤油店売却の相談あり

12日　夕前より山本忠興　中村康之助来訪　午前大人来訪あり、11時前より出社　今村角太

郎来り茂所有の太田醤油店を上郎清助、遠藤忠彦へ譲渡の件協議す。夜茂来宅、本日今村と協議の顚末を談ず

23日　夕山本忠興東京より来着(15日より唐津在)

26日　11時半より出勤、夜竹尾来話

9月

5日　亀井、菊枝、夏子を伴い11時17分唐津発

6日　夜8時25分新橋着直に帰宅、伊藤幹一茨城会社重役辞職の件にて大人(甲子君同伴)来宅あり、強一郎高等学校入学のため夜仙台へ出発

8日　午前茂夫婦茅ヶ崎に帰る

9日　夜中村康之助来宅身上の事相談す

10日　今村角太郎醤油店売却の件にて来社、吉田手取り11万円にて売却の事とす。吉川季次郎茨城の今回の不始末につき責を負い辞職すべき旨話し置り。

13日　大葬当日に付拝送のため11時半より早大に至り学生と共に二重橋に至る

18日　中村康之助早大退身の事相談あり

20日　11時より出社、高田早苗(中村康之助の件)来社

21日　1時前出社、牧野賢吾、長岡乙次郎も来る、長岡は一年間余山本忠興指導の下に早大にあり て、唐津鉄工所において製造すべき電気機械設計に従事する筈

24日　中村康之助　鉄工所の販売主任担当の事とし当分早大関係あるにより午後出社にて今日より勤務

25日　茨城会社に至り重役会に出席

26日　唐津鉄工所の矢野政義上京出社、長岡と共に山本の下に在りて電気機械設計の筈なり

10月

14日　多士郎家内岩村高俊の末女貰受けの事にてお菊来宅、お清叔母も来る

20日　3時前より池の端に至り拓殖博覧会見物5時より上野精養軒に開催の早稲田大学温交会に出席

11月

11日　白石に立寄る　腹部に腫物出来疼痛甚だし由

16日　11時過より出社　橋本増次郎来社

28日　茨城会社臨時総会を開き伊藤幹一の後任として木村勝蔵選挙せり

12月

9日　前日12時25分新橋発　今朝7時過小松着、11時

遊泉寺着

21日　7時軽便鉄道にて遊泉寺発8時23分小松発、大阪10時15分出船

22日　10時高知上陸、午後1時学校に至り夕前帰宿、吉崎、森沢、織田と夕食　吉川季次郎も来る

24日　午前吉崎来り11時より学校に至る。生徒を集め2・3の注意事項を話しおく　午後商業学校に横山を訪う不在町田に至る。岡上麟蔵今朝到着しおり学校まで同行、2時過より中村、吉崎、赤沢を伴い徒歩五台山に至り帰途電車にて帰宿

25日　11時半より中村同伴県庁に植木事務官を訪ひ学校に至る。午後織田も来会、来年度建築前後の事協議

26日　午前横山又吉来訪、1時30分出船織田、町田中野学校職員ら来送

27日　午前7時大阪上陸、11時41分梅田発　28日午後3時唐津着鉄工所に至り6時自宅に入る。夜竹尾、嶋本来宅

大正2年

1月

1日　(唐津)終日在宅、社員数多く来て庭球をなす。夜、田中、林、竹尾と食事を共にする。

10日　(8日唐津発)　大阪駅に遠藤、石川(石川は今朝大阪着今夜遊泉寺帰任のはず)来る。同所より米原まで松本、高西同車(高西は遊泉寺見物のためなり)午後8時25分新橋着(岡本、高木来迎)

27日　古館を伴い、11時半より石岡坑磯原を巡視5時半帰宿(24日より磯原在)

30日　午前岡上麟蔵来宿。正午前事務所を辞し、1時17分磯原発　7時5分上野着帰宅。夜、白石直治来宅

2月

21日　午後零時25分新橋発車。

22日　10時20分遊泉寺着。(28日まで)

3月

1日　6時唐津駅下車嶋本、藤野来迎(19日まで)

20日　大阪停車場へ後藤、遠藤、京都より米原まで中沢同車夜8時25分新橋着

23日　午後白石より相談ありたる土陽新聞出資の件にて福留久米夫来る
24日　岡部正樹土陽新聞輪転印刷機の事にて同製作人石川角蔵来社
28日　11時前より大学病院青山内科に山本幸彦を見舞う

4月

11日　8時上野発2時磯原着(18日帰京)
21日　手嶋精一(遠藤政直身上の件)、山本久米太郎(亜鉛精練の件)にて来社
26日　第一銀行の依頼により、奔前および奈井江両炭坑調査のため上野出発、第一銀行の青木惣吉来送

5月

2日　前日函館発、本日午後2時上野着
8日　大学病院青山内科に入院中の山本幸彦本人の希望にて昨日退院帰宅の由
11日　8時上野発国光同行10時前牛久下車、開墾場所建築家屋等巡視、5時上野着、6時半帰宅
16日　昨日新橋発　今朝7時過ぎ小松下車徒歩10時前着山、午前、午後両度構内巡視
23日　昨日小松発　今朝唐津着、嶋奔、藤野、東京の高木、大阪の遠藤(両人とも昨夜着)

6月

7日　昨日昼前唐津発　今夜8時25分新橋着
19日　早稲田大学に至り理工科付属工場の事、高田、中村、山本忠興と協議
23日　星野　橋本増次郎来社　橋本に機械販売材料買入事務に関係の事　茨城遊泉寺等の技術顧問新設計画ある早稲田理工科付属工場担任の事相談

7月

26日　(24日新橋発)冨山にて昼食　6時46分小松下車軽便鉄道にて八時前着山

8月

4日　(一昨日小松発)午後3時西唐津駅着鉄工所に至り6時自宅に入る
19日　唐津より150キロ発電機茨城へ発送

9月

3日　(昨日唐津発)大坂停車場に松本俊吉、高西淑次、大阪店の遠藤、後藤来る。同所より京都まで中沢同車、夜8時25分新橋着

25日　午前8時上野発　2時前磯原下車、古館同伴3時半事務所着

10月

3日　磯原発　午後7時半宇都宮下車停車場前白木屋投宿

4日　9時前発　正午篠井着　鉱山見分七時半帰宿

5日　9時40分宇都宮発　赤羽池袋にて転乗　1時半渋谷下車帰宅

18日　篠井鉱山株主高山来社　同山採鉱契約は解約の事となす

27日　橋本増次郎来社、橋本は自分用新製自働車に試乗し来る

11月

4日　二時前より新製の自働車にて橋本増次郎同乗出社。柳田友麿茨城第三坑開削設計の件にて帰京

出社　岩井興助同伴四時上野発（遊泉寺18日まで）

23日　大人は早朝上総鉄道開業式参列のため出発

12月

15日　8時上野発　2時前磯原下車事務所へ（21日帰京）

28日　前日午前8時半新橋発、今夜9時唐津着竹尾、嶋本、藤野等来迎

大正3年

1月

15日　昨日唐津発　今夜新橋着

21日　橋本増次郎来社、唐津鉄工所にて自動車の原動機並車台製造の事相談出京

2月

5日　山本忠興を呼び中村と共に牧野賢吾病気静養の事を談ず、岡部を呼び茨城炭販売の事で相談、木村は明日茨城出張のはず

8日　牛込喜久井町に牧野賢吾を見舞い、一、二年間鎌倉へ転住の事を勧め置く

16日　磯原へ（23日まで）

3月

6日　橋本増次郎、佐藤功一（大正博覧会の件）来社

9日　東京銀行支配人（安東十郎）九州五嶋炭田調査依頼の為来社、木村は明朝茨城へ出張のはず

18日　新橋発　唐津へ

4月

3日　唐津発　4日神戸にて滋賀丸乗船十時半出港
5日　十一時前入港、織田夫婦工業学校吉崎、森沢ら他の職員来迎　亀井夏子、山本基　同伴岩村に至り　自分は城西館投宿。織田、吉崎、森沢と昼食を共にし、吉崎、森沢同伴工業学校に至り6時帰宿。吉崎、森沢と夜食を共にす織田夫婦も来会
10日　山本忠秀、町田旦龍、徳永秀実来訪、11時前より学校に至り正午前帰宿、12時20分城西館を出て高神丸乗船1時解纜、織田夫婦、徳永夫婦、森沢夫婦、町田、山本、岩松、吉崎来送(11日新橋着)
16日　午後梅津寿門来社、今午後出発高知工業学校帰任のはず、遊泉寺銅山、田村、松岡、今午前着京の趣にて来社、木村明日茨城出張のはず

5月

21日　上野発　22日小松下車軽便線にて事務所着
24日　昭憲皇太后葬儀に付夜八時小学校にて遙拝式あり
28日　小松発　29日京都下車桃山御陵参拝同発　5月30日西唐津着

6月

4日　高取伊好を訪問、柳田杵嶋炭坑関係の事相談あり、1時前出社、柳田は明朝出発遊泉寺経由茨城へ帰任のはずにて辞去(6時過ぎ帰宅)夜、竹尾、山田、三輪と食事
11日　唐津発　12日大阪、京都にて遠藤、後藤、外村、松本等と会し新橋着
13日　古館九一茨城より上京、杵嶋炭坑柳田関係の件なり、高知工業学校の吉崎七次郎も来る

7月

4日　山本忠興、佐藤功一、小池佐太郎と食事と共に早稲田大学理工科教授方法を談す
21日　橋本増次郎(飛行機発動機の件)来社
26日　強一郎、良三、京城へ出発、同所仁川見物の上、唐津に滞在のはず
28日　岡部正樹、今幡西衛、伊藤幹一来社　茨城両会社合併の件、先方より条件外に重役2名増加の希望ありたるにより当分中止の事なり
29日　上野発　30日小松下車銅山着

8月

6日　小松発　7日西唐津着。車中にて名古屋より唐

津に向う山本忠興に会す
10日　佐世保鎮守府より電令に依り竹尾明日同所へ行く、高知工業学校の吉崎昨日来着、本日より鉄工所に実習従事
12日　山本忠興、今朝出発帰京、2時前より竹尾佐世保より帰唐、用事は砲弾製造の相談なり（高知工業学校の吉崎、森沢、嶋田は実習のため唐津にくる）
13日　実習中の高知工業学校の嶋田帰任
21日　高知工業学校の吉崎、森沢出発

9月

1日　唐津発　2日大阪を経て江尻下車乗船
3日　横浜埠頭着　7時10分新橋着。11時より出社
23日　橋本増次郎同人製造の自働車に同乗し5時前帰宅

10月

15日　小池佐太郎は茨城会社坑内顧問として月1回の出張、上野発小松へ（10月24日まで）
28日　牛久農場、山本忠興、岡部正樹、松本俊吉3人にて買入の筈なる10町歩の土地見分

11月

13日　午前7時45分急行列車にて新橋発　14日4時30分西唐津下車、鉄工所から6時自宅へ
22日　正午前唐津発、嶋本等送り来る、松本大阪まで同車、坂田、柳田も筋原まで同乗、サミュール商会のタムソンも門司まで同乗
23日　午前8時過大阪にて松本下車、遠藤来会、京都にて中沢面談、11時米原で転車し午後6時小松下車7時遊泉寺着　渋谷並に富山より来会の奥易蔵と話す
28日　午前11時上野着出社、4時帰宅

12月

8日　高知工業学校採用のはずなる豊田来社、面談したき旨電話あり2時過ぎより、岩村通俊氏を訪ね、七男九八身上依頼あり
16日　上野発　磯原下車（12月21日まで）
28日　8時東京駅発　29日夜7時唐津駅下車、竹尾、嶋本来迎

大正4年

1月

2日　柳田友麿は杵嶋より　坂田厚民は東京より来る

夜竹尾、嶋本、林、近藤、田中、鈴木来たり西洋骨牌を弄し夜を徹す

11日　11時56分唐津駅発　夜7時10分下関発　門司駅にて白石直治と会う

12日　8時20分大阪駅下車、遊泉寺より松本、大阪店の遠藤の案内で自働車で築港より住吉を経て大阪城前に出て梅田駅に至る（その間2時間）昼食　2時11分発　4時過ぎに京都下車にて中沢方に至る外村と会見食事　夜8時25分発直接帰京

3月13日9時40分東京駅着

24日　白石、山本忠秀、今幡西衛来宅、3月の総選挙を土佐にて自分競争のこと相談あり

2月

4日　午前8時東京発、夜9時過ぎ神戸にて滋賀丸乗船、中村康之助同行

5日　午後学校へ。6日午後得月楼中店にて工業学校職員一同と会食

8日　横山又吉を商業学校に訪ひ工業学校に至る

9日　宮林前竹、幡多より来訪。家政上の事相談あり、吉川、吉崎、森沢、岩松、正午前より埠頭に至り正一時出船。中村同乗、町田、織田夫婦、山本忠秀、岡崎賢次等来送

10日　午前7時大阪上陸、8時28分梅田駅発車、米原にて転車6時過ぎ小松下車7時過ぎ着山

17日　11時過ぎ上野着、夜、今幡西衛来宅、明朝高知へ出発の由

18日　橋本増次郎来社　自働工場拡張の相談あり

20日　今朝、岩村通俊君危篤の報あり同家に赴く六時廿分死亡の由

24日　町田旦龍来社　高知県より衆議院候補者たる事の来談あり

3月

4日　夜今幡岡上来宅　岡上は明朝高知行の筈

13日　東京駅発　神戸にて滋賀丸十時出港岡上麟蔵随行　今幡西衛高知迄同行

14日　午前十時半高知上陸　白石宅に投す　午後一時町田宅にて土佐郡有志に会し支部に至る

15日　高知　和喰（談話）　安芸　奈半利（談話）、安芸より同行の畠中卓翁は立派なる紳士なり

16日　奈半利　室戸（談話）　安芸　井ノ口（談話）安芸、室戸にて久振りにて桧垣真枝に面会

17日　安芸　安田（談話）　安芸　後免より電車　高知

久礼
18日　久礼　入野（談話）　中村（談話）、町田旦龍、坂本志魯雄に面談
19日　宿毛より出迎の十数名加はり一行二十余輛の人力車連ねる。中村　有岡（談話）　宿毛　押川、お清方投宿。
20日　正治方並伯父別荘、林有造氏宅　城山墓参　伊賀邸挨拶　自分邸見分　夜談話（3・21～22日記欠落）
23日　林宅―城辺（人力車）柏（徒歩）山麓（馬車）岩松。
24日　岩松―宇和島発船（25日船中）
26日　大阪安治川上陸。大阪発　東京駅着。
27日　夜電話にて自分得票二〇八七点にて当選の旨通知あり

4月

8日　東京駅発　唐津へ
17日　竹尾同伴で唐津を発つ
18日　大阪駅にて遠藤、京都駅にて中沢、外村に面会。汽車に高知から帰京の山本忠秀、今幡西衛に会う。小松5時、6時遊泉寺着

5月

1日　牛久にて新たに買入れたる地所（24町歩余り）の分配の談、坂田は明朝杵嶋出発のはず
4日　板垣翁を芝山内に訪いお礼
9日　父君、喜字寿宴の為、午後1時より自邸に園遊会開催、親族自社の社員および父君の最親友、板垣伯、尾崎三郎等20数人を呼ぶ

6月

5日　登院帰途、原田十衛同道、中江兆民埋骨所に標石建設の為、青山一丁目の石屋を伴い実地見分
9日　登院、議長不信任決議案の提出あり、連日の大混乱嘆かわし
20日　唐津下車、自宅に入る
29日　正午前唐津駅出発（嶋本、吉岡、高明）来送
30日　大阪駅に大阪店の遠藤、後藤、来会、米原にて転車　5時小松下車、6時銅山着、製錬所鉄骨家屋は九分通立つ（7月5日まで）

7月

15日　上野発牛久農場に至り、石河住宅建築1坪35円にて10月末落成の事として請負約束の事を国光に談じ置き6時15分上野着、帰宅
27日　今村角太郎、橋本増次郎、和田瑞来社、土陽新

聞支局に至り、土佐に鉄道敷設の陳情委員として出席せる有志者7名に面会す

8月

4日　東京から唐津へ　途中佐賀駅にて高知工業学校吉崎七次郎実習の為、唐津鉄工所に行くところ会う

7日　森沢菊吾着唐工場にて面会

22日　工業学校吉崎、森沢来話。吉崎は明後朝出発の由

28日　森沢午後高知へ帰任

9月

3日　昨日唐津を発ち、本日大阪店の遠藤、後藤と来会、子供3人(芳子、梅子、夏子)は東京へ直行、自分は米原転車にて北薩線に転乗し5時小松下車6時銅山着、夜は岩井、森、来談

8日　遊泉寺発2時小松を出て夜8時40分直江津にて転乗（9月9日上野着）

10月

4日　坂田は杵島炭販売用にして、今夕発敦賀より浦塩斯徳へ渡航のはず

19日　東京駅発　唐津へ

22日　坂田厚民来所、来27日香港新嘉披へ出発の由

30日　唐津発　遊泉寺へ（11月4日帰京）

11月

8日　即位式参列の為、京都へ行く、続いて11月12日神戸へ出て琉球丸で高知へ発つ

13日　午前10時高知桟橋上陸。織田夫婦、町田旦龍、学校の赤崎、森沢多数の来迎、城西館投宿、工業学校に至り教職員と面会、校内一巡、学校にて製作の原動機を据付けたる謁艇にて下新地に下り桟橋に至り同所より帰宿。夜森沢、吉崎と食事織田も来る学校のこと相談吉川季次郎来る

14日　畠中卓翁、町田旦龍等多数来訪、11時より工業学校に至り、午後町田来り土陽新聞の件相談

15日　3時琉球丸にて出港、織田夫婦、町田、畠中、辻、吉崎、森沢等多数来送

18日　京都駅より東京へ　19日東京駅着

28日　(昨日午後磯原着)第2坑に至昼食、神田一行加わる。第3坑に至り、そこより軽便線予測地見分。中郷駅に出て工場予定地見分　30日牛久

12月1日帰京

12月
13日　橋本増次郎を呼び小松鉄工所主任として就任の事を相談す
15日　外村宗治郎来社　遊泉寺銅山譲受の事を決定す

大正5年

2月
1日　(登院)佛学塾同窓会に出席
9日　露国機械工業界事情調査のため山下派遣の事とす
16日　午前和田英作来宅早稲田大学依嘱の自分肖像の描写を始む
21日　牧野伸顕と共に道玄坂に吉田茂宅地として買入れの筈なる土地を見分

3月
7日　午前10時45分上野発　4時磯原着
12日　昨日磯原発牛久着　今朝国光同道同人宅を出て澱粉製造所を同人宅より東南に当る傾斜地に選定し　開墾中なる山本忠興所有地一巡石河叔母を訪ひ松本宅に至る　一時二十分牛久発　三時十五分上野帰着
16日　午前坂本志魯雄　下司寅吉来宅　土佐山田停車場の件なり　日高行夫(高知工業学校へ採用の東京高工機械科卒業)来社
29日　竹尾と新造自働艇に試乗す(22日～30日唐津在)
31日　午前八時二十分大阪下車　今朝来阪の高知工業学校村井義孝も来り食事をともにす(滋賀丸四時過出港)

4月
1日　十時半桟橋着船　工業学校・政友会諸氏来迎、城西館投宿、山本忠興、中村康之助は一昨日東京より来着滞在しあり
2日　午前畠中卓翁、町田旦龍諸氏来訪、十一時過より学校に至り畠中、横田正喜(第二中学校校長)石丸土陽新聞記者に面会
4日　帰途中村、吉崎、森沢、豊田、田澤、潮江天満宮並に野中兼山の墳墓に至り六時過帰宿
5日　午前多田素　山本忠秀来訪　一時過より久家、織田両家を訪ひ学校に至り六時過帰宿　山本忠興は遊泉寺へ出発
6日　午前清水源井来話　十時過より学校に至り三時乗船　中村同伴　日高来着
遊泉寺銅山着

12日　十一時より小松に至り工場予定地見る
14日　小松発（15日東京駅着）
24日　山本忠興　中村と三人協議の末高知工業学校に採鉱冶金科を設け中学卒業以上の者を採り別科として来六月より開設の事に取極む
26日　高知工業学校へ採用の筈なる早大理工学部採鉱冶金科学生中野争鹿来り面会　坂本志魯雄、岡本宗三、橋本増次郎来社。橋本は小松鉄工所設立のため来月三日阿波丸に乗船N.Y.へ派遣の筈
29日　下関着笠戸丸で出船

5月

2日　基隆発台北着民政部挨拶後共進会第一会場見分
4日　台中着　官民歓迎会に出席
6日　台北出航
9日　門司投錨、下関発
10日　大阪―小松―遊泉寺
23日　銅山発小松事務所にて加州銀行常務取締役中司文次郎（高知人）に面会　栗津駅迄同車
24日　東京駅着　直に出社後帰宅　押川お清（従妹）一昨日福岡県某病院にて死去の由

6月

16日　唐津着（15日東京駅発、24日まで滞在）
25日　小松下車工場整地埋立の状況見分銅山着

7月

6日　東京着（5日銅山発）
27日　上野発盤越線廻り　28日新津転車　小松下車銅山着

8月

2日　唐津着（1日小松発）
15日　水野吉太郎（土陽新聞の件にて昨夕着）来宅
16日　夜別府温泉より今夕着唐の町田旦龍並に水野来訪土陽新聞の事協議両人は明午前出発の筈
23日　十三日米国より帰国の橋本増次郎小松経由当地（唐津）へ着
29日　（28日唐津発）米原にて北陸線に転乗小松下車工場敷地一巡後銅山着

9月

4日　小松発　5日東京駅着直に出社
6日　橋本は小松鉄工所長たる事決定せり　白石に至り中野寅二郎来会土陽新聞等のこと協議
13日　上野発磯原へ（17日まで）
20日　上野発若松着　猪苗代水電会社発電所等見学

23日帰京
25日　広尾山本忠秀宅にて水野吉太郎、坂本志魯雄来会土陽新聞の件協議

10月

2日　土陽新聞の件で町田旦龍来社　三時より早稲田大学理工科創業に関し自分に功労ありと表彰式あり　二時過より松本、岡本同伴同所に至り列席　挨拶を為し後築地精養軒の招宴に列す
4日　土陽新聞の件で鬼怒川水電会社に中野寅二郎を訪問　夜中野、坂本志魯雄来宅土陽新聞は町田の手を放し他の有志にて経営の事に取極をなす
6日　支那満州旅行の為中村康之助を伴い東京駅発
7日　午前九時下関着　熊野丸乗船四時出港
9日　11時上海着　三井紡績工場見学
12日　江蘇省立第一工業学校に至り見物(南京)
16日　漢陽製鉄所見分(漢口)　夜日本人クラブに早大出身者より招待を受け七時過ぎより出席
19日　自働車にて孔子廟中央公園等見物(北京)
28日　大連入港　鉄工場見学
30日　南満洲工業学校参観、中央試験所内巡覧

11月

1日　撫順炭坑大山竪坑　sand Flushingの装置並びにモンドガス発電所見学
3日　奉天発安東県着　茂来迎共に日本領事館に至り小休後商品陳列場見分後茂と別す
4日　京城着　5日茂安東県より来着同宿
6日　釜山着　新羅丸に乗船
7日　下関着竹尾と用談　茂着京都まで同道　8日小松下車銅山着
10日　橋本同行小松に至り鉄工所並に社宅建築場見分
12日　銅山発―小松―米原　13日東京駅着直に出社
14日　立川益蔵(早大理工科卒高知工業採鉱科教師として今回採用せる者)来社　岩井は明日米国渡航に付送別会を開く
22日　吉崎校長　盛岡工業学校長橋本竹之助同伴来社
25日　上野発磯原下車(30日帰京)

12月

2日　土陽新聞の件にて中野寅次郎　水野吉太郎、坂本志魯雄来社
6日　多士郎を呼び南中郷駅三坑間軽便線に本線引込の事相談
7日　大阪港より琉球丸乗船

8日　10時前高知上陸　一時前より白石老母を見舞い工業学校に至り構内一巡　夜吉崎、森沢、長岡、嶋田と食事を共にす

10日　正午前より織田、光森氏同伴種崎町町田別邸に至り工業学校教職員も13名来会食事を共にす　六時過ぎ得月楼の政友会支部宴会に出席

11日　横山又吉を商業学校に訪い夫より工業学校に立寄る、茂は午後4時神戸へ向けて出発、森沢、中村、村井と食事を共にす

12日　来年三月卒業生徒に一場の談話を為す　夜腹痛を覚える（15日臥床）

16日　高知出港（船中宇田友四郎に会う）

17日　小松着（23日まで　24日上野着）

25日　議会開会登院　石河叔母危篤逝去

大正6年

1月

4日　今朝廣宿毛より帰京、夕牛久に赴く

7日　午前茂来宅、同人米国在勤を命ぜられる処、昨日本省通商局勤務となりたる趣なり、午後多士郎来たり2時より共々白石に至り10時過ぎ帰宅、中村寅之助来会始めて面会す

9日　松本俊吉を伴ひ午前9時30分上野発車小平鉱山行　13日磯原着　18日帰京

23日　登院後白石に至り奥田栄之進、山本悌次郎、松田源治と会合　政友会にて不信任案に反対決議を為し我々に自由行動を許さざる時は脱会の申合わせをなす　渡辺脩は会合に病気で参加せざりしも一致の行動を取る筈なるにより同志6名なり

25日　政友会本部の代議士会に出席、党議の不信任案反対に自分等同志6名は除外を求め、正午過ぎ登院議席につく寸前各団体一名の交渉委員より党議終結の勧誘を受けたるも之を排し議席に列す　不信案討議中の幹部から除外承知の旨通知あり2時35分解散の大詔あり3時過ぎ帰宅

28日　午後茂来宅4時半より築地精養軒にて山内家主催の高知県出身貴・衆両院議員の懇親会に出席

2月

5日　正午前より宇田友四郎森本眞成来社　帰途白石に寄り中野寅二郎、山本忠秀、水野吉太郎、信清権馬、坂本志魯雄も来会　四月二十日総選挙

の事を協議
6日　正午より出社　3時前より新喜楽に至り自分原田十衛幹事となり開催の佛学塾同窓会に出席
11日　茂夫婦来宅共に買入の筈なる新龍土町十二番地屋敷見分（23日三万三千円にて買入の契約をなす）今朝遊泉寺より白子谷にて雪崩のため7人死去の旨電報あり。また午後撫順大山竪坑爆発の跡点検中ガス爆発のため嶋津義正死去の旨電報着
26日　3時より富士見町教会に至り4時より植村正久氏夫婦の媒介にて麻子、工藤正平の結婚式挙行、4時半終了直ちに富士見軒にて披露宴を開く
28日　小松行の為め東京駅発

3月

5日　銅山より小松に至る　十二吋口ギャップレース並に二十吋シェーパー唐津より到着しあり
9日　小松発　10日上野着
14日　社よりの帰途白石に立ち寄り両人協議の上、政友会内の空気は所信を一貫するに適せず、両人にて候補に立つ時は郷里の政友会員中に分裂を来す恐れありと信ずるにより、今回は候補辞退の事とし6時過ぎ帰宅
21日　午前9時30分桟橋着、政友会支部諸氏の出迎をうけ城西館投宿　昼食後工業学校に至り5時前帰宿、夜、吉崎校長、森沢幹事、吉川季次郎と食事を共にす
22日　11時より工業学校に至り1時過ぎ中村、岩松、今幡、吉川と種崎千松公園に至り6時前帰宿
23日　午前9時より工業学校第1回卒業式挙行、午後生徒留送別会あり、夜公園花月楼で教職員祝宴を開く
24日　幾度固辞せるも懇請を重ねられ、事情已むなく白石と打ち合わせの上候補に立つことを承諾せり　午前白石老母を訪る、1時過ぎより工業学校に至り5時前帰宿、夜吉崎、中村、山田と食事を共にす　当地に来りたる時は毎度雑種の来客あるも今回程数多き来人ありたる事なく毎日朝より深更に至る迄忙殺せられたり
25日　高知発―杉―池田―琴平―高松（泊）　26日高松―宇野―岡山―大阪　27日東京駅着出社
29日　11時過ぎより出社、1時過ぎより白石宅に至り3時より神宮司式中村寅之助、芳子の結婚式を

挙げ3時半終了、富士見軒にて披露宴を開く

4月

4日　上野発5日銅山着　機械科卒業生二名は昨日高知より着任の由

20日　衆議院議員選挙の投票を為す

22日　4時30分高知政友会高知支部より衆議院議員に当選の旨来電あり。後伝によれば自分最高点にて次は白石、仙石、富田、石本の順序たり

23日　磯原へ（28日帰京）

5月

11日　午前東京駅発車　12日4時半唐津着鉄工所一巡

19日　唐津駅発　20日小松駅着銅山着

26日　小松発　27日上野着

6月

11日　夜上野発　12日小松下車銅山着（17日まで）

22日　午前手嶋精一氏来宅、中村康之助海外留学の事につき話あり

7月

9日　同人社の学友吾妻兵治　昨八日死去の旨報告あり

12日　2時登院、6時前より白石に至り中野寅二郎

森淳太郎、岡林起盛と会食　土陽新聞の事協議

18日　正午より出社　望月圭助、山本忠興（同人は一昨16日工学博士を授与せられたり）来社

29日　上野発　軽井沢　30日直江津―小松―銅山着

8月

1日　小松発和倉へ（8日まで滞在）

9日　銅山―小松―京都―下関

10日　4時30分唐津着　竹尾、高知工業学校吉崎、大元来話吉崎は明日長崎へ向け出発、良三は第三高等学校入学の事となりたる趣にて大に安心せり（28日まで滞在）

9月

2日　午前高等学校設置の件にて安芸氏ら来宅

3日　11時過ぎより白石　中野　仙石貢、富田幸次郎らと高等学校設置に関する件協議　3時過ぎ出社信清権馬を呼び高等学校設置については県会より何程支出できるか協議すべき旨談置く

5日　5時過ぎより築地瓢屋にて白石、仙石、富田、豊川良平、村木雅美、田所美治らと高等学校の件にて会談、11時半帰宅

6日　9時より猪苗代水力発電気会社に至り、白石、

仙石、富田　高知より出京委員中谷　安芸　信清、高原　村田等と会合、正午出社信清を呼び浦戸築港土佐鉄道の事を談じ6時帰宅

13日　11時上野発　4時半磯原下車　9月18日まで各坑を巡視（19日帰京）

10月

1日　今朝2時前後より風速42mの暴風雨測候所創設来初めての風力なりという、正午より出社町田旦龍来社

5日　大人の荷物本日新龍土町送出を始め明日大人移転の筈　8時30分橋本同伴上野発

6日　12時小松下車6時銅山着　14日まで坑内巡視

18日　上野11時5分着後直に出社　竹尾来社しあり、吉崎七次郎、岡本宗三来社

28日　築地水交社に至り戊辰殉難土佐人追悼会並高知県人懇親会に出席

31日　1時半より菊枝、夏子を伴い上野美術展覧会に至る満員にて入場できず、転じて博物館、動物園を見る

11月

15日　東京発　9時20分神戸下車10時前厦門丸にて出港

16日　午前10時過ぎ桟橋着、直に城西館に入る、来客多数3時頃より工業学校に立ち寄り、6時より得月楼開会の歓迎会に出席、昨日先着の白石も来会、8時帰宿。織田、吉崎、森沢と工業学校のこと談す

17日　11時半より工業学校に至り　3時半より公園内で開催の土陽新聞40周年祝賀に列す

18日　越智に至り製糸所を観、佐川戸波を経て高岡に至り帰宿　但し今春選挙の節世話になりたる重立たる有志並に先般死せる辻重忠、佐野伝の両家歴訪のためなり

19日　土陽新聞社、工業学校に至る（20日も工業学校訪問）

21日　9時10分伊野部同伴自働車にて高知発　越知よりは2人曳人力車にて18里、7時過ぎ久万着投宿、滞留中に毎日数十名の来客あり一々記せず

22日　午前8時45分久万発7里森松正午3分発1時過ぎ高浜着直に乗船　5時40分宇品上陸電車広嶋に至り吉川本店に小休　夜12時19分特別急行車にて発

23日　着大阪、小松下車7時過ぎ銅山着
25日　11時過ぎより伊野部同伴小松鉄工所に至る
29日　銅山発金沢駅着(泊)　30日午前5時55分金沢発
夜10時過ぎ上野着

12月

15日　午前11時上野発5時前磯原下車6時頃倶楽部着
18日　11時過ぎより先般許可のありたる石岡川水力発電所予定地見分第三坑にて昼食、それより岡本蓮沼を伴い茨城採炭会社第二坑、千代田炭坑会社第一坑、第二坑並びに露天堀りの場所見分、それより高萩高野の自社坑区を経て高萩駅に出て4時20分発同40分磯原下車6時半倶楽部帰着
19日　11時20分事務所発12時39分磯原発、6時30分上野着
25日　本日衆議院議員召集なるにより9時過ぎより登院、11時半出社、本日の茨城会社重役会に自分は本年限り同社重役辞退の事申出をなしたり
27日　午前6時の温度氷点下6度6分にて東京気象台設置以来の寒気なりと。多士良来宅明後日　米国へ出発の筈
30日　午後、高知工業学校嶋田比楽来宅

大正7年

1月

5日～15日　九州旅行　唐津、鹿児島、宮崎、大分、門司
23日　手嶋精一、一昨夜死去の趣により本郷同氏宅訪う、白石に至り、鉄道並びに高等学校問題にて上京の松尾富功祿、吉松正治等と会食
24日　徳島高知代議士と両県より上京の委員と会合土阿鉄道の事協議
26日　土佐代議士並、山田、池田間鉄道の事にて上京の松尾富功祿、和田和と協議(27日も同じ)
28日　吉田茂夫妻来宅

2月

2日　高知県議一同高等学校の件にて文相に面談
4日　土陽新聞の件にて松尾富功祿来訪
18日　石井に茨城炭坑経営上の事談し置く自分今回、取締役退任せるにより挨拶を為す
22日　自働車一台買い入れ。四千九百円也
27日　茨城炭坑の件、採炭困難な第一坑設備を第三坑と6・7月起工の第四坑に移す方針決定

3月

5日　磯原へ（9日まで）
21日　東京駅発、伊野部伴い高知へ
23日　桟橋着、学校に至り卒業式に臨む、昨日来風邪気味町田旦龍に解熱剤を貰う
26日　学校、入学志願者学術試験347名昨日風雨の為欠席28名
27日　学校、体格並口頭試験を行う入学者100名補欠4名を採用す
28日　学校、夕方鏡水楼支店に学校の教職員一同を招く
29日　学校、夕方官民有志の招待宴得月楼
30日　学校、夕方識田方に吉崎、吉川、森沢と食事
31日　吉川季次郎、柿沼知事、町田旦龍来る。町田、吉川、伊野部と五台山へ　琉球丸にて出港

4月

1日　神戸入港、伊野部は特急で帰京。高知工業学校機械科卒業生西込生章（小松鉄工所行きの者）を伴い小松着、軽便線にて銅山着
9日　金沢発高田線にて上野着。先般買入れたる自働車（一五〇八）今夕より使用せり
12日　白石、中野と来月高知開催の政友会、四国・中国大会の事協議。
17日　吉田茂来宅、満南在勤領事明後日出発赴任の筈、高知工業学校の吉岡出京来社米国留学の件

5月

4日　原敬を上野に見送る（富山、金沢経由、高知の政友会中・四国大会出張）
6日　上野発磯原、仙台、青森、秋田、山形、5／17帰京（各炭坑見分）
21日　矢野政義遊泉寺より着京。来月頃米国留学せしむる筈なり
28日　山本忠興来社　山本戦一は茨城勤務を止め当分在京　山本忠興指導の下に小松鉄工所にて製造すべき電気機械の製図に従事の事とす
30日　快進社予定地見分（武蔵野鉄道沿線）

6月

5日　上野発、磯原着（10日まで）
12日　上野発（13日小松、20日東京着）
18日　昨年一月小松鉄工所創業以来1個の機械として完成せるは今日試運転した10馬力電気喞筒（茨城注文）を第一号とする

25日　牛久農場行（度々行く）

7月

4日　中野寅二郎来宅、高知政友会支部と安芸組合内の件に付話あり

12日　磯原へ（19日まで）

24日　上野発（25日小松着、31日唐津着、8月30日帰京）

9月

4日　政友会本部にて高知県より土佐鉄道速成の事で上京の委員と面会

10日　高知県選出貴衆両院議員と上京の委員3名と会食。池田・山田間鉄道の事協議

21日　快進社土地見分　自働車工場敷地（山本忠秀も加わる）

25日　上野発小松へ（10月6日まで）

10月

8日　茨城工業学校機械科創設のため寄付募集の件来社

10日　四国政友会代議士6名と会食、四国縦貫鉄道のこと協議。琴平・山田間となし第一期に繰入れ方。四国一致にて政府へ交渉の事に決定せり

18日　快進社創業総会（鉄道協会）

30日　山本忠興来社　明夜発高知工業学校視察に出張の予定

11月

14日　東京発、高知へ

16日　桟橋着、高知工業学校へ（他に18、19、22出校）

19日　下新地高知工作所参観

20日　清水源井同伴　県営水力発電所見学（第二発電所は工事中）

21日　土陽新聞社に松尾富功祿を訪ねる

22日　高知港発　23日小松着（30日まで）

12月

16日　磯原着（21日帰京）

25日　衆議院開会

大正8年

1月

6日　山本忠興、高知工業学校化学実験室建築の件で来る（他に度々来訪あり）

唐津へ（11日まで）

12日　小松着（20日帰京）

21日　登院（鉄道敷設法改正委員）

24日　高知高等学校設置の件　細川義昌、信清権馬来宅
25日　多田素、山本忠興来社、高知工業学校経営の事相談

2月

10日　鉄道の件で出京の町田旦龍、谷昭、並に信清権馬、中野寅次郎、土陽新聞社の小原、田村、樋口と会食
17日　白石遂に死去　21日告別式青山墓地埋葬
22日　白石の補欠選挙の件、中野寅次郎、松尾富功禄、橋田早苗、吉本重郷、信清権馬、鎌田と会合

3月

6日　橋本同道、東長崎に建築中の快進社工場に至る
9日　佛学塾同窓会に列す
13日　東京発　14日神戸、宇和島丸乗船
16日　片島(宿毛)上陸―中村選挙事務所―入野―竹嶋―中村
17日押川　18日小筑紫―押川　19日宿毛　20日錦―小深浦―大深浦―押川　21日中村―下田港発船
22日　高知桟橋―学校―建設中の高知停車場見分―延命軒泊
23日　学校第3回卒業式臨席　24日25日学校へ
26日　学校：入学試験志願者305名　27日学校　105名採用、28日学校
29日　学校―滋賀丸　伊野部利吉同行
30日　神戸―芦原　開花亭支店投宿　31日小松―銅山

4月

6日　上野着
14日　高知補欠選挙の慰労会開催、原総裁他政友会員招待
17日　上野発　南中郷　19日高萩(松原炭坑)―磯原
23日　上野着　新築快進社工場　本日より電力開通、機械運転を始める
29日　山本忠興来社、来月2日頃高知工業学校へ出張の予定
30日　新任の阿部高知県知事来宅

5月

1日　政友会本部で中野寅次郎と上京の宮地元治と憲法発布記念に当り幸徳秋水遺族宛の高知支部より頌徳状を発したる件に付善後処分法相談
2日　強一郎米国留学　明後日出発

4日　生徒50余名を伴い今朝着の高知工業学校の大元政一郎、門田盛衛、田中正利、生徒総代3名来宅　笹岡熊之助(高知県須崎町)浜口勇吉来宅

5日　宮地元治　昨朝発病中風の模様なりとの事に付き浅清館に至る

13日　東京駅発　14日唐津着、高知製作所の和田義公来着

19日　唐津発和田同車　20日小松着、和田同道、26日芦原、27日名古屋　28日東京駅着

6月

18日　上野発―磯原(23日まで)

20日　宿毛に病院設立の事にて三好亀吉来山

30日　本山白雲、若原　久来社

7月

10日　上野発、11日小松着、21日小松発、22日上野着

8月

1日　東京駅発　2日唐津着、29日唐津発、30日小松下車銅山着、9月7日小松発、8日上野着

10月

4日　上野発―南中郷　10日上野着

24日　東京駅発　25日大阪港発(琉球丸)26日高知入港　城西館

27日　学校(28、29、11／1も出校)

30日　県営水電の清水源井の案内にて穂岐山発電所夜、立川、土陽新聞の宇田友猪と食事

31日　岩井並に学校職員と舟遊・投網を観る

11月

2日　高知出発、3日小松下車、銅山着

11日　金沢発、上野着

27日　東京駅発(高知行)

30日　政友会本部より中村村に開会の大会に出張の筈なりし中橋　山本(悌)は東京高工学校の昇格運動突発の為め不能となりたり

12月

1日　多田氏―学校―阿部知事(幡多出張で不在)

2日　滋賀丸にて高知発

3日　小松下車、銅山着(12／9まで)

10日　上野着、森淳太郎土陽新聞の件にて来宅

17日　上野発南中郷下車

18日　磯原―高萩、20日上野着

24日　議会召集

大正9年

2月

26日　10時半より登院5時10分解散となり6時前帰宅

3月

25日　(23日東京発)8時前高知着9時前城西館に入る、1時頃より工業学校にいたり5時過ぎ帰宅。小田、嶋田と食事を共にす

26日　入学試験日なるにより10時前より出校5時前帰宿、村井、山田と食事を共にする

27日　11時過ぎ学校へ、6時過ぎ帰宅、吉崎、森澤と食事を共にす。

29日　11時過ぎより多田氏方に至り織田と3人にて学校のこと協議。一旦帰宿、1時過ぎより県営水電清水源井の招待にて花月に至り町田旦龍、山本忠秀と食事を共にし2時半出校幡多郡出身県会議員その他10名余来校、立候補の勧誘を受く

31日　2時半厦門丸にて高知出港、滞在中例の如く毎日多数の来客ありたるも記さず

4月

1日　4時半神戸着6時過ぎ三宮発車4時半小松下車7時過ぎ小松発銅山着(8日まで)

12日　諸物価暴騰につき意見交換を求められる

13日　正午半出社。高知県幡多郡々営水力電気の件4時半より林有造氏を訪、病気にて面会できず5時半帰宅。

15日　森淳太郎、岡田栄、幡多郡より立候補勧誘のため来社

18日　大人来訪(終日在宅)

20日　中野寅次郎来宅。高岡郡より立候補の勧誘の為なり辞退す

23日　林有造大病にて昨日大学病院に入院の電話あり見看(以後毎日のように見舞う)

5月

4日　今朝高知町田より至急電(立候補要請)

5日　午前　修学旅行のため上京の高知工業学校教員中村、松本、安並、並びに各科生徒総代3名来宅

10日　衆議院議員投票を為す

12日　(11日東京発)佐賀までの汽車中で12～3才頃大阪北浜付近の学校時代の旧友井田に会う　唐津着

13日　代議士当選の電報に接す　14日挨拶の電報手紙を発送
15日　唐津発、16日小松着
21日　銅価回復の見込み立たざるを以て今後の経営の事協議
24日　上野着　今幡来社幡多郡選挙の様子を聞く
25日　町田旦龍来社(28日も)
27日　牛久農場技手に予定の高等農林学校卒業生川村和嘉治(過日、自宅に寄食しあり)同伴し、牛久農場へ(川村和嘉治の事は大正12年2月まで度々出てくる)

6月

3日　南中郷へ(6日磯原発帰京)
16日　豊川良平告別式参列
28日　快進社総会
29日　議会開会
30日　6時過ぎより日比谷公園内松本楼にて高知県政友会五代議士主人となり高知県有志者と会食

7月

7日　議院内にて政友会政務調査会、11時より東京駅ホテルで土陽新聞並、高知県出身代議士主人役となり土佐青年観光団招待会あり

8月

24日　中野寅次郎、高知県水害の件にて来る

9月

1日　宿毛水害の詳細を山本光男より聞く未曾有の天災なり(2日幡多郡出身十数名と協議、4日内務省に相談、18日阿部知事と協議)
7日　上野発南中郷へ　12日帰京
29日　上野発金沢着　30日小松―銅山　10月6日帰京

10月

15日　板倉鋭丸(織田信福の義弟)来社。中村、宿毛間鉄道線路測量の為明日出発の筈
23日　東京駅発　24日唐津着、26日唐津発
27日　大阪より廈門丸2時半出港
28日　7時半高知上陸、城西館に入る。眼疾診療のため10時より町田旦龍にいたる。正午半高知工業学校に至り3時過ぎ帰宿後、吉崎、中村と食事を共にす。
29日　11時半より町田で眼の手当て、山本忠秀も来会3人にて用談　1時高知工業学校に至り3時頃帰宿

30日　正午町田にて診療、山本と3人にて水電舎内の件等協議、1時学校に至り4時帰宿　川村和嘉治学校にて面談
31日　織田、河村来たり用談、11時半町田にて眼の診療

11月

1日　午後、網船2船を雇ひ舟遊び、同行者多田素、織田、吉崎、山下、村井、島田、中村、吉川の8名。織田と会食
2日　正午町田で診療、直ちに出校、吉崎、森澤菊吾と会食
3日　正午過ぎ、学校に至り5時帰宿、村井、橋田早苗と会食
4日　正午、学校に至り　門丸にて2時半出発　町田旦龍同船で大阪より九州福岡へ、滞在中毎日多数来客ありたるも記さず。高知にて従来人力車を使用せざりしも眼疾と暖気のため始終車で往来せり（5日帰京）
12日　遠藤良弼を呼び吉田茂の広尾地所売却並金融の事に付文通の事依託

12月

14日　南中郷へ18日帰京
23日　快進社株主総会出席

大正10年

1月

22日　幡多水害復旧費の件、政友会関係者を招き会食同席者土佐政友会代議士、中野、町田、阿部知事其他なり
24日　貴族院加藤氏の質問は実に重きたるものにて議員生活中始めてのものなり　西比利亜撤兵に関する意見自分の所思と一致し快心の至りなり
25日　大日本炭鉱会社の一部なる無煙炭の諸坑と茨城無煙炭坑と合同の件を山本栄太郎氏と話す
29日　吉田茂の5分利公債3100円預かる

2月

7日　吉田の3100円は清遠に渡しておく　山田耕（高知工業山田直の弟）来社

3月

29日　大阪出港（琉球丸）
30日　午前8時過ぎ高知上陸城西館投宿　午後学校に至る　入学試験を行う受験者370余名なり

夜は織田、吉崎、村井と食事す

31日　県庁内務部訪ひ学校に至る、試験終了93名採用、補欠6名を採る、多田、中村、松本と食事を共にす。

4月

1日　正午学校に至り5時帰宿、2日11時過ぎ学校に至り4時過ぎ帰宿。

4日　高知発村井同伴須崎に至る、港内巡視案内をうけ9時過ぎ帰宿

5日　正午より学校に至り6時過ぎ帰宿　織田と食事を共にする。

6日　1時半学校に至り2時45分廈門丸にて高知出発滞在中日々多数の来客ありたるも記さず　7日東京帰着

8日　正午過ぎより出社　竹尾年助来社　唐津鉄工所株譲渡の事協議終了

16日　11時50分上野発佐貫下車　牛久農場に至り一泊亀井同伴

5月

9日　南中郷へ。13日牛久、15日帰京

6月

11日　牛久へ。13日南中郷　17日牛久　20日帰京

28日　上野発小松へ　7月3日帰京

7月

12日　多志良同伴磯原へ　16日牛久　18日帰京

20日　西内亀太郎、上原兵三郎　須崎港修築の件にて来社

9月

13日　大江卓昨日死去の由(19日葬式)

10月

4日　高萩へ　5日松原炭坑　7日牛久　9日帰京

10日　早稲田大学新学長　塩澤昌貞宅に至る　過日訪問の挨拶並に学長昇任の祝詞を述べる

19日　早稲田に至り大隈候の病気見舞い

11月

4日　正午半吉崎七次郎来社、織田信福に送るべき銀装茶器一組を求める。

6日　東京発、7日大阪着　神戸出帆

8日　高知着、城西館投宿、学校に至る

9日　午後学校に至る(10日、11日も同様)

12日　学校、幡多郡長、須崎町長来校、鉄道の事協議須崎町長も須崎港修築の件

13日　午後2時廈門丸にて出発、14日金沢着　17日小松発　18日上野着
19日　高萩へ　23日牛久　25日帰京

12月

2日　橋本増次郎来社　小松製作所、電気製鋼所は合同経営することに決定
3日　牛久へ　5日高萩　14日帰京
16日　廣澤範敏来社　土佐須崎港調査のため来20日頃出発(同町よりの依頼による)
22日　芝増上寺にて原敬氏の追悼会あり10時前よりおもむく。
29日　林有造　今朝宿毛町に於いて死去の報知あり

大正11年

1月

7日　夜11時過ぎ大人病気の趣5時20分発の電報着、続いて11時過ぎ発　3時15分着にて危篤の趣入電あり
9日　午前3時大人逝去　亀井同伴　11時過ぎ帰宅
11日　9時過ぎ本家に至り10時30分より挙式、11時30分終了、12時25分出棺、1時15分より挙式、2時15分前終了、2時より3時迄告別式執行式後直ちに埋葬に移り帰途本家に立寄り5時前帰宅
12日　中村寅之助葬儀に列す
18日　吉崎七次郎　大人逝去のため上京来訪。他多数
20日　高萩へ、松原炭坑他
28日　上野着、治水の事にて衆議院議長官舎に至る午前橋本増次郎来宅、昨朝帰京の趣にて小松製作所整理につき報告あり

2月

9日　(8日上野発高萩在)陸軍減縮特別員選ばれ明日の委員会出席のため帰京

3月

24日　(23日新橋発)浦戸丸で大坂出港
27日　11時前より出校、2時過ぎより、吉崎、村井同伴後免町県農事試験場見学して6時帰宿。吉崎、村井、普光江と食事を共にす。
28日　多田素を訪ひ1時過ぎ出校5時過ぎ帰宿(29日、4月1日出校)
30日　正午より出校、町田旦龍来校せるにより高知鉄道等の事を談しておく
31日　室戸漁港修築の計画あり現地案内してもらい7

時前帰宿。幡多鉄道は郡役所にて町村基金より20万円の融通出来するにつきこれに一株払込金15円を合し此の金額にて敷設の進行することに決す。

4月

2日　3時40分琉球丸にて出港　4日小松着　7日上野着

14日　高萩へ　16日帰京

22日　大隈候追悼会に列す

5月

22日　町田旦龍来たり高知商業銀行の話あり　高知工業学校松本、門田来社、今夜出発生徒同伴帰校の由

7月

10日　上野発小松へ　14日帰京

22日　中野寅次郎同伴室戸港の事にて間野農商務大臣を問ひ夫より電気クラブに至り松尾・田村を呼び宇和嶋中村間の鉄道の事協議

8月

6日　西尾来訪新龍土町家屋売却の件なり

9月

16日　牛久へ　18日高萩　20日帰京

10月

7日　幡多鉄道陳情委員、林譲治　今城団次外2名挨拶のため来宅

11月

6日　堂月建助を土陽新聞(45年の)に出張の事を談す

7日　南中郷へ―鉄工所・松原炭坑他　12日牛久　13日帰京

25日　南中郷へ　12月1日帰京

12月

5日　茅ケ崎発　出社快進社重役会あり、橋本増次郎・青山祿郎等来会

7日　林譲治・後藤環番・南北両宇和郡村長4名鉄道の件にて来宅

14日　1時前より出社　5時前より交詢社に至り川上啓太、渡辺修・矢野丑乙と会合南予・幡多郡間の鉄道の事協議

15日　11時より鉄道省経理局長と面会、南予・土佐間鉄道線の事相談→鉄道大臣官邸に至り秘書官面談

大正12年

1月

9日　大人1年祭
11日　快進社の重役会、橋本、田、青山来会

2月

15日　登院、丸ノ内ビルヂングへ会社移転　16日には丸ノ内ビルへ出社
20日　八幡浜中村間鉄道速成建議案の委員会、登院

4月

1日　上野発　南中郷（5日帰京）
21日　鳩山一郎来宅

5月

5日　上野発　高萩（10日帰京）

6月

3日　上野発　高萩（7日帰京）
30日　長岡乙次郎一昨日小穴製作所にて試験中高圧電気にふれ変死とのこと　本日富士見町教会にて葬式の由なり

7月

4日　後藤伯　27回忌追悼会列席
16日　板垣伯　5回忌法要

8月

7日　大正6年以来茅ヶ崎並に牛久にありたる土佐老爺夫婦今夜帰県

9月

1日　（茅ケ崎在）大地震発生　達雄は鴨井下に在り圧死せり　9月12日までの記事は9月13日に追記粗略なり
17日　東京自宅の震害は、運転手居宅と自動車置場、人力車夫居宅と供待居室付物置2棟旧土蔵前下座倒壊、西洋館屋根瓦落下、本屋僅少の損害
18日　帰朝の吉田茂来宅

11月

9日　鳩山一郎に面会

12月

10日　臨時議会召集日
25日　通常議会開会日なるにより9時過より登院

大正13年

1月

15日　強震あり

17日　(在茅ヶ崎)昨夜水野吉太郎より電報「重大事件突発帰京ありたき」東京帰宅、政友会分裂、東京ホテル仮事務所に行く

18日　政友会分裂の件にて坂本素等来訪　今幡、水野吉太郎来社　水野同道、東京ホテルに山本達雄氏に面会　脱会に至る経過委細を聞く

19日　水野吉太郎、大石大来たり新政党仮事務所に至る　昨夜の特急にて町田旦龍、田村実上京(水野は横浜駅より同道)

21日　新政党仮事務所に至る、高知支部町田、鎌田、田村等と面談

31日　4時前議会解散の詔出降

2月

4日　政友会本党事務所に立ち寄る(自分の選挙委員を止め水野とする事)

3月

11日　早稲田大学の招待により(理工科に電気通信科新設のため)大隈会館に至る。

29日　橋本増次郎来社　陸軍省より貨物自働車二台製造命令の由

4月

5月

10日　麻布区役所に至り衆議院議員の投票を為す

大正14年

2月

3日　松本遠藤両人に茨城会社に関する自分の意見を述べ置く

3月

3日　茨城会社相談役は辞職の事に通し置く

4月

24日　嶋田比楽来社、生徒を伴い見学の為上京

6月

13日　大麦14俵出来

14日　蚕、未曽有の上等品、8貫710匁一貫12円50銭

15日　明治44年来飼養せしエフ犬朝老衰のため死去。行儀正きものなり。

19日　岩井、中村税、多士郎に小松製作所の事を話す。

29日　強一郎より送り来たる無線受信機にて東京無線放送を聴く

7月

17日　橋本増次郎来る。快進社と自分関係を断絶の事

とす

9月
29日　遠藤政直に強一郎、横浜高等工業学校勤務のこと話す

10月
4日　強一郎午後来り夜小松へ出発
6日　工業倶楽部に至り多士郎並に中村に小松製作所に関する自分意見を話し置く
12日　仔犬生まれる、豚1頭(43貫500目)1貫1円90銭
23日　茂方の鐘木栄馬、廣尾地所の事にて来る。ヒナ鶏2羽生まれる。

11月
25日　麦蒔終了、小麦3反5畝、大麦2反8畝

12月
2日　温床をつくり始む

大正15年

1月
8日　大人5年祭
13日　織田信福死去の電報に接す。

2月
1日　強一郎横浜高等学校へ勤務の筈
2日　吉崎七次郎来社

3月
16日　午前松原炭坑　小松製作所に至る、夜茂夫婦来る、茂は明朝発奉天帰任の由

5月
1日　来る4日高知工業学校に於て大人銅像除幕式あり参列の為め今夜強一郎東京発

11月
18日　押川叔父午後一時死去の旨夜6時過電報あり

12月
9日　促成栽培用の蕃茄、胡瓜の種蒔を為す
14日　笄町140旧所番地に至り修理中の甲子君居宅見分
25日　午前3時無線電話にて聖上1時25分崩御の旨拝承
26日　織田未亡人来訪、昼食を共にし辞去、帰県の由

昭和2年

3月
31日　嶋田比楽(高知工業学校)午後来訪

6月
10日　繭6貫500匁売却　1貫7円20銭

15日　仔豚(雌)1頭買い入れる
21日　今日初めて東京市場へ蕃茄を送る
29日　蕃茄23貫採取20貫東京へ送り、2貫を当所市場に出し、1貫余残る

7月

7日　余りにも安価につき今日茄子の東京送りを止む(一個4厘ばかりなり)
9日　今日西瓜の試食す甘し
16日　12年末より寄宿せる金沢実、本日辞去(7月1日に挙動無責任にて断りたり)
21日　笄町売却の件

8月

9日　高知工業学校長、吉崎七次郎夕方来訪

9月

12日　橋本増次郎来る(T14年7月17日以来)

10月

12日　東北岩手方面、自動車等にて温泉宿泊しながら視察17日迄
29日　午後東京より一屯自動車一台にて銀代等乗り荷物着(同様の事11／6、7、12、23計5回)

12月

20日　松本俊吉来る牛久地所八町余売却調べたる由

昭和3年

1月

1日　達夫の墓に参り帰宅
3日　山本忠興夫妻、来訪
4日　午後悪寒発熱臥床す。
5日　前日同様高橋医師呼ぶ、気管支カタルとの診断なり。最高39度まで昇る
7日　最高39・6。
12日　石河夫妻見舞
14日　お菊さん来る
16日　あご下の腫物大分はれ手術の必要あり横浜青木病院長渡辺氏の来診を乞い明日を約す。
17日　渡辺及び高橋医師立会の上、切開手術をなす。夜手術のため少し発熱。
18日　肺炎の方は次第によろし
20日　平熱に服す。
22日　松本俊吉来る
23日　午前虎治来る
24日　午後濕布を取り去る

27日　寝床の上に座して昼食をなす。
28日　夕夏子来る
30日　はじめて室を出て廊下歩行

2月

1日　頭髪を洗う
5日　今日より食堂にて食事なす。
8日　便所行き可能となる。
11日　夕前真野官一来る
14日　梅子理髪
16日　池田俊子来る
17日　午後今幡西衛来る
22日　午後病後はじめて農園に至り、小野来たり温床の据付をなす
25日　夕夏子来る
27日　午後裏門を出て、山本門前を西方に土屋、藤井別荘に沿ひ中島別荘前を経て表門より帰宅(23日より散歩に出ている)
29日　夕前高橋医師来る　糖尿のためこれまで昼、夕食米飯2碗朝食パン一斤四分の一、間食(3時半)就寝前各1斤6分の1なりしも昼、夕の米飯1碗宛、パンも各食共減食のこととせり

3月

1日　裏門より海岸に出て東方4～5丁を進み、団十郎別荘前に出て帰宅
2日　切開せし腫物の跡ようやく癒合
3日　馬鈴薯を植え込む、病中廃止していた冷水摩擦を始む、促成茄子開花
4日　午後矢野政義来る
5日　雌豚1頭売却35貫、1貫匁1円40銭
6日　午前体重を量りたるに正味14貫200匁
8日　麦施肥終わる　夜板本志魯雄来る
11日　正午過菊枝来る
13日　甘藷床に植え込みなす。大便少量のため排出せず、小水又たびたび便通を催すも快通せず加えて尿道に疼痛を感じ不快多大なり、夜に入り潅腸3回をなす、排尿せり
14日　昨夜就寝後少し悪寒を感じ今朝体温38°以上に達せるにより高橋医師を呼び診察をうく、流行感冒なりという。
15日　午前中に熱気去り平常に復したり　正午過松本俊吉来る

竹内綱と明太郎の年表

	竹内　綱	竹内明太郎	主な出来事
一八三九　天保一〇	一二・二六　宿毛に生まれる		
一八五二　嘉永五			七・一一　中浜万次郎帰国
一八五三　六			六・一五　ペリー来航
一八五四　安政一	・伊賀家歩兵の伍長となる		三・三　日米和親条約締結 一一・五　地震で宿毛も被害
一八六〇　万延一	・長男明太郎誕生	二・二八　宿毛で生まれる	三・三　桜田門外の変
一八六二　文久二	・伊賀家目付役となり財政整理地租改正等を行う		三月　坂本龍馬脱藩 四・八　吉田東洋暗殺
一八六三　三	・後藤象二郎と外国交易の振興を論ず		九・二二　土佐勤王党の弾圧
一八六五　慶応一	・伊賀家仕置役を命じられる		
一八六六　二	二月　大阪に出向き宿毛蔵屋敷を設置 七月　英国船の安満地浦来港事件に関して責任を問われる		一・二二　薩長同盟成る
一八六七　三			・宿毛文舘を廃し日新館を開校

			一〇・一四 大政奉還 一一・一五 坂本龍馬暗殺
一八六八 明治一	・伊賀家嫡子陽太郎の京都遊学に随行、戊辰戦争の東北征討軍に従う		一・三 戊申戦争起る 七・一七 江戸を東京と改称
一八六九 二	・高知藩より大阪蔵屋敷引揚を命じられ、藩札引換で負債償却す		三・二五 東京―横浜電信開通
一八七〇 三	三月 大阪府七等出仕		
一八七一 四	二・七 妻春死去 三月 大阪府少参事(従六位)となる	・大阪の岩崎英学塾で豊川良平等と共に学ぶ	一・二四 郵便開始
一八七二 五	・大阪の取締制度、町村会、河川改修等をなす		九・一二 新橋―横浜鉄道開通
一八七三 六	三月 陸奥宗光の推薦で大蔵省六等出仕、庶務頭となる	・父の勤務に伴い上京	一・一〇 徴兵令制定
一八七四 七	四月 大蔵省辞任・蓬萊社の後藤象二郎より高島炭坑の管理を引き受ける	・同文社に学ぶ(中村敬宇先生)	四・一〇 高知に立志社設立 一〇・五 中江兆民、仏蘭西学舎開設(後の仏学塾)
一八七五 八	・端島、大島、香焼三島炭坑の経営権を得る	・仏学塾に学ぶ(中江兆民先生)	二・三 板垣、大阪で愛国社結成

一八七六	明治九	五月　蓬萊社社長となる		
一八七七	一〇			・西南の役起る（三月～九月） ・立志社の獄起る
一八七八	一一	四月　土佐挙兵計画のスナイドル銃買入の周旋で逮捕される 八月　禁獄一年の刑（新潟監獄） 九月　五男茂生まれる		一・三〇　立志社の発刊誌を「土陽新聞」と改題 五月　大久保利通暗殺
一八七九	一二	八月　禁獄満期放免される		
一八八〇	一三			三月　愛国社を国会期成同盟会と改称
一八八一	一四	・高島炭坑、端島大島香焼三島炭坑を岩崎弥太郎に譲渡 ・板垣を大政党主宰に説得 ・板垣の東北巡回演説に同行 ・自由党常議員となる		七・二　酒井三治没 一〇・二　国会開設の詔勅宣布 一〇月　国会期成同盟会を解き自由党を結成
一八八二	一五	・板垣の東海巡遊に同行、岐阜の板垣遭難に会す ・次女菊、白石直治と結婚		四・六　板垣遭難 ・自由新聞・絵入自由新聞創刊
一八八五	一八	・佐賀県芳谷の抗区払下を受け開抗を開始		二・七　岩崎弥太郎没

	・芳谷炭坑合資会社設立		
一八八六 一九	・北海道東北に遊覧、硫黄抗の調査	・芳谷抗業の管理を委任される	三・二 帝国大学令公布 ・小野梓没
一八八七 二〇	三月 保安条例により三ケ年の東京退去を命ぜられ、吉田健三宅等(横浜)に寄遇		二三・三五 保安条例公布片岡謙吉等下獄となる
一八八八 二一			四・三五 市町村制施行
一八八九 二二	三・一 五男茂の義父、吉田健三死去		二・一一 大日本帝国憲法発布 ・鉄道、東海道本線開通
一八九〇 二三	七・一 第一回総選挙当選(高知1区)、予算委員となる	・芳谷―唐津港軽便鉄道敷設	一一・三五 第一回帝国議会開会
一八九一 二四	・自由党を一時離脱	三・二 山本亀井と結婚	九・一 鉄道、上野―青森全通
一八九二 二五	・総選挙出馬を固辞、政府と政党との提携に尽力する ・芳谷の石炭販売促進に清国漫遊		一・三 植木枝盛没
一八九三 二六			・三菱合資会社設立
一八九四 二七	五月 林と朝鮮視察、日清開戦を進言 ・京釜京仁二鉄道の急務を政府に提議	三月 長男強一郎生まれる ・竹内鉱業㈱設立	八・一 日清戦争開戦(翌年まで) ・京釜、京仁鉄道暫定条約締結

一八九五	明治二八	・伊藤内閣と自由党との提携を説得		・伊藤内閣と自由党提携を決議
一八九六	二九	・京釜鉄道(株)発起人総会開く常務理事となる		五月　茨城無煙炭鉱(株)創立 初代会長大江卓
一八九七	三〇			・後藤象二郎没
一八九八	三一	三・二五　第五回総選挙当選(東京一区) ・大隈板垣の間で調整を計る 九・八　京釜鉄道合同条約締結		・隈板内閣成立
一八九九	三二			・勝海舟没
一九〇〇	三三	・京釜鉄道速成建議案を議会決議 三月　京釜鉄道会社創立、常務取締役就任	・欧米視察、パリ万国博を見学	一一・二七　立憲政友会高知支部発会
一九〇一	三四	・京仁鉄道完成		二一・一八　八幡製鉄所開所式 三・三　中江兆民没
一九〇三	三六	二月　京釜鉄道(株)が京仁鉄道合資会社を合併 ・芳谷炭坑会社、石川県遊泉寺銅山を買収	・遊泉寺銅山経営に当たる	一・三〇　日英同盟協約調印
一九〇三	三六	三・一　第八回総選挙当選(高知		七・八　土佐電気鉄道(株)創立

		郡部） 四・八　後妻、瀧子死去		八・三　東京電車鉄道（後に都電）開業 一〇・三一　片岡健吉没
一九〇四	三七	・五男茂に東大法科入学を勧める 三・一五　毛受甲子と再々婚 三・一九　三男虎治、中江兆民娘千美と結婚	・茨城無煙炭鉱㈱常務を受理	二月　日露戦争開戦 五・二　乗出―堀詰、梅ノ辻―桟橋電車開通 一〇月　潮江桟橋竣工 ・京義鉄道完成
一九〇五	三八	一月　京釜鉄道開通、一部営業開始	・石川県別宮村に発電用水路調査	八・一〇　日露講和条約締結 ・小野義真没
一九〇六	三九	六・三　遊泉寺銅山用水力発電所を別宮村に建設の契約 ・五男茂外交官（領事補七等官）となる	・唐津鉄工所を構想、竹尾年助と面会 ・工科大学、工業学校の構想を手島精一に相談 ・海外留学生派遣	一・二　岩村高俊没 三・三一　鉄道国有法公布
一九〇七	四〇	・京釜鉄道国有となる	二月　高知市に工業学校設立を計画、場所は土佐郡第一高等小学校敷地とする ・海外留学生派遣 ・来高（二一・三〇～三・六） ・遊泉寺銅山より小松出張所へ軽便鉄道敷設 ・神子清水発電所操業開始	・早稲田大学理工科設置を発表 ・石川県鳥越村発足（別宮村他二村合併）

一九〇八	明治四一	・鳥越村住民が神子清水発電所水路記念碑を建立 三・六　五男茂結婚披露宴	六・一八　高知工業学校の敷地買い付け ・九州炭坑汽船会社顧問	四月　早稲田大学理工科予科開設 三月　土電電車が伊野町まで延長
一九〇九	四二	・米国資本の韓美電気会社（京城）の権利譲渡に協力	四月　芳谷炭坑付属、唐津鉄工所開設 九月　早稲田大学理工科本科始業式、資金と教授を提供する	一〇・六　伊藤博文暗殺 ・牧野啓吾没
一九一〇	四三	・北清漫遊	・大夕張炭坑の経営 ・茅ケ崎に別荘地買い入れ	八・三　韓国併合、朝鮮と改称
一九一一	四四	四月　芳谷炭坑の経営を三菱合資会社へ譲渡 ・朝鮮金剛山に遊ぶ	六・五　芳谷炭坑株式会社を竹内鉱業株式会社と改称 ・橋本増次郎の快進社自動車工場に出資、工場用地に広尾吉田地所を提供 ・高知工業学校の経営人事を協議、教頭に吉崎（手島精一推薦） ・来高（一・三～三五）	・幸徳秋水刑死 五月　土電電車、後免まで開通 ・高知県営水力電気発電所（甫喜ケ峰疏水利用）竣工
一九一二	四五	三・二一　文部省より私立高知工業学校設立認可される	三月　中村、森沢、吉崎と高知工業学校設立に関する事項協	七・三〇　明治天皇崩御

		五・四　開校式来校（五・三　政友会高知支部歓迎会）	定終了 ・来高（三・二五〜三・四） ・北アメリカ・カナダ・英・仏・独に行く（三・二六〜八・五） ・来高（一二・二三〜二六）生徒に講話
一九一三	大正二		・牛久農場開発
一九一四	三		・快進社製造の自動車ＤＡＴ一号完成 ・来高（四・五〜一〇） 八月　高知工業学校の吉崎、森沢、島田、唐津鉄工所で実習
一九一五	四		・来高（二・五〜九） ・来高（三・一四〜二三）選挙遊説 三・二五　第一三回総選挙に初当選 八月　高知工業学校教員、唐津鉄工所で実習 ・来高（一一・一三〜一五）
一九一六	五		一月　竹内鉱業（株）より分離独立し（株）唐津鉄工所設立 五月　高知工業学校に別科（中学卒業以上）として採鉱冶金科を開設

		・山本幸彦没
		・京釜鉄道全線完成 三月　東京大正博覧会開催 八・三　第一次世界大戦始る 九月　高知―安芸、乗合自動車開通 一三・一八　東京駅開業式
		二・二〇　岩村通俊没 ・牧野賢吾病没 四月　県下町村に電話開通
		・コレラ流行

一九一六	大正五		一〇・二　早稲田大学理工科創業の功労により表彰を受ける ・清国遊覧(一〇・七～一一・七) ・来高(一二・八～一六)吉田茂を呼び生徒に講話(一二・一一)、来春卒業生に談話(一二・一三)
一九一七	六	一〇月　麻布区新龍土町へ転居	一月　竹内鉱業(株)小松鉄工所設立(所長橋本増次郎) 一・二五　衆議院解散 ・来高(三・二～二五)第一回卒業式(三・三)に出席 四・一〇　第三回総選挙当選 ・土陽新聞社社主(白石直治と共同)となる ・来高(一一・一六～一二)学校、土陽新聞社等立ち寄る 三月　茨城無煙炭鉱(株)重役会、重役辞退を申出
一九一八	七		・国会減税委員 ・鉄道・高等学校問題について高知より上京の委員、四国の議員等と協議を重ねる(四国縦貫鉄道は琴平―山田間とな
			一〇月　東京大暴風雨 八月　各地に米騒動勃発 一一月　世界大戦終る

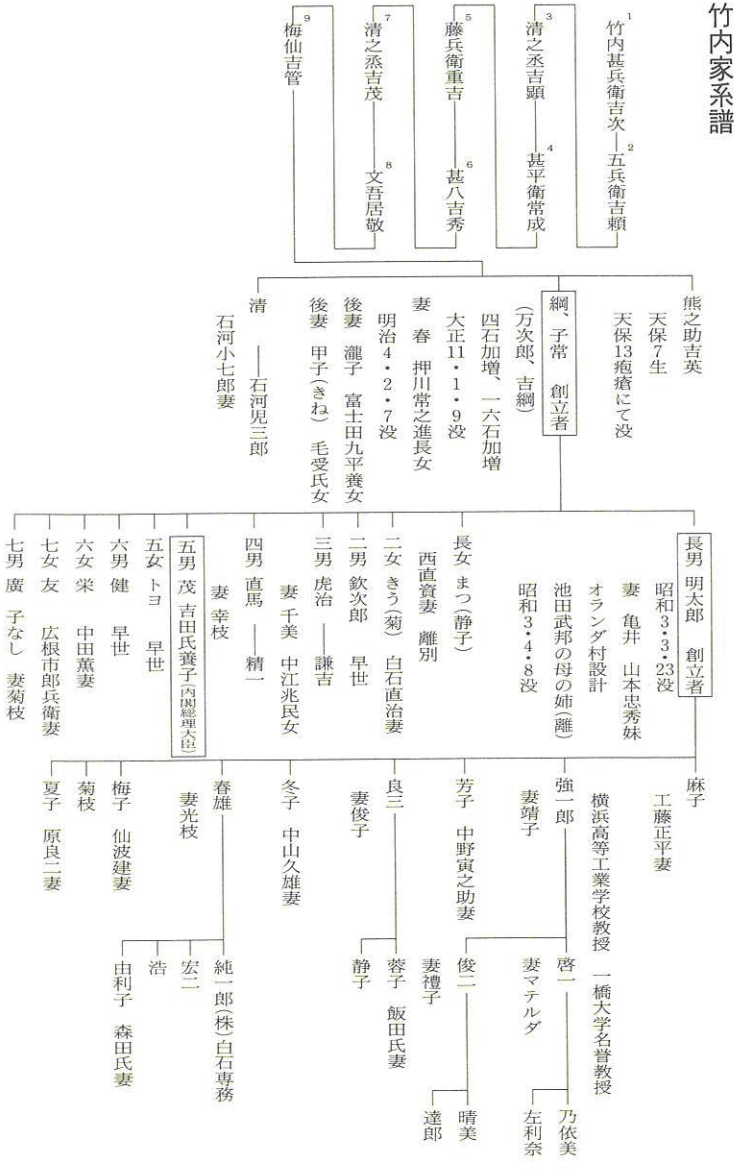
	一九一九 八	•三男虎治娘浪子二歳、母千美の薦めで九州より祖父綱の元に寄留、女学校通学(S二八 鈴江言一と結婚)
り、高校問題は文相と面談) •来高(三・三〜三一)卒業式と入学試験等 五月 竹内鉱業(株)小松電気製鋼所設立 八月 株式会社に改組した快進社に出資、工場は北豊島郡長崎村に建設(白石の地所) 一月 山本忠興を高知工業学校視察に派遣 •来高(二・六〜三)工業学校、土陽新聞社等の他、清水源井と県営水力発電所見学		
•山本忠興と高知工業学校の実験室や経営のこと相談 五・二 山本忠興、高知工業学校へ出張 •来幡多(三・一六〜二一)白石後の補欠選挙応援 •来高(三・三〜二九)卒業式、入試 五・四 修学旅行中の生徒総代三名と教員来宅 •来高(一〇・二六〜一一・三)学校、土	二・一七 白石直治没 七・一六 板垣退助没	

一九一九 大正八		陽新聞社の他、清水源井の案内にて穂岐山発電所見学 ・来高(二一・二七〜三一・三)	
一九二〇 九		二・二六 衆議院解散 ・来高(三一・三五〜三二)入試 五・五 修学旅行中で上京中の生徒総代三名と教員来宅 五・一〇 第一四回総選挙当選、出馬の意志無しを担ぎ出される ・牛久農場技手に千葉高等農林学校卒業生の川村和嘉治を採用(大正一三年までか?) ・来高(一〇・二六〜一一・四) ・遊泉寺銅山閉鎖	三月 全世界に戦後恐慌勃発、株式など市場大暴落 五・二 日本初のメーデー(上野公園) 六・二一 豊川良平没 ・幡多地方水害 一二・一七 国際連盟に加盟
一九二一 一〇		国会臨時治水調査委員となる ・来高(三一・三〇〜四・六)入試他 五月 竹内鉱業㈱小松鉄工所を分離独立して㈱小松製作所設立、初代社長白石多士良 ・来高(一一・八〜一三)須崎港修築の件(調査)他 三月 小松電気製鋼所は㈱小松製作所と合同経営に決定	九・一三 大江卓没 一一・四 首相原敬暗殺 一二・二九 林有造没

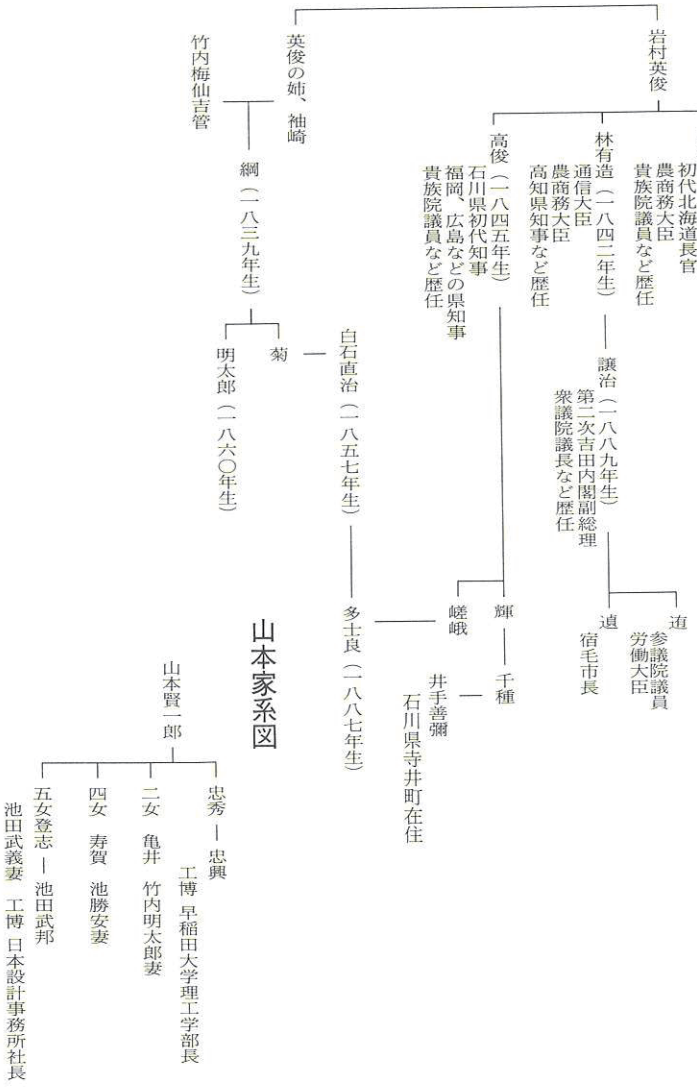
一九二三	一二	一・九　東京で死去（満八二歳）	一・二　綱葬儀。高知工業学校講堂でも葬儀を行う ・国会陸軍減縮委員 ・来高（三・二五～四・二）幡多鉄道、室戸漁港修築の件他 ・南予―幡多鉄道の件、陳情委員鉄道省等と数回協議 三・二八　衆議院、全院委員長に選出される	一・一〇　大隈重信没
一九二三	一三		二・二五　会社を丸ノ内ビルディングへ移転 四・一　高知工業学校、県に移管され高知県立高知工業学校と改称 九・一　大地震発生、貯蔵炭焼失	四月　高知高等学校開校 六・三〇　長岡乙次郎没 九・一　関東大震災
一九二四	一三		一・一七　政友会分裂、脱会する町田旦龍、田村實上京 一・三　衆議院解散 三月　茅ケ崎に住居を移す	五・一〇　第一五回総選挙 一一・一五　国鉄、須崎―高知開通 三月　高知鉄道、後免―手結開通
一九二五	一四		三月　茨木無煙炭鉱（株）相談役を辞職の事とする 七月　（株）快進社より手を引く	三・一　東京放送局放送開始 一三・五　国鉄、高知―土佐山田開通

一九二六	大正一五	五・四　高知工業学校において胸像除幕式	五・一　綱胸像除幕式へ参列のため長男強一郎が出発 ・松原炭坑会社と小松製作所の東京事務所へ時々出向く	一・一三　織田信福没 一二・二五　大正天皇崩御
一九二七	昭和二		一〇月　東北地方を自動車等で巡遊 ・笄町自宅売却、牛久地所一部売却	三・三〇　上野―浅草地下鉄開通（日本初）
一九二八	三		一・四　悪寒発熱臥床す 三・三三　肺炎で死去（満六六歳） ・竹内鉱業（株）解散	八・一〇　高知駅―桟橋間に電車開通
一九三一	六		五・四　高知工業学校において明太郎胸像除幕式を行う	四月　高知鉄道手結―安芸間が開通

竹内家系譜


1 竹内甚兵衛吉次
2 五兵衛吉頼
3 清之丞吉顕
4 甚平衛常成
5 藤兵衛重吉
6 甚八吉秀
7 清之丞吉茂
8 文吾居敬
9 梅仙吉管
熊之助吉英
天保7生
天保13疱瘡にて没
綱、子常 創立者
（万次郎、吉綱）
四石加増、一六石加増
大正11・1・9没
妻 春 押川常之進長女
明治4・2・7没
後妻 瀧子 富士田九平養女
後妻 甲子（きね） 毛受氏女
清 ―― 石河児三郎
石河小七郎妻
長男 明太郎 創立者
昭和3・3・23没
妻 亀井 山本忠秀妹
オランダ村設計
池田武邦の母の姉（離）
昭和3・4・8没
長女 まつ（静子）
西直資妻 離別
二女 きう（菊） 白石直治妻
二男 欽次郎 早世
三男 虎治 ―― 謙吉
妻 千美 中江兆民女
四男 直馬 ―― 精一
妻 幸枝
五男 茂 吉田氏養子（内閣総理大臣）
五女 トヨ 早世
六男 健 早世
六女 栄 中田薫妻
七女 友 広根市郎兵衛妻
七男 廣 子なし 妻菊枝
麻子
工藤正平妻
横浜高等工業学校教授 一橋大学名誉教授
強一郎
妻靖子
啓一
妻マテルダ
乃依美
左利奈
芳子 中野寅之助妻
俊二
妻禮子
晴美
達郎
良三
妻俊子
蓉子 飯田氏妻
静子
冬子 中山久雄妻
春雄
妻光枝
純一郎（株）白石専務
宏二
浩
梅子 仙波建妻
由利子 森田氏妻
菊枝
夏子 原良二妻

竹内家、岩村家と白石家の関係を示す系図



参考文献

（第二、三部では、次の文献、資料を参考にさせていただきました。）

沈黙の巨星――コマツ創業の人・竹内明太郎／小松商工会議所機械金属業部会編、北国新聞出版局

小松製作所五十年の歩み／小松製作所発行

会社抄史／真野官一著、小松製作所

竹内明太郎先生追憶／竹内明太郎先生追憶録編集委員会

追憶記―竹内強一郎さんを偲んで／竹内強一郎先生追悼委員会発行

北波多村史／北波多村史編纂委員会

鳥越村史／鳥越村史編纂委員会

小松製作所工科学校史／渡辺正徳・編集兼発行

工作機械を創った人々／機械技術

常盤炭田史／いわき市史・別巻／明治の機械工業／鈴木淳著、ミネルヴァ書房

工具業界に限りなき愛をこめて／大和田国男著、商工経済新聞出版部

早稲田大学百年史／早稲田大学大学史編集所

稲門の群像／エピソード稲門の群像編集委員会

宿毛市史／宿毛市史編纂委員会、同市教育委員会発行

宿毛人物史／宿毛明治一〇〇年史人物篇編集部

高知県選挙史／橋詰延寿著、県選挙管理委員会など発行

高知県の議員史／松浦勝重著

随筆　早稲田／市島春城著

半峰昔ばなし／高田早苗述、早稲田大学出版部

高知県の歴史／編者・平尾道雄ほか
日本の歴史／井上清著、岩波新書
昭和史／遠山茂樹、今井清一、藤原彰著、岩波新書
改革と維新／原田伴彦著、講談社現代新書
日本史年表／歴史学研究会編、岩波新書
山本忠興伝／山本忠興博士伝記刊行会
手島精一伝／安達龍作著、財団法人「手島工業教育資金団」
白石多士良略伝／白石俊多著
白石直治伝／編纂兼著者、南海洋八郎　工学博士白石直治伝編纂会発行
町田旦龍／編纂兼発行人、町田昌直
竹内綱自叙伝／竹内綱著
開校五十年誌／県立高知工業五十周年記念誌編集委員会
火水翼・創立八十周年記念誌／創立八十周年記念誌発行委員会
織田歯科百年史／織田歯科医百年史・織田英正編集
高知県機械工業史／社団法人高知県機械工業会発行
日産自動車三十年史／日産自動車

あとがき

「高知工業高等学校創立者調査研究委員会」がつくられたのは、平成六年五月四日のことでしたが、ようやく創立者竹内綱・明太郎両先生の伝記編纂を終えることができました。この間、多くの方々から資料提供や激励をいただきましたことに対し感謝の念で一杯であります。

委員会設立当初は、編集要領も定まらず、調査の目処も立たないまま、委員はそれぞれ県内はもとより、県外の可能性のある所に、藁をも摑む思いで資料を求めて出かけましたが、伝記作成に使える資料となると収集は容易ではありませんでした。それでも竹内綱先生については、明治政界の大立物であり、自由民権の闘士として広く知られていたために、各種の文献資料が残されています。特に「竹内綱自叙伝」は貴重な権威ある参考資料でした。この自叙伝は、明治文化全集「雑史篇」によって公開されたものでありますが、古い重要な資料でありますので紹介をしておきます。

この全集の編者である元東大教授吉野作造氏は、これに次のような解説をつけております。

『竹内綱の何人なるかは、伝記みずから語るところにまかすとして、この伝記なしといえども、竹内綱の名は土佐の名士として久しく我々の耳目に熟しているのだから、今ここにその自叙伝を収むるをえたるは特に「雑史篇」を設けた趣旨にかなうものなることを、読者は容易に首肯されるだろう。

しかもこれは未刊の珍本である。もとより公刊の目的で書かれたものではないらしい。竹内翁が晩年

に及び、児孫に示さんと書き残されたもののようだが、没後久しくさる親戚の庫中に秘蔵されていたのを、今回はからずも本篇の一部として世上の被閲に公開されたのである。

編集部の乞いを快く容れられた後嗣竹内廣君に対してはもちろんだが、故翁の近親外務次官吉田茂君ならびに東大教授中田薫君（綱六女・栄の夫）のその間に周旋せられたる労に対して、私は読者とともに深厚の謝意を表したいと思う。』

この自叙伝は、今回の伝記編纂にあたって中核的な資料となったことは勿論であります。

次に、明太郎先生についてでありますが、若干の資料は入手していましたが、少年時代に父君とともに高知を離れていた関係上、生い立ちから青年時代にかけての資料はなく、全くの空白になっています。平成八年三月に小松商工会議所機械金属業部会から出版された「沈黙の巨星」は「コマツ創業の人・竹内明太郎」の実像を見事に書き出されたものでした。私共高知県人では殆ど知られてなかった興味深い記述が随所にあります。私共はこの度この「沈黙の巨星」の記述を何カ所か活用させていただきました。

正直なところ「沈黙の巨星」以上の資料は極めて少ないために、明太郎先生については、学校創立者としての特色ある記事を書くことはむつかしいのではないかと困却していました。このときに考えもしてなかった朗報が入りました。雀踊りして喜ぶというのはこのような心境をいうのでしょうか。

それは明太郎先生の日記（明治二十二年から昭和三年にかけてのもの）が現存しているということでした。途中欠落している年もありますが、とにかく大変貴重なものであるとのことで早速お願いし、竹

内啓一氏より公開の許可をいただいたわけであります。この間の事情は本文に詳しく書かれておりますので省略しますが、早速コピーさしていただき解読作業にかかりました。約半年かかりましたが、この日記により学校創立のいきさつや関係した人物等が実によく正確にわかりました。かくして執筆作業も軌道にのり、「沈黙の巨星」とは立脚点を異にした姉妹篇を作ることができました。

これもひとえにご指導ご支援下された方々のおかげであります。末尾になりましたが厚くお礼申し上げる次第であります。

高知工業高等学校創立者調査研究委員会

委員長　山田　通

この本の出版・取材に協力いただいた方々と団体（敬称略・五十音順）

伊藤三代子／池禎章／大矢義夫／織田桂輔／織田篤子
熊田郁也（故人）／白石俊多／鈴江浪子／高橋治／高本薫明
竹内靖子／竹内俊二／竹内純一郎／立田敬二／千葉昌弘
鶴見宗茂／中山達男／庭田寅雄／橋田庫欣／林遖
久松麗子／森木洋子

㈱小松製作所／㈱唐津鉄工所／小松商工会議所
関東東北鉱山保安監督部関東支部／早稲田大学／秋田大学
高知工科大学／石川県立小松工業高等学校
高知県立須崎工業高等学校／宿毛歴史館

高知県立高知工業高等学校同窓会
創立者調査研究委員会（○印：編集小委員）

委員長○山田　通（昭和一三年機械科卒）
副委員長○宗竹啓介（〃一八年機械科卒）
学校長野町幸一
委員塩田一郎（〃一三年機械科卒）
〃大畠正賢（〃一六年電気科卒）
〃岸之上守代司（〃一六年建築科卒）
〃○竹内福志（〃二三年機械科卒）
〃○宮田隆弘（〃二八年土木科卒）
〃○土居稔昌（〃三〇年機械科卒）
〃尾崎翹彦（〃三二年工業化学科卒）
事務局○今津静男（〃三五年電気科卒）
会計○茶木勉（〃三七年機械科卒）

制作スタッフ
池　和代（第一部執筆）／堀内　汎（第二・三部執筆）
高知新聞企業出版部

工業ハ富国ノ基

平成九年六月二十五日　発行

発　行　高知県立高知工業高等学校同窓会

制　作　㈱高知新聞企業出版部

印刷製本　高知印刷株式会社

高知工業高等学校同窓会編
定価3,000円（本体2,857円）